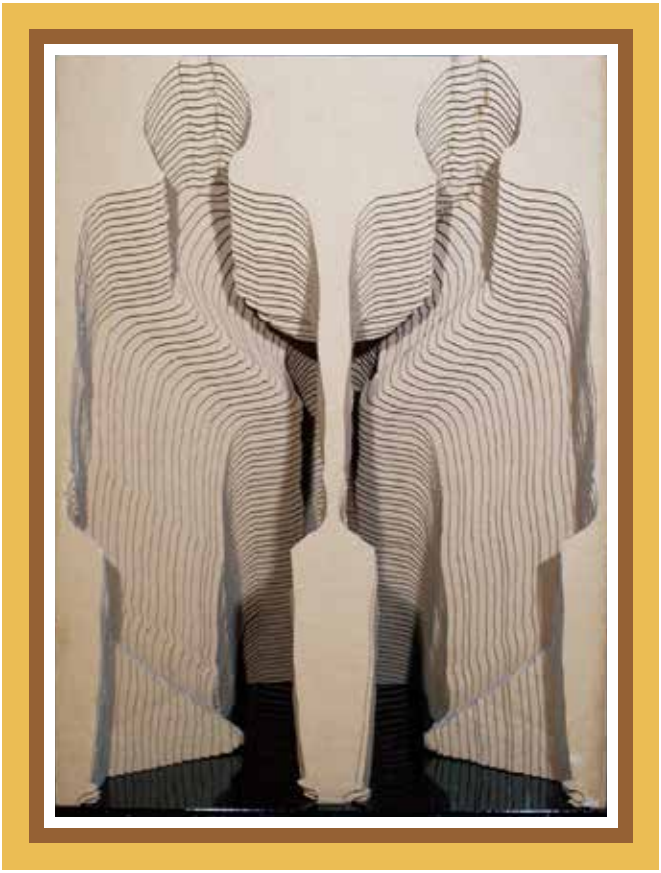
浜松市民文芸

57



浜　松　市

平成 24 年度　浜松文芸館の催事と講座

（内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認下さい）

●講　座

講座名	講師	開催時	受講料円
現代詩入門講座	埋田昇二	4/14,28,5/12,26,6/9（全５回） 10:00～12:00	2500
文章教室Ⅰ	たかはたけいこ	4/15,5/20,6/17,7/15（全４回） 13:30～15:30	2000
川柳入門講座	今田久帆	4/22,5/27,6/24,7/22,8/26（全５回） 9:30～11:30	2500
文学講座（春）	松平和久	5/9,16,23,30,6/6,13（全６回） 9:30～11:30	3000
宮沢賢治童話を楽しむ「ひろば」	村上節子	5/11,18,25（全３回） 10:00～12:00	1500
声であらわす文学作品	堤腰和余	6/7,7/5,8/2,9/6,10/4,11/1（全6回） 10:00～12:00	3000
俳句入門講座（前期）	鈴木裕之	6/16,23,30,7/7,14（全５回） 9:30～11:30	2500
夏休み絵本づくり講座	井口恭子	7/28 13:30～16:00	500
うら打ち入門講座	近藤敏夫	①8/4,5　②9/1,2 13:00～15:00	各1000
10歳からの少年少女俳句入門講座	九鬼あきゑ	8/7,9,10（全３回） 10:00～11:30	500
夏休み額縁を作ろう	書繪堂	8/8 13:00～16:00	1000
文章教室Ⅱ	たかはたけいこ	8/19,9/16,10/21,11/18,（全４回） 13:30～15:30	2000
短歌入門講座	野島光世	9/5,12,19,26,10/3（全５回） 10:00～12:00	2500
大人のための絵本づくり講座	井口恭子	9/6,13,10/4,11/1,8,22（全６回） 10:00～12:00	3000
文学講座（秋）	松平和久	9/7,14,21,28,10/5,12（全６回） 9:30～11:30	3000
自由律俳句入門講座	鶴田育久	10/10,17,24（全３回） 9:30～11:30	1500
俳句入門講座（後期）	笹瀬節子	10/20,27,11/3,10,17（全５回） 9:30～11:30	2500
文学と歴史講座	折金紀男	10/28,11/4,11（全３回） 13:30～15:30	1500
カッターでつくる「切り絵の物語」	上嶋裕志	11/17,24,12/1,8,15（全５回） 13:30～15:30	2500
文学散歩	和久田雅之	①11/21　事前講義 10:00～11:30 ②11/28　実地めぐり 9:00～16:30	セットで 5000
文章教室Ⅲ	たかはたけいこ	12/16,1/20,2/17,3/17（全４回） 13:30～15:30	2000

●収蔵展　企画展

先駆者と現代小説家のコラボ展 「浜松の幅広い文芸人たち」 3月10日（土）～ 5月13日（日）
企画展 「かっぱの絵」（仮） 5月26日（土）～ 8月26日（日）
収蔵展 「浜松の幅広い文芸人たち」（仮） 9月 8日（土）～11月 4日（日）
企画展 「切り絵」（仮） 11月17日（土）～ 2月24日（日）

●講演会

トークショー＆サイン会	渥美饒児・七尾与史	4月29日（日）	13:30～15:30	大　人500円 高校生300円
講演会Ⅰ	たかはたけいこ	7月29日（日）	13:30～15:30	300円
講演会Ⅱ	村木道彦	9月30日（日）	13:30～15:30	300円

●朗読会

文芸館朗読会	堤腰和余	10月14日（日）	14:00～15:00	500円

浜　松　市　民　文　芸

第　57　集

（相生垣瓜人俳画）

浜　　松　　市

選者

小説	竹腰幸夫
	柳本宗春
児童文学	那須田稔
評論	中西美沙子
随筆	たかはたけいこ
詩	埋田昇二
短歌	村木道彦
定型俳句	九鬼あきゑ
自由律俳句	鶴田育久
川柳	今田久帆

☆ **表紙絵**

内山拓哉

平成23年度浜松市芸術祭「第59回市展」にて芸術祭大賞受賞作品

題「透化する自分『～浮上～』」

この作品は、複数の作品から成り立つ作品のうちの一つです。この作品に使われている自分のシルエットを通して、「個人」の在り方・「人」の存在について、思わず考えさせられ、自分を見直す良い機会にもなりました。

「浜松市民文芸」第57集　市民文芸賞受賞者

部門	受賞者
小説	海原　悠
	山﨑Ｔｉｃｏ
児童文学	むらまつたえみ
評論	中谷節三
随筆	前田徳勇
	北山七生
詩	和久田理仁
	竹内としみ
	中村弘枝
	水川亜輝羅
	辻上隆明
短歌	飯田裕子
	伊藤美代
	塩入しず子
	富永さか江
	内田乙郎

部門	受賞者
定型俳句	田中美保子
	野田正次
	山内久子
	切畠正子
	吉田髙徳
	山﨑暁子
	野嶋蔦子
	藤田節子
	渡辺きぬ代
	野中芙美子
自由律俳句	大軒妙子
	藤本ち江子
	生田基行
川柳	鈴木千代見
	竹山惠一郎
	髙橋博
	馬渕よし子

目次

小説

市民文芸賞

哭くな信康……海原　悠……10

風が吹く場所……山﨑　Ｔｉｃｏ……25

入選

松の夜の夢……麻倉　純……41

穂高……石黒　實……57

雨……伊藤　昭一……73

浄土への旅……幸田健太郎……83

地六峠……水野　昭……92

選考評……竹腰　幸雄……109

選後評……柳本　宗春……110

児童文学

市民文芸賞

みみくんの物語……むらまつたえみ……111

入選

僕の夏休み……恩田　恭子……120

昨年度入選

ライオンの成人式……恩田　恭子……130

選評……那須田　稔……136

評論

市民文芸賞

鍼（はり）の如く（前編）……中谷　節三……137

入選

一葉の流れて哀しい江戸の町……十津川郷士……146

選評……中西美佐子……155

随筆

市民文芸賞

私のくせ、生き方……前田　徳勇……156

年賀状……北山　七生……158

父からの答え……和久田理仁……161

入選

おじさん……吉岡　良子……164

覆水盆に返らず……石山　武……165

チャコちゃんの力こぶ……中津川久子……167

負けないぞ……山田　知明……169

雪解けて、空へ……アイユ……171

講評……たかはたけいこ……173

詩

市民文芸賞

終わりの夏……竹内としみ……175

新常用漢字……中村　弘枝……176
ある駅の構内で……水川亜輝羅……177
わが心の・・・……辻上　隆明……179
入　選
嫁ぐ日に……桑原　みよ……180
古都紅葉……小池　祥元……181
「温暖化」……新村　健一……182
視る者……鈴木巳三郎……183
直面する問題への対応策の一例…髙柳　龍夫……184
ジョブズ氏に脱帽だ……内藤　雅子……186
惰眠の由来……橋本まさや……187
選　評……埋田　昇二……188

短　歌

市民文芸賞

飯田　裕子　伊藤　美代　塩入しず子
富永さか江　内田　乙郎

入　選

柳　光子　鈴木　利定　寺田　久子
江間　治子　伊藤　米子　石原新一郎
ちばつゆこ　太田　初恵　鈴木巳三郎
宮本　惠司　戸田田鶴子　井浪マリヱ
大庭　拓郎　柴田　修　岡部　正治
袴田　宣子　柿澤　妙子　澤田あい子
木下芙美子　森脇　幸子　柴田千賀子
小笠原靖子　浜　美乃里　宮澤　秀子
曽布川くり子　近藤　栄子　松浦ふみ子
赤堀　進　鈴木　壽子　古谷聰一郎
太田　静子　恩田　恭子　能勢　明代
河合　和子　松江佐千子　知久とみゑ
長浜フミ子　手塚　みよ　佐々木たみ子
山田　文好　生田　基行　水嶋　洋子
すずきとしやす　鈴木　信一　久米　玉枝
北野　幸子　幸田健太郎　岡本　久榮
前田　徳勇　村木　幸子　杉山　佳子
宮地　政子　中山　和　大石みつ江
岡本　蓉子　金取ミチ子　平井　要子
織田　惠子　坂東　茂子　荒木　治子
吉野　正子　内山喜八郎　倉見　藤子
川島百合子　寺田　陽子　髙橋　幸
新田えいみ　仲村　正男　髙山　紀惠
角替　昭　増田　しま　安藤　圭子
平野　旭　鈴木　郁子　寒風澤　毅
大城きみ子　水川あきら　河合　秀雄
中村　弘枝　森　安次　白井　忠宏
内山　智康　竹内オリエ　荻　恵子

あひる　高橋紘一　内田安子
森上壽子　内藤雅子　今駒隆次
江川冬子　月美里　田辺悦子
小林和子　和久田俊文　鴇多健
半田恒子　飯尾八重子　伊藤友治
石川きく　前田道夫　大橋康夫
太田あき子　藤田淑子　内山文久
川上とよ　飛天女　畔柳晴康
出原久子　鈴木芳子　杉山勝治
北島はな　鶴見佳子　近藤茂樹
井口真紀　脇本淳子　山口久代
高橋正栄

選評……村木道彦……206

定型俳句

市民文芸賞

田中美保子　野田正次　山内久子
切畠正子　吉田髙徳　山﨑暁子
野嶋蔦子　藤田節子　渡辺きぬ代
野中芙美子

入選

赤堀進　あべこうき　飯田裕子
池田千鶴子　池谷静子　伊藤久子

今駒隆次　岩﨑良一　岩渕泰三
右﨑容子　大倉照二　大田勝子
大村千鶴子　小川惠子　加藤新惠
切畠正子　齊藤あい子　佐藤千惠
佐藤政晴　澤木幸子　塩入しず子
柴田弘子　柴田ミドリ　白井宜子
鈴木章子　鈴木由紀子　平幸子
高橋ひさ子　竹山和代　田中ハツエ
田中美保子　徳田五男　中津川久子
中原まさ　中山志げ　野嶋蔦子
野島やすゑ　野末初江　野田正次
野田ますえ　野中芙美子　伴周子
平野旭　深津弘　藤田節子
藤本幸子　星宮伸みつ　牧沢純江
松江佐千子　松本緑　宮本みつ
村松津也子　森下昌彦　山内久子
山﨑暁子　山﨑勝　横原光草子
吉田髙徳　和田有彦　渡辺きぬ代
浅井裕子　あひる　安間あい
安間すみ子　飯尾八重子　生田基行
池田保彦　石川芳治　石橋朝子
伊藤アツ子　伊藤サト江　伊藤しずゑ
井浪マリエ　岩崎芳子　内山あき

海原　悠
太田沙知子
大橋　康夫
岡本　久栄
刑部　末松
梶村　初代
加藤　和子
金田　チヨ
加茂　隆司
川瀬　雅女
倉見　藤子
坂下まつ江
沢田　清美
不　知　火
新村ふみ子
新村　　幸
鈴木　千寿
鈴木　浩子
髙柳とき子
為永　義郎
坪井いち子
戸田　幸良
内藤　雅子

梅原　栄子
太田しげり
大平　悦子
岡山　小夜
小野　一子
勝田　洋子
加藤ゆう子
加茂　桂一
川島　泰子
川村かづ子
斉藤　てる
坂田　松枝
柴田　　修
新村あや子
新村　　康
鈴木　和子
鈴木　ちよ
関　　和子
髙山　紀恵
辻村　榮市
鶴見　佳子
富永さか江
中嶋　せつ

大石　佳世
太田　武次
大屋　智代
小楠惠津子
御室　夢酔
勝又　容子
金取ミチ子
加茂　　忠
川瀬　慶子
金原はるゑ
斉藤三重子
佐原智洲子
清水よ志江
新村　健一
新村八千代
鈴木　節子
鈴木　智子
髙林　佑治
田中　安夫
辻村きくよ
鴇夛　　健
豊田由美子
永田　惠子

長浜フミ子
西尾　わさ
野沢　久子
野田　俊枝
花田　春男
原田かつゑ
古橋　千代
松本憲資郎
松山　洋子
宮澤　秀子
森　満智子
山口　久江
山本　峰子
和久田志津
伊藤　倭夫
大石　睦治
加藤うめ子
畔柳　晴康
佐野　朋旦
白井　忠宏
高橋　紘一
ちばつゆこ
寺田　久子

中村　貞子
西村　充雄
野末　法子
野又　惠子
浜　美乃里
原田　ゆり
堀口　英子
松本　賢藏
馬渕　涼子
宮本　惠司
八木　裕子
山本晏規子
横田　　照
和久田りつ子
うたの
太田　静子
川上　とよ
佐久間満雄
小　百　合
杉山　佳子
滝田　玲子
黒葛原千惠子
天　竜　子

中村　勢津
二橋　記久
能勢　明代
袴田八重子
林田　昭子
日置　文代
前川　友子
松本　美都
水川　放鮎
森　　明子
八木　若代
山本　兵子
吉野　民子
渥美　　進
内山喜八郎
岡本　蓉子
北村　友秀
佐久間優子
清水　孜郎
鈴木　圭子
竹下　勝子
手塚　みよ
戸田田鶴子

永井　真澄　中野はつゑ　中村　弘枝
錦織　祥山　のぶ　女　浜名湖人
藤田　淑子　古谷　廣行　本間　哲三
前田　徳勇　松野タダエ　水野　健一
道　宮地　政子　森　三歩
山口　英男　山田　知明　山田美代子
山中　伸夫　和久田孝山
選評……九鬼あきゑ……239

自由律俳句

市民文芸賞

大軒　妙子　藤本ち江子　生田　基行

入選

縣　敏子　生田　基行　伊熊　房子
泉沢　英子　鈴木　章子　鈴木まり子
戸田　幸良　外山喜代子　中津川久子
中村　淳子　宮本　卓郎　石田　珠柳
伊藤　重雄　岩本多津子　太田　静子
大軒　妙子　大庭　拓郎　小楠　純代
河村かずみ　木俣　史朗　木俣とき子
倉見　藤子　畔柳　晴康　鈴木　憲
鈴木巳三郎　鈴木　好　ちばつゆこ
戸田田鶴子　富田　彌生　錦織　祥山
袴田香代子　松野タダエ　水川　彰
宮司　もと　阿部　洋子　飯田　邦弘
飯田　裕子　池野　春子　内山　春代
大久保榮子　影山　ふみ　河合　秀雄
川上　とよ　佐々木たみ子　柴田　修
鈴木　愛子　鈴木　明子　鈴木　晴香
滝田　玲子　竹内オリエ　鶴　市
手塚　全代　寺島　寛　鴇多　健
富永さか江　内藤　雅子　永田　キク
長浜フミ子　中村　友乙　浜名湖人
原川　恭弘　飛　天　女　ヒメ巴勢里
広島　幸江　藤本ち江子　宮地　政子
山崎みち子　山下　正則　横井万智子
渡辺　憲三
選後評……鶴田　育久……249

川柳

市民文芸賞

鈴木千代見　竹山惠一郎　髙橋　博
馬渕よし子

入選

仙石　弘子　赤堀　進　浅井　常義
太田　雪代　小島　保行　山口　英男

米田　隆　木村　民江　鈴木　覚
鈴木千代見　鈴木　均　滝田　玲子
竹山惠一郎　堀内まさ江　山﨑　靖子
飯田　裕子　石田　珠柳　伊藤　信吾
金原　惠子　柴田　良治　白井　忠宏
高橋　紘一　高橋　博　竹内オリエ
為永　義郎　戸田　幸良　とつか忠道
中田　俊次　中津川久子　中村　禎次
中村　雅俊　長谷川絹代　馬渕よし子
内山　敏子　太田　静子　太田　初恵
大庭　拓郎　岡本　蓉子　小野　和
金取ミチ子　久保　静子　倉見　藤子
畔柳　晴康　後藤　静江　斉藤三重子
佐々木たみ子　柴田　修　杉山　佳子
髙柳　龍夫　髙山　紀惠　辻村　榮市
手塚　美誉　寺田　久子　戸田田鶴子
富永さか江　豊田由美子　内藤　雅子
仲川　昌一　長浜フミ子　中村　弘枝
野末　法子　松風　梢　松本　錦是
水川　彰　夢　耘　森上かつ子
山田とく子
選評……今田　久帆……260

「浜松市民文芸」第58集作品募集要項……261

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。

掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作品は選考順または五十音順としました。

第57集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一八	短歌	六〇四
児童文学	四	定型俳句	一、一六九
評論	三	自由律俳句	三二九
随筆	四一	川柳	三七八
詩	二五	計	二、五七一

小説

【市民文芸賞】

「哭くな信康」

海原　悠

信康（岡崎三郎信康）は二俣城の急峻な崖をカモシカのように走り下りると、着物をはらりと脱ぎ、草むらに投げ置いた。振り返ると服部半蔵が崖を下りてくるのが見えた。信康は褌一つで岩の上にすっくと立つと、いきなり天竜川に飛び込んだ。ひやりとした水の感触が全身を貫いた。その感触は強烈で筋肉から骨の髄にまでも達して、脳天を突き抜けるような心地好さであった。水に逆らって泳ぎ、水底まで潜って砂を掴んでみた。流れの中で受ける全身の感覚はこれまでに感じたことのないさわやかさであった。透明な水の中は夏の空を淡く溶いたように美しかった。両肩の筋肉が活力を得て動き、下肢の筋肉も水になじんで力強く動いた。顔を流れに向けて、水の感触、匂い、味を心いくまで味わった。

生きている、いま、生きているのだ。

しびれるような思いを全身で受けとめた。

鮎が両脇を下っていくのが見えた。晩夏の光が川底に届いてキラキラと輝くのを見ながら息の続く限り前に進み、それから川底の砂をけって、いったん川面に顔を出して息を継いだ。髷が解けて髪が乱れている。口に含んだ水を噴出し、川辺を見ると服部半蔵が片膝ついて心配そうにこちらをうかがっている。再び潜り川の中央の水深のある流れの速いところまで泳いで、流れに身をまかせた。流れに乗って身体が軽くなった。鮎が次々と下っていく。落鮎か。やがて半蔵のいるところへ戻った。

「半蔵も泳がぬか、気持ちがいいぞ」

「――――」

半蔵が困ったような顔をしている。

「許せ半蔵、わがままもこれまでだ。二人で泳ごうではないか」

「いえ、それがしは山育ちにて」

信康は声を上げて笑った。
このように気持ちよさそうに笑う信康を、半蔵は初めて見た。
「半蔵、知っておるぞ、水の中でも練達の技があるであろう」
「半蔵は無骨者にて、一つことしかできませぬ」
「水の上を歩いたというではないか、あれはまことか」
「あれは――――」
信康が愉快そうにまた声を上げて笑った。
信康は笑い声を上げながらまた水面から消えて、今度は岩伝いに崖の下の岩場に潜った。岩の底は流れがなく、奥を見ると大きなヤマメが数匹いた。
信康は川から上がると、半蔵から借りた脇差で傍らの竹を四五本切った。枝をはらい、先を矢のように削いで、籐(やす)のようなものを作った。半蔵の心配する顔を尻目に、髪を束ねると再びそれを持って飛び込んだ。
信康は数匹の鮎とヤマメをたちまち突いてから上がってきた。
「半蔵、火を起こせ」
「――――」
「半蔵、ゆるせ」
服部半蔵は無言のまま川石で炉のようなものを作り、竹の枯葉を集め、枯れた流木を集めて、火を起こした。信康は小刀で魚の腹を割き、はらわたを出すと、竹の枝を串の代わりにしてそれを刺した。煙が立ち流木に火がつくと勢いよく燃え出した。串刺しにした鮎やヤマメを砂にさして焼いた。いい匂いが立ち込めてきた。
信康は旨そうに食った。
「うまい、半蔵、うまいぞ、食わぬか」
焼けた鮎を差し出した。
「――――」
「何故黙っておる、こんなに旨いものはないぞ」
服部半蔵は火の加減を見ながら、下を向いた。泣いているようであった。
「天竜の鮎はこんなにもうまいのか、こんなことができるのも半蔵のおかげだ、いままで生きてきてよかった、半蔵、礼をいうぞ」
服部半蔵は顔を上げなかった。
「泣くな、半蔵」
半蔵は下を向いたまま、背中を震わせた。
信康は半蔵の背中をじっと見ていたが、顔を上げ遠くを見ながら、
「泣くな、半蔵」といって絶句し、それから「戦国の世じゃ」と苦しそうにいった。
信康はそういったきり、天竜川の川上に眼をやり、何もいわなくなった。
焚き火が弾けて炎に勢いが増した。ゆらめく炎の向こうのぼんやりとした天竜の流れを信康は虚ろに見ていた。

信康には、数日後、二俣城で切腹の沙汰が下りていた。

話を前に戻す。

天正七（1579）年8月1日、織田信長は、徳川家康に対して嫡子岡崎三郎信康、及びその生母（家康の正妻）築山殿を、失いまいらせよ、と沙汰した。

家康は、想像もしなかった突然の信長の命を受けて驚愕した。何故このような命令が下りたのか、余人を遠ざけて一人になり、冷静に反芻してさまざまなことに思い巡らした。

岡崎の信康の評判が上がり、築山の立ち居振る舞いを聞くにつけ、わずかに危ぶんだことはあるにはあった。

地に足をつけろ、急ぐではない、大将は人が自然に担いでくれるまで誰よりも泥まみれになって働き、戦うものだ。己を無にして人に施し、弱いものにはやさしくあれ。

そのことを信康にじっくりと諭すべきであった。もう少し早ければ打つ手はあったかもしれない。正妻と長男の殺害である。血を吐くような苦しい重い決断だった。

振り返れば、稗（ひえ）と粟しか育たぬ奥三河の狭い山国から松平は家を興した。幾多の戦いを経て南に出た。松平家は多くの重臣を亡くし、また新しい味方も加えて膨張して、祖父の清康のころにほぼ三河を手に入れ、自分はいま遠江の浜松にいる。やがて、駿河も治めることが出来るであろう。この徳川の大きな国をおもえば、決断は一つしかなかった。

信長は、姉川の戦いで朝倉、浅井に勝利し、長篠の戦では三段構えの鉄砲で武田軍を打ち破った。また、琵琶湖の東に五層七階の壮麗なる安土城がほぼ完成していた。本州の中央をほぼ制覇して、ここより天下に号令する勢いだった。この時期、信長は絶対であり、正も否もなかった。家康は、いまは何としても織田信長との同盟を維持していかなければならない立場にあった。

家康は悩みぬいた末に決断して、8月3日岡崎城に入った。それからは素早い行動であった。間をおかず信康と対面して事の次第を告げ、信康を8月4日岡崎城から大浜城へ移送した。8月4日松平家忠に軍勢を率いて大浜城に近い西尾城へ赴くように命じ、自らも西尾城へ来た。あわただしく家忠に指示を出すと、踵を返して7日に岡崎城に戻っていった。9日には信康の移送をはじめた。船を使って矢作川を下り、知多湾に出て遠江に向かう海路をとった。船は伊良湖岬をまわると帆は西風をはらんですべるように走った。遠州灘を東に進み、今切れより浜名湖に入り、静かな湖を北上して大沢基胤（もとたね）の遠州堀江城に移された。いずれも松平家忠の弓、鉄砲隊に囲まれての護送だった。

信康は、何故このようになったのかその経緯が納得できなかった。物々しい護送団に囲まれての護送だった。何故、お父上は突然このような沙汰をおだしになったのか。

――――いまはいえない、不穏な動きがあるのだ。岡崎を離

れて、遠江の二俣でしばらく謹慎せよ、追って沙汰する、とだけ命ぜられた。
何があったというのだ。不穏な動きとは何のことか。わしにその理由も示されず、申し開きする間もなく、いきなり拘束されて罪人のように移送されるとはどういうことだ。わしがいったい何をしたというのだ。

移送された堀江城で同行していた服部半蔵に、何故だと訊いた。
半蔵は無言である。
「何があったのだ、半蔵、まるでお城の取り潰しではないか」
「それがしも、まだ聴いてはおりませぬ」
「お城で何があったのだ、何か異常な動きがあったのか」
「拙者はなにも――――」
「父の一存か」
「いえ、そうではないと存知まする」
「ならば、信長様か」
「――――」
「どうして、父は承知されたのだ、どうしてわしに説明されなんだ、わからんぞ」
半蔵は涙をため、あくまでも無言であった。
信康は立ち上がり、堀江城から浜名湖に落ちる夕日を見た。大きな真っ赤な夕日が今まさに落ちていくところだった。
何故だ、信康は大声で湖にむかって叫びたかった。

岡崎において徳川の進む道について父と意見を交わしたことを思い出した。
信康はすでに20歳になっており、すらりと背が高く、切れ長の涼しい目をしており、立ち居振る舞いが美しく、家康始め譜代の家臣と、挙措、物言いがどこか違う。
三方ケ原の戦いで大敗してからというもの、家康は、人が変わったようにいずれの戦いにおいても一段と慎重を極め、待ちに待つ戦いに変わった。勝てぬとおもう戦いはしなかった。もともと、松平一門の戦いは城より出撃して城外の広野で戦うもので、現に少数でも勝ってきた。が、三方ケ原の戦い以降はまるで変わった。また、信長の采配に従った。
信康にはそれが面白くなかった。一つには高天神城を包囲した武田軍と戦うことなく、信長の援軍を待った。それでついに高天神城は武田勝頼に奪われてしまった。長篠の戦もそうだ、やはり織田の援軍を待ちつづけ、信長の派手な三段構えの火縄銃の勝利によって信長の名を世に成さしめた。いずれも主導権は徳川が握るべきではなかったのか。
「信康、言葉が過ぎないか」
家康は大きな眼を瞬(まばた)きもせず信康を諭した。
「信長公とて、東に徳川の壁があればこそ、西へ伸びてゆかれるのではございませぬか。徳川がここにこうしてあることを、もっと天下にいわねばなりませぬ」
「さもあろう、が、ゆっくりと考えてみよ、信長公がいまこ

の世で一番輝いておられる。高いところから天下を見ておられる。そうは思わんか、信康」

「――――」

家康が何をいおうとしたのか信康には分からなかった。

信康は永禄二（１５５９）年３月６日駿府城で家康と瀬名姫の長男として誕生し、竹千代と名づけられた。今川義元が桶狭間（１５６０年）で討たれた後、家康は今川の人質となっていた駿府城より岡崎城に入城し、やがて信長と同盟を結んだ。信康は永禄十（１５６７）年５月２７日、９歳で信長の長女徳姫と結婚した。元亀元（１５７０）年家康が浜松へ移るときに岡崎の城を譲られてわずか１２歳で城主になっている。元亀二年８月２６日に元服し岡崎次郎三郎信康と名乗った。名前は舅（信長）の信と父（家康）の康から取られた。その祝いの能楽が浜松城で行われている。

天正元（１５７３）年１５歳の信康は、甲冑を着け初陣で菅沼貞吉が守る田峰の内武節の城と足助の城を戦わずして落とした。四肢がすくすくと伸びて甲冑がよく似合った。精悍な顔つきになり、将来を約束される武将としての懐深さも併せて持っていた。天正三（１５７５）年１７歳で長篠の戦に出陣した。信長はその姿を茶臼山の本陣からつぶさに見ていた。

「信康は逞しくなったものよ」と信長がつぶやくのを家臣が聞いている。

信長は目を移して、信康の後方に陣取っている我が子の織田信忠に目をやった。信忠に落ち着きが見られず、信長はわずかに眉をひそめている。信長はそのとき信康をどんな感情で見ていたのか。

同年、長篠で敗れた武田勝頼が再び大軍を率いて遠江にあらわれた。このとき家康と信康は出陣して小山城を攻めていたが、武田軍の大部隊と戦う不利を知り家康は退却を命じた。信康は家康を先に退かせて自分が殿軍を受け持つことを自ら願い出た。退却するときの殿軍が最も危険で難しい戦いをしなければならない。戦いつつ退き、いったん踏みとどまって戦って押し返し、また退く。そのむつかしい戦いをやってのけた。その一挙手一投足は水際立っており、それによりその名は広く知られるようになった。

そして信長にまでその評判が届いた。

この青年はすでに名将といっていいほどに育ち、まわりの目を奪った。負けたことがなく、家康でさえ信康がいれば東にも北にも打って出ることができると考えた時があった。それほど信康は岡崎において抜きん出て注目される若い武将に成長していた。家康は我が子の将来を大いに嘱望したが、これほどまでの輝かしい急成長に、ふと不安を覚えることがあった。しかし、それが何であるのか、このとき家康は気がつかなかった。

信康は、振り返って服部半蔵に質した。

「わしは戦いすぎたのか、おのれの信ずるままに前へ前へと戦っただけではないか」
信康が独り言をいい、半蔵は神妙に聞いていた。
「半蔵よ、戦は、攻撃が最大の防御であろう、松平の戦いは、そうだったではないか」
信康はいつも先陣切って戦い、勝った。駆け抜けるだけで、逃げる敵もいた。
「左様ながら、しぶとく守り抜くことも、また勝ちを呼ぶ戦いかと」
「守るだけで攻めねば、戦いにならぬであろう」
「されど、守りとて力がなくては守りきれませぬ、忍んで守り抜く戦いこそ負けぬ戦いでございます」
半蔵は慎重な言い回しをした。
「父の受け売りか、半蔵」
こんなにも慎重に物言う半蔵を信康は初めてみた。
「家を絶やさず、国を安らかに保つ戦いは、そのようなことかと、半蔵このところ考えるようになりましてございます」
「半蔵、人の一生には限りがあるぞ、待ってばかりいては、時間がないのではないか」
信康はそういってまた背を向けて夕日を見た。
「そこで、ござる」
こことばかり服部半蔵は手を膝に置き、力を入れてわずかににじり寄り、神妙な面持ちで続けた。
「生は、皆等しく有限でございます。誰しもそうでござる。されど、急がば腰が伸び隙を作りましょう、また足もと危ううすることもありまする。力を溜めて勝機を待つ。待てるか待てないかは、人の器にあるのではありませぬか」
いつの間に半蔵はこのように軍師のようなことをいうようになったのか。信康は山育ちでやや猫背の男の顔をまじまじと見た。父がそのように育てられたのか。確かに父は早くから伊賀や甲賀者をよく用いられた。しかも、一人の人間として武士として重用された。
半蔵とこれ以上話をしても、解ってはくれまいと信康は思った。父の考えで骨の髄まで染まっている。しかし、わしにこのような家来がいままでいたであろうか。信康は家康の漠とした人格の大きさを改めて思った。
浜名湖に溶けるように形を変えて落ちていく大きな夕日を信康は目で追っていた。

戦国の大名は忍びの者を間諜に多数利用したが重用しなかった。忍びには忍びの社会があり、武士とは根本的に違うと考えた。信長も秀吉も召抱えて利用したものの好意を持っていない。信長は天正七年に伊賀の掃滅を計っている。また、忍者にも特異な考え方があった。ある武将のために仕事をするのは、傭われたからであり、目的を果たせば任務は終わる。大切なのは、忠節、ではなく「術」だとした。
家康は、若いころから「信」「義」を内に秘めている男を一目で洞察した。それに技と度量があれば忍者でも敵方の家

臣でも従うものはすべて陣営に加えた。この評判がいつのまにか家康を大きな存在に押し上げることになる。

翌日、信康は浜名湖を北上して二俣城に移して幽閉された。二俣城は西側を大河の天竜川が流れ、東南は二俣川が流れる崖の上にあった。武田と徳川の争奪が何度かあり、いまは徳川の大久保忠世が預かっていた。

信康はその夜一睡もすることなく、天井を見つめて今までのことに思い巡らした。様々なことが思い出された。

父と戦における戦略で幾度か対立した。それは意見を率直に申しあげただけだ。しかし、いずれも父の命に従った。言葉が過ぎたか、それは認めねばならない。わしはいつもそうなのだが自分の主張を通そうとするあまりつい言葉が激しくなる。しかし、それは誰でもあることではないのか。また、若気の至りで乱暴もした。鷹狩で獲物に恵まれず、帰りに出会った僧侶に矢を射掛けたり、岡崎の城の中でも尾張から来ている徳姫の侍女の髪をつかんで投げ飛ばしたりもした。あれもはずみのようなもので、気分がすぐれなかったときのことだ。城の中の侍女どもの間では、尾張と今川と岡崎と違う空気が漂いだして陰気になっていた。あの時は、わしの振舞いを事細かく質そうとするので、うるさい、と振り向いたときにはもう投げ飛ばしていた。が、そんなことで謹慎になるのか。

いつもの信康は、起きてから寝るまで風が吹きぬけるようにさわやかで、馬で駆けぬけるような爽快感で全身が満たされていた。いまそれがしだいに失われて、いつしか暗い大きな洞に紛れ込み、喪失感と絶望感が襲ってきてねっとりとまつわりついている。いままで自分では気づいてもなかった、見えない大きな霞網（かすみあみ）に十重二十重（とえはたえ）に取り囲まれている。人に先駆けて走ろうとすると、それらが身を阻んでくる。玉虫色に塗りこまれた同盟、戦国の掟、徳川が生き残る為の手段、母のこと、母の出自のこと、今川のこと、それらの鉛の錘（おもり）のようなものが、手や足に絡まり信康の動きを封じていく。考えたこともなかった、この世を生きぬく為の手練手管。長いものには巻かれなければいれないこと、出る釘は打たれること、本音は一切言わないこと、強者ににじり寄り、顔色を一瞬にして見分けること。

「馬鹿な、それが武士か、それが男か。美しくないではないか」

信康は身を起こして、闇の中で叫んだ。

「馬鹿な、それがこの戦国の世だというのか」

いままで同盟関係にあった今川、それがいまは敵対しているというより、武田と徳川でほしいままにしている。これが戦国の世というものなのか。

巨大な渦が信康の脳裏で音を立ててゆっくりと廻り始めた。

夜が明けると大久保忠世に一つだけ願い事をした。

「すでに覚悟はできている。逃げも隠れもせぬ。父上の沙汰

に従う。いま少し半蔵を近くに侍(はべ)らせてくれ」
大久保忠世はやや右眉をあげ、信康の顔を見て黙考したが、
「半蔵といま少し話がしてみたい。後生だ」
信康が美しく頭を下げるのをみて、
「承知仕った」と静かにいった。

信康は二俣城の天竜川の見える部屋にいた。立ち上がり窓を開け天竜川を見ながら、服部半蔵を呼んだ。
「岡崎にて、母上はいかがされておる」
「はい、気丈にも顔色一つ変えず日々お暮らしのご様子。ただ、信康様のことを深く案じておられるようでございます」
「お徳はいかがした」
「お変りないかと、思いまする。お城はしーんと静まりかえっているようでございます」
「そうか」
信康はうなずいて立ち上がり、部屋の欄干に手をやって身を乗り出して天竜川を覗き込んでしばらく見ていた。
「流れの何と雄雄しいことか、周りの山の緑が河に溶けて、まるで翡翠(ひすい)のような水の色ではないか、こんな河は三河にはなかったなぁ」
「浜松の土地はこの河によって潤い、時として氾濫して大きな被害をだす、とも聞いておりまする。このあたりでは天竜太郎、暴れ天竜、などと呼んでおりまする」
「この流れを見ていると胸につかえたものを洗い流してくれるようだ。いつまで見ていてもあきることがない、一度はこんな河で泳いで見たいものよのう」
信康は独り言をいい、ふと翳の射す顔になり、外を見たまま
「父と母は、仲はよかったのだろうか」
といった。
「えっ」
半蔵は不意をつかれて戸惑い、信康の背中を見た。
「父は浜松に移られたとき、何故母上をご同行せられなんだのか、わしは不思議だった。いまとなってはあとの祭りだが、わしは何故母上にそれを勧めなかったのか。母上も何故父上についてまいりたい、という気持ちを顕わにされなんだのか」
半蔵は慎重に言葉を選んで、
「戦に次ぐ、戦でございましたゆえ」
といった。
「お二人の気持ちが添うておれば、たやすいことだ。それが夫婦(めおと)ではないか」
それから、しばらくは河の流れを見ていたが、つぶやくように
「やはり、血、か」
と短く信康がいった。
半蔵は、どきり、とし、目をそらしてうつむいたまま言葉を失った。

家康は今川の人質生活時代、今川義元の命により用宗(もちむね)城主関口義広の娘、瀬名姫（築山御前）と結婚している。弘治三（１５５７）年元信（家康）１６歳、瀬名姫（築山御前）１７歳のときである。関口義広の妻は今川義元の妹で、瀬名姫は義元の姪にあたる。

今川家は足利将軍に次ぐ名門であり、瀬名姫は立ち居振る舞い、物言いが京風で、歌に長け、お茶、お花、香合わせなどの雅を好んだ。家康はその一つ一つが異国のことの如くに新鮮でめずらしかった。多くのことを夫人より教えられた。二人の仲はむつまじく、永禄二（１５５９）年３月６日に信康（幼名竹千代）が生まれ、翌年に亀姫が生まれている。

今川義元は家康の幼少の頃からその素質を見抜いていた。判断力決断力があり、武に長け、しかも沈着冷静な一面も併せ持っている。義元は軍師雪斎をつけて学ばせた。西の守りに岡崎の家康を置けば、京はもうすぐ側である。着実に手を打っていた。

今川義元は甲斐の武田信玄、相模の北条氏康と三国同盟を結ぶと、永禄３（１５６０）年５月２日に２万５千の大軍を率いて駿府を発って京にむかった。

このとき元康（家康）は先陣を切って出陣して、三河の前進基地である大高城に織田の間隙をついて兵糧を運び入れることに成功している。

しかし、運命も人生も、一寸先は闇である。

桶狭間における思いもよらぬ一陣の突風によって歴史は大きく転換していく。上洛途中の義元は、永禄三（１５６０）年５月１９日、織田信長の奇襲にあっけなく首をはねられたのである。機略と度胸で小が大を鮮やかに倒し、颯爽と信長が登場する。

この敗戦で大高城から岡崎城に戻った家康は駿府へは戻らなかった。

岡崎城は、今川の城代と家来たちが松平領の租税をほぼ奪っていた。松平の家臣は農夫に戻りわずかな土地を耕して飢えをしのいでいた。家臣団は大喜びで家康を迎えた。一方、今川義元亡き後、嫡子の氏実(うじざね)は蹴鞠(けまり)をよくし歌舞音曲に秀でていたものの、思慮の浅い男であった。義元の弔い合戦を主張した家康ではあったが、今川氏実にはその気がなかった。家康は氏実を見限り、時代の空気を読み取り、そのまま岡崎にとどまると、生母お大の方の進言も聞き入れて、２年後の永禄５年に今川と決別して信長と同盟を結んだ。

戦国の世ばかりではない、同盟とはかくも簡単にもろく破棄されるものである。同盟の条文などほとんど価値はなく意味を成さない。戦国の同盟とは人質交換または政略結婚がその主たるをなしていて、命と国を天秤にかけ、命さえ犠牲にすれば、いつでも破棄できる。同盟とはそれを結び、互いが政治的経済的また軍事的に常日ごろ肝胆会い照らし、意思の疎通を図り、文化や人事の交流をよくする。いわば二種類の

うどん粉を練りに練って練り上げ、一つにしなければならない。また、互いに独立していて、それでいて適切に依存でき、それをよく知っていることである。それがなければ、絵に描いた餅と同じではないか。現代における同盟も同じではなかろうか。

戦国の世はまことにめまぐるしい、隣国の勢力とは周辺の変化により時として同盟を結び、また戦い、和睦しながら互いに生き延びている。

家康と信長が同盟を結んだことにより、瀬名姫（築山御前）は踏み台をはずされたようなものである。父の関口義広は、婿の家康が裏切ったことの責任を今川氏実に問われて腹を切った。そして信康と瀬名姫は駿府にて今川の人質状態となる。が、家康は今川方の三河国西郡の鵜殿長照の子供二人を生け捕りにして、妻子との人質交換に成功している。

瀬名姫と信康は岡崎城に移った。そして、家康は岡崎城内の馬場東側沿いの屋敷に住まわせた。住居は玄関、書院、客屋敷、居間があり、書院には山水の軸、床の間には香炉が置かれていた。庭は見事な築山があり、サツキが見頃をむかえる頃であった。そこをのちに岡崎衆は築山御殿と呼んだ。それで、瀬名姫は後に築山御前と呼ばれるようになる。

信康は永禄十（１５６７）年に織田信長の長女徳姫と結婚した。信康９歳、徳姫９歳の時である。

築山御前、嫁の徳姫、姑のお大の方は同じ城内で過ごした。つまり、今川（駿河）、織田（尾張）、徳川（三河）という異なる風土文化で育った女たちが共に暮らすことになったのである。今川家の駿河は名門の誉れ高く、公家化して京風の淡い渋さを好んだが、尾張は商業が発達して、派手できらびやかなものを好んだ。また三河の松平は山地で何事においても質朴で質素であった。女たちには当然ながらそれぞれの風土で育まれた性格があった。言の葉は恭しく保ち、表情もにこやかに日常を過ごしながら、その皮膚の下で、また心の襞の奥では、それぞれに複雑な思いを持って暮らしていたであろう。それらが一つ屋根の下で目に見えぬ力学、或いは生理と感情という元素が摩擦熱を誘発し、化学反応をおこして、火花を放ち、やがて暴発することになる。

岡崎に来てしばらくはいい思い出ばかりだった。父上（家康）を岡崎に迎い入れて家臣団は沸いて燃え上がり、更に織田と同盟を結んで、徳川の地盤を固めつつ東への侵略を視野に入れていた。一方、母上は庭を京風に仕立て直し、部屋は居住まいよく装飾を施した。徳姫を我が子のように可愛がった。徳姫は利発な女の子で物事の呑み込みが早かった。香合わせ、歌、書もこなし、貝合わせに興じた。

しかし、いつのころからだろうか、お徳が成長し女の子を二人なしたころだろうか、おだやかな春の風にくるまれていた空気が、気づいたときにはしだいに乾き、時として冷たい風が吹き始めていた。それを自分も感じていた。それぞれの

侍女達の間に隙間風が吹き、ひそひそと互いの陰口などをささやくようになり、岡崎譜代の家来の、母上やわしにたいする物言いや態度が、微妙に変化していった。いつそうなったのか信康には分からなかった。

譜代の家来衆は奥三河松平郷の山育ちの荒々しい気風があった。夜になると車座になって土器(かわらけ)を回し飲み、歌って踊って騒いだ。それが団結力を作った。父上も仲間にはいられることもあり、このときばかりは剽(ひょう)げて踊られた。それは松平ではごく普通のことであり、楽しみとともに明日の戦への英気を養う備えでもあった。が、母上もお徳もそれを好ましく思っておられず、眉ひそめておられた。わしも好んで仲間に入りたいと思わなかった。育ちというものはそのようなものなのだろう、日常の生活までが次第に反りが合わなくなっていった。

母上は、ことさらわしにだけ和歌を教えてくださり、能の舞いも教えてくださった。

人の上に立つものは学問武術の他に、寂(さび)もこころえなくてはなりません、とおおせなされ、さらに、背筋を正して美しくなくてはなりません、とおおせられた。

それを見る家臣の冷たい眼差しを幾度か感じたことがあった。

家康は岡崎に戻ってから戦に次ぐ戦の連続だった。

武田が駿府へ南下の動きを知ると、岡崎から遠江へと動いた。浜名湖湖畔から北また東に今川の出城があり、一つひとつ将棋倒しのように落としていった。拠点となる引間城を落としてから、それを拡張する形で、三方ケ原の台地の末端に梯格式の平山城の建設にかかった。浜松城である。

母上は部屋に閉じこもることがしだいに多くなり、鬱々とされていたようである。父上がたまに岡崎にお戻りになっても母上の寝所を訪れにならなかった。侍女に昨夜、殿はどうなされておられたのか、と青ざめた顔をしてお聞きになっていたことがあった。父が浜松より側女を同行された気配を感じておられた。どうして殿はあのように土豪の名もない女を愛されるのか、母上は理解できなかったようだ。湯浴みして髪を下ろし部屋には香をたいて待たれていた母上を思うとさびしく思ったことが幾度かある。戦いに明け暮れている父上は城に戻れば誰にも気兼ねなくくつろいで開けっぴろげに過ごしたかったであろう。格式ばったことが苦手であったから致し方ないとしても、母の気持ちを察すると不憫に思ったことがあった。

母上は次第に衰弱なされ、医師減敬(めっけい)の処方をうけられた。減敬が甲州の唐人であったこともあり、家臣の中には首をかしげ疑うものがでてきた。

減敬(めっけい)はわしも知っているが疑われるようなお人ではない、漢方に明るくやさしいお人であった。わしも漢方の処方をしてもらったことがある。わしの気が荒れているときだ。

「殿、これを食間にお白湯をたっぷりでお飲みくだされ。人の体の中には血液や水のほかに見えない「気」、というものが流れておりまする」
「気力、などという、気、のことであるな」
「左様でござります。殿はいま「気」が猛っておるようでございます。気が強すぎますと、物事がよく見えるように感じまするが、これは尋常なことではございませぬ。とかく、木の芽どきは、その「気」が乱れるものでございます。気と水と血が、滞りなく巡っておらねば、変調をきたしまする」
「これがその漢方か」
「牡丹皮、朮、桔梗根、山椒実、肉桂、浜防風根茎を調合いたしました。邪気を祓い、気を静めまする」
優しいお人だけに母に誠意をもってつくされた。それがまるで違う意味に取られた可能性がある。
わしの知らないところで噂に尾ひれがつき、憶測が餅のように膨れ上がっていたのかもしれない。
築山御前は減敬と密通して武田と通じ、武田と結び信康をたてて謀反を起そうとしている。嫁のお徳に嫡男のないことを常日頃より恨めしく言葉にして、今川の血を絶やす気か、などの暴言まで吐いている。
築山御前がそのような言葉を発したのか否か、心の中で幽かにそう思ったことがあったのかどうか、それは藪の中である。が、築山御前は松平の譜代の家臣やその侍女たちと育ちが違い、気風が違い、生活態度や物言いまで違うために、意思の疎通がうまくいかなかった。それがいつか疑心暗鬼にまでなってしまった。そのうえ、御前は気位高く、政治好きであるために、何処からかきなくさい煙がいつの間にか立ち始めていた。
酒の席で家来の一人が面白半分にいった言葉が、いつか真実らしく語られだし、好ましく思っていない勢力に上手く利用されたことはあるかもしれない。減敬が甲州人だったことが、尚一層災いもしている。時とともにあらぬ方向へ話がいってしまった。
その頃になると、わしと母上を排除したい、という空気をにわかに感じるようになっていた。そして気がついたとき、それが実行されていた。
お徳はときどき近況報告としてお父上に手紙を出していたようである。お徳は聡明で見通しの明るい人である。徳川の家臣団と母上、わし、お徳の生まれ育ち、生きざまの違いは感じていたであろう。が、父上に露骨に告げ口などをするような浅はかなお人ではない。
信長様に岡崎の情勢や母上やわしのことを誰が何時どのように報告したのか、信長様はそれをどのように聞かれて、どのように父に連絡されたのだろうか。また、父はそれをどう受け取られたのだろう。

わしは何にも知らぬ。母とて青天の霹靂（へきれき）だろう。どこかで笑っている者が居るかもしれない。しかし、どう考えてみても納得いかない。些細な話がいつの間にか謀叛の話までに膨れ上がってしまった。

基をただせば「生まれと育ち」ではないか。ただそれだけだ。それはどうしようもないことだ。悲しいが誰も変えようがない。そのことで摩擦がおき、傷になって、膿をもって腫れ上がり、ついに血をふいてしまった。そうとしか思えない。

築山御前は浜松へ移城するために三ヶ日より浜名湖を南下、宇布見から佐鳴湖へと水路を取り湖畔の小藪で上陸した所で、家康の家臣団によって殺害された。天正七（１５７９）年８月２９日のことである。母の死に際は潔かったらしい。介錯人野中三五郎重政の動揺するなかで、自ら懐剣をとりだして果てようとなされた。が、最後は重政の刀により３８歳の生涯を閉じられたという。いまも御前谷という地名が残り、そのときの血のついた太刀を洗った「太刀洗の池」の跡がある。

信康は母の言葉をおもいだしていた。

「人の上に立つ武将は強いだけでなく、美しくなければなりませぬ」

男が美しいとはどういうことか。立ち居振る舞いだけのことではあるまい。戦うことにおいて、勝ち方、そして負け方も美しくなければいけない。そのように潔く生きてきたつもりでいる。しかし、ともするとそのようなわしの言動が譜代の家来達やまた父上とも、どこかで乖離（かいり）してしまったのかもしれない。それも今にしておもえば、わしの若気の至り、身から出た錆である。ここまでくれば信康は信康らしく美しく死ぬしかないということか。

すでに信康には切腹の沙汰がいいわたされていた。

日が傾いてきた城の中で、信康は仰向けになって寝転び、頭に手をやってじっと天井を睨んでいた。天竜の流れがざわざわと聞こえ、城の中の蜩（ひぐらし）の鳴く声が聞こえてきた。

カナカナ、カナカナ、高く美しくも悲しい鳴き声を聞きながら、またつぶやいた。

「今川の、血か」

母上もわしも、そう生まれてきただけだ。変えようがないではないか。ただそれだけで、この世から抹殺されてしまうのか。こんな不条理が罷り通る世を、戦国の世というのか。

信康はむっくり起きあがると机に正座して、墨を擦った。心を整えるようにゆっくりと擦った。それから和紙を広げてしばらく目をとじて思索を練った。

それから一気に筆を走らせた。

二俣の弧雲もさびし鳴く蝉の
カナカナカナと悲しかりけり

カナカナカナと、さびしかりけり、と読み下してみた。が、あからさまで女々しくもあり、まだ未練を残している。思い直してもう一つ書いた。

咲きてまだ浅き命の立葵
今朝の嵐に散りそむるかな

このほうがまだいい、と信康は思った。和紙を取り上げて詠んでみた。少しは気持ちにそって腑に落ちた思いはあった。しかしやはり、歌を残すなど男として美しいことか、と思いなおした。

「つたなし」とつぶやくと、いきなり和紙を破り捨てた。

何も残さないほうがいい。戦国の世に信康という男がいた。二俣の城で黙って腹を切って果てていった。それでいい。いまさらじたばたすることではない。そう思った。

服部半蔵を呼んだ。

「天竜川で泳ぐ」

そういうと信康は部屋を抜け出した。半蔵があわてて後を追った。

天正七（1579）年9月15日、二俣城の空はすっきりと晴れ渡った。

本丸の広場に信康はまるで秋の空のような表情で現れた。上背のある信康は白無垢一重の裃を着て、花道をゆく歌舞伎役者のように静々と歩き、乱れることなく席についた。正面に大久保忠世が床机に腰かけていた。白の鉢巻姿の服部半蔵が後ろに回って片膝ついた。信康は静かに畳三枚の席につく。姿勢をただし一呼吸を置いて、わずかに会釈をしてから肩衣をはずし、白木三方の上の短刀を取って懐紙で刀を巻いた。それから三方を左手で後ろにまわして臀部に当てた。目を半眼にして背筋を伸ばし、やや上半身をのりだした。半蔵が後ろに立つ気配を感じながら左手の中指と薬指で左下腹を探った。正面の大久保忠世は癖で左眉をわずかに上げたものの、その表情はしかとは分からなかった。が、今まで雲ひとつなかった青空に白雲が一つ浮かんでいるのが見えた。弧雲往くか、これまでだ、哭くな信康、と自分にいった。これで幕だ。

信康は右手に力をぐっと入れた。介錯で後ろにいた半蔵が獣のようなうめき声を上げて泣きくずれ、刀を下ろすことが出来ず、その場にうずくまってしまった。信康は薄れる意識の中で、笑みを作りさらに力を入れて右に引いた。見かねた天方山城守通綱が服部半蔵に成り代わり、刀をおろした。

信康、21歳であった。

服部半蔵は、信康自刃の無念さに暇を請い、髪をおろして僧となり西念と号し、諸国を行脚、後に江戸四谷に「西念寺」を建立して信康の菩提を弔った。

天方山城守通綱は禄を辞し、名も関嘉右衛門と改め高野山に隠棲した。

信康の妻のお徳は再婚することなく晩年は京都烏丸中御門

の南（娘の嫁いだ本多家の下屋敷）に住まい、78歳で没した、と伝えられている。

了

（西区）

【市民文芸賞】

風が吹く場所

山﨑　Ｔｉｃｏ

ここふた月ばかりの間、家の中で父の影を見かけないことがしばしばある。

それぞれの部屋を持っているが、食後のだんらんはできる限りリビングで過ごすというのが、鈴木瑛太（えいた）の家族の間の約束だった。

瑛太は、いつもならば父の勇（いさむ）が好んで座っているリビングのソファーを横目で見やる。

居れば居たでどうということはないのだが、居なければ居ないで気になる。役所勤めで生真面目な性格の男である。定時が過ぎれば真っ直ぐ家に帰って来るのが日課だ。壁の時計は夜九時を回っていた。この時間ならば、たいていもうすぐ二歳になる孫の隼人（はやと）と遊びながらテレビを見ているのが常だ。

瑛太は風呂の後、晩酌に発泡酒の缶を空けながら、妻の恵真（えま）に問いかけた。

「親父、今日も遅いのかな」

「同僚と飲んでくるから遅くなるって言っていたわ」

妻は、隼人を寝かしつけたあと、リビングで一息つきながら瑛太の晩酌に付き合っている。

このところの勇の言い訳は「同僚と飲んでくる」「残業で遅くなる」たいがいそんな感じだ。その割に帰宅時には酒の匂いをさせていない。酒の席に付き物の煙草の臭いもさせて来ない。週末も、いつもならば庭の隅にある小さな家庭菜園をいじったりするぐらいで、たまに出掛けるとしても、三年前に他界した妻、つまり瑛太の母親の墓所の掃除ついでに近所のカフェに行くくらいのものだった。それが、近頃ではどうかすると朝から一日外出している日がある。「釣りを始めた」とは言っているが、家に釣果を持ち帰ったことはない。

「親父、ここのところ変じゃないか？　今までそんなに外出することなんてなかっただろう。なんだか、怪しいと思わないかい？」
「あらそう？　だったらあなた、直接聞いてみたらいいじゃない。自分のお父さんでしょ？」
「ううん……」言葉と一緒に飲み下した発泡酒が何だか苦い。
　梅雨時の湿気を払うため、除湿にしてあるエアコンの風が首筋を撫で、ひやりとする。
　もしかして……と、考えたくもない妄想が頭をよぎることがある。いや、そう考えるとそのことばかりに囚われる。勝手な疑惑がメビウスの輪のように堂々巡りを繰り返す。
　普段そんなに口数が多くない親子としては、相手の気持ちを推し量るのは第三者の力を借りるのが適当だろうと思う。特に、こんな話題の場合は。
「変な話、親父、良い人でもできたんじゃないだろうかって思うことがある」
「うふふ、それならそれでいいんじゃない」
缶酎ハイを空けながら、妻がいたずらに笑う。
　何なのだ。瑛太の痛い所を何の躊躇もなく突けるその薄情さは。
「そりゃあ親父もまだ五十五歳だ。お袋の三回忌も過ぎたし、何をやったって自由だ。だけど……」
　普通にテーブルに置いたつもりの空き缶が、思いの外乾いた大きな音を立て、自分で驚く。
「お代わりもらうよ」大股で冷蔵庫へ歩いていき、冷えた発泡酒をもう一本取り出す。
　テーブルには子供の口に合わせて砂糖とバターで煮たニンジンや、甘口のカレーが並んでいる。酒のつまみとしてはどうかと思うが仕方があるまい。酒も飲まずにこんな話はできない。
「この前親父の部屋を覗いたら、北海道旅行の雑誌とか、ホテルのパンフレットを見ていた。それは何だ、と聞いたら何でもないって慌ててしまいこんだ。誰かと旅行でも行くつもりなのかな？」
「へぇ」と、ニヤニヤとした顔で答える。
　それほど酔ってもいないはずなのに、胸が苦しい。なんだか、酸素不足でもがく金魚のようだ。
「僕は考え過ぎだろうか？　勝手な妄想だろうか？　でも、何だか嫌な予感がする」
「あら、あなたって意外とロマンチストなのね。ふふふ」
「親父はこっちが何も気づいていないと思っているんだろうか？　だとしたら、相当熱を上げすぎて頭の回線がショートしているんだ」
「たいがい、何かに熱を上げている時なんてそんなもんじゃないの」
　返す言葉が見つからないので、無言で缶のプルタブを引き起こすと、思いの外勢いよくあふれ出た泡が側面を伝い、おっとっとと、慌てて口で迎えに行く。

妻を亡くした男はかなりの確率で腑抜けになってしまうらしい、ということを聞いた。事実、勇の落ち込み様といったら無かった。気丈にふるまってはいたが、却ってそれが痛々しかった。火葬場から小さくなった母の骨を拾う時だけは目を真っ赤にしていたが、その時以外は涙を見せたことはなかった。それ以来、孫と遊ぶ以外は自分の部屋に引っ込んでいる時間が多くなったようだ。

そう考えると、このところの勇のアクティブな行動を歓迎するべきなのかもしれないが、しかし……

この家を改築したのは五年前だ。瑛太は恵真との結婚を契機に家を出ようと思った。男として経済的にも、社会的にも自立の証が欲しかったからだ。しかし、恵真は瑛太の家族との同居を申し出た。瑛太の母、つまり恵真の姑になる佳代子は心底喜んだものだった。息子は瑛太を始め男ばかりの三人兄弟であったため、娘ができることを心の底から歓迎した。わたしもまたパートに出て家のローンの返済に充てますからと、新しい家族を迎えるための家の改築に張り切っていた。

しかし、家が完成し、瑛太と恵真が式を挙げる直前、佳代子の体に癌が見つかった。まだ五十代になったばかりの若さでは病の進行が早く、息子夫婦の結婚式を見届けた後、あっという間に他界してしまった。恵真は自分の親のことのように号泣した。そんなに泣いてばかりいたら佳代子さんも極楽浄土に行けませんよ、と叔母たちに抱きかかえられて別れを済ませた恵真だった。奇しくも、家のローンは佳代子の生命保険で随分まかなうことができた。

そんな具合で義理の娘と母は、死後も絆を保っていると思っていた。そんな恵真なのに、瑛太が口はばかった言葉をさらりと言ってのけた。あの世の母はどう思うのだろう？

十時近くになって玄関の鍵を開ける音がして、勇が帰ってきたことがわかった。自分の部屋に行くためにはリビングの脇を通らねばならないが、中をちらりと見ただけで、瑛太たちとは目を合わさず「ただいま」と、小声で声をかけ、そそくさと自分の部屋に引き上げてしまった。中高生でもあるまいし。

「なんなんだろうな、あれ……」

ため息はアルコールの香りを帯びている。

「お義父さんがよければ良いんじゃない？」

と、妻は白い歯を見せた。

良い、悪い……何が正しい？　誰が正しい？　瑛太は、軽く酔いの回った眼で、ただエアコンの風に揺れるカーテンを見ていた。

数日後の土曜日、その晩は隼人の誕生日だったため、朝食の後は勇を含めた家族四人がリビングに集まり、プレゼントは何にしようかと相談をした。

恵真は木のおもちゃが良いと言い、瑛太は絵本が良いと意見が分かれた。当の隼人はというとヒーローのフィギュアが欲しいと言って聞かない。

「あの、三輪車はどうかな?」勇が口を挟んだ。
「まだ早いだろう」と、瑛太。
「けっこう高いわよ」恵真も意見する。
「三輪車！　三輪車！　ぼく三輪車がいい」
隼人の顔がパッと明るくなった。
「そうか、三輪車か。よし、じいじが一番かっこいいやつ買ってやるぞ」
歓声を上げ膝に飛び込んできた孫を抱え上げ、勇が満足げに笑う。隼人もキャッキャと声を上げる。
「ちょっと、親父、勝手に決めるなよ」
「お義父さん、予算が……」
二対一だ。
「いや、お金はわたしが出すから」
勇は引かない。いつもなら、三輪車なんて真っ先に反対しそうだ。怪我や事故のことを心配して、少しでも危険なおもちゃは与えないのが方針だ。
「あら、そういうことなら、三輪車にしましょう」
一対二。あっさり形勢逆転。
「よし決まった。じゃあ、今日は三輪車を買いに行こう。じいじが一番かっこいいのを買ってあげるからね」
頭を撫でられ、隼人のテンションが更に上がる。部屋中を駆け回って全身で嬉しさを表現する。
勇のこの気前の良さは何だ？　ひょっとしたら自分の喜びの「おすそ分け」的な意味合いを含んでいやしないか？　またもいらぬ妄想、勝手な思い込みが去来した。瑛太の胸の中で、何かがラムネ瓶の中のビー玉のように引っかかる。
にぎやかな家族会議の後は、家族そろっておもちゃ屋へ出かけた。そこには何台かの三輪車が展示してあった。いろいろ目移りする隼人は、なかなか一台に決められない。
「隼人、これでいいんじゃない?」恵真はオーソドックスな赤い三輪車を選んだ。
「それより、これなんかどうだ?」
勇が選んだのは、銀色に光る、どことなくバイクに似せて作られた三輪車だった。値段は他のものよりいくぶん高い。
「こっちの方が隼人に似合っているよ。これにしよう。仮面ライダーみたいだ」勇は引かない。
「隼人の物だ。隼人に選ばせたらいいじゃないか」瑛太はもっともな意見を言った。
「ねえ隼人、どっちがいい?　ママとパパはこっちの赤い方がいいと思うけど」という恵真の問いに、隼人は、
「んー、じゃあぼくこっち。仮面ライダーみたい。かっこいい」
と、勇が選んだ銀色の三輪車を指差した。
「そうか、こっちか。かっこいいバイクだ。じいじも欲しいな」
「じゃあ、じいじも乗っていいよ」
「そうか、貸してくれるか。じゃあ今度これに乗ってお出かけしようかな」
勇はそう言って、隼人が乗った三輪車を押したり引いたりしている。

「ママも後ろ乗っていいよ。いつも乗せてくれるから」
「あら、嬉しいわ。パパは？」
「パパはダメ」
「おいおい、なんでだよ」
「だって、自転車乗れないから」
「ひどいな、乗らないだけだよ」
　そういえば、外出はいつも自動車だ。近くのコンビニさえ自動車で出掛けていた。面倒くさいし。風を切って走ったことなんて、ここしばらく無いことだった。
　三人が楽しく三輪車を囲んでいる姿を見ていると、何となく自分の居場所が無いようで、少し離れたベンチに座った。前かがみになると、ベルトの上に乗る腹の肉の量が多くなったような気がした。

　鬱陶しかった梅雨も明けたある日、瑛太が家に帰ると、ダイニングテーブルの上に大きな寿司桶が乗っていた。黒光りする漆塗りの木の桶だ。たまに持ち帰り専門店で買ってくるペラペラのプラスチックの容器ではない。はて、今日は何かの記念日だっただろうか？
「あなた、お帰りなさい。待っていたわ。早く食べましょう。今日はお寿司よ」
「パパおかえり。おすし、おすし」隼人が自分の椅子に這い上がろうとしている。
「今日は何かの記念日だったっけ？」
　結婚記念日を忘れようものなら、一週間口をきいてもらえないだろう。しかし、今日はその日ではないはずだ。
「いいからいいから。早く手を洗って席に着いてちょうだい。お義父さん、瑛太さんが帰ってきたわよ。お寿司をいただきましょう」
恵真が勇の部屋に向かって声を掛けた。
「さあさあ。早くしないとあなたの好きなイクラ全部食べちゃうわよ」
「ああ……」
　妻に急かされて、慌てて洗面所で手を洗う。イクラも気になるが、それ以上に事の真相が気になるのだが。
　リビングに戻ると、他の家族三人が既に席に着いていた。見ると、いつもの発泡酒ではなくビールの缶が置かれている。
「何で今日はこんなに豪華なんだ？」席に着きながら恵真に尋ねた。
「お義父さんが頼んでくれたのよ。あ、ビールの方は私のおごりだからね」
「ええ？　いったい、どうしたって言うんだよ？　ますますわからない」
　勇を見ると、ニコニコと微笑み、好物の赤身を取っている。
「ああ、たまにはいいだろう、寿司くらい。隼人、どのお寿司がいい？」
　勇は、隼人にも赤身を取ってやろうとする。
「ちがうよ、ぼく、おすしがいい」

隼人が卵焼きを指差す。彼にとって「お寿司」とはいわゆる「卵焼き」のことだ。経済的だ。
「ああ、そうか。このお寿司か。いっぱい食べなさい。じゃあ、じいじはこっちの赤いお寿司を食べよう」
しばらくその様子を見ていた瑛太だが、慌ててイクラとトロを確保した後、もう一度勇に尋ねた。
「ところで親父、何で寿司なんか取ってくれたんだい？」
勇はやはり、はにかんだような笑いを浮かべながら、少し濃いめに淹れた茶をすすり、イカを口に運んだ。
「お義父さんね、試験に合格したのよ。今まで、がんばって会社帰りとか休日返上で勉強したからね。だから今日はそのお祝い」
照れくさそうにしている勇の代わりに、妻の恵真が答える。
そうか、だから夜遅く帰ったり、休みの日も外出していたりしていたのか……。自分の勝手な妄想で父親を貶めたことを恥じた。
「なんだ、そうか。そういうことか。おめでとう、親父。別に隠すことじゃないだろう」
「別に隠すこともないが、人にいう程のことでもないと思って」
「僕はてっきり……」と、その先の言葉はビールと一緒に飲み込んだ。
「ところで、いったい何の資格なんだい？」
この歳で取る資格とは何だろう？　コンサルタント系、法律系、パソコン、ヘルパー……？　最近は資格ブームである。早期退職でも考えているのだろうか？
「……うん、ま、それはまたおいおい」
歯切れの悪い調子ではぐらかしながら、サーモンをつまみ、「北海道の鮭はもっと美味いのかな」と、美味そうに薄桃色の鮭をほおばった。
その晩のビールが効いたのか、胸のつかえが取れたからなのか、瑛太はベッドに入ると間もなく眠りに落ちた。その夜、瑛太が見た夢は、若い頃の父と母が仲良く雄大な景色の中に立っている情景だった。あれはたぶん、北海道だろう。

翌朝、庭で恵真と隼人が遊ぶ声に起こされた。昨夜の酒のせいだろうか、このところの残業のせいだろうか、深い眠りから目覚めると、いつもより気分が良かった。
寝室のカーテンを開けると、すっかり高くなった太陽の光が眩しかった。庭を見下ろすと、三輪車で遊ぶ二人の姿があった。
「おはよう」窓を開け放して声を掛ける。
「パパー、おはよー」大きく手を振りながら隼人が答える。
「全然早くないけど、おはよう」恵真が返す。
いつもと変わらない朝の風景。家族の笑顔さえあれば他に何もいらない。この家を守ることだけが自分の役目であり、幸せである。残業も、休日出勤も苦にならない。それに、瑛太には他にこれといった趣味もないからちょうどいい。

三十歳、今が勝負の時かもしれない。四年前、それまで勤めていた会社から先輩と一緒に独立をし、ＩＴ系のベンチャー企業を起こし、近頃やっと軌道に乗り始めた。日付が変わってから家に帰るようなこともある。しかし、苦労とは思わない。家族を養うのはもちろんだが、仕事が楽しくて仕方がない。妻子には悪いが、男ならチャンスの後ろ髪を逃してはいけない。

一方、父親の勇は市役所勤務の役人である。特に暇でもなければ仕事に忙殺されることもない。大金を稼ぐこともなければ、大損をすることもない。贅沢をするでもなく、ただ淡々と三人の息子を育て上げるために働いてきたようなものだ。妻、つまり瑛太の母の死は想定外だっただろうが、良くも悪くも平凡な人生だろう。瑛太のように、仕事が生きがいではないとしたら、いったい、何を人生の楽しみとして生きてきたのだろうか？　生きがい、趣味、そういえば、父の趣味ってなんだろうか？　考えたことがなかった。

趣味、資格……あの時の記憶が蘇ってきた。自分勝手に女の影を疑って、変な妄想をしたことだ。とんだ濡れ衣をきせてしまったのだが……顔でも洗ってこよう。

商談で出掛けた帰り、照りつける八月の太陽を避け、のどの渇きを癒すためにカフェに立ち寄った。窓際の席に座り、アイスコーヒーを飲みながら、通りを行きかう薄着の女性などをぼんやり眺めていた。

「おい、瑛太じゃないか、久しぶり」

突然声を掛けられ驚いた。

「なに鼻の下を延ばしてるんだ。やらしいな」

中学の同級生の伊藤順平だった。当時はちょくちょく数人のグループで遊んで、互いの家を行き来していたものだった。それぞれ別の進路をたどり、今では数年に一度、こうして街のどこかで顔を合わせることもある。

「瑛太、ちょっと太ったか？」

昔からズケズケものを言うやつだったが、ちっとも変っていない。だが、不思議と友達の多いやつだった。瑛太も彼のことを嫌いではなかった。順平は自分のアイスコーヒーのグラスを瑛太のテーブルに置き、どかっと向かいの席に腰を下ろした。

「お前、こんな所で何をやっているんだ？」

順平が尋ねるので、「順平こそ何をやっているんだ？」と瑛太も返した。

「俺は今、納車の帰りだ。相変わらず親父と一緒にバイクショップをやっているよ」

順平は決してきれいとは言えない、胸に「イトウモータース」と刺繍のあるつなぎ姿だった。

「そうか、僕は元の会社の先輩と一緒に独立して、ＩＴ系の会社をやっている。今から会社に戻るところだ」

「へー、そりゃすごいな。昔っから瑛太はできるやつだったからな」

褒められて悪い気はしない。
「ありがとう。おかげさまでそれなりの業績を上げ始めた。順平こそ、バイク屋なんて今時アナログな商売をよく続けているもんだな。大丈夫なのか？」
一瞬、まずいことを口走ったかもしれないと思った。一段高い所からの言いぐさじゃないか。奢った人間にはなるまいと思っているのに。瑛太も、時々そういう人間と遭遇する。会社で偉くなることは社会でも偉いのだと勘違いする人間は少なくない。出世の道の途中で何か大切な落し物をしてしまった者たちだ。
「まあ、俺はお前みたいなデジタル人間じゃないからな。だけど、アナログはアナログなりに需要はあるんだぜ」
順平は意に介さない様子で、ストローをつまんで、ズズッとアイスコーヒーをすすった。指の関節のしわと爪の間が黒く染まっている。オイルにまみれて仕事をしてきた手なのだろう。火傷と思われる傷や、袖口からは絆創膏も見え隠れしている。自分とは違う世界を生きてきたのだ。時の隔たりを物語る手だ。昔から、車やバイクが好きなやつだった。趣味が仕事になった幸せな男だ。自分はどうだ。今はそれなりに楽しいとはいえ、仕事イコール趣味とまで言い切れないではないか。待てよ、そういえば僕の趣味って何だ……
「どうしたんだよ、また難しい顔しちゃって」
「あ、いや何でもない。相変わらず順平が元気でよかったよ」
「まあね、それだけが自慢だ。ところで瑛太はバイクに乗らないんだっけ？」
「ああ、昔はちょっと憧れたこともあったけど、だけど今さら」
「いや、遅くないさ。四十代、いやむしろ生活に余裕が出てきた五十代になってから、バイクに戻って来るリターンライダーや、新しく免許を取りに行くオヤジたちもいるんだぜ。知ってるか？　バイクがボケ防止になるんだってさ。学会で発表されたらしい。〝さもありなん〟て思う。バイク乗りのオヤジたちって、やたらと元気なんだよ。家の親父なんか俺に仕事を押し付けて、勝手にどっかツーリング行っちまうんだぜ。六十近くになるって言うのに」
「順平だって、その素質は十分にあるよ」
順平はニヤッとしながらアイスコーヒーをやっぱり、ズズズッとすすった。
「ああ、死ぬまでバイクにまたがっている自信はある。遺伝だな。家はじいさんの代から浜松のポンポン屋だ。何でも、死んだじいさんは五十年以上前の浅間やマン島ＴＴレースに出ていたとかって話だ。俺ももうちょっと才能があればレーサーになりたかったよ。ところでバイクっていうのはな……」
それを口火に、瑛太にはよくわからないバイクの話が始まった。長くなるかもしれない。順平は昔からそういう男だ。悪い奴ではない、熱い奴なのだ。瑛太はそれにつきあった。生返事だが。一区切りついたところで、
「それじゃあまたな」と席を立とうとした。

「あ、そうだ、お前の親父さんもバイクに乗るんだろ？　よろしく言っておいてくれよ」

唐突に順平が告げた。

「え？　家の親父が？　いや、あの人はバイクになんか乗らないよ」

「あれ？　この前浜名湖のサービスエリアでオヤジライダーの集団を見かけたけど、その中にお前の親父さんに似た人がいたぞ」

「へぇ。それは他人のそら似ってもんだろ」

「そうか」

良い息抜きになった。損得勘定無しに話ができる旧知の友に会えたのは嬉しい。この後、また仕事場に帰って契約書類をまとめたり、新規の営業先へのプレゼンの準備をしたりしなければならない。今夜も子供が起きている時間に帰れるかどうかわからない。

会社へ戻る道中、道行くバイクに目が行った。眩しい夏の日差しの下、風を切って走っていく彼らの姿は、自由な雰囲気に包まれているように見える。そういう世界もあるのだ。順平の飾り気のない笑顔を思い出した。

忙中閑有り、というのだろうか。今度の週末はまるまる二日間空いた。ちょうど良い骨休めができそうだ。二日間とも思い切り寝て過ごそうと思ったのだが、一日くらい家族と出掛けるのも良いかもしれない。このところ、あまり息子にかまっていないので、心なしか距離が遠くなってしまったような気がする。母親べったりで、僕なんかいてもいなくても大して気にならないのではないだろうか？　父親の存在を示すべきだろう。妻にも日頃の労をねぎらいたい。

今では妻となった恵真は、瑛太より六つ年上で、当時の職場の先輩だった。面倒見が良いきれいなお姉さんといった感じの恵真は、社内でもたいへん人気があった。そんな恵真を、なぜ瑛太が射止めることができたのかわからなかった。後で聞いたところでは、瑛太という人間は真面目で一生懸命で、頼りがいがありそうなのだが、どこかもうひとつ足りない。思いやりがあるのだが、不器用。何となく放っておけない雰囲気を持っている。一言でいうと「母性本能をくすぐるタイプ」なんだとか。それっていうのは男として良いことなのか悪いことなのか複雑だったが。

どちらにしても、恵真と一生を通じて関わっていけるという喜びは、瑛太にとって何ものにも代えがたいものだった。曲がりなりにも会社から独立し、やっと軌道に乗せ、世間でも認められるようになったのは、恵真という妻の支えがあってのことなのだ。そして、かけがえのない子供まで授かった。そんな大切なことを疎かにしている自分を反省する。父ともすっかり疎遠になっている。

その晩家に着くと、恵真はテーブルに夕食を並べ、隼人は元気に家の中を飛び回っていた。珍しく早く帰宅した瑛太を見て隼人は「パパー、おかえりー」と、歓声を上げながら飛

びついてきた。抱き上げるといつの間にかすっかり重くなっている。その重さの分だけ、幸福の量が増えたと言うことなのだろう。

「お帰り、瑛太。今日は早いんだな」

リビングのソファーから声を掛けてきたのは勇だった。すると、瑛太の腕の中の隼人は「じいじ、じいじ」と、瑛太の腕を逃れて祖父のもとに行こうともがいた。隼人はすっかりおじいちゃん子になってしまったようだ。無理もないかと自戒する。

「親父、週末は暇かい？　みんなで御殿場へ日帰りドライブに行こうと思うんだけど、一緒にどうだろう？　隼人も喜ぶし」

「ありがとう。そうか、御殿場か。悪いが、週末は仲間と信州へ一泊旅行に行くんだ」

「へー、信州か。この時期信州もいいだろうな。ゆっくりしてくれば」

「ありがとう、そうさせてもらうよ」

勇にも旅行に誘ってもらえるほどの友人たちがいるなんて知らなかったし、良いことだ。このところの勇は、気のせいだろうか。以前より元気になってきたような気がする。いつまでも母の死に囚われていては、父のためにも、ましてや死んだ母のためにもならない。

夕食後のだんらんの後は、それぞれの寝室に戻った。隼人はまだ遊び足りなさそうで、三輪車に乗りたいなどとせがんだが、それでも強制的にベッドに寝かせ、恵真に好きな絵本を読んでもらっているうちに、いつの間にか眠りに落ちてしまった。無邪気な子供の寝顔に癒される。改めて幸せの意味を考える。

「なに難しい顔をしているのよ？」と、妻に言われて、我に返る。

「いや、いろいろと苦労をかけているんじゃないかと思ってさ」

「あなた、いつも考え過ぎなんだもん。それじゃあ体を壊すわよ。抜くところは抜く、頑張るときは頑張る。それでいいじゃない。ねえねえ、御殿場では絶対アウトレットに寄ってね！　帽子とサングラス、えーとワンピとか……」

「そんなに興奮すると眠れないよ」

「だってー、久しぶりなんだもん」

その後も、恵真は何だかんだと言っていた。まったく、これでは子供よりたちが悪い。

土曜日、朝から恵真のテンションは高かった。キッチンで朝食の支度をしながら、今日の買い物リストを独り言のように話している。しかし瑛太としては時之栖（ときのすみか）で昼ご飯を食べたいというリクエストであるが、この様子ではどこまで受け入れてもらえるか分かったものではない。

出発予定の七時までまだ少しある。その前にニュースと天気をチェックしようとテレビを点けてみて驚いた。東名の上

り線、静岡付近で大きな事故が発生したとかで、大渋滞の報道がなされている。復旧の見込みはまだ少し先だという。
「えーっ！」
キッチンで朝食を準備していた妻が叫ぶ。期待が大きかっただけに、妻の落胆ぶりはすさまじかった。瑛太の膝にいる寝ぼけまなこの隼人もびっくりして目を開ける。
下道を通っていくという手もあるが、御殿場までだと何時間かかるか。今日は止めにしようか、と言いかけ、恵真を見て気が変わった。憮然としている。これでは今日一日、ちょっとやそっとじゃ機嫌が戻らない。とんだとばっちりを食らうかもしれない。
「そうだ、それなら思い切って信州方面はどうだろう？　久しぶりに馬篭（まごめ）の叔母さんの家に行ってみようよ。高速を使っていけばそう遠い所でもないし」
「信州ねえ……。確か、お義父さんもそっちに行くって言っていたわよね」
「同じ所じゃだめかい？」
「ううん、そういうわけじゃないけど……大丈夫かな。まあいいか、行きましょう。暫く叔母さんの顔も見ていないし」
「よし、決まりだ」
眠くてぐずる隼人に少々手を焼きながら軽い朝食を済ませ駐車場に出た。抜けるような真夏の空の青である。一足先に出掛けた勇の車は既に無い。
満ち足りた雰囲気が車内にあふれていた。心地よい揺れに満足しているのか、さっきから後ろのチャイルドシートの隼人と恵真は眠っているようだ。しばし、一人のドライブ時間を満喫する。
小牧ジャンクションを過ぎ、中央自動車道に入ると、リンゴの香りをはらんでいるような、アルプスの澄んだ空気が少し開けた窓から流れ込む。
高速道路は渋滞をすることなくスムーズに流れている。追い越していく車も、追い越される車も、信州の風の中で清々しい。しかし、ひときわその醍醐味を満喫しているように見える者たちがある。バイクを駆るライダーたちだ。
幾人かの集団であったり、一人であったり形態は様々だが、前方を見据え、それぞれのスピードで、自らの意思で風を切って走っていく。ヘルメットに輝く太陽の光を反射させながら。
「ママ、おしっこ！」
急に現実に引き戻された。
後ろのチャイルドシートで寝ていた隼人が目を覚ましたようだ。こういう場合は子供優先である。恵那峡（えなきょう）サービスエリアへ寄ると、母子は急いでトイレに駆け込んでいった。
瑛太もストレッチを兼ねて車を降り、トイレ前のベンチに腰掛け二人を待つことにした。自販機で買ったアイスコーヒーの缶をハンカチに包んで、閉じたまぶたに当てた。ひんやりとして気持ちがいい。
どこからかバイクらしいエンジンの音が近づいてきた。目

を開けてみると、少し離れた駐車スペースに五台の大型のバイクが入ってきた。ライダーたちはそれぞれ思い思いのジャケットやパンツをまとい、カラフルなヘルメットを被っている。ツーリング途中の若者たちだろう。爽快感が漂う。

ところが、その内の一人がヘルメットを脱いだのを見て驚いた。明らかに中年以降といったおもむきの男性である。次々と他のメンバーもヘルメットを脱いだが、現れるのはみな瑛太よりも年上の五、六十代といった面持ちと頭髪の具合である。

ふと、順平の言葉を思い出した。近頃はバイクの世界にシニア世代が台頭している……。なるほど。

気の合う仲間がいるというのはいいものだ。共通の話題で盛り上がり、人生の喜びを分かち合うことができるというのは。

少し遅れて、もう五台のバイクがやって来て先のライダーたちと合流した。やはりみな、それぞれ軽い身のこなしで大型のバイクを器用に操り、次々と駐車スペースに止めていく。

瑛太はその鮮やかな様子にしばし見とれていた。

後から来たライダーたちも、ヘルメットの下から現れる顔はやはり同じような世代である。ところが、最後の一人を見て驚いた。父、勇の顔があるではないか。

間違いない。レザーの上下に身を固め、赤い大型バイクにまたがって、仲間と楽しそうに笑い合っているが、あれは間違いなく自分の父親、勇だ。確かに仲間と信州へ旅行に行くと言ってはいたが……。

集団はこちらに向かって歩いてくる様子だ。トイレにでも寄ろうというのか。

瑛太はさりげなく、植木の陰に隠れた。帽子を目深に被り直し、ポケットから取り出したサングラスで顔を隠す。

その時、トイレから妻と子が話しながら出てくる姿が見えた。

万事休す、だ。

「あー！　じいじ！」

勇に気づいた隼人が声を上げる。

驚いた勇の顔があった。

「おや、勇さんのお孫さんかい？　偶然だね」

仲間の男性に話しかけられて、父はばつの悪そうな顔で頷いている。隼人は勇の方へと駆け出し、勇の胸に飛び込んでいった。

恵真は「いつもお義父さんがお世話になっています」とあいさつをする。動じている様子はない。

仕方がなく、瑛太も木の陰から顔を出し、帽子とサングラスを取ってライダーたちに挨拶をした。そして、困惑顔の勇の袖を引っ張り、

「親父、ちょっといい？」と少し離れた建物の陰に誘った。

勇は仲間に先に行ってくれと促し、瑛太たちの元に残った。

隼人を胸に抱いたまま観念した顔の勇、不機嫌な顔の瑛太、それを面白そうに見つめる恵真。

先に口火を切ったのは勇だった。
「お前たち、今日は御殿場じゃなかったのか……」
「親父こそなんだよ、そのかっこう、それにあのバイク。いったいどういうことなんだよ?」
何が何だかわからない。聞きたいことだけらだ。
「お義父さん、すっかり板についてきたわね。この前見たときよりこなれているわ」
「何だって? 恵真、知っていたのか?」
ますます訳が分からない。
「ほら、ちょっと前に言ったじゃない。お義父さん資格を取ったって」
「それが、これか? 大型バイクの免許のことだったのか? 先に言ってくれたら……」
「先に言ったら、あなた賛成した?」
「……」
瑛太は渋い顔をするしかなかった。
「……すまん。黙っていて」
勇は叱られた子供のようにうなだれて、小声で謝った。
「じいじ、かっこいいねー」
勇のジャケットの胸を撫でながら、隼人がはしゃぐ。
確かに、黒いレザーのウェアは年の割には引き締まった長身の体躯の勇に似合っていた。いっぱしのライダーだ。あの赤いバイクにまたがった姿は、悔しいが様になっていた。
家と職場の往復、庭いじりぐらいしかないと思っていた父と、今目の前にいるライダーが同じ人物だということを理解しがたい。
「お義父さん、お仲間を待たせちゃ悪いわ。隼人、こっちに来なさい。私たちこれから馬篭の叔母さんの家に行こうと思うの。お義父さんたちは?」
「うん、諏訪まで行く。そこから温泉宿に泊まる予定だ」
「そう、気をつけてね。お仲間によろしく」
「ああ、姉さんによろしく言ってくれ。そのうち顔を出すからって」隼人を恵真にあずけながら勇は精一杯の作り笑顔を浮かべた。
「とにかく、親父、今さら引き返せとは言わないけど……」
「すまない。安全第一で行くよ」
終始、きまりが悪い様子の勇だったが、隼人に「じいじ、またねー」と送り出され、仲間の元に帰って行った。
去っていく父の、黒光りするレザージャケットの背中を見つめながら、瑛太は狐につままれたような心境だった。
「あなた、さあ行きましょう」
妻に背中を押され、瑛太は無言で自分の車へ戻った。
歩く道すがら、瑛太は恵真に問いただした。
「ところで君は知っていたのか? 親父のこと」
「ええ」さらりと答えた。
「お義父さん、かっこいいわよね。私この前タンデムさせてもらったの」
「タンデム? 何だそれ?」

「後ろのシートに乗ることよ。お義父さん、なかなかの運転ぶりよ。安心して乗っていられるわ」
「は？　ますますわからない。何でそんな大事なこと黙っていたんだよ」
　どこ吹く風の恵真は、隼人と一緒に後ろのシートに乗り込む。
　瑛太は運転席に着いて、ルームミラーで後ろを覗く。自分の不機嫌な顔と恵真の満面の笑みが、妙なコントラストで映っていた。
「ねえ、早く出発しましょうよ。叔母さんが待っているわ。あとは叔母さんの家に着いてからゆっくり話すわ」
　瑛太はしぶしぶ車を出した。

　叔母の家は馬篭に近い静かな田舎にあった。勇より三歳年上の叔母、静子（しずこ）が一人で住んでいる。
　ひとしきり再会を喜び、静子の手打ち蕎麦を食した。素人なりに美味い蕎麦である。それだけでもここまで来た甲斐があったかもしれない。
　食後の茶をすすりながら、話を切り出したのは瑛太だった。
「親父のことで相談があるんだけど」
「あら、どうしたの？　どこか体の具合でも悪いの？」静子は不安げな顔を見せた。
「いやそうじゃない。むしろその逆かもしれない、実は……」
　父親が自分に内緒でバイクに乗り始めたこと、そしてそれを知ったのがついさっきだったこと……、それらを説明した。
「へー、勇がね、仕方がないわね。昔取った杵柄、って言う言葉もあるし。でも内緒は良くなかったわね」
「叔母さん、どういうこと？　昔って？」
「おや、知らなかったの？　そりゃそうね、あなたが生まれる前のことだもの」
　ますます困惑する瑛太を見て、恵真は、
「言い出しづらかったのよ。だって、あなたのためだったなんて、言われる方もいやでしょ？」
「どういうことだ？　僕にはさっぱりわからないよ。ちゃんと説明してもらえないかい？　これじゃあ納得も何もできやしない」
　謎と疎外感が深まる。
「勇はね、若い頃はバイクに乗っていたの。お前のお母さんの佳代子さんと付き合っていた時も、よく佳代子さんを後ろに乗せてバイクで出掛けていたものよ」
　知らなかった。親父にそんな過去があったなんて。そんなに好きなバイクならば、なぜ降りてしまったのだろう？
「ところが、佳代子さんがお前を出産する直前になって、勇は信号を無視して交差点に入ってきた車と事故を起こしてね、大怪我をしたの。しばらく入院をしていたわ。それ以来、バイクはきっぱり諦めた。佳代子さんはその必要が無いって、また乗ればいいって言ってくれたんだけど、勇は家族のためだと言ってね。生まれたばかりのあなたを抱き上げてあげら

れないのがとっても辛かったみたい」
父は立派に家族を守って来た。その後大きな怪我も病気もせずに、自分の好きなバイクを断ってまで家族を支えてきた。
「恵真、君は知っていたのか？　そのことを」
「ええ、偶然お義父さんが持っていた大型二輪の教習所のパンフレットを見ちゃったの。同窓会で昔の友達に再会して、何だか懐かしくなっちゃったみたいね。彼らもまた最近バイクに戻り出してって聞いて。今叔母さんが話してくれたような内容も一通り話してくれたわ」
「それで、君は引き止めなかったのかい？」
「あら、引き止める理由って？　乗りたければ乗ればいいじゃない。お義父さんの自由だもの。あなただって立派に独立したし。あなたにバレたらバレた時のこと。どうせ反対するに決まっているもの」
「反対するて、どうしてわかる？」
「バイクに乗らない人には、バイクに乗る人の気持ちはわからないもの」
「……」
すると、恵真はバイクに乗っていたことがあるのか？　いつ……。
「まあ、まあ、あんたたち羊羹でも食べるかい？　近所の美味しい和菓子屋さんで買ってきたのがあるから」
「いただきまーす！　却って気を遣わせちゃって悪いわね、叔母さん。ついでにこのうなぎパイも開けちゃいましょう。隼人、こっちいらっしゃい。お菓子があるわよ」庭で遊んでいた隼人が喜んで走ってくる。
茶が渋い。自分の心が晴れていようが曇っていようが、見上げれば窓の外は相変わらずの信州の抜けるような夏空だ。今頃、父はどのあたりを走っているのだろう。

夏の空は、夕刻になってもまだ太陽の名残が居座る。昨日の清涼とした信州と比べると、浜松はじっとりと暑い。やはり、叔母の家で一泊して、もう少し涼を満喫すればよかったかもしれない。
エアコンのきいた室内で、ソファーに腰かけながら冷えたコーラを飲む。ノンカロリーのやつだ。もう少しこの腹を……と、思い浮かべる先には、父のスリムなレザーウェアの姿があった。父は家路に着いただろうか……。
あの晩、「今、宿に着いたから」と、短い電話があった。瑛太は「うん、わかった」とだけ短く答え、お互いそれ以上会話を交わすことなく電話を切った。
間もなく、父が車で帰宅した。いつもと変わらない様子で手に小さな旅行鞄とお土産袋を提げ、しかしどことなくぎこちない様子でリビングに入ってきた。
「おかえりなさい、お義父さん。お疲れでしょ、冷たい麦茶でも召し上がって」恵真に促されて、勇はリビングに通された。
「おかえり。親父、ここ座れよ。そっちより涼しいからさ」

ダイニングテーブルの椅子に座ろうとした勇を、瑛太は自分の横に手招きをした。

しばらくは言葉が無かった。瑛太のコーラのペットボトルも勇の手の中のグラスも大粒の汗をかいている。盛んに歌い続ける蝉の声が窓の外から聞こえる。

しばしの無言の後、瑛太は小さな声で言った。

「親父、あのバイク、なんていう名前？」

「あれか、あれはホンダのＣＢ１１００と言うんだ」

「僕にはバイクのことはわからないけど」ボトルを一口仰ぐ。ピリッとした刺激が喉に刺さる。

恵真と隼人が、庭でふざけながら水撒きをしているのが見える。

「母さんと、北海道にツーリングに行くことが夢だった」勇がぽつりとつぶやいた。

その後、勇は少しずつ口を開いた。馬篭の叔母に聞いたのとほぼ同じ内容だった。

また、あのバイクは友人から中古で譲り受けたものだとも語った。これまで派手な遊びをしなかった分、勇にはそれなりの小遣いもあったらしい。しかし、瑛太の手前家に持ち帰ることもできず、ウェア類と一緒に貸しガレージに預けてあるという。

勇のグラスの麦茶が空になる。

「まったく……」

そう言うと瑛太は立ち上がり、窓辺に向かった。そして、大きく窓を開け放った。

「外は暑いな。暑いけど、やっぱり自然の風の方が気持ちいいや」

打ち水に誘われた風がチリリン、と、軒下の風鈴を揺らす。

「麦茶のお代わり持ってこようか。僕にはバイクのことはよくわからない。わからないけど、あのバイクは親父に似合っていると思う」

「瑛太……」

「それから僕は、北海道土産ならカニがいいな。恵真は〝絶対白い恋人〟って言うだろうけど」

数日して、鈴木家の庭に小さなガレージが建った。

（東区）

【入選】

松の夜の夢

麻倉　純

一.

ところで、こんなに月がキレイな夜です。よかったら、アタシにすこし質問させてくれませんか？

こほん。

えーと、みなさんは『夢』って聞いて何を思い浮かべますか？

『夢は大切だ。簡単には叶わないけど、明日の活力になる』

へエー。なるほど！　どこの自己啓発書に書いてあるの？

『そんなものは幻想だ。社会に出たら、定期入れの半分も役に立たない』

あれれ、そんなアナタは現実家ね。そのくせ、預金通帳は悪夢のよう。

ざざぁ、ざざざぁ、しゅわぁ、とは、砂丘の向こうで打ち寄せる、お婆さまの声。

ざわわ、ざわ、しゃわ、とは、砂地の松林から見おろす、お母さまの声。

えッ？　アタシ『松の実』なんて名前はいや。そうね……たとえば――。

今夜はアタシの夢が叶う夜。だからすこし風が優しい。満月が笑う。

二.

白浜弘樹（ひろき）は二十三歳。

東京の大学の卒業式を終え、しばらく後の八月に実家へと帰ってきたところ。

勉強机はどう見ても、記憶のそれより小さかった。

その椅子で古いマンガを読んで、ずらっと並んだプラモを撫でて、地元の友人にメールをしたところで。

「ひろ、晩ご飯よー」と母の幸枝（さちえ）の声。

階下のダイニングにゆくと、味噌汁とお好み焼きがテーブルに並んでいた。

そのうち、父の弘重（ひろしげ）が腹巻をして現れた。

久々に家族そろっての食事だった。ビールで乾杯して、ひとしきり食事を済ませ、日本酒にしたころ。

父が赤くなりはじめた顔をほころばせて、

「ひろ、おまえ、思ったより呑むだな」

「ああ、そうだよ。いろいろ付き合いがあったからさ。サークルのコンパだとか」

父はコップを握ったまま、その手を焼魚のとなりに置く。
「で、仕事の方は決まっただか?」
テレビのニュースが流れる。街中で音楽祭があるらしい。それからどこかの町長の飲酒運転。
「まだ決まってないよ。履歴書は今月も……。そりゃ、たくさん送ったよ」
それへ父がつっかかる。
「たくさんって?」
「うーん……。そうだね、二、三通くらいかな」
「ってことは、おまえの場合は二通だな。……ハァ、まったく。どこがたくさんなんだ。古代人だって十まで数えられる」
弘樹は言葉につまる。
面接では絶句が一番いけないのだ。沈黙は金、雄弁はもっと金なり。とりあえずしゃべっておけば、日本語を話せることは証明できる。
「と……とりあえず部屋をひきはらって、こっちへ戻ってこようと思ってる。上の部屋、空いてるみたいだし」
父はじろりと弘樹を見る。そのまま何も言わず、しばらくして、
「……だめだ。ここに戻るのは」
「な、なんで? あんなアパート、いつまでも契約していたらもったいないジャン。――仕事も決まらないし。……なんかさ、もう疲れたんだ」
「あのなァ、おまえ、夢とか、なにかやりたいこととかねェのか?」
「はァ、やりたいことね……。別にないなー。大企業に引っ掛かっていたら、こんなふうになってなかった。――そういえば、父さんはもうじき定年だら? 商社の仕事はどうだった?」
「おれのことを言ったってしょんねえ。とにかく、仕事を見つけて生計をたてろ。バイトだって続けて。……そうだな、もうしばらく、家賃だけは出してやるから」
「どうして? もったいないよ。職探しならこっちでやるから。どうせ就職したらしたで、どこに飛ばされるかも分からないし。――うん。戻った方が経済的だ」
日本酒がなみなみと注がれた、父のコップが震える。その顔が赤い。
「だめだ。甘いんだよ、おまえは! 博士になって、ロボットを研究するだとか言ってただろ。それがなんだ! 勉強もあきらめて、仕事もあきらめて、ダメロボットみてェな顔で帰ってきて」
「なんだよそれ!」
弘樹は、父が提唱するダメロボットを思い浮かべた。ドラム缶に手足がはえた、ヤカン頭のロボット。顔はマジックで描かれ、あちこちから煙が漏れている。おまけに胸には『弘樹』の名札。
弘樹はうつむき加減で父を睨み、それでも抑えた声で、
「ダメロボットって……そんな。ふざけるなよ……」

すると父は唇をぷるぷる震わせ、
「ダメロボットみてェなもんだろ！　ガス欠で、やる気なし。根性なしの。……ダメロボット扱いがいやなら、おまえ、すこしは男らしいとこを見せてみろ」
弘樹はテーブルを両手で打ち付け、立ち上がった。いきおい、椅子が後ろに倒れる。
「バカみたいなたとえは止めろッ！　なにがダメロボットだよ！」
そんな弘樹の方へ、父はコップを投げつけた。それは壁に当たって砕けた。母の短い悲鳴。父は青筋を立てて、
「よくも、おい！　親に向かってそんな口を！　出ていけ！」

三.

夜の九時。
街灯がぱちぱち哭いて、薄ピンクの喫茶店はＣＬＯＳＥＤ。そんな海岸への道を、弘樹はとぼとぼと歩いていた。
ゆるいシャツの胸ポケットに携帯電話を突っ込み、茶色の短パンをはいて、サンダルをひっかけて。
「父さんは冷たい！　おれは息子だってのに。母さんはなにも言わないし！　ハァ。それにしても、やりたいことか」
満月がふやけたボールみたいに浮かぶ。弘樹は眉をよせる。
「そうか……プラモデルとか好きだったな。そうそう。それで工業の道へ進もうと。――それでどうなった？　今はこんなだ。くそッ」
月が松林に隠れる。潮風の匂い。砂丘へ向かう木の階段を登ってつぶやく。
「ああ、昔のまんま」
登りきると砂丘が見えた。左右には松林が広がる。
空には、磨き上げたエンジンのように輝く星々。それからその中央の満月が見える。
「そういえば、音楽も好きだったな。歌も得意だった気がする」
高校生のときに流行っていた、うろ憶えのポップスを口ずさむ。
あのころ。
誰もが似たような歌を聴き、似たような話題をＣＤのように交換しあった。
『オマエ、進路ドウスンダ』
『アイツの彼女スゲーカワイイヨナ』
先ほどから口ずさむ歌は、曲名も思い出せない。
そういった音楽は、熱病みたいに流行っては、気が付くと廃れていった。――それでも、思い出の目印にはなっていた。時代のブイみたいなものだった。
プカプカ流されたゆくブイ。記憶を乗せて海原に漂う。
それを懐かしむほど、弘樹の中でどんどん巨大になってゆく。
あのとき。
ブイから飛び降りるのは怖かった。友人たちは『当然だろ』

という顔で、流れゆくブイから飛び降りていった。そのくせ誰もが怯えていた。

社会とは過酷で退屈なトライアスロン。重荷に耐えて走り続けるのだろう。――そう覚悟していた。

しかし今のところ、背負うのは空気だけ。まるで雲の上を歩くような日々。

明日は見えないが、思い出ならば振り返った先に見えた。だからそのブイによじ登って、とっくに錆びついた、あのときの歌を口ずさむ。

拍手はまばら。ペチペチペチ……。

おまけに小さな笑い声。

「プククク。なにそれ、ヘタな歌。アナタ才能ないわ」

「ちょ、ちょっと、なんだよおまえ。こんなところで。――それに今の歌は……いいだろ別に！」

弘樹をしばし見上げ、立ち上がったのは、黒髪を肩にそろえた少女。

「ヘェー」

にやつき、近づいてくる。

「それにしてもキミさ、まだ中学生くらいだろ？　こんな夜に、いったいなにやってるんだ」

少女はくるりとまわって、木の皮みたいな模様のワンピースをおどらせる。

「仕事よ。仕事中。アナタと違って、アタシには仕事があるんだから」

「え、仕事？　キミが？　ハハ、そうかそうか。よかったね。――しかし、おれとは違うって。……そうやって、予想でものを言わないでくれ。そうだな、おれが警察官だったらどうする？　今は、さしずめ夜間パトロールみたいなものだ。不審者を見つけたり、キミみたいな家出少女を探したり」

「ハハ、まさか！　アナタがお巡りさんなら、自分にショクムシツモンしなさいよ。「こんな夜中に、ヘタな歌をまき散らして、うろつくのはケシカラン」って！　ねェ？　アタシ見てみたい。ハハハハ。それがアナタの仕事なのよ」

「なんだいそれ？　バカにするなよ。……しかしキミこそ、仕事中だって言うけどさ、どう見たってそんなふうには……」

「アタシが仕事中っていうのは、ほんとう」

「そうかそうか。そうしたらおれにも紹介してくれ。履歴書は書いても書いてもなしのつぶて。……インスタント証明写真の常連だよ。年間フリーパスでもあれば買うのに。……あッ、イヤ、おれは……」

「ハハ、やっぱりムショクじゃない。アタシにはすべて分かるの。……ねェ？　それってムショクっていうんでしょ？」

「ちがうよ、……バイトはしてるさ。それに、きちんと税金も引かれてる。その税金でキミらの学校が成り立ってるんだよ。だからそんなふうに、大人をからかわないことだ」

「学校？　いってないわ」

「なんで？　中学校は義務教育だろう？　そんなわけは……

高校生には見えないし、とんでもない不良少女にも見えないけど」
「ギムキョウイク？」
「はあ、そんなことも知らないのか。義務ってのはね、とにかく絶対やらなきゃいけないこと。小学校と中学校はいかなきゃいけないんだ。高校はほとんどいく。――大学は、好きにすればいい」
「どうして？　ダイガクはギムじゃないの？」
「どうしてって……。やりたいことがある人が、もっと深い勉強をするためにいくんだよ。おれだって……そのつもりで……」
　少女は首を振って、
「いいの、そんなむずかしいこと。今日は記念すべきステキな夜なの！　さァさァ、少し歩かない？」
「歩くって、こんな時間にかい？　帰った方がいいよ。こんな遅くまで遊び歩くのはよくない」
「いいから、いいから！　それに、アタシは遊んでいるわけじゃないわ。仕事なんだから」
「なんだい？　キミの仕事って。まさか……援交ってやつか？……やめてくれ。そのへんの松にでも当たってくれ。おれはキミみたいなのに興味はない。だいたい、金だって……」
「はァ？　意味わかんない。それに、アタシにも名前があるの。キミキミ言わないで！　そうね、ええと、松子。じゃなくて……ううん、松子。そう、それね」
「そうか、松子か……。ちょっと古風な名前なんだね」
　弘樹は砂丘をさくさくと登る。後ろからは少女の息遣い。
「……ところで、キミ……松子のお母さんはどんな人なの？　なにか言わないのか？　こんな夜に出かけて」
　松子の髪が風に舞って、さらさらと揺れる。
「ざわわ」
「えッ？　なんだいそれ」
「ざわわわ　ざわ　って。お母さま」
「うーん。さっぱりわけが分からないよ……」
「ねェ、アタシってなんに見える？」
「ああ、えーっと、だから、夜にさまよう謎の中学生、かな」
「それって人間ってこと？」
「……なんだか疲れてきた。だいいち、こんなふうに砂丘を登ってどうするんだ？　夜の砂丘なんて、暇なカップルと、花火をする高校生のものだ。おれたちが来るようなところじゃない。なあ、いったいなにをする気なんだよ？」
「さっきから言ってるでしょ？　仕事なの。アタシはね、ずっと今夜を楽しみにしていたの」
「ああ、そうかそうか。……ちなみにキミのお父さんは怒らないのかい？　こんなに遅くまで……」
「分からない。いないわ」
「……ごめん、よけいな質問だった」
「ねェ、アナタのお父さまは、どんな人？」

「おれのかい？　おれの父さんは……」

四.

とある日曜の昼どき。
弘樹が小学校四年生になったばかりのころ。その時はまだ、同じ町の小さな借家に住んでいた。
父は居間の食卓に向かってあぐらをかき、せわしなく飯をかきこんでいる。
弘樹は父の袖をつかみ、不満そうにうったえた。
「えェー！　パパ、また仕事なの？　今日は映画にいくって言ってたのに！　ドラえもん終わっちゃうよ……」
父は茶碗を置き、
「急な仕事だで。すまんな。母さんにいってもらやいい」
そのまま箸を漬物に延ばして、口に放り込む。母が奥の台所から出てくる。
「ひろちゃん、無理いわないの。ママが一緒にいくから。帰りにアイス食べよ?」
「やだ！　パパがいなきゃやだ。……いくだら？　ねえ、今日は約束だら?」
父はさみしそうな苦い笑顔をつくり、茶をすする。やがて立ちあがると、母の鏡台に向ってネクタイを直しはじめた。
「夜は早めに帰ってくるで、そうしたらホラ、トランプしよう。……さあ、もう行かんと……」

真っ白いお城のような映画館を出て、弘樹は夕焼けをぼんやりと見あげていた。そこへ母の顔が割り込む。
「おもしろかったね」
「……うん」
「おなかすいた?」
「……うん」
「どうしたの？　あんなに観たがってたのに」
「……うん。おもしろかったよ。でも、パパと観たかった。……パパはもう帰ってきたかなぁ。今日はトランプやってくれるかなぁ」
「そうね。そうだといいね」
母は弘樹の頭を撫で、デパートを指した。
「ひろちゃん、アイス食べよっか?」
それには答えず、弘樹は映画館の入り口に広がる、白いフロアに立ちつくしていた。
「ぼくも弟が欲しい」
「えッ?」
「弟がいたら、そうしたら一緒に遊べるのに。パパとママが忙しくても」
「……そうね、授かるように神様にお願いしておくわ」
「うん。ぼくもお願いするよ。だからきっと」
母は困ったような笑顔を浮かべた。
とはいえ弘樹は知っていた。――それが叶うことはないと。

大人は嘘をつくとき、すぐにそういう顔をする。口でいいよ、と言って、顔がだめよ、と言う。それは分かっていた。

しかし、母親というものが、どのように子を授かるのかは知らなかった。あいにく、そこまでませてはいなかった。

弘樹は想像した。おそらく市役所に申込書があり、父と母が署名して提出すると、一ヶ月後に子供を授かるのだ。

それから弘樹は、夕焼けの中を歩く家族連れを見た。

父親の右手に女の子、左手に男の子の手が握られている。

その後ろには、彼らの母親の姿があった。

ふと、男の子がなにか冗談を言った。女の子――おそらくお姉さんが、弟を指差して笑っている。

やがて弟は父親の手をほどき、こんどは母親の手にしがみついた。母親は笑いながら弟を抱き上げる。

そんな家族連れは、横断歩道を向こう側に渡り始めた。信号が点滅し、赤になる。

夕焼けの中に幸福の影絵みたいな家族が消えてゆく。

弘樹は自分の母の手を強く握り、ふとよぎった考えに怯えていた。

『あそこの子になれたら……』

たぶん、そんなことを考えた子供は鬼にさらわれるに違いない。地獄に落ちるに違いない。だからなかったことにしようと、笑顔で言ったつもりだった。

「ママ！　アイス食べて、帰ろ！」

なぜか母の答えは期待したものと違っていた。

「ごめんね」

やっぱり大人はすぐに謝る、と思った。

五.

ボーン、ボーンと、柱時計は夜の十一時。

テレビでは洋画の主人公が拳銃を構えている。弘重はうつむいて、注ぎなおした酒のコップを抱えていた。そんな背中に幸枝が、

「まったく、弘樹はどこにいったのかしら。……ねえ、あれでよかったの？　もうちょっと言い方がなかったの？」

幸枝は小さなグラスを傾け、弘重と同じ日本酒に口をつけた。ダイニングの片隅で、ガラスのかけらがちり取りに集められ、そのままになっている。

「ああ。いいだ、あれで。……おれの人生は、結局、仕事に振り回されたまんま。……あいつにはやりたいことを見つけて、人生を楽しんで欲しい。なのに、あんな甘えたことを……」

幸枝は皺の目立ちはじめた目許を細め、日本酒のグラスを回した。氷など入っていないのに。

「わたし、あのときね、本気で下の子を望んだのよ」

「ん？　ああ、いつか弘樹が言っていたなぁ。弟が欲しい、とか」

「ええ、弟でも妹でも。生活費なんてどうにでもなった。す

こし離れた兄弟になるけど……それでもよかった。でも……きちんと話せなかった」

弘重は酒を置き、煙草をくわえ、ライターを探しながらもごもごと言った。

「あいつ、やっぱり寂しかっただかなぁ。……きっとそうだ。一人でプラモデルとかやってたな……。ナンショ手先が器用だで、活かせばいいだに」

「そうね、そうすればいいのにね」

弘重は煙草をくわえたまま、両手を曲げて、ギターを弾く仕草をした。

「おれも、我ながら器用だと思ってた。ギターだって、すぐに憶えた」

フンフン、とジョン・レノンのイマジンをハミングする。

「おれたちは、放浪した。あれに比べれば、ハハ、弘樹の方がよっぽどマシだら？　……夢なんてなかった。夢の中にいたから」

そう言って弘重は肩で笑う。幸枝は口の端で笑い、頭を左右に細かく振って、

「やめて、そんな昔の話は……。そういえば、あなた昔、方言を隠してたわね。わたしをこっちに連れてきて、とたんに思い出したみたいに、そうなった」

弘重はにやついて、やいやい、と頭を掻く。

テレビの洋画では、主人公がヒロインのピンチに駆けつけたところ。

「それでもあなた、あの子おそいわ。ケータイにも出ないし……。いったい、どこへいったのかしら……」

「ああ、ツレんとこでもいっただら」

洋画が終わり、ＣＭになって、つまみのイカがなくなるころ。

「ちょっとそのへん、見てくるで」

弘重は白い肌着のまま、短パンを穿いて玄関を出た。足の裏が妙にちくちくした。見ると、小さなガラスのかけらが刺さっていた。

六.

弘樹は腰を屈めながら、下り坂になってきた砂丘を歩いていた。遠くで夜の海が、月光を浴びてちらちらと光る。カラスの影が頭上をすぎる。

――そのとき、弘樹の胸ポケットで携帯電話が鳴った。どうせ父さんか母さんだろ。マナーモードにして、松子の背を追った。

それからしばらくして。

弘樹は何気なく松子の脚もとを見た。そして砂地に埋もれたペットボトルに視線をうつし、流木を見つけたとき。

（さて。今なにか……変なものを見たな）

順番に巻き戻してみる。

トゲトゲしい流木。

ひしゃげたペットボトル。
松子の脚。
——その脚は、木の皮に覆われていた。ハハハ。タイツかなにかだろう。深呼吸して、もう一度やってみる。
トゲトゲしい流木。
ひしゃげたペットボトル。
松子の脚。
——はやっぱり木の皮そのもの。その脚はぼそぼその木肌に覆われ、端々がすこしめくれている。
(いや、いや、いや。なにかが違う……だから)
トゲトゲしい流木。
ひしゃげたペットボトル。
松子の脚。
——でも変わらない。弘樹は唾をごくりと呑んで、
「キミ……いや、松子。ちょ、ちょっとさ、そうだな。たとえば……歩きにくい、なんて思ったりしないの?」
「はァ?」
「そ、それ……」
弘樹は松子の脚を指す。
「あれれ……アタシ……」
松子が慌てた顔で見上げてくる。しばし目が合う。松子の頭が急に迫ってくる。——その額が弘樹の鼻っ柱を打った。
「なにすんだよ、いたいな! だいたいその脚はなんだよ!
そんな、木の幹みたいな……」
弘樹はぼやき、松子の脚を見るが……。さきほどの木の皮は消え、するりとしたきれいな脚になっていた。
眼前には真剣な松子の顔。弘樹はおびえたリスみたいに背を縮めた。冷や汗が背を伝う。
「ご、ごめん」
なんでおれが謝るんだ。などとは言えず、凍っていると、
「さァ! いきましょ」
と松子はすまして、海へ向かって歩き始めた。
砂が潮を含んで固くなる。4WDのごつごつした轍が、幾重にも交差している。

七.

松子は裸足になると、波に足をつけた。ひゃ、冷たい!
と笑っている。
「ちょっと待ってくれ。……こんな時間に水浴びなんて」
「いいでしょ? ちょっとくらい。なんなら一緒に泳がない?」
「遊泳禁止だって、書いてあった」
「なにそれ?」
「むやみやたら、遊びで泳ぐなってことだよ」
「遊びじゃないわ。仕事だもの」
「……そういう問題じゃない」
「ねェ、こっちへ来て。気持ちいいから」

松子はくるぶしまで海に入り、弘樹を見つめてくる。
その目は黒い水晶のようだった。それを見ていると、弘樹は胸の奥を溶かされる気持ちになった。
ふと、海に足を入れてみたくなった。
サンダルを脱ぎ、近づいてゆく。
砂のざらついた感触。くるぶしに絡まる、寄せては返す波がくすぐったい。松子がくすくすと手招きする。
「おいで。……温かいでしょ、海って」
その優しく、とろけるような笑顔が誘う。
「冷たいのは最初だけ。だんだん気持ちがよくなるわ。もっと、ねェ。こっちへおいで」
「ちょ、ちょっと待ってくれよ。そんなに深くまで……」
海水が短パンの裾を濡らす。ときおり海藻が脚をくすぐる。
――たしかに海は温かかった。そのまま永遠に海を感じていたい、と弘樹は思いはじめた。
「ねェ、あそこの、テトラポッドあたりまでいきましょ？そうしたら、お婆さまが迎えにくるから」
「……アア、キミのお婆さんが。そうか、キミの……」
潮騒と風の中、松子の声がなぜだか遠くにきこえる。
すべての言葉は音になってゆく。月の光の挑発的な笑い声。テトラポッドの寝言。星が雲にさえぎられるときの、非難じみたぼやき。
あらゆるものが言葉を発し、それらが単なる音になって、薄墨の夜に溶けてゆく気がした。

胸ポケットの携帯電話が震える。閉じ込められた小さな動物みたいに細かく揺れ、助けを求めるように唸る。
松子が振り返ってくる。
――それ、捨てちゃえば？
その顔は木の皮に覆われていた。弘樹は何かを言いかけたが――松子の黒い瞳に口をふさがれる。その瞳に吸い込まれる。
シャツが水につかり、腹まで海面がきていた。あいかわらず携帯電話が震える。
――それ、捨てちゃえば？
弘樹はうなずき、携帯電話を右手に取った。
その手を海面に近づける。
ストラップには猿のキャラクターがついていた。
その猿が海につかり、驚いた顔で溺れている。
背面のディスプレイには『母さん』の文字。弘樹はしばし手を止め、テトラポッドの作る小さな湾のさなか、立ちつくした。
『母さん』の文字が点滅して、ぶいい、とそれが震える。猿がけいれんして波紋をつくる。
そのときだった。
旗を立てた、小さな黄色い物体が流れてきたのは。
それはブイだった。どこかの港からか、浜名湖からか、漂ってきたらしい。
水面下ではあいかわらず、ストラップの猿が震えてもがい

ている。
ブイの旗は夜風にあおられ、くるくると舞っている。
弘樹は顔や口元についた、塩辛い海水を拭おうとした。——しかし、その海水は目から流れていた。
それは頬を伝い、顎を流れ、喉を濡らした。
松子は顔をゆっくりと振って、ためいきをついた。
「いけないわ。涙は夢を溶かしてしまう」
弘樹は猿を釣りあげ、震える指で通話ボタンを押した。すると、母の声が飛び込んできた。
「ひろなの？　返事しなさい！　えッ？　なにやってるの？　ひろ……、いったいどこにいるの？　ああ！」
「どうしたの？　そんなにあわてて」
「父さんが……父さんがバイクにはねられて！　ひろを探しにいって、そのあと警察から電話があって……」

八.

オレンジ色の街灯が並ぶ、静かな道路。
弘樹を乗せたスーパーカブが疾走する。その顔は青ざめていた。
シャツや短パンが濡れて、ひたひたと体に張りつく。髪や耳が風にたたかれ、ズババババ、と鋭い音を放つ。
弘樹は記憶を頼りに走り続けた。祖母の見舞いに、幾度も行った病院だった。
古びた川沿いの商店街を北に走り続けると、R病院がそびえていた。
ぼんやりと光る夜間受付の看板を見つけると、ハンドルを傾け、そこへ横づけした。カブを倒してインターフォンへ駆け寄り、マイクへ叫んだ。
「白浜です！　父が……父が」
待合室の薄茶色のソファーに、母が座っていた。弘樹に気づくと、すぐに駆けてきた。
「ひろ、こんなにびしょびしょで！　なにやってたの。……それより、父さんが！」
弘樹は母の肩を支え、
「母さん、落ち着いてよ。——それで、どういう状態なの？」
看護師が白い紙コップで水を持ってきてくれた。「どうぞ、よかったら」それを母に手渡すと、看護師は弘樹を一瞥して去ってゆく。水びたしの弘樹には水など不要だと思ったのか。
その足もとに向かい、廊下がナメクジの跡よろしく濡れている。
「父さんね、あなたを探しにいって、バイクにはねられたの。父さんが飛び出したみたいなんだけど……。それで、頭を打って。ああ、あんなに血だらけで！　……どうしてこんなことに……」
母は弘樹の胸にすがり、泣き崩れた。

そのとき、集中治療室の扉があいた。すると、メガネをかけた初老の医師が現れた。
「白浜さんのご家族ですね――手を尽くしておりますが、正直なところ、きわめて危険な状態です。できれば……こんな時間ですが、ご親類にお知らせした方がいいでしょう。……キミ、こんなときだ。お母さんの代わりに」
弘樹はうなずき、震える膝に手を乗せ、立ちあがった。それから、携帯電話の電源を入れながら外へ向かった。

九.

「ずいぶん、ひどいじゃない」
弘樹が病院の夜間受付から飛び出したとき、松子が立っていた。
「ごめんよ！　でも今はキミと遊んでいる場合じゃない。……父さんが！　父さんが……」
松子は夜間受付の扉を見て、目を閉じた。
「お父さまは、――とても苦しそうね。頭からあんなに血が出て。二人のお医者さんが汗だくで。喉に管が刺さってる……」
「……松子、キミはいったい、何者なんだ?」
「アタシ?　アタシは……どうだっていいでしょ?　早くさっきの続きを……。海へいきましょ?　お父さまのことは忘れてさ。……運がよければ生きるし、悪ければ死ぬ。そんなものでしょ?」
「キミには父親がいないから、分からないかも知れないが。……今、おれの父さんが死にそうなんだよ。命ってものはそんなに、クラゲみたいに軽いものじゃない！　キミみたいな……キミみたいな化け物に分かるものかッ！」
松子は目を広げ、口を細くあけ、うなだれた。
「アタシは……今夜をずっと待っていた。法螺貝の年、その九度目の満月。あの月が輝くあいだだけ、アタシは人間の姿になれる。……お母さまは言ったの。『人間の世界から、ステキな人を連れてきなさい。ずっと砂浜でお話しできるのよ。あなたの伴侶となる魂を見つけなさい』……アタシはね、アナタとずっと一緒に暮らそうと思ったの。……ねェ?　アナタ退屈そうだったじゃない。夢もないし、仕事もないし。砂浜にいる方が楽しいわよ、きっと」
「……生きるのって、たしかに面倒で辛いよ。楽しいことばかりじゃない。でも、おれはそれでもいい。だってさ、なァ、松子。おれはなにも、……ホントになにも、……これっぽっちも成し遂げていないんだ。それって悲しいだろ?　このまま死んだらたまらない……」
松子はそっぽを向き、頭の後ろに腕を組んで、
「アタシには分からないわ。アハハ、だって人間じゃないもの。ねェ、人間ってどうしてそんなに必死なの?　勝手に焦って、暗くなって、バカみたい。……それに、アナタはなにかを成し遂げるって言うケド。それっていったい、なにをどうした

いの？」
「……いや、おれは……」
「ねェ、アナタの夢ってなに？　アタシはあるよ、夢。ステキなパートナーを見つけて、一緒に砂浜で暮らすの！　でも、あなたはいやだって言う。そのくせ、アナタにはなにもないじゃない」
「……あのさァ、そうやって好きなことを言ってくれるけどさァ。……おれなんて特技もなくて、勉強も大したことないし。こんな状態でどんな夢を見ろってんだよ。それに、バイトだって楽じゃないよ。想像できるかい？　来る日も来る日も皿洗い。火傷したって皿洗い。怒られたって皿洗い。ああ、これじゃ皿洗いロボットだ！　店長は『自動洗浄機があるだろ？』なんて言うけどさ。ふざけるなって！　そんなのあったって、大変なことに変わりはないんだよ！　……どうしてキミにまで文句を言われなきゃならない？　くそッ。生きるのに精いっぱいなんだよ。くそッ。みんなそうさ！　夢なんて見ている余裕がないんだ」
「そう、夢なんて……そんなものなのね。それって、アナタのお母さまも？」
「……ああ、そうさ」
「ほんとう？　でもアタシ、信じられない。意味わかんない。アナタがきっと特別にネクラなのよ。……それとも人間って、みんなそうなの？　ねェ、だったらお父さまも？」
「……ああ、そうだよ。どうせ。……仕事ばかりで、夢なんてなにもなかった。かわいそうだけど、そんな父親さ」
「だったら、のぞいてみる？」
その瞬間、弘樹の視界に松子の瞳が迫ってきた。
巨大な黒い瞳に埋め尽くされ、生ぬるい海に引きずり込まれる。
体が軽くなる。
背後には松子の気配。
ずっと下の方で潮騒がきこえる。
ざざざざぁ、しゅわわわぁ。
そんな暗い海岸を、ひとりの男がとぼとぼと歩いているのが見える。長い髪に黄色いバンダナを巻いて、背中にギターを背負い、海へと入ってゆく。
――その顔。
弘樹は見たことがあった。あれはいつだったか、父が酔っぱらって、古いアルバムを見せてくれたとき。母と出会ったばかりの時代の写真。そこから抜け出たようなヒッピーの姿だった。
父は裾の広がったジーンズをたくし上げ、ざばざばと海へ入ってゆく。どんどん進む。なんのためにたくし上げたのだろう。すでに腿まで波が届いている。
テトラポッドが月明かりに照らされ、灰色に輝く。ざああ、しゅわわ、と波が歌う。
そのとき、背後で松子の声がした。
「ちょっと聞いてくる」

弘樹は振り返ったが、すでに松子の姿は消えていた。見下ろすと、父の眼前の水面に松子が立っていた。
「ねェ、ちょっと聞かせてもらえませんか？」
父は頭を振ってスパゲッティヘアを払い、目を電球みたいに広げた。
「なんだよ、キミ！　おれはこれから世界一周の旅に出るところなんだ。もうじき潜水艦が迎えにくる。黄色いカッコイイ奴がな！　だから、邪魔しないでくれ」
無視して、松子は言う。
「アナタの夢はなんですか？」
「え？」
「だからアナタの夢は……」
「ちょ、ちょっと、待ってくれよ。なんだよキミ。そんな、イキナリ夢ったって。……夢。そうか、そうだな。……世界中の人と会ってみたいな。それで一緒に歌って、酒呑んで。そうすりゃ平和だよ。そうさ！　戦争なんて歌と想像力がなくしてくれる。弾丸はふやけた豆になり、流された血はトマトピューレ。戦闘機はハトになる。それで作ったスープを分け合うんだよ。ああ、ラブアンドピース！　それこそが平和だ！　今こそ銃を捨て、自由を掲げるときだ！」
松子は口を半開きにしたまま、頭を振る。
「あーあ。アナタ、脳みそがウニなのね。弘樹がかわいそう」
そのとき父は――父の面影のヒッピーは動きを止めた。
「弘樹？　……その名前……おれは……いったい」
その声は妙だった。中年の太い声と若者の声が混ざった、不協和音だった。
「おれの夢……」
今度は完全に中年の声で、
「これは。なんてカッコだ」
たしかに、ひどくおかしな光景だった。社会の教科書の、六十年代のページに出てきそうなその姿。『ギターを担いだヒッピーの若者』なんて解説つきで。それでいて声は野太い父のものだった。
しまいに父は、自分のジャラジャラした妙な腕輪を睨み、たじろぎはじめた。
松子は痺れをきらして、さらに問う。
「カッコなんてどうでもいいの。ねェ？　アナタの夢を聞いているの。なにもないの？　それともホントに世界一周したいの？　それなら、どうぞお好きに」
松子はすこし横にそれ、右手を沖に向ける。父はうつむき、ぼそぼそと語りはじめた。
「夢……おれの夢は……いつか、幸枝と一緒になって」
弘樹のよく知っている声だった。ヒッピーの背中でギターが哭く。夜風が吹き込み、胴鳴りしている。
「……おれはいつか」
やがて父の目の前に、月の光が集まって、その光が白い形にかたまりはじめた。
真っ白な布にくるまった、小さな姿が浮かびあがる。それ

が弾けんばかりに泣き出す。
父はおそるおそる手を延ばして、それへ触れようとする。
それは――赤ん坊だった。
「おれの夢は……。ああ、いつかおれにも赤ん坊ができたら。ハハ、このおれが、赤ん坊だなんて。そうしたら最高だ。その瞬間に世界一周したようなもんだ！　それで元気に育って、生意気になって、あそこに毛が生えたら冷やかして。いつか酒でも一緒に呑めたら！　……オイ、そんなイイことがあるか？　……バカ！　あるわけねェよ。そうしたら、……おれはマジメな親父になる。ああ、そうさ。こんな姿、死んでも見せられないだろ？　ハハハハ」
腕輪をジャラジャラさせて、照れくさそうに頭を掻きむしる。腕輪とモジャモジャの髪が絡まり、ギターにひっかかり、ボヨーンと鳴る。
松子は納得したように『もういいわ、分かったわ』と微笑する。
「……あ、ついでに言うケド、――はっきり言って、アナタ死んじゃうから。沖にゆくと。世界一周だかなんだか知らないケド」
父はにわかに慌てだし、キョロキョロとあたりを見まわしはじめた。
いつの間にか、弘樹の眼前に松子が浮かんでいた。
「やっぱり、アナタとは違うみたいね」
集中治療室のランプが消え、その扉がひらく。――ガラガラと音がして、父が運び出されてきた。
「父さん！」
父は麻酔で眠ったままだった。その寝台が運ばれてゆく。弘樹は母を連れ、病室までついていった。
それから四時間後の午前六時。父は病室でその目をうっすらとあけた。
「ああ、頭が割れそうだ。アイタタ、くそッ。……そういえば、おれなァ、妙な夢を見ただ。……海へ向かって歩いてゆくと……そう、すごく温かい、きれいな海だった。そこへ女の子が出てきて……。ハハハ、なんだろな。やいやい、死んだ婆さんだろうか。ハハ、あんな若返って。うッ、頭イテェ」
弘樹は目を細め、さきほどの夢幻の旅を思った。
父はふざけたヒッピーだった。夢見るヒッピーだった。そんな父が求めたもの。
弘樹は自分の手を見た。皿洗いで皮がふやけ、あかぎれしている。細くて白い、アスパラガスのような指。
「父さん」
「なんだ？」
「……なんでもない」
朝日が東の窓から射しはじめる。
父の皺がれた、大きな手が見える。
その手に、夢はつかめたのだろうか？　自分には見つかるのだろうか？　夢が見つかったとして、それに届くのだろう

か？
難しいかも知れない。きっとそうだろう。
だとしたら……だとしても……だからこそ。
「父さん、おれは――」

中央棟の屋上。
そのへりに、松子が斜めに足を組んで座っている。どこからか、ラジオ体操の音楽が流れてくる。
松子の姿は朝日を浴びるほどに、透明になってゆくようだった。――ふと、松子はその顔を上げた。髪は朝の風に舞う。

十.

そんなわけで、結局アタシは仕事を果たせませんでした。お母さまの残念そうなためいきが聞こえます。ざわわわわ。なんて。
またアタシは砂浜で松ぼっくりになって、ひとりで転がる日々をすごすのです。あくびを噛み殺してね……あーあ。
想像できますか？　いつまでも、来る日も来る日もあっちにころころ、こっちにころころ。
ねェ。それって気持ちがいいけど退屈でしょ？　だからパートナーが必要なのです。そうすれば、きっと楽しい日々になる。
そうね、それがアタシの夢かしら。たったひとつの夢。いつか叶うかも知れないし、ダメかも知れない。
アタシがいつか、消えてしまう日がくるとしても、それまで夢見ていたい。砂のひと粒になるその瞬間まで。
いつか、満月の夜。今度はきっと、アナタの前に現れるわ。アナタだったらどうする？　一緒にきてくれるかしら？
――いつか。
アタシはその言葉が好き。海原にぼんやり見える、ブイみたいな言葉。
それに甘え、裏切られ、満たされる。
なごりおしいケド。いつか、また出会う日まで……さようなら。
そして……どうかアナタの鼻先にステキな夢を。

（f i n）

（中区）

【入選】

穂高

石黒　實

昨年の八月のことだ。

昨日も昼間は三十五度を記録するうんざりする猛暑であった。寝ていても汗が吹き出る程の寝苦しい夜が続き、夜中に起きて何度か背中を拭きながら溜め息をついては横になり、夜明けを待った。眠れたのか眠れなかったのか分からないような毎日だ。だが眠れないのは暑さのせいばかりではない。二十年間勤めた職場を退職し、時間感覚の無い宇宙空間に放り出された様な日々が二ヶ月余も続いてしまった。それ迄はその日の仕事を終え、床に入る時でさえ、「さあ、明日は会社に行ったら何々をしなきゃいかんな」と自分に言い聞かせながら寝たものだ。眠ると言うのは明日の為に眠るのだ。今日の疲れを取り、明日又頑張れる自分である為に眠るのだ。今は「さあ、もう寝よう」という差し迫る時間的感覚が無い。明日の目的が無い生活と言うのは自分を空虚にするものだと知った。

うっすらと窓の外が明るい。新聞配達のバイクが走り去るのを聞いた。

「もうそんな時刻か？　そう言えば、俺も新聞配達をしていたっけな。毎朝三時には起きて、新聞配達をし、定時制高校に通って頑張ったよな」

ふっと四十年も昔の自分を思い出した。「職場をいくつ変わったかなあ？」布団の中で指を折りながら、中学を卒業し、最初に就職した町工場から数えてみた。「うーんと、八つか。色々やったなあ」一つ一つにその時の自分があり、思い出もあり苦労もあった。取り留めの無い事ばかりが頭に浮かんでは消え、又別の意味も無い事を思い出したり考えたりしているのだ。

うたらうたらしているうちに太陽は隣の屋根の真上に来ている。暑くて寝てもいられなくなり起きてしまった。そのまま一階の茶の間に行き、扇風機の風を浴びながら朝刊をテーブルに広げて目を通していた。

「起きたの？」家内の多津子がそう言いながらツカツカッと近寄って来た。

「お父さん！」気合の入った声を発するなりドンッとテーブルを叩いた。「な、何だよ？　いきなり」キョトンとする俺に「いつからそんなに偉くなったの？」キッとした顔つきから出た言葉に思わず俺はピッと背筋を立てた。そして広げた新聞の向こう側に、子供を叱りつける母親の様に多津子がこちらを睨んでいる。「えっ？」何のことか理解出来ないでいる俺に、続けざまにキーの高い声が発せられた。「勝って気

ままに起きて来て、そうやって新聞読んでいれば、自然と朝御飯が目の前に出て来ると思っているの？」多津子が捲し立てた。突然の険悪な雰囲気にオロオロしていると、「私はまだ今からシャワー浴びて化粧もして、パートの仕事に行かなきゃならないんだから、あんたの事なんかかまっていられないわよ。自分で朝御飯ぐらい用意してくれなきゃ無いわよ」

突き放すように言いまくると、俺の前から立ち去った。向こうの部屋に行ったかと思っていたら、バスタオルを身体にまとって戻って来た。「それよりも、新聞なんか読んでいないで今日は分別ゴミの日なんだから先に出して来て！」思わず「何だよ、その言い方は！」起きたばかりにそんな言い方をされ、腹が立った俺は一喝した。すぐさま返答が返って来た。「あのねえ！」と俺よりも更に大きな声だ。「この家は私が仕切っているの。この家の人間で居たいのなら私の言う事を聞きなさい！」ビシャッとした多津子の言葉に俺は次に「うるさい」と言おうとしていた言葉を飲み込んで発する事が出来なかった。

「ねえ、分かった？　分かったら返事をしなさい」相手をねじ伏せる言い方に「分かったよ」取りあえず俺はそう返事をしておいたが、今日一日家に居るのが辛くなるような気持ちになった。バタンと浴室のドアを閉める音がし、多津子の朝シャンの音が聞こえてきた。

「そんなあ、何だよー。バキャロウメ」と俺は言葉にもならないことをブツブツ言いながら、空き缶やらペットボトルを袋に詰めて町内のゴミ出し場に向かった。会社勤めをしていた時は朝七時半には家を出、夜十時、時には十一時頃に帰宅していたのだから、勤めを辞め、毎日俺に家に居られるのは多津子にしてみれば、居ないはずの夫が毎日家に居る事が目障りと言うか、想定外なのかもしれない。昨夜「仕事を辞めちゃってこれから、お父さんとしてはどうするつもり？」と多津子が俺の顔を覗き込むように聞いてきた。「まだ辞めて二ヶ月ぐらいしかたっとらんよ。これからの事なんて何も考えてないよ」俺は俺で会社を辞めてしまった事は気にもしている。これから先々どうしようかとも悩んでもいる。傷口に塩を擦り込む様な多津子の言葉に内心腹が立った。「まだ腕が痛くて仕事なんて出来んよ」と言ってはみたが、多津子の目から逃れるように右腕をさすった。

「半年ぐらいは失業保険で何とか暮らせるから、その間にゆっくり考えるよ」と、返事にもならん言葉で濁し「あっ俺、風呂に入ってくるよ」とその場を逃げた。

定年まで会社に勤めてくれると思っていたろうが、満期前に退職してしまった俺に多津子が不満を持っているのは分かっていた。アメリカのリーマンショックから始まった不況は浜松の自動車関連から仕事を奪った。（四勤三休）などと言う勤務体制が敷かれた。その内に派遣工が雇い止めになり、俺のような定年間近い正規社員は肩を叩かれた。何とか居残ろうと踏ん張って来たが、愛知県の半田工場に出向として飛ばされる事になった。たまたまトヨタのハイブリット車

の生産がフル稼働に入り、毎日の残業も四、五時間を数えた。しかし、会社側に隠してはいたが、数年前から両腕とも腱鞘炎になって治療をしていたので、内心は痛みを我慢しながらの仕事は辛かった。ある日、あまりの腕の痛みに製品を落下させてしまい、報告書にその訳を書かざるを得ず、とうとう会社に腱鞘炎の事実を打ち明けた。その翌日に出向から解かれ、浜松工場に戻されたが、間の悪い事に二ヶ月もしない内に会社の倉庫のトビラを開けようとした際、右肩関節を脱臼し、役立たずの人間になってしまい、結局は退職する事を自分で決めざるを得なかった。「もうこの身体では俺は無理だな。働ける身体じゃあ無いな」と感じた。「生き恥を晒すのも嫌だしな。俺なりの意地もある」此処までが自分の限界と知った。

中学を卒業し、田舎を出てからは工場と言う中でしか働いたことがない。再就職と言ってもそんな俺に何ができるんだろうか。人並みの体格も無い。資格も経験も無い。考えるだけでも苦しくなる。

そんな事を考えながら分別ゴミを籠に振り分けていると、ビン類回収の車が最初に入って来た。

「お早う御座います」車から降りて来た二人は六十歳をまわったぐらいの年配者だ。愛想良く挨拶をし、手際良くビン類を空けるとサーと次の集積場へ走り去った。

他人が気概を持って働いている姿は、職を失った者には眩しく映るものだ。人は時間と言う中で暮らしている。何時、何々をして何時迄にやり終えるとか。そういうものが無いと、己を律する真ともな生活は出来ない。だらだらと時を過ごし意味なき時間が過ぎる。何かこのまま家に居たのでは自分が落ち込む。それだけでなく自分が駄目になる気がしてきた。数分前の多津子の顔を思い浮かべると、尚更そう思う俺だった。

既に八月の太陽は炎々と燃え、今日もその暑さに耐えることを覚悟せねばならぬと思う朝だった。

「ヨシッ、気分転換に山に登って来ようかな」

ふっと頭に浮かんだ。「行くなら、何時行こうかな」と空に聞くように炎天を仰いだ。「浜松に居ても暑いだけだし、明日行こうかな」そう俺は決めた。山なら夏は北アルプスだ。いつか行ってみたいとも思っていた。ただ今迄は仕事ばかりで休みも取れずにいたが、今は俺、時間があるのだ。さっそく明日の出発に備え、登山用具の準備にかかった。その夜、家内の多津子に穂高に登山に行く事を伝えると、

「何っ、死に行くの？」突然何を言い出すの？　と言う顔をしている。

「そんなんじゃないヨ。登山する人で死ぬ為に登る人はいないよ」頭の奥でしまい込んであった様な上手い返事が出来た。

「本当に行くつもり？」家内は俺より背が高い。顔も大きい。あまり近づかれると俺はどうしても後ずさりになり「うん。せっかく時間もあるし、毎日家に居るのもどうかと思ってナ」とつい声も小さくなる。「何、言っているのよ。天気予報を

見てごらん。台風四号が来ているのよ」「うん、昼間に新聞の天気図をじっくり見たよ。この天気図だと日本海に抜けるから、まあ心配ないな。八月半ばになるとよけい山の天気は荒れるし、盆休みに入ると山小屋も混むから、明日にでも行くヨ」と多津子に説明をした。

「全く何を考えているのか、分かったもんじゃない。死にたきゃ勝手に行きなさい。どうせアンタの事だから、行くと決めたら黙って隠れてでも行く人なんだから」呆れた様な口調で多津子が喋った。「でもネッ、向こうに着いたら前以て電話を入れなよ。アンタの場合、山登る以前に車を運転していて交通事故を起こして死ぬなんて事も充分有りえるんだから」

「馬鹿言うな。そんな下手な運転はしていないワイ」俺は突っぱねる言い方で自分を保った。

「携帯に掛けてくれればいいから。もし私が出なかったらメールでもいいから、連絡を入れなさい。無理だったら引き返して来るんだよ」まるで上司が部下に言う様な言い方だ。

翌日の早朝、家族は未だそれぞれの部屋で寝ている。隠れて行く訳ではないが音を立てては悪いと、俺なりに気を遣いこっそり玄関を出た。飼い猫のジャジャ丸が足元に近寄りすりすりをする。抱き寄せ頬擦りをしてやると、ドアの前で見送ってくれた。

まだ明けぬ姫街道二五七号を一路稲武に向け車を走らせた。台風の行方が心配で昨夜は天気状況をしっかり見ては来た。

「まあ、明日には長野も天気が回復するだろう」と考えて来たが、いつもより明けが遅いのは、台風の影響で雲が厚いせいだろうか？

二五七号は走り慣れた道ではあるが、今回は単独登山だけに自分の中に緊張感みたいなものがある。これから沢渡まではカーブの多い山道だ。俺はしっかりとハンドルを握った。装備は万全か？　頭の中でザックの中身を再点検した。

昨夜息子が「奥穂から岳沢の方は行くなよ。吊尾根は難関ルートだからな。親父では無理だぜ。家族に心配させるなよ」と俺に言ってきた。その言葉が脳裏に残る。俺が穂高を登ると多津子から聞いて、すぐさま山岳地図を取出し、「何処のルートを登るつもりだ？」と問い詰めてきた。息子も大学の山岳部に所属していたから山の知識はそれなりにある。一五〇センチにも満たない自分の背丈では重いザックを背負い穂高を縦走するのはキツイのは覚悟しているが、だが一度は「穂高連峰縦走」を成し遂げてみたい。二十代の頃から焦がれていた事だ。会社勤めの生活から解き離れ、やっと自分の自由な時間を持てるようになったのだ。体力と気力を考えると今しかない。「やっぱり実行してみよう」そんな決意を自分に込めた。そうこうしているうちに稲武に着き、信号を右に切り一五三号に入る。此処から昼神を抜け妻籠宿に入り一九号を走る。南木曽、須原宿、木曽福島と山間の町を通り薮原から二六号へ向かう。木祖村を過ぎると野麦街道と交差

する。野麦峠と言えば大竹しのぶ主演の（ああ野麦峠）の映画が記憶に残っている。諏訪から飛騨に続く峠越えでのシーンが感動的で良い映画であった。帰りに時間があれば野麦峠にも足を運んでみたい。左に川が沿って流れる。奈川ダムを過ぎると松本方面から来る車と合流しいっきに道路は混み出した。朝家を出発してかれこれ五時間半は走ったろうか、ようやく沢渡に到着した。此処からはマイカーは駐車場預けになり、上高地までは回送バスを利用することになる。依然雲行きは怪しかったが突然に雨が降ってきた。バスの車窓からの焼岳は雲に覆われ、噴煙を上げる活火山の姿を見ることは出来なかった。それでも上高地に下りると幾つもの登山グループや観光客で賑わっている。この沢山の人間を見たら、気分はすっかり（山岳人）になりきっていた。俺はいつもの軽装登山と違って、二倍はあろうかと思われる三五リットルザックをしっかりと担いだ。背中にずっしりと来る重さが、穂高の山にこれから挑む覚悟が出来ているのかと自分に問うているようにも思えた。

一日目の今日、宿泊する横尾山荘までの歩行時間は三時間はゆうにかかる。予定通りに歩いたとしても到着は午後四時過ぎになる。歩を早めようとしたがザックの重さはそれを許さなかった。後方から付いて来た人が俺を抜こうとしたのか互いのザックが当たり、はずみで俺が転倒してしまった。「あっ、済みません。大丈夫ですか?」男はすぐさま駆け寄り俺の手を引いて起こすと深々と頭を下げた。「済みません。とんだ事をしてしまって」そう言ってすっかり男は恐縮していた。「いえ、大丈夫ですよ。ちょっと自分でバランスを崩しただけですから」と俺は答えた。自分より三つ程しか変らぬ年上の感じだ。背丈は俺よりもかなり高いが穏やかな細身の男だ。「上高地はこの時期はやはり人で賑わいますね」愛想のつもりで俺はその人に声を掛けた。「ええ、私も今朝武蔵野市から来たのですが、沢山の人ですね」と男は都会人らしい雰囲気で応える。「今日は横尾迄ですか?」と尋ねると「それが山荘には未だ予約も入れてなくて受付に間に合うかと心配でしたので、先を急ぎ、とんだご無礼を致しました。本当に申し訳ありません」素直な嫌味の無い声で静かに話される人だと思った。会社に勤めている時は誰と話をしても、頭上から声が降って来る様な話し方ばかりされてきたから、男の人と話をする時はつい身構えてしまうのだった。

「僕は山荘には予約はしてあるので時間迄にゆっくり行きます。どうぞお先に行って下さい」と男の人に道を譲った。その男の人を先に行かせてからも、ザックを背負った何人かの人にも抜かれたが、今度は自分から除けて道を譲った。明神、徳沢ロッジを経てひたすら歩く。猿の親子連れが林の中から俺達人間を見ているのが笑えた。人間が猿達を見ているのではない。俺達が猿に見られているのだから。登山帰りのグループにも何組も会う。「今日は」互いに挨拶を交わす。ようやく横尾大橋が見えてきた。「ああ、やっと着いたな」フーと息をつき辺りを見渡すと橋の手前には記念写真をする者や

絵を描く者。携帯コンロを取り出し、夕食の準備をする者など賑わいを見せていた。横尾山荘は三百人が宿泊出来る規模の大きな施設だ。登山者の多くは此処を利用する。入り口付近はこれから登るのか、それとも下山をして来た者かは分からぬが、談笑に賑わう登山者であふれている。山荘手前にあるテント設営地は色とりどりに張られたテントで花畑のようだ。山荘の入口で（一泊二食－九千円）で受付を済まし、指定された部屋を探し、ベッドにザックを置くと先ずは横になり手足を伸ばした。「ふうー。重たかったな。あっ、そうだ」と多津子に言われていた事を思い出し、携帯に掛けてみたがなかなか相手が出てくれない。「まあ、いいや」と思い、「横尾山荘に着いた。今夜は此処に泊まる。登山者は大勢いるので心配は要らない」とメールを送信しておいた。夕方六時からは夕食の時間だ。食堂に並ぶと先程の武蔵野市から来たと言う男の人が三、四人前に既に並んでいた。背が高いからすぐ分かった。テーブルに着く時に俺に気づいたのか声を掛けてきた。「先程は失礼しました」と頭を丁寧に下げた。俺も「受付に間に合ったようで良かったですね」と笑顔で答えた。山荘は受付時間に遅れると宿泊は出来るが、夕食が用意されないことがある。どの登山者も大抵が朝早く家を出て、山荘に辿り着くので食事無しでその夜を寝ると言うのは辛いのだ。「宜しかったら御一緒に食事しませんか？」と聞いてきた。「そうですね。僕も独り旅ですから。山のお話など聞かせて戴ければ嬉しいです」

山小屋で出される食事は、近年はなかなか御馳走である。赤岳山荘に宿泊した時などはビーフステーキが夕食に出され驚いたものである。四十年近くの俺の結婚生活でも多津子が食卓にビーフステーキを用意してくれた事など記憶に無い。「やあ、なかなかご馳走ですね」と俺がにっこり微笑むと、彼は「私はいつもは独りの食事ですから、こうして大勢で戴くのが楽しいんですよ」とメガネの奥で細い目がいっそう細くなった。「お独り住まいですか？」立ち入っては失礼かなと思ったが聞いてしまった。何処の山荘も独特の解放感の様なものがある。日常から解き放たれて、身分、肩書きを捨て、独りの自分に戻って来るのだ。自然と隣にいる者に親しい言葉が掛けられ会話が始まる。単独登山を志して来る男達は、何処か孤独であり、心に切ないものを隠し持っている人が多い。そんな人程話し出すと結構長話になる。

「ええ、娘はいるんですがね、もう嫁いで別に暮らしていますから」「そうですか」と受けて「あっ、僕は石田と言います。今日は浜松から車で来たんですがね、一度穂高に登ってみたかったんですよ」と自己紹介を付け加えた。

どのテーブルも談笑しながらの食事に賑わいを見せていた。「おいくつになられるんですか？」俺もそんな雰囲気に呑まれながら聞いた。「石田さんですか。私は舟木と言います。六十二歳に先月なったのですがね。銀行員でした。勤めは定年で辞めました。現在は何もしていません」「えっ？　それでは僕と同じですよ。年齢は三歳程下になりますが、もっか

無職ですよ」「そうでしたか。もっとお若いかと思いましたが」「ええ、小柄なもので、よくそう思われます。ただ仕事を辞めてからは家に居ても、どうも座りが悪くてね、こうして山に逃げて来た様なもんです」苦笑いの顔になった俺であった。「家族が傍にいてくれればそれが一番良いですよ」彼は実に真面目に話をする。「そうですかね、僕はいっそ一人で気ままに暮らしてみたいと思ってしまうんですがね」

「銀行に勤めていた時は、私も家族と話をすると言うことをあまり持たないままきたんですが、それがまずかったんですね。結局、家内とは別れる事になりましたよ」

俺は返す言葉に窮して皿に出された山菜に目をやった。「これ、いい味をしてますよ」と話の向きを変えた。俺が舌鼓を打ちながら「この年齢になると、こういうのがご馳走ですね」と言うと、「山菜が好きでしてね、食べたいのですが、私は料理などはやった事がないので、大概スーパーで出来合いの物ばかりですよ。それでは良くないのですがね」舟木さんはゆっくりと話をし、ゆっくりと食事を口に運んだ。相手と話をする時自分を「私」と言う表現をされる彼は、やはり銀行マンだなと思った。工場勤めで通して来た俺には「私」などと自分を呼べない。何故か自分に照れてしまいそうだ。「私」と言う型にはめて生きて来た人間と「俺」と言う自己流で貫いて来た人間の違いか。あるいはビジネスマンと工場労働者の違いか。そんな風に思った。

「明日はどの様なご予定ですか?」彼が聞いた。「涸沢ヒュッテから、北穂、涸沢岳のコースで穂高山荘に明日は泊まる予定です」と一応の予定を話した。「私にはとても無理ですね。私は明日は涸沢から山頂の穂高山荘まで行ければ、良いと思ってます」

「そうですか。では、又明日、山荘では会えますね。登山はもう長いことやられているんですか?」気になったので聞いてみた。「ええ、近くの低い山を少し歩いた程度ですから、登山歴と言える程ではありませんね。素人と同じです」しかし昼間道で出会った時は幾つもの山を登り歩いている様な雰囲気を漂わせていた。「僕が行く北穂からの尾根歩きは十分気を付けて行かないと危険なコースだと聞いています。特に「亀岩」の処は岩稜が不安定なようですから。息子が心配してますから無茶はしないつもりです」やはりコースの事となると俺も口調はキリッとする。「息子さんが居られるんですか。それはいいですね。私の娘は別れた女房の方には行くようですが父親の私には顔を出してくれませんね。今にして思えばもっと家族と仲良くしておけば良かったと思いますね」年齢が近いせいか、互いの生き様を語るかの様な話が暫く続いてしまった。二人とも団塊の世代である。俺も田舎の中学を出て名古屋に就職する時は「金の卵」と言われた。そして働きまくって四十数年の時が過ぎ、心も身体も折れて結局は放り出されてしまった。彼も同じであったのだろう。銀行員として一筋に骨身を削り生きて来たのだろう。互いに人生の一休みだ。そんな人間にとって穂高を登るのは、言わばこれ

から進む先の人生を探しに来た様なものだ。食堂を見渡せばその殆どが中高年齢層が占めていた。

食事を終え、彼は自分の部屋に戻って行った。俺はロビーの横にある談話室に行き、気になるテレビの台風情報に耳を傾けた。日本海に抜けるはずの台風四号は何と向きを変え、日本列島を縦断する形で近づいて来ているのだ。

明日夜半には近畿地方も荒れて来そうだ。皆、押し黙った表情で腕組みをしながら天気予報に釘付けになっている。俺もどうしようかと迷った。そして空いている椅子に腰掛けるとテーブルの上に置かれた一枚の紙片に目がいった。（七月十七日に単独登山で槍ヶ岳から北鎌尾根に向かう途中で男性一人が消息不明。発見された方は是非お知らせ下さい）というものだ。ザックを背負い、にこやかに立っている「小野英明」と言う青年の顔写真がそこにあった。「北鎌尾根はあまり登山者が通るコースでは無い。あそこで遭難したら発見はされんよ？」「怖くて下なんか覗けたものじゃない」「救助ヘリでもあんな谷間は飛べないぜ」「ガスがかかってるか、雪が積もってるかで一年中下が見える事が無いよ」隣の席で男のグループが話しているのが耳に入った。その夜、舟木さんの事といい、台風の事といい、行方不明の小野と言う青年の事と言い、何もかもがグルグルと頭の中をよぎって、ベッドに入ってもなかなか寝つけなかった。

二日目の翌朝、四時半に起床。山荘の朝は早い。その多くは既に起きてそれぞれに出発の準備をしている。五時半から食堂が開き、皆一斉に並ぶのだ。俺も列に並び順番を待つ。後ろに並ぶ列に舟木さんを探してみたが、今朝は未だ見えない。

玄関でしっかりと途中で緩まないように靴の紐を締めた。外に出ると未だ雨は降ってはいないが、かなりガスが深く穂高の高峰は望めなかった。他の登山者達も出発し出した。何時(いつ)雨が降り出しても間に合う様にと、雨具だけはすぐ取り出せるザックの上側に置き、俺も涸沢ヒュッテを目指して出発した。

雲が下がり穂高の様相はまるで見えない。先を行く登山者の後に続いた。一人は心細いし、何かの際には助けを求めることが出来るからだ。二時間ほど進むと雪渓地帯に入った。積雪の多かったこの年は八月に入っても残雪が多い。二メートル以上はある。雪渓地帯を進む時は注意しろと教えられた。裂け目があちこちにある。その下をザアーと急流が走っているのが聞こえる。足を滑らしたら決して這い上がることの出来ない深さだ。この年の夏は例年にない猛暑で雪渓がもろいのか、あちこちに穴があいている。ガサッと裂け目の端の雪片が崩れ、急流にのみ込まれていくのが分かる。雪渓の表面は水蒸気が立ち上り、靄がかかっている。一歩一歩安全を確かめ雪渓地帯を渡り越えた。岩のガレ場にさしかかるとヒヤーとした冷たいガスが周りの視界を閉ざした。その後に突然の大雨だ。慌てて雨具に身を整えた。高所の山岳に於いては、雨に濡れることは極力避けなければいけない。濡れた衣

類は決して乾くことは無い。そのうち冷えて体温を奪う。寒さと疲労の果てに歩行不能になる。山の天気は猫の目変わりである。暫くザーと雨を降らしたかと思うと又、陽が射し雨具の下をタラタラと汗が流れる。そんな繰り返しでヒュッテに到着したのは九時半近く。ザックの重さが背に堪える。やはり人並みの体格が欲しいとつくづく思った。

涸沢ヒュッテは二千百七十mの地点にある。此処は北穂高と奥穂高の分岐点になる。昨夜の気象図では台風はこちらに進路を変え、列島沿いに向かっていると知ったが、まだ時折、雨や風が吹くが何とか進めそうな気がする。ただ穂高連峰は厚い雲に覆われ、その影さえ見せようとしない。北穂高へは南稜直下の北涸沢を登る。又雪渓地帯に入り注意しながら進むとガレ場だ。この標高になると樹木はハイ松だけである。そして大きな岩がただ積みあがっているだけで、岩の上にペンキで塗られた丸印を頼りに、えんえんと登り進む。高度を増すとやはり天候は一変する。頭上に迫るガスはあっと言う間にあたりを覆い一瞬に視界をさえぎってしまう。次第に風も出て来た。先を行く者も後に続く者も白い雲の中に独り閉ざされてしまう。いつもは遠州の山あたりを歩く時はぺちゃくちゃと連れ合う者達とおしゃべりをしながら行くのだが、今日はただ黙々と自分の足元だけを見ながらの歩行だ。天候が良ければハクサンフウロ、シシウド、信濃キンバイなど高山植物が見られるのだが。吹きつける風雨を背に鎖場を過ぎると大きな岩がゴロゴロと重なる道になる。尾根が広がり、南稜のテラスに出た。此処から右に折れ、やっと（三一〇六mの北穂高）にたどり着いた。時計の針は午後の一時を指していた。登頂記念の写真も雨と風の吹き荒れる中では撮影は無理である。横尾山荘で作ってもらった弁当もあったがザックを開ける事もままならず断念した。チョコレートとビスケットをカッパのポケットから取り出し、口に放り込むと風雨の荒れる涸沢岳ルートへと向かった。是から三時間、この中を危険な尾根伝いに進まねばならない。横尾山荘を出発した時は何人かと一緒に出たのだがいつの間にかはぐれはぐれになってしまった。北穂の山頂から南稜の分岐に戻りそのまま直進すると北穂高岳の南峰の稜線に出た。岩場ばかりで道と呼べるものは無い。ガスに霞む岩に印された丸いペンキ跡をたどりつつ進むのだ。岩稜の稜線が深く切れ落ち、思わずたじろいだ。風に煽られぬ様に姿勢を低くし進んだ。おりしも、雨が激しく降り出した。横からビシャーと来る様な雨だ。伴って風が谷間からヒューンとうなり声を上げて尾根沿いに抜ける。俺は岩に這いつくばった。少し待っていれば雨も風もすっと治まる時がある。やせ尾根の上には立たない事だ。かがむ姿勢をとり、ひたすら道を見失うまいと岩のペンキ印に沿ってゆっくりと進んだ。天候が良ければ前穂高岳や奥穂高岳の絶景を目にすることが出来るのに残念だ。次は鎖場だ。また不安がよぎった。先ほどの鎖場を越える時も「肩の関節を外しているから大丈夫かな？　支えれるかな？」心配した。しかし此処まで来たら前に進むしかない。腕に無理がかから

ぬ様に鎖を身体全体で覆う格好で掴み岩にしっかり足を掛け小刻みに進んだ。山岳での基本は個人だ。他人には頼れない。再びペンキ印をたどりながら、やせ尾根を登り、そして又下りての進みだ。南側からの吹き上げる風に煽られバランスを失わないようにと注意した。裏側はスッパリと切り立った断崖だ。峪は深いガスに覆われ何も見えない。北鎌尾根で消息を絶った小野と言う二七歳の青年は、こんな深い峪に転落したにちがいない。発見はおそらく出来ないであろうと思った。俺の後にも確かどこかのパーティが向かっているはずだが、影すら見えない。ただ時折雨が弱まるとガスの切れ間に穂高の峰がうっすらと黒くそびえているのが見えるだけだ。

風の音、雨の音、切り立った巨岩、悪天の穂高は頑として人の侵入を拒む黒い魔王にも思えた。「亀岩」の岩稜は不安定で注意が特に必要と聞いて来たが、足を掛けたとたんにガラッと崩れた時は肝を冷やした。落下した岩が下に落ちながら他の岩を拾いながらガラガラと落ちて行く音を聞いた俺はすくんでしまった。その事で岩に足を掛ける時は一度に体重を乗せるのは危ないと知った。必ず掴んでいる腕で自分の身体を支えられるバランスを保つのが大切だ。その後も鎖場が連続する。濡れた手が滑り易く、ハシゴにしがみ付いた。緊張が続き疲れを感じた。俺は少し呼吸を整え立ち止った。「もし、此処で足を踏み外して落ちたら俺は助からんな。多津子の奴、何と言うだろうか？　馬鹿な奴と笑うだろうか？　死んでくれて清清としたと思うだろうか？　それとも悲しんでくれるだろうか？」フッとそんな思いが頭をよぎった。「死んではいかん！　絶対無事に家に帰らねば」そう自分に言い聞かせた。凹角状の岩場を鉄杭や鎖に掴まって直上すると（三一一〇ｍの涸沢岳）の山頂に着いた。腕時計に目をやった。既に四時半を廻っていた。

土砂降りの雨がやや小降りになった。此処から山荘は三十分程で下れる距離だ。涸沢岳山頂を後にし、白出のコルに向かう。ガスの切れ間に赤いトタン屋根が見えてきた。穂高山荘は標高二、九八三ｍの地点にある。三五〇人の宿泊数を用意出来る大きな山荘だ。山荘の屋根は大抵が赤いトタンぶきだ。遠くの距離からでも確認できる。ここも一泊二食九千円。山荘は何処も同程度の金額で宿泊できる。しかし今日の穂高山荘はかなりの混み入りようだ。入り口から既に混雑しておりフロントで一枚の布団に二人で寝る事になると聞いてゲンナリした。

俺に割り当てられた部屋は「槍ヶ岳」と言う部屋名だ。此処の山荘部屋はどれも北アルプスの岳名が付けられている。昨日の横尾山荘とは違い、談笑を楽しむような賑わいは無い。乾燥室で濡れた服や合羽、登山靴を乾かしたり、汗で蒸れた身体を拭いたり、電話を掛けたり忙しく動く人。怪我をしたのか額の包帯を巻き直している者もいる。ベッドで棒の様に横になって動かないままの者。穂高山荘は険しい北アルプスの峰を越えて来た者だけが来る場所なのだ。廊下に置かれたザックや登山靴もアルプスクラスになると、大きさも

四〇から五〇リットルの物が折り重なっている。小柄な俺ではとても背負えるような物ではない。ただそんな男達の間に混じって今夜は寝る事になる。夕飯に着く頃は又もやトタン屋根をバシバシ叩くような大雨だ。誰もが天気状況を知らせるインターネットの掲示を食い入る様に見ている。「明日の日程をどう進めるか?」どの顔も口を固く締めて真剣な目をしていた。むろん俺もそうである。息子の言葉が頭によぎる。台風四号はいよいよ本州に入りこちらに向かう模様だ。「石田さん」後ろから声を掛けて来たのは横尾で会った舟木さんであった。「ああ、やっぱり会えましたね」俺も此処で会えれば良いなと気になっていたので声を掛けてくれたのは嬉しかった。「やっぱり、北穂のコースは険しいですね」「無事に来られて安心しました。私も石田さんのことが気になっていました。天候も悪いですからね」

「ええ、何とか北穂を越えられました。でも良い経験になりましたよ」と笑みで応えた。「明日はどうされますか?」と聞くと「私は予定としては奥穂だけでも登って来ようかと思っているんですがね」と彼は答えた。

「僕は一応、奥穂から前穂、岳沢へと下りるコースで届けも済ましてあるのですがね。明日の宿泊は岳沢小屋に予約は入れてはあるのですが」そう言ってはみたが実際は笑顔とは反対に迷っていた。

山荘の消灯は規則は夜九時になっているが夕食を済ますとサッサとそれぞれのベッドに入り、八時にはどの部屋もドアを閉め就寝に入る。と言っても一枚の布団に男が二人。神経の細い自分には、とても眠れたものではない。それでも他の連中の中には酒でもあおって寝たのか大鼾をかきながら眠る者もおれば、キリキリ歯軋りをする者がいたりする。自分と同じく眠れないのだろうか? トイレに何度も行く人がいて、二段造りのベッドの梯子(はしご)をグラグラ揺すりながら床に降りるのでその振動でこちらも何度も起こされる。俺は上段のベッドの右端に寝ていたが、とても眠れる気がしなかった。隣の男は眠ったのか、俺の太腿程の右腕がドスンと俺の腹の上に乗っかってきた。「な、何と重たい腕だ」払い除けようとするが人の腕がこんなに重いものだとは知らなかった。遠慮なく開いた足は俺の領分まで伸びて来た。その腕と足の重さに堪りかね、隅へ隅へと押しやられベッドの端枠と布団の隅に動けないまま横になっていた。それでもいつしか意識が遠のいて僅かながらも眠った様だ。

(八月十一日)家を出発して三日目になる。少し寝過ごしてしまったようだ。自分を除いては他の登山者のベッドは既に空だ。急いで食堂に駆け付け列の後方に並び順番を待った。外は昨日からの雨だ。トタン屋根はバシバシと大きな雨音を立てるので、屋内に居ると凄い豪雨だと思ってしまう。「いよいよ今日は台風の中かな?」気持ちも重くなってしまう。朝食を済まし、昨日乾燥室に干したままの雨具や上着を取りに行くと、そのまま出発の支度を終え山荘を出た。かなりの大荒れな天候だと予想をしてたが、それ程の雨ではなかった。

しかし穂高山荘は雲に浮かぶ島の様なもので深いガスに覆われていた。上方に黒々と奥穂高の巨峰が霞んで見えるだけだ。舟木さんとは今朝は会わなかったが、もしかしてもう奥穂高に向かったのかなとも思ったが、この天候だし、行く訳が無いと言う気がした。俺はどうしようかと迷った。「こりゃこのまま涸沢小屋に向かって下りた方が確かだな。この天候では下山するのが正解と言うもの」最初はそう考えていた。しかし迷っている自分にもう一人の自分が言う。「昨日も風雨の中を歩き通せたのだ。気を付けて行けば行けるよ。此処で止めたらもう行く機会も無いかも知れんぞ。他にも行く者はいる。落ち着いてゆっくり進めば行けるさ。行くぞ！」止めようとする自分に進めとけしかける自分がいる。此処から岳沢小屋まで通常ペースで六時間。更に危険が伴う難所ルートだ。ましてやこの天候だ。無事に進む事が出来るだろうか？「工場で働くだけの平凡な会社勤めで終わってしまった。一度は自分自身に挑戦をしてみよう」もう一人の自分が言う。本当の自分が分からないまま、もう一人の自分に引きずられる様にして奥穂ルートの鎖場を登る俺がいた。山と言うより巨石を積み重ねた岩の塊と言ったほうが解りやすい。これまでに幾人もの登山者がこの鎖を伝い登ったのであろう、鎖はツルツルしていて握る部分は磨かれたように光っている。

（三一九〇m）の奥穂高は穂高連峰の最高峰だ。

先程の出がけの雨は小康状態になった。八時五分。少し遅れて到着した青年と挨拶を交わし、互いに自分の記念写真を撮り合った。深いガスに覆われ顔の分からない写真にしか写らない。視界は七m程だ。結局、舟木さんとは会わなかった。これから厳しいやせ尾根ルートだ。此処までを無事に乗り切った自信もある。（慎重に行けばやれる）と言う気持ちにもなっていた。だが山荘には大勢の宿泊客がいたのに自分の近くには誰も人影が無い。もう他の登山者は前穂に向かったのだろう。先程の青年は前穂に行くのか、山荘に戻るのか聞けば良かったなと思った。やはり難関なルートと言う意識があるだけに単独は心細いものがある。台風はどの地点か？今日は更に荒れるのか？　心配もある。だが歩き出せばどうせ一人になるのだから、他人を頼っても仕方がないと言う気になり、前穂コースに向かった。

奥穂山頂から吊り尾根最低コルまでは鎌の刃先の上を歩くような難関地帯が続く。両側は切り立って片時も気を緩めることが出来ない。これが北アルプス、穂高連峰なのだと全身で受け止めた。「穂高とお前は勝負しているんだよ。負けてはいけないんだよ」もう一人の自分が俺に言う。「そうだ」と思った。これ迄の自分の生き様に胸を張れるものは無い。何かに挑戦してやり切ったと自分に誇れるものも無い。「俺はこの山と勝負をしているんだ」と思った。それからは何と無く勇気が出てきた。「この勝負に勝ち抜いて無事に家に帰るんだ」そう思うことにした。ペンキ印を頼りにしっかりと突き進むのに集中した。ヒヤーとするガスが覆う。視界は七、八メートルだ。前穂岳の方角すらつかめないでいた。小さく

折りたたんだ山岳地図を雨具のポケットから取り出し、自分の位置を何度も確認しながらも進むが、とびとびに付けられた目印は見失うことが度々ある。うっかり進み×印にぶつかり肝を冷す。その先は切り立った崖だ。雲に浮かぶ岩の上を歩いているだけだ。突然の風雨が激しく襲う。暫くすると又治まり、それが繰り返される。天候に翻弄され行き戻りする。

途中雷鳥のつがいが足先に現れた。生き物に出会うと嬉しい。幸い雨がほんの少しの間、止む。カメラを取り出し、側まで行くとチョンチョン小走りに逃げる。シャッターを切ろうとした俺は思わずたじろいだ。雷鳥のいる先は、尾根の先端だ。危ないところだった。離れた距離でカメラにおさめた。カメラに入り込むと命を落とす。

前穂岳に向かう吊尾根の南稜の頭の手前で左に折れ曲がるように下る岩場で、とうとう俺は恐怖心に襲われ前に進むことが出来なくなってしまった。小康状態だった雨が、又激しく降り出した。登る時には上方ばかり見ているから感じない恐怖心が全身を襲う。鎖があればまだ何とか進めるのにと思った。眼下は絶壁。下方から吹き上げる風を受け、横殴りの雨。岩を掴みながら急斜面を伝い下りるには危険すぎる。「こりゃ無理だ。止めときゃ良かった」息子の顔が浮かんだ。「親父の体格では無理なんだよ」そんなふうに言う声が聞こえる気がした。

一五〇センチにも満たない自分の身長だ。それに未だ傷めた肩関節が腕をいっぱいに伸ばすと外れはしないかとの不安もある。今迄考えもしなかった心配が押し寄せる。弱気な自分が出て来て言う。「引き返そう？　落ちたらどうするんだ？」自分に関わる人の顔が次々と脳裏をめぐる。岩場の陰に身を寄せ、決断がつかぬままにいた。少しばかりの食料をザックのポケットから取り出し、口にしながら、どうしようかと考えた。もう一人の自分が「此処では引き返したのでは悔いが残るぞ？」と催促する。俺はザックが無ければ行けるかも知れないと考えた。穂高を登るだけに装備もそれなりに用意はして来たので細めだがロープはある。それだけでは短いのでズボンのバンドをはずして継ぎ足し、ザックの肩掛けの端を伸ばし4メートル半程の長さになった。ザックだけを上から下の岩場に下ろした。身体だけなら身軽になった分自由が利く。直下を見てしまうとやはり怖気づく。「絶対生きて帰るんだ」俺は自分に強く言い聞かせた。岩場に腹這いになり、しっかり岩をつかみ、片足ずつ足場を探しながら下ろすのだが、足の短い者はこんな岩場は不利だ。足の届く範囲に岩が無い。岩に覆いかぶさるようにしがみつき、足をあちこち動かしては足場を探す。少しずつ身体をずり下ろしながら片足ずつ下ろした。進み出したら止まることは出来ない。北穂での経験を生かし足だけに重心をかけないことに注意した。何とか本当に何とか下に下り立った。此処から岳沢側を登下降し、突き進むと、鎖場が続いた。風雨は更に強くなった感じだ。頭上をヒューンと風が走るのが聞こえる。台風はどの辺まで来ているのだろうか。この風雨は台風の影響によ

るものかは分からない。突然に荒れたり、弱まったりで、はっきりしないが通常の荒れ方で無いことは確かだ。

最低コルの下部を巻いて前穂から落ちる沢を横切ると紀美子平に出た。此処からは前穂岳に行くには進路を左に折れるのだが、また戻って来ることになるので、岩陰にザックを置いて行く事にした。身を軽くして前穂高岳の山頂を目指した。岩は折り重なるようにして続く。背中が自由になった分、急斜面ではあるがかなり楽に登って行ける。手前の岩場しか見えないが、地図の上では三〇分もあれば山頂に到達するはずだ。大きな岩がゴロゴロと積みあがった上が山頂だ。到着（午前十二時一〇分）前穂高の山頂には奥穂高の様な祠もケルンも無い。平たい岩場の上に（前穂高岳山頂）と書かれた標木が突き立てられているだけであった。ガスった中で標木だけをカメラにおさめた。

好天ならば夏の時期は山頂狭しと登山者で賑わうところだが、今は雲の上の孤島に自分独りだけの世界だ。岩陰に身を寄せ、雨を背中に受けながら穂高山荘で作ってもらった握り飯を頬張り、岳沢に向かい下山にかかった。紀美子平に戻りザックを背負い、重太郎新道を下る。スラブ状の岩だ。鎖場、鉄はしごが続く。気の抜けない岩場下りの岳沢ルートだ。山仲間がこのコースは避けるようにと忠告したが、B型の俺はついぞ聞き入れず自分の行動をしてしまう。こんな台風の吹き荒れる中を難所ルートを突き進むなんて、滑落し、新聞記事になったとしても、「馬鹿な奴だ」と笑われて終わるだろう。

仕事の時もそうだったが、疲れてくると頭の奥がズーンと痛む。昨夜の寝不足がこたえたかな？　ザックの重さも小柄な俺にはキツイ。右肩を脱臼してからはカクッと腕が引き攣ることがある。「それでも此処まで踏破して来たんだからな、後は下るだけだ。気を付けて行けば」そう自分に言い聞かせた。

雷鳥広場を通り岳沢パノラマ迄下りた。途中、登って来る男女の二人連れと六〇歳前後の男の登山者に会った。「お気を付けて」と通り一遍の挨拶を交わした。カモシカの立場の岩場を越えると樹林地帯に入る。雪崩の後であろう？　崩れ去ったガレ場に出た。その向こうに赤いトタン屋根の岳沢小屋が小さく見えた。「ああ、とうとう此処まで下りて来た」緊張の連続であった。膝がガクガクする。踏ん張る力が無い。膝が笑うと言う奴である。ザックが岩にひっかかる程の狭い岩場をずり落ちる様にしてようやく沢に下り立ち、岳沢小屋へと到着した。午後の三時四〇分。ただただ無事に下山出来たことに胸を撫で下ろした。

岳沢小屋の受付で「予約を入れておいた石田です」と言うと「よく頑張って来たね」と笑顔で迎え入れてくれた。「今日はこんな天気ですからキャンセルが多いですよ」成る程、登山者は自分を加えても七人だけであった。「では穂高山荘に居たあの沢山の登山者は皆、涸沢に下りたのか。北穂に向かったのかは分からぬが岳沢ルートに向かう人は殆どいなかったのだと知った。ヒリヒリと足が痛む。素足になると靴

ずれした皮膚が水膨れになっている。休憩所に行き、足に絆創膏を貼って手当てをした。昨夜は隣の男にベッドの端に押し付けられ腕やら足やらを乗せられ、ほとんど眠っていなかった。今夜は少人数だから邪魔される事も無く眠れそうだ。「北穂高岳、涸沢岳、奥穂高岳、前穂高岳と穂高連峰縦走を成し遂げたんだから」「やり通したのだ、俺は」

ザックから携帯コンロを取り出し、コーヒーを入れた。コーヒーの美味しい香りがし、甘さが喉を潤した。ほっとして、何故か妙に家族や知人の顔が浮かぶ。そして会いたくなった。明日は山を下り、浜松に帰ろう。皆が待っている。

（八月十二日）四日目の朝、台風は今日長野地方を通過する予定だと岳沢小屋のロビーにインターネット情報の掲示板が張り出された。だがもう此処まで下りれば危険な箇所はない。小屋の従業員に挨拶をして、風雨荒れる岳沢の深い原生林地帯を上高地に向かい出発した。途中、数年前の雪崩が小屋も立ち木もなぎ倒したという跡なのだろう、幾つもの大木が荒々しく剥き出しで岩の下に埋まっていた。午前九時半上高地到着。俺はバス停に着くと直ぐ家族の待つ家に電話を入れた。幸い多津子が電話口に出た。「お父さん？　この台風の中、何をやってんのよ。健一がどんなに心配してると思ってるの？　息子に心配させる父親が何処にいるのよ。兎に角、気を付けて帰ってらっしゃい。帰って来たら、お灸をすえてやるから、覚悟してなさい」何ともきつい言葉が返ってきた。角の生えた多津子の顔が浮かんだ。

この台風下でも上高地は観光客で溢れている。沢渡駐車場までの回送バスも長い列が並んだ。沢渡に着き、自分の車の運転席に座ると、やっと何かをやり終えたと言う充足感が満ちてきた。歩行距離三千メートルに及ぶ穂高の高峰を踏破した自分が嬉しかった。四日間に渡る悪天の穂高との闘い。それは今迄経験した事がない自分との闘いであった。自分の中にもう一人自分がいる。葛藤があった。本当の自分と言うのは今もって分からない。きっと誰もがそうなのだろう。

浜松に向け俺はハンドルをしっかりと握った。台風四号は弱まることなく、長野県道二六号はまだ大雨の中であった。

そして二日後の事であった。いつもと同じように朝起きてテーブルで朝刊を開いた。北アルプスでの遭難事故記事が載っていた。

「去る八月十一日。遭難者は武蔵野（むさしの）市出身の舟木哲夫さん六十二歳。奥穂高から岳沢に向かう途中での滑落事故。首の骨を折っての死亡」

俺は驚き、仰天した。記事に釘付けになった。「えっ？あの日、穂高山荘から奥穂には行くとは言っていたが、俺とは会わなかったし、そのまま涸沢方面に下りたものと思っていたが」予想もしない記事に「まさか」としか思えなかった。「では俺が出発した後の事だ」と考えた。

「八月十一日に俺より遅れて奥穂高を経て、前穂高、岳沢、上高地へと下りるつもりだったんだ。俺と同じルートを後方から、前穂高に向かい進もうとしていた時の、岩場での滑落

事故だ。前穂に向かう途中で二組とすれ違ったから、彼らが遭難事故を知らせてくれたのだろう。俺より後に岳沢に着いた一組は何も知らない様だったし」あの荒れた天候では山岳救助は出来ない。ヘリが飛んだのは日が過ぎてからのことだろう。「それにしても何で突然コースを変更したんだろ？安全ルートに変えるのなら分かるが危険なコースへと変更するなんて」疑問であった。が、ハッとした。「俺が行くと言ったから後を追ってみたのかも知れない」そんな気がした。

「舟木さん、死んだら駄目なんだよ。山に行って死んでは絶対いけないんだよ。死ぬ為に山に登るのではないんだから」俺はやたらくしゃに涙が出た。「やっと人生の一休みをしている時なのだから。どんな風に扱われようと今まで懸命に生きて来たのだから。此れからだってまだまだ人生をいっぱい創造しながら生きて行けるのだから」「穂高は自分を勇気付ける為に登るんだよ」溢れた涙が止まらない。新聞に涙がポタポタ落ち、すっかり濡れるのも構わず泣いた。押し殺していた声が抑えられなくなり泣いた。

庭のナンキンハゼのミンミン蝉が俺の声を掻き消すようにいっそうさわがしく鳴き出した。

（中区）

【入選】

雨

伊藤昭一

一

蒸し暑い七月の雨が降り続いています。まだ梅雨が明けていないのです。

三日間の芝居の稽古も今日が最後の日、みんな疲れたらしく、昼食が済んだあと、それぞれの部屋で眠ったりイヤホンでラジオを聞いたりしています。

ここはこのお寺に付属する宿泊所のような所で、合宿の稽古はいつも利用しています。ちょっと交通には不便な所なんだけれど、とても安いのがいいのです。だって、わたしたちみんなそんなにお金持ちじゃないし、気兼ねなく芝居の稽古ができれば、どんなところでも構わないんです。

そう、わたしたちってまったくの素人劇団だけれど、芝居にかける情熱だけは、たいしたものなのよ。今やっている「未来へ」っていう劇も、もう一年近く稽古してるのよ。完成はいつになるのかも分からないのだから考えてみれば悠長な話よね。でも、今までも一年か一年半の稽古で公演っていうパターンだったから、この「未来へ」も、来年の春には公演にもっていきたいところなんだけれどね。

わたし、この劇では一応主役なの、高校の先生の役なんだけれど、天文を教えるということも、最初はうんと現実的な考えをしてるのが、いろんな出来事を通して、情熱的でしかも幻想的な思いを強く抱くようになるという私の役がらなんだけど、そんな心理的な変貌をうまく表現出来ないので、演出の鈴木さんにいつも叱られてばかりいるの、情けないことに・・・。

芝居ってやればやるほど難しくって、今まで何度も辞めてしまおうと思ったか知れない。でも、不思議なことに、すぐに気を取り直して稽古にやって来るのね・・・何故かしら、自分でもよく分からないのよ、そこのところが。

それで、わたしみんなに聞いてみたことがあるの。

――あなたにとって、芝居、あるいは演劇とは何ですかって

そうしたらみんないろんな事言うのね。

わたし自身は、うまく言えないけれど、みんなともちょっと違うのね。

わたしなんて、まだ人生とか社会の何たるかを知っているわけじゃないし、毎日の生活が楽しくてたまらないということでもないけれど、こうやってみんなでひとつの劇を、少しずつ練り上げていくことが、とても大変なんだけれど喜びでもあるの。

もっとも、こうして口にしてしまっても、まだ言い切れてないこともあるような気もするんです。でも、わたしもみんなも芝居が好きだということは言えるわね。

――私は仕事に完全燃焼できない部分を、演劇に情熱を傾けるのさ。こんなこと上司には言えないけどさ

――自分というものをもっとはっきりさせたい。本当の自分は演劇を通してしか見えてこないような気がするのね

――まあ、抽象的にしか言えないけど、自己実現ということかなあ・・・ひとつの芝居が完成して公演したあとの充実感って、君も感じるだろうけど、やったって気持じゃない

――私は主婦ですが、子育ても一応終ってしまった今、何をしたらいいか分からずにいた時この劇団に出会ったのがきっかけね。演劇は高校の時にやっただけの経験なの・・・

こうしたひとりひとりが違った考え方や経験を持つ集団を束ねて、ひとつの芝居に仕上げていく演出の鈴木さんはいちばん大変なんでしょうね。

鈴木さんっていえば、わたしたち男性八人、女性七人の団員をまとめ、呆れる程の時間をかけて、ひとつの芝居を仕上げていくという、考えてみればこの世の中にあるどんな仕事よりも難しいんではないかと思われる事をし、その上苦労が必ずしも実るとは限らない、言ってみれば賭けのような仕事に打ち込んでいる鈴木さんを、少なくともわたしは尊敬しています。

わたしは独身で、仕事があるといっても、身軽な立場にいるのに比べて、鈴木さんは奥さんに任せているとは言いながらビジネス・ホテルの仕事にどんなにか犠牲を払っていることでしょう。

もっとも鈴木さんばかりでなく、この劇団の男性の人たちの中でも、家族を抱えている人も何人かいるけれど、そういう人たちにもわたし感心します。

このお芝居のストーリーはね、ある高校を舞台にして、教師間のあつれきや、そのあつれきの中から生まれる恋や、生徒たちとの交流を描いているんだけど、多分に幻想的なところもあって、ちょっと変わっているといえば言えるようなものなの。

わたしは天文を教える教師役なんだけれど宇宙は限りなく広いし、わたしたちの銀河系のほかにも別の宇宙があることも初めて知ったのよ。目に見える星だけでも六千もあると言うし、その全てが未踏だってことも改めて考えると、とても不思議。

芝居のなかでわたしに思いを寄せる国語教師の榊原さんは、恋なんていうものには全く縁がないような、そう言っては失礼だけれど、決してスマートじゃないけれど、どこまでも誠実で真面目で几帳面で・・・普段のご本人の雰囲気と役がらがピッタリ、という感じ。それこそ地でいけるようなところがあるの。キャストが決まった時、みんな大笑いしたわ、でも、笑っちゃいけなかったのよね。榊原さんが扮する国語の先生が、天文を教える教師のわたしに、密かな恋心を抱く

んだけれど、わたしは全く気づかないの。

わたし、本当の恋って経験がないけれど、もし、わたしを恋してくれる人が現れたとしたら、きっと気づくと思うんだけれどなあ。

そりゃ物語では、愛されていることに気づかないでいるっとことあるじゃない、例えば、あのシラノの恋みたいな。でも現実にはそんなことはあり得ないと思うんだけれどね。

榊原さんってね、長距離トラックの運転手なの。独りきりでアパートに住んでて、炊事洗濯一切自分でやってるの。それで、来月生活費が大体いくら位かかるか見当をつけて、今月は何日働くか決めるんですって。そう、およそ十五日、月の半分働けば翌月の生活費は確保出来るものなんだそうです。

――まるで自転車操業だね。

なんて言う人もいるけど、わたしはそういう生き方もあると思うのよ。働かないで済む残りの日数が、榊原さんが芝居に打ち込める時間になるんですもの。そうした榊原さんの芝居研究、演劇探求は、決して大劇場でやる有名な劇団のそれじゃなく、ちょうどわたしたちみたいな小さな劇団や、地方のあまり有名じゃない劇団が目当てなの。そうすることがわたしたちの劇団のためになるだろうからと考えるのね、きっと。

わたしは役がらの上では、榊原さんのわたしへの思いを、まるで感じない鈍感な教師を演ずるんだけれど、榊原さんのひたむきな眼に出合うと、やはり、気持が動いてしまうの。

――典子、だめだ、眼が動いている。動揺してるぞ。もっと虚ろに、もっと夢みるように・・・・。

演出の鈴木さんが鋭く遮るんだけど、なかなかうまくいかないわ。

喜びや悲しみ、驚きや怒り・・・・そんな直接的な感情をそのまま表現するのより、わたしに向けられるいろんな思いを、冷たく、あるいは無意識を装って拒否するのって、そりゃ難しいものなのよ。

劇の中でも、ついに榊原さんの思いはわたしには通じなくて、やがて榊原さんはわたしが授業で説明してる宇宙の星の中へ、その恋心をまるで星屑のように散り散りに散らしていくの。無数の星の瞬きは、そうして散り散りになっていく恋の片鱗なのよ。

わたし思うんだけれど、もし本当にわたしに恋してくれる人がいても、わたしがそのことに気づかないとしたら、わたしはとてもいけないことをしたことになると思うの。そう考えると何となく不安になる。

でも、本当に演劇って何だろう。

単なる作り話じゃない。だってそこに演じられることは、ごく平凡で現実的な、わたしの周りにいる多くの人々と同じ表情をもっている人たちの、いろんな思いや生活が繰り広げられているんですもの。それはわたしたちの日常に連続したものに違いないのよ。そんなわたしたちの生活のある部分を

切り取ったものがわたしたちがやろうとする劇でなければいけないのじゃないかしら・・・。

クーラーの効きが悪いのか、部屋の片隅でかすかに寝息をたてて眠っている大村さんの額に、うっすらと汗が光っている。

大村さんは銀行員で、今度の「未来へ」の脚本を書いたんです。そして劇のなかでは学校の用務員の役をやっています。

意地悪な女教師役の恩田さん、女生徒役の上村さん、太田さん、そして太田さんの母親役をする矢野さん・・・。

みんな芝居が好きで、それぞれに無理をしてでもこうして集まって芝居の稽古をしてるんです。

もうじき一時。午後の稽古が始まるので、一人ふたりと集まってきていますが、隣の部屋ではひとりセリフの稽古をしている榊原さんの声が聞こえます。熱心な榊原さん、わたしも見習わなくちゃ。

ほかの男性はまだ帰って来ない。参道の土産物屋でも覗いているのでしょうか。

外は相変わらず雨が降っています。本当に梅雨ってうっとうしくて嫌だ。こんな雨でもこのお寺に参詣する人がいて、色とりどりの雨傘が、ここからも木立の向こう側を横切って行くのが見えます。

――典子・・・。

わたしを呼ぶ鈴木さんの声が廊下の向こう側から聞えてきました。

二

典子は私の話を聞き終わると、その大きな眼から溢れる涙を拭いもせずに、私を睨むように見据えた。

涙は眼の周りから溢れてくるものだということを初めて知った。こんな時、そんなことに感心している自分を、何て冷酷な男なんだろうと自嘲する気持と、こんなにも冷静に典子に話し終えることが出来た自分の平静さに驚く気持とが交錯していた。

典子は何も言わなかった。

流れる涙は頬を伝わって落ち、台本の表紙を濡らした。

私は典子の涙に突然、殆ど忘れていた遠い記憶のなかにあったある場面を思い出していた。

それは無論、周囲の状況も、私自身もまだ若く、すべてが現在とは違っているのだが・・・。

それはこんな情景から始まる。

日曜日というのに人影はまばらであった。松の内を過ぎた冬枯れの鎌倉である。氷雨が降っていた。

バス通りを鎌倉駅から来て真直ぐに行けば長谷観音の入り口、右折すれば長谷大仏という少し手前の道を右手にあがって行くと、百メートルほどの山の中腹に鎌倉文学館がある。もとは加賀百万石の大名、前田氏の別荘を改築したものであ

る。

しかし、私はこの文学館をめあてにやって来たのではない。大学でお世話になった大迫教授の奥さんが亡くなられたと聞いて、久し振りに鎌倉を訪れたのであり、文学館はそのついでに寄ってみただけなのだが・・・。

正面に由比ガ浜を見下ろすと、眺望が開け八千五百坪はあるという敷地の中にあるこの文学館は、確かにその存在そのものが文学的である。

大迫教授は私の卒業論文の指導教授であった。教授の専門は経済史であったから、私が選んだテーマとはやや違っていたが、あえて大迫教授の指導を受けるようにした私の心情は、多分に屈折したものがあった。

学内の大迫教授評の多くは、その狷介な性格を先ずあげ、学生たちが近づきたがらない教授のひとりであった。

陽気で活動的でマスコミにも人気があるというような教授は学生に人気があるのは今も変らないだろう。

そんな教授の講義は、物事を出来るだけ単純に概括して明確に判断を下す、というようなものだが、単純化したり概括することによって剥ぎ取られた部分は一体どうなるのだ。そこに真実はないと保証できるのか、というふうな幼い私の反発めいたものの反動が大迫教授に近づけたのかもしれない。

しかし、私は最後まで大迫教授を好きにはなれなかった。

月に一度か二度、この文学館へ上がる道の反対側にある教授の家を訪ねるのは、あまり気が進まなかった。論文の進捗状況を報告し、それに対する教授の考えを聞いたり、参考文献を示してもらったりするだけであった。

教授の家の玄関を上がると、教授の書斎に至る廊下にも夥しい専門書が並び、和室の書斎にも天井近くまで本や雑誌が積まれていて、その下の畳が心なしかその重さのためにかなり沈みこんでいたのが、妙に気になっていた。

当時、私が読んでいたアメリカの経済学者ソースタイン・ヴェブレンの論文の一節に

――われわれの社会で無くてよい余計なものは、大学の学長、売春婦、広告、教会の牧師の説教、ホテルのポーターそして小売り商人・・・。

とあったが、大迫教授も学生たちの幼稚な論文も、無くてもよい余計なものと考えているのではないか、と私は思ってみたりもした。

私がそんなことを考えるほど大迫教授の指導は、必要最小限のことしかしない、と言うように見えた。

鎌倉行きにあまり気が進まなかったのは、大迫教授のそんなこともあるが、もうひとつは、当時付き合っていた女が、私の鎌倉行きにいつもついて来たこともある。

貧しいアルバイト学生であった私にとって、既に仕事をもっていた女の存在は、経済的に確かにありがたいものではあった。しかし、私は女に優しい言葉のひとつもかけるでなし、いつも邪険に女を傷つけてばかりいた。

私はどうしてあんなに傲慢であったのだろう。しかし、女

は私の傲慢さの陰に潜む、臆病で不安に怯える情けない弱さを見抜いて、逆に私を憐れんでいたのかも知れない。

女は私が大迫教授のところにいる時間を、駅の近くの喫茶店で過ごしたり、鎌倉の街をあてもなく歩きまわったりして、私が戻ってくる頃、鎌倉駅で待っていた。

ある時、あいにくの雨で道がぬかるんでいたのかも知れない、女の白いパンタロンの裾がひどく汚れているのが遠くから見えた。私は急に残酷な気持に襲われて、女をそこに置き去りにしたまま、東京に帰ってしまった。

女がいつまでそこに待っていたのか知らない。そのことがあって、かなり経ってから、私が女と会った時、女はそのことで私を詰めるであろうことを予想していたにも拘らず、女はただ黙って私を見詰めるだけであった。やがて、女の眼に涙が溢れ頬を伝わって流れるのを私は見た。

しかし、そんなことがあっても、私は女に優しくしようとはしなかった。それこそ何かに反抗するように、私は苛々しながら女の些細な失敗や落ち度を激しく責めたてた。

その後、女は二度と涙を見せることはなかった。

私は典子の涙に、既に忘れていた女の涙をぼんやり思い返していた。

あの頃の私は、たとえ残酷で許し難い非情な男であったとしても、その一方には瑞々しい若さをもっていた筈だ。

――若さというものは、それ自体惨酷なものである。

と言った詩人がいたが、だからといって私が許されるものでもあるまい。

遠い街に住んで、平凡だが満ち足りた生活を送っているはずの女に、私は今何も言うことは出来ない。

卒業論文の審査は、数人の経済学部の教授によって行われた。最後の面接も過ぎてから、その結果があったが、比較的良い結果であった。しかし、私は少しも嬉しくはなかった。

文学部にいた私の友人は、卒論のかわりに百枚の小説を書いて合格点を貰ったと言っていたが、その方がよほど値打ちがあるような気がした。何故なら私の論文は外国語教室の地下の倉庫にしまわれて、おそらく日の目をみることはないだろうからだ。

私が典子に話したのは、典子の相手役である榊原の教師役をおろす、ということであった。

長い沈黙の時間があったが、典子は何故、と最後まで問うことはなかった。

典子の涙は一体何だっただろう、典子のこの沈黙は何故か、と私は考える。

ひょっとしたら典子は榊原が芝居をこえたところで典子を好きになってしまっていたことに気づいていたせいなのか。

典子と榊原は芝居のなかでは、互いの愛には気づいてはならないのだ。いや、そこに愛が生まれることをも禁じている

のだ。

劇中で典子と榊原が対峙する場面がある。榊原の視線が典子の瞳に注がれると、典子の眼が光った。榊原の視線は、やがて典子に対する憧憬に似たあたたかさがあふれるのを私は見た。

たしかに一年近く稽古をしてきた役をおろすのは残酷なのかも知れない。だが、榊原のあの役は誤りであったと考えざるを得ないのだ。

なまじ彼の地でいける、というふうなやや安易な考えが、私にも彼にもあってそれがいつまでもついて回っていたような気もするのである。

私は典子が部屋を出て行ったあと、榊原を呼んで、この役をおりてもらう、とだけ言った。

彼は暫く考えているようであったが、やがて表情も変えずに

――わかりました

と言って部屋を出て行った。

午後の稽古が始まる時、私は広間に集まった団員たちにそのことを伝えた。過去、決まったキャストが途中で変更された例はなかった。不満な表情を浮かべている者もあったが、私は構わず榊原の代わりに、新村を指名した。

私は大学を卒業した後、いくつかの会社に勤めたが、いずれも長続きしなかったが、今のビジネス・ホテルをやることになって十年が経つ。この仕事は殆ど妻に任せてきた。

幸い地の利もあって、大きな発展もないかわりに経営に行き詰まることもなかった。

ビジネス・ホテルの仕事を始めて二、三年した頃であった。二十名ほどのある劇団員の客があった。

地方新聞の片隅に、その劇団はきわめて先進的、あるいは前衛的な芝居をする劇団、というように紹介されている記事を私は読んでいた。

電車を降りてホテルに近づいてくる客の中に、私は学生時代の友人で、卒業論文に百枚の小説を書いた男を発見した。聞くと彼はその劇団で脚本を書いているというのである。

私が彼のいわば影響で、芝居にかかわるようになったのはそんな偶然からであった。

三

俺は確かに役者としての資質があるとは思ってはいない。演出の鈴木さんから今の役を辞めてもらう、と言われた時は、正直悔しかったし腹立たしくもあった。

俺は言ってみれば芝居だけが生き甲斐だし、俺から芝居を取ったら何も残らないような気がする。俺の生活は芝居中心に動いていると言ってもいい。芝居のために働き、芝居のためにはどんな犠牲を払ってもいいと思っている。

深夜の高速道路を、長距離トラックを運転しながら、セリフを大声でしゃべっていれば俺は満足だった。

だが、俺がこの役をおろされた本当の理由は一体何だろう。鈴木さんもはっきり説明はしなかった。

俺は誰よりも稽古には熱心だった。セリフを覚えるのも決して遅くはなかった筈だ。あの役が決まるときも、俺は適役だと思っていたし、皆もそう言っていた。

だが、やっぱり俺のどこかがいけなかったに違いない。

俺は皆の稽古を見ながら考えた。

俺の代わりをすることになった新村は、さすがに若いだけあって、ハリのある声でセリフも淀みがない。それに何よりも俺と違って表情や体の動きに一種の明るさがある。

だがこうして皆の稽古を見ていると、今まで気付かなかったところが、はっきり見えてくるような気がする。

なかでも一番光っているのは、やはり典子だ。俺を相手としてやっている時とは違った初々しさのようなものがある。

典子は変わったのだ。

相手が俺じゃなく、新村になったからだけではなく、典子は変わっていた。こうして客観的な立場で見ると、初めて発見できる新鮮な輝きがある。

演出の鈴木さんは、俺が典子の相手役では典子のこの輝きを引き出せないと思ったからだろうか、と言う考えが俺を捉えた。

俺はもともと才能なんてものを問題にしていなかった。才能のある無しを言うのは、一種の弁解ではないかとさえ考えていた。才能よりも努力だと思っていた。

だが、こうして典子を見ていると、才能、それももって生まれた才能は、誰もが備えていて、努力とか教養以前の資質としてあるのではないかと思えてくるのである。

俺は所詮トラック野郎に過ぎないのだ。演劇だ芝居だなどと、俺には似つかわしくないことに夢中になってるような柄じゃないのかも知れない。

俺がこの劇団に入ることになったのは、典子のやっていた芝居を見たのがきっかけだった。

典子は主役ではなかったが素晴らしかった。舞台を縦横に駆ける大きな動きには、素人の俺には天性のものを感じた。人は生まれる時から既に持っている資質があるとしても、典子にはそれを全く自覚しないのではないか、と俺は感じていた。

女性がいちばん美しいのは、自分の美しさを自覚しない少女時代ではないかということを聞いたことがあるが、典子が劇団員の誰からも愛されているのは、彼女の明るさや素直さのせいもあるが、俺は典子自身が自分の美しさや賢さ、感性の鋭さに全く気付いていないことにあると思っている。

典子は、本当は「のりこ」と呼ぶべきだが、何時からか、誰もがそう呼ばずに、「てんこ」と呼んでいた。何時の日か自身の美しさや賢さを自覚する時がくることを俺はひそかに

怖れているような気持になっていたが、その一方で矛盾するようだが、その日が早く来ることを願ってもいた。

ひょっとして、稽古のなかで俺の典子に対するそんな戸惑いに似た思いを、鈴木さんは発見して俺をこの役からおろすことを決めたのかも知れないとも思うようになっていた。

芝居の中では典子の教師役と俺の国語教師役の間には、愛があってはならないという下書きを俺はぼんやり思い返していた。

俺はこの劇団に入る前までの勤めを辞め、長距離トラックの運転手になったのは、その方が稽古に都合がよかったからだ。同時に俺は小さな都市で上演されるあまり有名でない劇団の芝居を観るようにした。なかには劇団員と知り合いになって、その劇団とともにいくつかの町を巡ることもあった。

田舎の旧家を借りて、自炊しながら公演を続けることもあった。

そんななかで、俺はこつこつと努力を重ね、やっとひとつの役を貰える人がいると思えば、同じことを何の苦もなくさらりとやってのける者もいることに気づいていた。

俺はそういう人に決して嫉妬はしないつもりだ。神の不公平に文句をつける気もない。人間なんて一人ひとり違った格のようなものが備わっているような気がするのだ。

俺はそんなことを考えながら皆の稽古を見ていた。

俺がこの役をおろされたのも、結局俺にはどうにも似つかわしくなかったからだろう。潔くおりなければならないのだ。努力だけでは埋めることの出来ないギャップがそこにあるのだと俺は納得した。

俺の兄や妹は大学まで進学したが、俺は高校を卒業するのがやっとだった。高校を出て就職した会社の社宅が、既に高校卒と大学卒ではまるきり違うことを知った。そのことを兄に言うと、俺の言うことを不思議そうに眺めて言ったものだ。

——学歴のあるなしで何かが違うというのは当たり前じゃないか

と兄は言った。もっとも俺の言う事の方がまっとうだと言うのも俺が勝手に考えたことなんだが・・・。

こうして、三日間の稽古は終った。

ミーティングの後、俺たちはそれぞれの部屋に戻って荷物をまとめ帰り仕度をした。いつもそうだが、こうして合宿の稽古が終ると誰しもが多少不機嫌になるのだが、今回も例外ではなかった。

疲れもあり、思うようにいかなかったという悔しさもある。

とりわけ俺にとっては今までやってきた役をおろされて、さし当たっての目標がなくなってしまった。鈴木さんを恨むわけにもいかないし、恨んでみたところでどうなるものでもない。

俺はひとりで糸のように降る雨の中を傘も差さずに急な坂道を下りてバス停に向かった。

この三日間はこの地方だけの行事があるとかで、この寺に参詣する人でけっこう賑わっていた。駐車場には車が溢れていた。

俺はバス停の近くで雨を避けるために大きな木の下に立ち止まって、行き来する人たちを眺めていた。

すると背後に人の気配がして、赤い花模様の傘が俺の上に止まった。雨にけぶる灰色の視界が、一瞬花模様に染まったかに思われた。

典子だった。

典子は俺の方を見ずに、バスの時刻表を眼で追いながら、次の稽古の日程や、さっきのミーティングで触れなかった小さな連絡を俺に告げた。

雨は次第に強くなっていったが、俺はほんの少しだけ明るい気分になっていた。

（西区）

【入選】

浄土への旅

幸田健太郎

（一）

「吟子、いま帰ったよ。元気かい？」

部屋に入るとコートを脱いで、私は吟子の仏壇の前に座った。仏壇の中では、見慣れた吟子の顔が笑っている。

今日は久し振りに街中（まちなか）で飲み会があった。少し飲み過ぎたのと、帰りのタクシーの暖房が効き過ぎていたのか、喉が渇いた。冷蔵庫から、大きめの缶ビールを持ってきた。

このところ地元自治会の行事や、趣味の会の旅行などが続いて、吟子とゆっくり話すことができなかった。今日は久し振りに話せると、朝から楽しみにしていたのだ。冷えたビールをごくりとやった。冷たい液体が、熱い喉を気持よくすべり落ちていった。

仏壇といっても我が家のものは、普通のものとはだいぶ違う。家具職人をしている友人に、特別に作ってもらったものだ。縦五〇センチ、幅四〇センチ、奥行が三〇センチメートルの小さいものだ。前面には扉はなく、飾りも一切ない。下部に小さな引出しが、ひとつだけ付いている。

白い波形をした杢目がきれいに浮き出た、チョコレート色をした栗の無垢材で出来ている。小さいが気品があって、周囲に存在感を漂わせている。たいへん気に入っている〝箱〟である。

仏壇の中には、額に入った吟子の写真と、ピンクのリボンの付いた小瓶、それに菊の花を挿した一輪挿しがあるだけだ。

写真は亡くなる二年前に、一緒に信州へ旅したときのもので、吟子のひとりで笑った顔が大きく写っている。元気な頃の雰囲気がとてもよく出ていて、私の好きな一枚だ。

ガラスの小瓶には、火葬のときに分けておいた吟子の骨が、少しだけ入っている。これが我が家の仏壇である。

私は去年に吟子が亡くなってから、この仏壇の写真に向かって、独り言のように話し掛けるのが、楽しみになっている。

写真が喋るわけはないが、私が吟子の眼を見詰めて、ゆっくり話し掛けると、なんとなく吟子の口元が動くような気がするのだ。それを勝手に自分の口で、都合のいいように言葉にして発する。私の下手（へた）な一人芝居のようだが、不思議にこうすると、本当に気持が落ち着いてくる。生きた吟子と会っているような気分になるのだ。

仏教徒の家庭に育った私たち夫婦は、吟子がまだ元気だった頃から、人の死や死後の世界、霊魂やその供養といったことについて、折にふれてよく話し合ってきた。

しかし、同時に今の仏教界のあり方には、強い不満もあった。僧侶は、お葬式や法事のときだけ派手な袈裟を着けて、神妙な顔をして来るが、普段の生活者にとっては、とても身近な存在とはいえなかった。特別なときだけに現れる、別世界の人のような気がしていた。

人は死ねば、それで本当にすべてが終りになってしまうのか？

肉体と霊魂が一体だとすれば、霊魂は肉体の出生と同時に生じ、肉体の死滅とともに滅びることになる。そうすると仏教が説く、因果応報ということが成り立たない。

逆に、肉体と霊魂は別のものであるとすると、霊魂は肉体の発生・死滅とは関係なく存在することになる。すると死後も自我は永遠に存在することになって、これも仏教の考えとは相容れない。

だが、仏教はこの矛盾する問題では、古代インドの伝統的な考えである輪廻の観念を取り入れたのである。

私たち夫婦は、あまり難しいことはよく分からないが、今の仏教が説く、天界――人間界――阿修羅界――畜生界――餓鬼界――地獄界という六つの世界を輪廻転生するのだろうということは信じた。すなわち、人は死んでも肉体を離れた霊魂は宙に昇り、いずれまた新しい肉体に宿って、この世にも生まれ変わってくるというものである。夏の盂蘭盆会には、先祖の霊を祀るという風習もあるではないか。

自分たち二人は、こうした仏教の教えを大筋としては理解しているが、個別な点ではあまり拘泥せず、二人で話し合って納得した方法でやっていこうということにしていた。

吟子の葬儀も仏式によって平凡に済ませたが、戒名はつけず墓も作らなかった。いま目の前にある小さな仏壇が、吟子の墓でもあるのだ。遺骨は灰にして、吟子が産まれ育った古里の山に散骨した。

死者の供養は残った者の務めだが、私は分家の身で、しかも子供がいない。すべては自分で考え（吟子と相談しながら）、やっていく以外にない。吟子の供養は、私の手元でやっていくことにした。

「あら、久し振りね。あなたこそどう？　元気でやってる？」

聞き慣れた吟子の声が聞こえる（口が動いた気がする）。生存中には些細なことで、よく遣り合った懐かしい声だ。

「うん。元気だけど、このところいろいろと忙しくてね」

「へぇー、結構じゃないの。やることがなくて、一日中ぼけーっとしてるのは嫌よ。こっちもね、年中気候がよくて快適なんだけど、なんだかんだと毎日忙しいわよ。あっそうそうこのあいだね、先にこちらに来られたあなたの御両親に会ったわよ。二人ともちっとも変わってなくて、昔のまんまよ。お義母さんね、あなたのお酒の飲み過ぎには、すっごく心配してたわよ！」

ドキッとして、私は手に持っていた缶を、思わずテーブル

に置いた。缶の飲み口から、白い泡がじわっと溢れ出た。
「なぁに、大丈夫だよ。気をつけながらやってるから、心配しないように伝えてくれよ」
　内心、私は痛いところを突かれたと思った。若い頃から酒はよく飲んだが、吟子を亡くしてからは、その量は確実に増えている。身近に話し相手がいないと、どうしても手が酒にのびてしまう……。
「ところで、あなたの独り暮らしはどう？　もうだいぶ慣れた？」
「うん、もう大丈夫だよ。君が逝った当初は本当に参ったが、時間とともに慣れてもくるし、また周りの人たちからもいろいろ教えてもらってね。老後の独り暮らしも、なんとか無事にスタートできたみたいだよ」
「まぁーっ、それはよかったわ。安心したわよ、本当に」
「それにね、老人が独り暮らしをうまくやるためには、コツみたいなものがあることが分かったよ」
「へぇー、それってなぁに？」
「まず第一はなんと言っても健康だね。これは若い頃でも当たり前だが、特に歳をとっての独り暮らしは、これがなくっちゃなんともならんね。これが壊れたらもう絶望だよ。俺の酒なんか、そのための栄養補給剤みたいなもんさ」
　私は、わざと大きな声で言った。
「まぁー、都合のいいこと言って！」
「そして二番目が、なんでもいいから自分で打ち込んでやれることを持つことだね。三番目は、心を許し合える友達がいることで、最後が食べていける程度のお金があることだなぁ。友達は多い方がいいが、お金はたくさんはいらないよ。質素に食べていけさえすれば十分だね」
「ふぅーん、私なんか事故で急にこっちへ来ちゃったから、老後のことなんか考える暇もなかったけど、ふつうに一生を終える人にとっては大問題だよね、きっと……」
　吟子の声が急にしんみりとした口調になった。私はテーブルに手をのばし、少なくなったビールを口に運び、ゆっくりと飲み込んだ。
「そうなんだよなぁ。老後はその人生の締めくくりだし、残された時間はもう少ない。そして体力や気力も衰えてくる。そうなってから不本意な生活を強いられるのは、とても辛いことだよ。幸いにも、私の場合は今のところはうまくいってるが、先のことはまだ分からんなぁ――」
「そうねぇ。あなたには、最後にひとりで越えなければならない大きな山があるわね。それをどうするか……」
「うん。分かってるよ。周りに家族はいないんだから、ひとりで全部やるしかないね……さぁーっ、夜もだいぶ更けた。今日はこの辺で終りにするか。風呂に入って寝ることにするよ。吟子、おやすみ……」
「そうね。傍にいてやれなくて申し訳ないけど、身体にはくれぐれも気をつけてね。じゃあ、おやすみなさい……」
　マンションの窓から外を見た。大都会のような派手な夜景

ではないが、暗い空間に浜松の中心部の明かりが灯っている。その明かりの下には、たくさんの人が住んでいる。

人は生きている限り、誰にでも老いは進み、やがて死は確実に訪れる。この有限の生をいかに充実させ、悔いのない人生をおくり、その最期をどう迎えるか。私はいま、それをいつも考えている。

カーテンを閉め、居間の電気を消した。壁の電波時計の小さなランプが、青白く光った。

（二）

大陸からの強い寒気団が日本を覆ってきて、この暖かな浜松も、数日前からこの冬一番の寒さが続いている。さすがにこうなると、外出するのは思いやられ、私は毎日碁石を並べたり、本を読んで過ごしている。

この書斎は南を向いた、六畳ほどの洋間である。外は寒くても陽が十分に差して、温室のように暖かい。壁には造り付けの大きな本棚があり、若い頃から好きで求めた本が、びっしりと並んでいる。　机の上の写真立てには、居間で吟子と二人で撮った写真が入っている。吟子は普段着のままで、寛いだ雰囲気で微笑んでいる。

読む本は、宗教関係や老年の生き方に関するものが多くなってきた。歳をとっての独り暮らしだと、どうしてもそういう方面に関心が移っていく。

人が老いるとは、どういうことか？

いろいろな本を読んで、自分なりに整理してみた。まず、人は最初から人間として生まれて来たのではないという。生物として生まれ、たくさんの時間と労力を注いで、やっと人間に成長する。そして最後はまた、生物として死んでいく。老いるということは、人間から生物へ戻る過程だという。青春期が人間への登り坂なら、老年期は生物への下り坂だ。

老いとは肉体が衰え、病気がちになる。精神も衰えて、物忘れがひどくなる。友達が減る。楽しみも減る。生きる張合いもなくなる。社会との繋がりもだんだん細くなり、次第に孤独感が深まっていく……。

これは人によって多少の違いはあるにせよ、ほぼ共通する現象だ。どんなに抵抗したり、逃げようとしてもそれは無理だ。老いを止めたり、押し戻すことはできない。そしてその先には、確実に死が待っている……これが偽らざる〝老い〟の姿だ。

このように考えてくると、暗澹たる気分になる。この先生きていても、明るい兆しはまったくない。一歩一歩大きな暗い谷に向かって、歩んで行くようなものだ。

しかし、このようにいくら考えても、悩んでみてもどうにもならないことは、丸ごと飲み込んで、そのまま認めてしまう以外に方法はないのではないか。それが〝悟る〟ということかも知れない。

そう腹に決めてしまえば、それはもう拘泥せず、せめて生

きている間のこの人生を、少しでも明るく、前向きに生きていけばいい。私はこの頃、ようやくこのように考えることができるようになった。

少なくなった友人や、町内の皆さんとも積極的に交わり、誘われれば喜んで旅行にも行く。趣味の短歌の会や、囲碁クラブにも参加している。若い時分にはなかったことだ。ひとりになって、今までとはまったく違った世界が見えてきた。新鮮な発見だった。

仏教では、人間には五つの欲があるという。金銭欲、名誉欲、色欲、食欲、睡眠欲だが、仕事をリタイアした私にとっては、金銭欲と名誉欲はもう関係ない。食欲と睡眠欲は死ぬまで必要で、色欲は分からない。

要するに人間、特に老後はぎらぎらした欲や見栄(みえ)を張るのはやめて、慎ましくあるがままに生きればいいのだと思っている。

だが、最近はそれもなかなか難しい情況になってきた。栄養がよくなったのと、医学が進歩したためか、日本人の寿命が大幅に伸びた。ひと昔前なら、仕事を引退し十年も経てば、自然とあの世へゆけたものが、今ではほとんど二十年はある時代になった。老後に残された時間が飛躍的に増えたのである。

だいぶ昔に、「永すぎた春」という小説があったが、今は「永すぎる秋」という感じだ。長生きは結構なことだが、その永い秋を持ちあぐねている老人が多い。かといって死ぬ気にもなれない。経済の発展と科学の進歩が生んだ贅沢なそして厄介な現象である。

人の死と、死後の世界はどうなっているのか？

私は今の日本社会は、あまりにも「この世の生」だけに重きを置きすぎているのではないかと思う。したがって、この世での人間が刹那的・物欲的になってしまって、人生が平板で小さく、底の浅いものになってしまっているのではないか。

生まれる前の世界や、死んだ後の世界も含めて、もっと大きく全体を捉えれば、この世の生き方にも立体感や深みが出てくる。その方が面白いし、また生きやすくもなるはずだ。私はいま、このような感覚で生きている。

人は日一日と老化する。やがて重い病気を得て、病院のベッドに横たわる。身体のあちこちの痛みに加えて、点滴だの腹水を取るだのといろいろな管につながれて、寝返りもままならなくなる。

やがて、床擦れの苦痛が始まる。家族や周囲の者に、介護をはじめさまざまな負担をかける心の負い目。その介護や医療に感ずる無数の不満。それらを口に出せない鬱屈。深まる孤独感と言い様のない寂しさ……。

こんなことなら、こうなる前に死んでしまった方が良かったではないか。このような状態で生きていても、なんの楽しみもない。第一、これからさき生きて、どうしてもやらなければならないことなど何があるのか。ほとんど何もない。永

すぎる秋を持てあまし、ついダラダラと生きた結果がこの姿だ。

人はいつかは必らず死ぬということは、誰でも知っている。ただ、それがいつかということが分からない。だから確実な死と不確実な死期の間で、みんな割とのんきな顔をして生きている。

人の死は、大きく分けて三つある。自然死と事故死、それに人工死だ。病死や老衰死は自然死に含まれるが、そのひとつのケースとして想像したのが、いま述べた姿だ。

ある人は、「すべては天に任せ、その時はその時だ」と達観したかのように言うが、私はそのようには考えられない。

アメリカの医師ヌーランドが書いた、『人間らしい死にかた』という有名な本がある。三十年にわたって、約九千人の患者を診て、実に多くの死に立ち会ってきた医師だ。

ざっと読んだが、病院における自然死の現場は、世間で一般に思われているような穏やかなものではないらしい。臨終の瞬間には概して平穏で、安楽な無意識状態が訪れることも多いらしいが、その前には恐ろしく悲惨で残酷な光景が繰り広げられるらしい。「尊厳のある平穏な自然死」というのは、理想であって現実には難しいようだ。ヌーランド自身も、医者にすべてを任せるつもりはないと言っている。

やはり、この世で授かった生命を終結するときには、それなりの肉体的・精神的な苦しみを経ないと、死は訪れないものらしい。

次の事故死は、死の覚悟が出来たいいタイミングの時に、苦しまない即死のような事故にあえるかどうか当てにはできない。これは、運を天に任せる以外にない。

そして最後が、人工死だ。この人生死ぬか死なないか分からないなら、自分から死ぬことはないが、確実に死ぬのだ。人間の寿命は神経細胞の寿命と一致するが、人間のそれは一二〇年くらいだそうだ。したがって、人間の寿命の限度は一二〇歳前後だという。

私は若い頃から、人生の目的は長さだけではない、内容や達成感の方が大事だという死生観を持っている。やりたいことを精一杯やって、一定の達成感や満足感が得られれば、それでいいではないかと。自然死、特に病院での死亡は否だ。事故死はまったく当てにならない。

だとすれば人工死しかないが、私はそれでいいと思っている。私には子供がいない。家内には先立たれてしまった。継ぐべき家もない。この世にもう特に強い未練はないのだ。

振り返ってみれば、私の人生は楽しかった。敗戦後の混乱期が治まり、日本の経済が高度成長期に入った頃に青春期を過ごした。世の中が活気に満ちて、輝いていた。そして、現役で働いていたあいだ中は日本の経済も安定しており、引退と同時に閉塞感が漂い始めた。

いい人たちともたくさん出会えたし、仕事もやり甲斐があり、目一杯働いた。海外や国内の旅行、趣味や道楽もいっぱいやった。この世での楽しみは十二分に味わった。本当にい

い時代に生きたものだと心から思っている。

これからさき生きても、楽しいことはそうありそうもない。それに、いつ果てるとも知れない人生を、ダラダラと生きるのは厭だ。痛い目をして病を治療しても若返るわけでもないし、高額の医療費を若い世代に負担させるのも心苦しい。そして何より、老醜を晒したくない。

これはいま、社会問題となっている、働き盛りの人の自殺とは違う。すでに人生の大半を消化し、やるべきことはやり終えた、人生の最終場面だ。人の生き方に自由があるように、この最終場面の幕の降ろし方にも自由があってもいいと思う。

誰にも遠慮せず、また世話もかけずに、百パーセント自分の意志と力で、この幕を降ろしたいと思っている。

自分の死を、他人である医者に委ねたくはない。死はこの世での人生の総決算だ。もうこの辺が潮時だと悟ったときには、潔く次の世へと旅立ちたい。

（三）

立春も過ぎて、梅の開花が話題にのぼるようになった。居間に差し込む陽光にも、春の気配が感じられる。しばらくのあいだ、冬籠りのような生活をしていた私も、今日は午後からバスで、市内にある梅園に行こうかと思っている。

食事を済ませて、吟子の前に座った。明るい陽光に照らされて、吟子の顔が輝いている。

「吟子、おはよう！」

大きな声をかけて、吟子の顔をじっと見詰める。ずいぶん見慣れた顔だが、不思議と飽かない。それに年齢（とし）をとらないのがいい。このところ、私は自分自身がかなり老けたのではないかと心配している。日一日と老いを痛感しているのだ。

「おはよう！　元気？」

いつもの明るい声だ。

「あぁ、元気だよ。こっちはずいぶん暖かくなったが、そっちはどうだい？」

「こっちは年中春みたいなものよ。一年中お花が咲いて、とっても気持がいいわよ」

「へぇー、そりゃいいね。ところでさ、君は今そっちで毎日なにをやってるの？」

「うふふ、なんだと思う……？　実はね、この次に生まれ変わる時のために、みんなでいろいろ勉強しているのよ」

「えぇっ、そりゃすごいや。それって一体どんなことをやるの？」

「まぁ、ひと口で言えば、世の中みんなが仲よく幸せに暮らしていくためには、どうしたらいいかってことね……」

「なるほどねぇ。こりぁ驚いた。だが、そうしてみんなが順番に生まれ変わっていけば、いつかはこの世の中もっと平和になるってことかなぁ」

「そうよ。時間はかかるかも知れないけど、こういうことをしっかりやっていくしか、仕様が無いじゃないの。あなたは

毎日どうしてるの？」
「うん、特に変わったこともないが、だんだん体の疲れがたまって困るよ。このあいだも公園の掃除があって、ちょっと張り切ったらあと二、三日体が痛くて参ったよ」
「駄目よそんなに頑張っちゃ、もう若くはないんだから。あなたは若い時から本当によく働いた人だから、もう何もしなくていいのよ。体に気をつけながら、自分の好きなことだけをのんびりやれば……」
「そうだな。そのつもりで、あとしばらくはのんびりやるよ」
「あっ、そうそう。気になっているんだけど、前に話したあなたが最後に越えなければならない山のことね、どうするつもり？」
　吟子の声が、急に真剣になった。
「……うん。いろいろ考えたが、大体腹は決まったよ。身の回りをきちんと整理して、周囲の人に迷惑をかけないように、すっきりと気持よく越していきたいと思っているよ」
「そんなにうまくいくのかしら……」
「大丈夫だよ、万全の準備をしていくから。それより、次に生まれ変わったら、俺たちはまた会えるのかなぁ」
「さぁー、それは分からないわよ。人間界に転生できて、膨大な人の中からお互いが出会わなければならないのだから、かなり難しい気がするわね。運に任せる以外にないかも知れないわよ」
「そうか。もし出会えれば嬉しいが、そうでなくても仕方がないか……この世で出会えて、お互い楽しい想いができたんだから？」
「そうよ。縁があって違う人と結婚しても、それはそれでいいと思うわ。いろいろな人と出会って、いろいろな生き方をして、人生を大いに楽しむのは悪いことじゃないものね」
「そうかなぁ。世の中広いんだから、いろいろな生き方をしてみるのもいいことかも知れないか……」
　驚いた。私は突然、頭をガツンとやられた気がして狼狽えた。吟子の口からそういう言葉が出るなんて、迂闊にも思っていなかった。結果はともかく、来世もきっと一緒に、と言ってくれるものだと思っていたのだ。理屈から言えば、吟子の言う方が道理かも知れない。この世で、私と吟子が巡り会えたこと自体が偶然だったのだ。やはり、吟子の方が現実を冷静に見ているのか……。
　正直言えば、私たち夫婦にもいろいろなことがあった。吟子は頭がいいし気立ても良かった。器量も悪くなく料理もうまかった。殊に、外部の人との接し方は抜群だった。他人で吟子を悪く言う人は皆無だった。そういう意味では、私にとってはよくできた女房だった。
　だが一方で、吟子は超真面目で、三六五日×二十四時間、一分の緩みもない。どんな話題でも、正しいか正しくないかの二つだけだ。冗談は言ったことがないし、こちらが言っても通じない。強情で頑固な面もあった。そのためによく衝突し、ときには激しく遣り合うこともあった。可愛らしさはな

かったが、女性としては素晴らしく、嫌いではなかった。
その吟子からいま、別の男と結婚して違う生き方をするのも、悪くないという言葉が出た。この世で夫婦として生きてきた私にとっては、複雑な心境だ。未練がましいが、そう簡単に割り切れるものではない。心の奥には嫉妬の火が燃える。相当に強い炎だ。
だが冷静に考えれば、これもすべての人が老い、やがては死んでいくのと同様に、次の世で吟子と会えるかどうかなんてことを、今いくら考えてみても仕方のないことだ。これも丸ごと飲み込んで、すべてを任せて納得する以外にないのだ。
そう強く思い切れば、いくらか気分が軽くなるような気がする。完全に吹っ切れるわけではないが、この世で吟子と暮らした楽しい思い出は胸の奥に仕舞って、来世のことはすべて天に任せることだ。
天に任すといえば、吟子のことばかりではない。この世で起きたすべての出来事、出会ったすべての人たち、いうなればこの世での私の人生すべてを、真っ白にリセットすることだ。それが次の世へと移る前提条件となると思う。
「分かったよ、吟子。君の言うとおりかも知れないね。とにかくこの世のことは全部精算して、真っ更な気持で行くさ。また始まるであろう次の人生には、新しい希望を抱いて、しっかりと山を越えてゆくよ」
「大変でしょうが、頑張って下さい……」
「うん、分かったよ。そっちでまた会えることを楽しみにしてるよ。じゃあ、今日はこの辺で終りにするか。さようなら吟子……」
「さようなら、あなた……」

「耀いて未練なきよに散るもみじ
吾もゆきたや浄土への旅」

（終り）
（中区）

【入　選】

地六峠

水野　昭

私は峠という言葉が好きだ。私はあちらこちらの峠道を歩いてみて感じたことがある。峠とは人里と人里を結ぶかなめであって、単なる通過点とはちがうのだということを。

峠は帰郷の途にある人にとっては、いよいよふる里だという期待のポイントとなる。それが長旅ならば、家族や知りあいの顔を頭に描いて、留守のあいだ、みんな元気だったろうかと、心の奥に絞り込まれるような軽い不安感や再会への喜びを抱いたであろう。またある人にとって、故郷から別の地への旅立ちのための通過地点である。慣れ親しんだ地を後にして、未知の国へと旅立つ期待と、残してきたものへの心惹かれる糸をたち切る最後の場所となったではないのだろうか。人それぞれであるが、私にとってどんな場所となるのか、峠に立つといつも考えてしまう。だから私は峠が好きで、高い山に登らなくても、旧街道の峠歩きは十分に満足感を得ることができるのだ。

年が明けて、私にとっては初めてのルートである信州の地六峠への計画を立てた。地六峠という名前に惹かれたからだ。海抜で千二百メートルもあるというが、登山というよりも街道歩きだから、周辺の残雪で白くなった山の景色を楽しむ余裕もあるかもしれない、と私は期待した。

暦の上で春となったがどれほどの雪が残っているかわからない。私は小型のアイゼンも用意した。ステンレス製で重さもあまり気にならないものだ。自分の登山靴に合わせて、近所の鍛冶屋のおやじさんが作ってくれた手製のものだった。

私の住む町にはいくつもの染色工場や自動車の下請け工場がある。そこからの細かい金属加工の作業や、工作機械の修理をやっている小出金属工場があった。

働いているのは社長と言うよりも、工場のおやじと言ったほうが親しみを持つことのできる七十過ぎになる主人で、従業員はいなくていつも黙々と一人で仕事をこなしていた。

近所の人たちは看板にあるように「小出金属」とは言わないで、むかしから「鍛冶屋」と呼んでいた。

その鍛冶屋の主人に、私は市販のアイゼンでは雪のある急斜面ですぐに靴から外れてしまって困る、という話をしたことがあった。一週間ほどしてから鍛冶屋の主人が、その登山靴とアイゼンを見せてほしいと言った。なにかいい方法でもあるのかと、私は意味もわからず靴とアイゼンを預けた。

三日目に社長から電話があって、アイゼンと靴を取りにくるように言ってきた。

「ほら、靴に合わせて絶対に外れないようになっているから」

と白銀色に輝く手製のアイゼンをくれた。ステンレス製で、先端部分とかかとの部分にひっかかりがあり、私の登山靴の底にぴたりとはまるようになっていた。

「これならベルトできっちりと締めつけて使えば、どんな急斜面で孝男君の全体重がかかっても、ずれたり外れたりしないだろう。ベルトも一本で巻きつけるようになっているから」

「ありがとうございます。手数料というか工賃はどれだけ払えばいいですか」

無精髭の中の大きな眼が笑っていた。普段は無口で、仕事に熱中しているときはまるでダルマ法師のような顔の男だった。

「いいよ、いいよ。孝男君のお父さんには季節になると甘夏みかんとか次郎柿をもらっている。いつもなんのお礼もできなくて。その代わりといってはなんだが、少し見た目はごつい感じがするが、このアイゼンなら役に立つと思うから」

私の革製の登山靴に、市販にはない手作りのよさが加わって、雪山での安心感がこれで一気に増したと思った。

正月を過ぎて早々の寒波が来た日に、社長は風邪をこじらせ肺炎にかかって、あっけなく亡くなった。私は葬式のとき、アイゼンを持参して「冬の山ではいつでも社長の顔を思い出して使わせてもらいます」と言って手を合わせた。それから私は意味もわからずにいぶかしがる親類や縁者たちの前で、ベルトに通したアイゼンを目の高さに持ちあげた。私はアイゼンを左右に振った。アイゼンは風鈴のように澄んだ音を葬儀場に響かせた。

地六峠は長野県にあるが、家を早めに出れば、日帰りのコースだった。作ってもらったばかりのアイゼンを使ってみたかった。三月も中ほどになっていた。この季節なら信州の山にはまだ雪が残っている。アイゼンの尖った歯が私の体重によって、堅くなった雪の表面に食いこむときの音が、耳の奥に届き、心が躍った。

私は地六峠についてガイドブックをくり返し読み、二万五千分の一の地図と方位磁石でなんども調べた。登山口までの乗り物についても確認して、朝の出発時刻を六時とした。昼ころには峠に着き、日暮れまでには反対側にある池本という町に到着しているという計画だった。

私はローカル線を降りて、エンジンをかけたまま停まっていた駅前のバスに乗った。私は最後部の席に座った。少しばかり型の古くなった朝のバスには、中年の夫婦とサラリーマンらしき男が五人いた。同じ列車で降りた人たちだった。サラリーマンは商店や小さな会社のある町の中心でバスから降りた。中年の夫婦は町を外れてから、漢人川の橋の手前の三叉路で降りると、すぐそばの細いわき道へと歩き出した。

これでは赤字だろうなあ、と思わず私は余分な心配をしてしまった。やがて人家がなくなり、うねりのある畑の中をバスは走った。乗客は私一人となった。私はザックを持って一

番前で、運転手のすぐ横にある席へと移動した。
「どちらからこられたんですか？　ハイキングですか？」と私を一瞥してから運転手は前方を向いた。運転手は若い男で私より少し年齢が上かと思われた。
「浜松から来ました。地六峠って知っていますか？」
私はガイドブックからの知識だけなので、少しばかり不安だった。彼は前方に目を向けたまましばらく首を傾げていた。
「すみません。私はすぐ隣町の影山の生まれで、地元の人間なんですが、その峠の名前は聞いたことがあるというだけで一度も行ったことはないし、どんな所なのか……終点の小笠原で聞けばなにかわかると思いますが」
彼は首をすくめるようにして答えた。
自動車道はずっと登りで、山襞をぬうようにして、バスは高度を上げていく。植樹林や雑木林に覆われた山々がどこまでも続いていた。一度小さな集落でバスは時間調整ということで八分間の停車をした。集落をいくつか抜け、谷が開けて明るい斜面に出た。小笠原地区だった。所々に畑があり街道に沿って家が並んでいた。あちらこちらの、日陰に白く見えているのは雪だった。あっ、雪だと思わず私は声を出した。
「ここが終点です。ご乗車ありがとうございました。お忘れ物のないようお降り下さい」
私は「どうもありがとうございました」と言ってバスを降りた。運転手が「気をつけて行ってらっしゃい。奥にはまだかなり雪があるようですから」と言った。笑い顔は人なつっこい童顔で、もしかしたら私よりも若いのかもしれないと思った。
暖房のきいていた車内から出たとたんに、息が白くなるのがわかった。太陽は出ていても、頬に当たる空気がとても冷たかった。村落の日光の当たらないところには、かきよせた雪の塊がまだ残っていた。車の通らない横道には人の足跡がくっきりと残るほど一面に白く積もっていた。
「ここでこれだけの雪があれば、峠はどうなんだろうか」と、思わず声に出して私は言った。雪国の人にとって、半分は迷惑だが半分は生活の一部になっている雪だと聞いたことがある。私の住む浜松では積雪はとても珍しい。十年とか二十年の間隔で町が白くなることがある。子供たちは大喜びをするが、市内の交通が完全に麻痺してしまう。だから雪に対しては複雑な気持ちにもなる。
バスは公民館の前で私を降ろすと、そのまま北のほうへ向かって商店の角から見えなくなった。時間は十時ちょうどだった。
田舎の商店街といった感じの家並みが少しばかり続いていた。むかしは商店をやっていたらしい構えだが、戸が閉じられた状態の家が三軒並んでいる。その横に公衆電話の置かれた雑貨店があった。雑貨店の入り口の、ガラス戸越しに私は中を見た。店の中は暗いけれど営業をしているようで、酒や醤油、洗剤からヘアークリーム、軒先には庭ボウキ、バケツ、鍬からスコップ類までがすきまなく並べられていた。

私は店の人から地六峠のことでなにか知っているか聞くために店に入った。石油ストーブの匂いがしていた。店と奥の部屋との境にあるガラス戸は閉じられていた。ガラス戸の向こうでテレビを見ている人の姿があった。

「おはようございます」

私は人影に向かって声をかけた。

「はい」と返事があり二十歳代の若い女が立ち上がって店に出てきた。女はサンダルを履いてから店の照明のスイッチを入れた。

「すみませんが教えてください。地六峠への入り口はどこになりますか」

「峠の名前は聞くけれどあたしは豊川から嫁いできたものだから、行ったことがなくて、よくわからないのですけど。この先にバスの反転地があって、そこに峠への案内板があったような気がします。旧街道がここの店の前から公民館の前を通っているから、たぶんこのまままっすぐ歩いていけば峠に行くことができると思います。むかしは塩を馬の背に乗せ峠を越えて運んだということで、賑わっていたようだと母に聞いたことがあります。最近は地元の人でも登ることはないようですけど。今でも通れるかどうかわからないですねえ」

店の奥で赤ん坊の泣き声がした。女はそちらが気になるのか振りかえった。これ以上聞いても仕方がないので、私はお礼を言って店を出た。私は少し歩いてからキャラメルかチョコレートの一箱くらい買えばよかったかなと思った。

バスに乗ってきた道が、そのまま山に向かって続いていた。私は見当をつけて歩きはじめた。もう一度だれかに聞きたいと思っても人の姿はどこにもなかった。家々の戸はしっかりと閉じられていた。酒屋と飲み屋があったが、客はいないし、夜にでもならなければ店は開くようすもなかった。

数軒の家並みが途絶えると広場があり「無断駐車はお断り・バスの反転地」と看板があった。私の乗ってきたバスがちょうど戻るために発車したところだった。さきほどの若い運転手が私に気がついて、こちらに笑顔を向けぺこりと頭を下げた。私もちょっと手を振って合図をした。

広場を横切ると軽自動車なら通れるくらいの道が、山の奥に向かっていた。コールタールの塗られた物置小屋が広場の角にあり、小屋の壁に手書きの「地六峠へ」という板がぶら下がっていた。強い風が吹けば飛んでしまいそうな錆びた針金でしばってあった。この地形と道路の状況はガイドブックの中に書かれていることとほぼ同じだった。古びた案内板を見ていると、地六峠はすでに廃道かもしれない危うさを象徴しているようだった。

雑貨店の若い奥さんが言っていた看板というのはこれだな、と思った。でもあの運転手は知らないといっていた。毎日のように彼はここまでバスを運転してきている。地六峠と書かれた看板が、バスの反転する場所のすぐ目の前にあっても、気がつかないのだ。それとも関心がないので、彼にとっては目にも入らないのだ。もしかしたらほとんど人の行かな

い場所へ登ろうとする私のほうが珍しい存在なのかもしれない。

私は腕時計を見て今の時刻を十時十五分とメモした。ガイドブックでは峠まで一時間半とある。私は頭の中で計算して昼飯は峠で取るつもりで歩きはじめた。

登りが急になると、車の道は行き止まりとなった。本格的な登山道が始まった。山の中の所々に雪があったが、アイゼンを使うほどのことはなかった。道はしっかりしていて急な滑りやすいところには間伐材で階段状のものが作ってあった。今でも峠を通行する人たちがいるのだろうか。私はなんとなく安心をした。

斜面の位置によっては吹き寄せられた雪の塊があった。雪の上には所々人に踏まれた跡が残っていた。まだ新しい足跡のようだが登山者なのだろうか。山仕事に入った地元の人かもしれない。もしも登山者ならば、ここを選んだ理由を聞いてみたいものだと思った。

風もなく空気は冷たいが汗も出ない。歩くのには都合のよい条件で、予定よりも早く峠に行くことができそうだった。

九十九折の坂道が続き、高度はぐんぐんと増していくが、どれだけ歩いても植林された杉林の中だった。眺めが悪く景色を楽しむところはほとんどなかった。ゆっくりと歩いても息が切れる。私は薄暗い林の中で、岩がむき出しの平坦な場所を見つけてひと休みすることにした。私は背中のザックを下ろし、中からポットを取りだした。ポットの蓋を取ると、コーヒーの香りを含んだ熱い湯気が顔に当たった。しんとした静けさに包まれて、私のからだも自然の中に溶けこんで、頭から足の先までの全てが山の一部となり永遠の命を与えられるような気分になった。修験者が山奥にこもって、孤独や闇への恐怖心と闘いながら、心身を鍛える意義がなんとなくわかるような気持ちにさせられた。

私はコーヒーを一口喉の奥に流しこんだ。私の吐く息が白く見えた。たとえインスタントのものであっても、腹の底が暖まり自宅では味わうことのない幸福感に包まれた。

斜面の少し上のほうで音がした。かさ、かさっと落ち葉を蹴散らし、私の背後の山の中を駆けおりてくる。あっというほんの一瞬、林の中からなにかがとび出した。足の速い生き物で、風を起こして私のすぐ横を走りぬけた。灰色をした塊は吠える声や威嚇のようすもなく、灌木の中へ、その勢いのままで跳びこんで消えた。

ここは杉林だが、植林されてすでに三十年は経過していると思われる。しかし手入れが悪いためか、丈の低い雑木が地を這い、見通しがきかない。峠に続く道だけが踏み固められている。その動く物体は登山道ではなく小さな木のそばや、草の塊の中をすり抜けて移動していた。山の中に足音だけが聞こえる。

イノシシではないだろう。三年前に海抜千メートルほどの三河の山を、一人で歩いていたときのことが頭を横切った。家ほどもある大きさの、岩の横を回り込めば頂上にあと一歩

という地点だった。「あー、もうすぐだ。がんばれっ」と私は自分で自分を元気づけようと声を出した。

そのときだった。ど、どろどろと地響きがし、足元からの振動を私はからだで感じた。岩の多い山なので、私は一瞬山の一部が崩れたのだと思った。私は音の聞こえた崖の上に立った。眼下の、背の低い雑木の中でなにかが動いていた。豚に似たきゅーきゅーという声と低いうなり声に、これはイノシシだと思った。地響きは崖崩れではなく、数頭のイノシシが一斉に崖を駆けおりたときのものだと知った。

今、聞こえる動物からの音は軽い感じで、イノシシのような重量のあるものではない。瞬間だがちらりと長い尾のようなものが見えた。薄暗い林の中で、灰色は空気と同じで、その正体をはっきりと見せることもなく荒い息遣いだけが私の耳に残った。

私はどきりとして声も出なくおどろいて身構えた。私は登山用のステッキやピッケルなど持っていない。手ごろな武器になりそうな木の枝も見つからない。私はコーヒーの入ったカップを岩の上に置いた。ザックを引き寄せて、いざとなったらこれを盾にするつもりで立ち上がった。そのひょうしにザックの紐が引っかかって、飲みかけのコーヒーのカップが転がり、中身がこぼれた。

灌木と岩の向こうから一匹のポインター犬が飛びだして、小走りに私のそばに寄ってきた。犬は私の近くでぴたりと動きを止めた。全体が薄い灰色をして、背中と尾の先に、黒い斑点がある。栄養がいいものを食べているのかかなり大きな体型だ。犬はそのまま動かないで私の顔をうかがっている。犬はおじぎをするように頭を下げて尾を振った。それでも少し離れた位置にいる。初対面の人間がはたして安全かどうか確認しているのだ。

「なあんだ、犬か」と私はほっとして胸に抱えていたザックを下ろした。

私は犬が好きなので、ポインター犬の、人に対する様子から噛まれるようなことはないと判断した。過去にも私の知っているポインター犬で、人を噛むという癖のあるものはいなかった。人間と遊んだり撫でてもらうのが大好きな犬ばかりだった。

私は口笛を吹いてちょっと身をかがめた。

「いい子だ。いい子だ。こっちへおいで。さあおいで。猟にでも来てご主人様からはぐれてしまったのかな」

呼びかけると、犬は頭を下げたまま、ゆっくりと私の足元の匂いを確かめるようにして近づいてきた。長い尾がゆらゆらと左右に動いていた。私がそっと自分のひざの前あたりに手を出すと、犬はそろそろと寄ってきて長い首を伸ばした。私の手の匂いを嗅いでからぺろりとなめた。私は「いい子だな、いい子だ」と声をかけながらそっと犬の口元から顎の下へと手をずらした。首筋を、それから頭や背中を撫ぜた。緑色の首輪をしていた。

「名前はなんというのかな、いい子だ、ほんとうにいい子だな」

この犬の体型から判断すると、ぜい肉がなくて、走りが早いと想像できた。犬はおとなしくそのままの位置で尾を激しく動かしていた。

「おーい、ゴローどこへ行った」

すぐそばの藪のかげから人の声がした。私は顔を上げてそちらを見た。大きな岩の向こうから痩せた体型の男が現れた。六十を過ぎたと思われる男は股引のように体にぴたりとついた黒いズボンをはき、ポケットがたくさんついたオレンジ色のベストを身につけていた。帽子もオレンジ色で、日光のあたらない山の中でもはっきりと見えた。男は狩猟の人かと思ったが、銃はもっていなかった。杖の代わりなのか細い木の棒を右手に持って、腰には革のケースに入れたナタをぶら下げていた。ほとんどなにも入っていないような、ぺちゃんこ状態のザックを背にしていた。

「こんにちは」

私は男に挨拶をした。こんな山の中で人には会うこともないだろうと私は思っていた。男は登山者ではなく、地元の山仕事かそのたぐいの人だろうと判断した。

「ああ、こんにちは。大丈夫だったかね」

枯れたような細い声で男は答えた。男の言う大丈夫かね、というのは犬のことを聞いたのだとすぐにわかった。犬が危害でも加えなかったのか、ということだろう。

「大丈夫です。僕は犬が好きだから。すばしっこいわんちゃんですね」

「このゴローはいいが、しし犬には気をつけないとな。もし追われたら木にでも登るしかないからなあ。あれは飼い主以外のいうことはまったくきかないからな」

ゴローといわれたポインター犬は、主人の顔をちらりと見てから、私のそばを離れて走りだした。斜面を駆けあがり男の周囲を一回りすると、ふたたび近くの灌木の中に跳びこんで姿を消した。ほんのひとときだったが、離れていた主人を確認し、そして再会し喜んでいる雰囲気だった。

「珍しいことだなあ、こんな山へ登山の人が来るなんて、地六峠にでも行くのかね」

そばで見る男の顔は日に焼けて色が黒く、しばらく手入れがしてないのかあごのあたりはごま塩の無精ひげのままだった。

「はい、地六峠へはこの道でいいですか」

念のために私は聞いた。

「ああ、あと十五分くらいだよ。眺めもなにもないが、並んだ地蔵さんが待っている。むかしは六体あった。風化してまともに仏さんのかっこうをしているのは今では三体だけだが」

男は私と話をするのを機会に、いっぷくといった感じでそのまま少し上の斜面で立っていた。

「今年は雪が少ない。いつもならこの時期にまだまだ雪が多くて、慣れない人間では越せない峠だよ。熊が出ることもあるからな。なにか音の出るものがあったら鳴らしながら行っ

たほうがいいな。ま、めったなことはないが」
「え、熊ですか」
熊と聞いて驚いた。人の気配が伝われば、熊のほうから逃げるといわれても、たった一人では心細い。私はザックの中からアイゼンを出した。それからズボンのベルトにアイゼンのベルトで結わえた。ベルトを動かすとカチャリ、カチャリと金属音が響く。男は私のやることをじっと見ていた。
「兄さん、うまいこと考えたなあ。うん、それを歩きながら時々鳴らすといい。熊は耳がいいから人間が来たことを察知して、むこうから去っていくからな」
男はそれから林の中に消えた犬のほうに向かって、ゴロー行くぞ、と叫んだ。

男と別れてからしばらく歩くと、雪で一面白くなった場所に出た。あの男と犬の足跡がくっきりと刻まれていた。門のように並んだ大きな岩と岩のあいだを抜けると、雑木林の中に峠はあった。三坪ほどの平らな場所になっていて、男が言ったように地蔵が三体並んでいた。地蔵の横にはひとかかえほどの岩が転がっていた。形から判断すると、長い年月に風化して砕けた石仏の残骸だった。むかしは地蔵が六体並んでいたということなのだろう。長い時間の経過を感じる場所だった。
苔むした状態の三地蔵が、真っ赤な帽子と前掛けをしていた。三体とも赤い帽子の大きさがふぞろいで、真ん中の地蔵はむりやりかぶせてあって、強い風が吹けば飛んでしまいそうだった。前掛けもそれぞれの左右が不ぞろいで、私はとりつけた位置をなおそうと試みた。右を合わせると左が引っ張られて、いびつになる。どうやら布の裁ち方や紐の位置が悪いようだった。
私は両手を合わせると、今日の無事を祈った。ふだんは神や仏に祈るようなことはほとんどしていない。しんと静まった山の中の並んだ地蔵が、自然と私に祈りの心を起こさせるようだった。私は目を閉じて、手を合わせた。頭が自然と前に垂れてくる。心の中をからっぽにした。静寂の中へとからだの中のあらゆるものが融けだしていくのは、意識とは別のものだった。
いったい人はなにを祈ればいいのか。以前そういえば言われたことがあった。神仏は人が手を合わせるだけで、すべてお見通しである。あれやこれや口に出して頼まなくてもいいのだと。頼むというよりも、今の自分がここにこうしているということへ、お礼のつもりで、ありがとうございますというのが正しいのだとも言っていた。ほっとした安らぎの心が、祈りをする人間にいちばん必要なのだよというようなことだった。
私は地蔵の前でザックを降ろした。時計を見て十二時五分前とメモした。ビニールの風呂敷を、雪の積もった岩の上に広げて腰を降ろした。すっかり冷たくなっている握り飯をとり出して昼飯にした。冬枯れの木の枝の向こうに、アルプス

の銀嶺が輝いていた。

「あ、もしかしたらこの地蔵さんの赤い帽子や前掛けは、あの犬を連れていた男の人がつけたのだ」

私は思わず独り言をいった。赤い布は山の中に今まであったとすると、これほどきれいな状態であるはずがないのだ。赤い布のどこにも汚れがない。手に触れてよく見れば、布の真ん中辺りには折り目が残っている。ほかの岩は雪をかぶっているのに、三体の地蔵は雪がきれいに払い落としてある。赤い帽子と前掛けは、私が峠にやって来るほんの少し前につけたばかりだとしか思えなかった。

犬の後を追うように歩きだした男が足を止めてふり返った。

「兄さんは結婚しているかね」

男は私に聞いた。突然この男はなにを言いだすやら、と私は思った。犬はすでに木々のあいだに姿を消してしまって、枯葉を踏みつけている足音だけが聞こえていた。

「いいえ、僕はまだ独り身ですが」

私は答えた。男はふたたびゆっくりと歩きながら言った。

「この上の峠の地蔵さんはな、霊験あらたかでな、むかしから願い事はなんでも叶えてもらえるありがたいお地蔵さんだで。ま、今じゃあほとんど来る人もなくなったが」

「あ、そうですか」

「なにか困ったことがあればお願いしていくといい」

私は軽く聞き流すようにしてその場を離れた。

「ゴローそんなに離れるな。待っていろ」

下の林の中で男の叫ぶ声がした。しばらくしてから遠く犬の鳴き声が数回あったが、再びしんとしたもとの静けさになった。

周囲の岩や高い木々に囲まれ、太陽の光もあたらないので雑草はあまり生えていない。地六峠を通るのはほんのわずかな登山者や地元の人くらいなものだろう。

ポインター犬を連れていたあの男は近くの村に住んでいるのだ。身内としては息子かあるいは娘がいるのだが、遠く離れた土地にいるのだ。男の年齢から考えても孫がいるだろう。そんな身内のだれかの具合が悪くなり心配なのだが、遠く離れた地に暮らしていて、なかなか会いに行くことができない。だからせめても、自宅から歩いて行くことのできる地蔵に、お願いをするために地六峠までやってきた。むかしからの習慣として地蔵に願をかけるため、前掛けや帽子を作ってきた。いかにも不器用な男の手縫いの作品なのだ。奥さんがいれば、もっとうまく作っていただろう。だからあの男の同居家族は犬だけだと私は想像した。

無愛想な男だった。いちども笑顔を見せなかった。たった五分くらいの出会いでは本当のことはわからないのだが、いつもならもっと笑顔で近所の人たちと接している人のいい男

かも知れない。心配の種をかかえているので、初対面の私に対して、そんな余裕がなかったのだ。わざわざ足をとめて、私に地六峠の地蔵さんのことを教えてくれたのは、あの男には親切心があり、だれでもいいから心配の心を打ち明けたいという苦しみの表れだったのだろう。

峠を越してからの下り道で、私はアイゼンをつけた。北側の斜面なので雪は深く、足はくるぶしまで潜りこんだ。少しばかりの恐怖心と興奮で、私は雪に触れる喜びに心を躍らせた。一時間ほどしてふいに林道に出た。登山道が林道でぶっつりと切れていて、その先がわからない。私の地図にない林道だった。道幅はトラックでも走れるほどあり地図になくても、たぶん電車の駅のある池本の町に出ることができると私は判断した。

雪の積もった林道を歩いていると、木々のあいだに民家の屋根が見えてきた。民家の近くになって雪が少なくなり、私はアイゼンを外した。やれやれだ、と安堵の気持ちが私の中に広がった。酒屋の前がバス停で、運よくものの一分と待たないでバスがやってきた。

池本の町に入ると商店街があり、狭い道路をバスは走った。バスの窓から見ると、太陽が西の山の向こうに隠れようとしていた。人の顔がようやく区別できる明るさだった。

電車の架線が町並みのすぐ上の、小高くなったところを通っていた。商店街に沿って坂を上がりつめればそのまま電車の駅に到着ということだろう。膝に手で触れると筋肉が疲労を訴えていた。

バスが商店街にある時計屋の前を通ったとき、店の奥にぶら下がった柱時計に気がついた。私はボンボン時計と呼んでいるが、文字盤の外側が八角形で、時計の下半分の小窓からは振り子が揺れているのがわかる。単なる時計屋としての飾り物ではなくて、私の腕時計の時刻とほぼ合っていた。

外見は古いボンボン時計でも、最近は古きよき時代の雰囲気だけ味わうための電池式もある。ウィンド越しではなく、時計のすぐそばで見ないと、どのような製品なのかわからないのだ。商店街の真ん中で私はバスを降りた。駅はもうすぐそこにあって、ここからも屋根が見えている。次がバス終点の池本駅前だった。

私がなんとなく古時計に興味を持つようになったのは、我が家で新たに時計を買う話が出たときである。私の両親が、結婚の祝いにと親戚で買ってもらったねじ巻き式の柱時計を、洋間を改築した機会に電池式にしようということになった。両親の時計は二十年以上前の物ということになる。考えてみれば家の中に時計はいくつあってもいいのだ。ふと今、何時だろうかと知りたいのは、時計のある部屋とは限らない。わざわざ別の部屋にまで時刻を知るために行かなければならないことだってありうるのだ。贅沢な話だが、自宅のそれぞれの部屋に時計があってもいいのではないか、と私は思った。

私は両親の時計をもらって、自分の部屋の壁にとりつけた。

私の部屋には目覚まし時計があったが、時計の文字盤は大きいほうが見やすいものだ。古い時計の汚れた文字盤やカチカチいう音、どれだけ調節してもいつのまにか時間がずれてしまうことなど、機械だというのに人間的な心を感じるようになっていた。古くなれば価値がなくなるという風潮があるが、私には簡単にそういう気にはなれなかった。

静岡へ宿泊をともなった出張中、夕食後に夜の街を歩いていて、ボンボン時計を壁にいくつも並べてある店を見つけた。店の主人に聞くと、郊外の民家から手に入れて、修理点検してあるということだった。値段は私の財布の中身と相談してみたが、宿泊代や昼食代を差し引くと、帰りの電車賃がなくなりそうだった。

私はしばらく店の中でクラシックな柱時計をながめていた。振り子の動きとかなり大きく時を刻む音が、心の中でほっとする気持ちを次第に大きくしてきた。余裕があれば一台くらいほしい、と思った。両親にもらった時計よりも、はるかに古いものばかりで、よく磨きこまれた材料の木部や、中には文字盤周辺に凝った彫り物がしてあったりで、時刻を知るためのものというよりも、動く芸術品といってもいいものばかりだった。しかし出張中のために余分な金を用意してないので、次の機会にそのつもりで来ようと思った。

半年ほどして静岡へ日帰りの出張があったので、今度こそ思いきって買ってこようと、小遣いを余分に持って家を出た。一日の仕事が終わってから私は記憶の中の古時計の店へ行った。心当たりの場所をあちらこちらと歩いたが、店は見つからなかった。時計屋といっても扱っていたのは古時計だけで、私のようにいいなあと思っても、値段のこともあり簡単に買うことができない品物だ。だから商売として成り立たないのか、廃業してしまったようだった。

私はあのとき無理をしても買っておけばよかったなあ、としばらく両親の時計を見るたびに悔やんでいた。

池本の時計屋では売り物なのかそれとも修理のために預かっているのかがわからない。とりあえず私は店のガラス戸を開けた。私が「こんばんは」というとしばらくして店の主人が顔を出した。

「はいはい、なんでしょうか」

丸い顔の主人の、同じように丸い眼鏡の奥で目が笑っていた。

「そこのボンボン時計はお客さんからの預かり物ですか、それとも売り物ですか」

「これでも売り物ですよ。中古品ですがちゃんと手入れしてあります。ご希望でしたら修理と点検の費用も含めて九千円でお譲りします」

九千円という金額を主人は言ってから私の顔の表情を見ていた。三千円出せば新品が手に入るというのに、古くても九千円ということに主人としても多少は抵抗があったのかもしれない。骨董品としての価値を考えると、都会では安いとも言えるだろう。

山登りということで、一万円までなら帰りの電車賃はなんとかなるが、ここまでの金の遣い道を考えていなかったのでぎりぎりの線だった。

「少しまけてもらえませんか」

私はおそるおそる言った。

「……そうですね、五百円ならおまけできますが」

主人はひと呼吸してから答えた。この機会を逃がしたらいつまた手に入るかわからないので私は買う決心をした。

「ねじを巻くときに、重くなってきたら、あまり力まかせにやらないでください。ゼンマイを傷めてしまいますから」

主人は振り子を取りはずして、新聞紙に包むと時計の中にそっとしまった。時計の本体も新聞紙に包んでガムテープでしっかりと止めてくれた。

「どうして持っていきますか?抱えていきますかね」

「僕のザックに入れていきます。余分なものを出せば入るでしょうから」

私はザックからカメラとポットを取り出すとなんとか入る大きさだった。小型のカメラはポケットに入れて、ポットは手で持っていくことにした。雨具も一度取りだし、時計を入れてから、あらためてその横の隙間に押しこんだ。アイゼンはザックのベルトに縛りつけた。ザックの頭が盛りあがって、包みの新聞が少しばかりとび出していた。

私は金を払って駅に向かった。車は商店の並んだ坂を上り、少し先でUターンして、駅前の広場に出るようになっている。歩行者は坂の途中の階段から直接に駅前へと出ることができる。階段を上がるとき、私は太ももの痛みに思わず顔をしかめてしまった。

時刻表を見ると八分ほど待てば急行列車がやって来る。浜松までの切符代と、乗換駅で立ち食いそばなら買えるくらいの金は残っている。駅は商店街を見下ろすような小高い場所にある。私は駅前広場のベンチに座って、少しばかり残っていたポットの中の水を飲んだ。

小さなポットなので、自宅から持ってきたコーヒーは途中でなくなってしまった。ポットには山の中の湧き水を詰めてあった。その水も残り少なくて、ポットの底をぐいと持ち上げて飲もうとしたとき、私は商店街の後ろにあるこんもりした森に気がついた。太陽は山の稜線の向こうに消えたけれど、明るさはほんのりと残っていた。辺りに夕闇が少しずつ広がりはじめていた。

森の一角に大きな鐘楼と寺の本堂の屋根が見える。私はどんな寺なのか、ふと寄ってみたくなった。

駅員が改札口で「上りの急行列車が近づいているので、お乗りの方はホームに入ってください。急行券は乗車券とは別にお求め下さい」と言った。お寺に行けば急行に乗ることができない。この次の上り列車は三十分後の普通列車になる。あとはのんびりと家に帰るだけということで、それほどに急ぐこともないからな、という気持ちが私にはあった。私は急

行列車に乗ることよりも、ザックをかついで寺に行くことにした。

商店街の坂道を少し下って、先ほどの時計屋の前も通った。食堂と農機具店のあいだに「天鈴寺入り口」と書かれた看板があった。三十段ほどの石の階段を上ると、古くて大きな寺門がありすぐ横に鐘楼が建っていた。

薄暗い中に、かすかに白いもやが漂っていた。私の背後で列車の汽笛が山々にこだました。あれが急行列車かもしれない。鋭くなにもかも蹴散らしながら、悲鳴のように響いていた。

鐘楼のそばに人がいた。私のほうを見ていた。寺の和尚かもしれない。

「こんばんは」

こんな暗くなった時間にやってきた私に対して、男はおそらくいぶかしい気持ちをもっているだろうからと、つとめて明るく大きな声でいった。

「こんばんは」

安心したように薄暗がりの中で男の笑顔が見えた。小柄でずんぐりとして、肩幅のある男の顔は、白くて平面的だった。

「駅からこちらの鐘楼が見えたものだから、ちょっと見物させてください」

「そうですか。どうぞ、どうぞ。天鈴寺の創建は室町時代ですが、一度火事で丸焼けになり、その後に本堂や鐘楼は江戸時代になって建てられました。そこの寺門は江戸時代末期になって、当地の領主だった遠山家から移築したものです。鐘楼にある彫刻は自慢のものですよ。五十年前に重要文化財に指定されました。もうこの明るさではよく見えないでしょうな。せめて鐘の音を聞いてください。晩の六時にいつも鳴らす鐘です」

男は鐘楼の階段を上がると鐘を突きはじめた。黒い影絵になった鐘楼と男を私はそばにたたずんでながめていた。空気がいっそう冷たくなってきた。私は首に巻いたタオルをきつく締めなおした。男が大きく勢いをつけて鐘を打つ。空気がかすかに振動している。軽さと重みと、灰色と白と黒と青色の混ぜたものが、私の体を包みこむのを感じた。私はごく自然に頭を垂れて鐘楼に向けて手を合わせていた。

私はしばらく鐘の音を聞いてから男に一礼して寺の階段を降り、駅に向かった。

鐘はいくつ鳴らすのかわからないが、駅に着いてもまだそのひびきは山々にこだまし静かに消えていった。商店街には街灯が灯っていたが、プラスティック製の街灯の飾りは色もあせて、中には故障したのか点灯していないものもあった。

私が駅前のベンチでぼんやりと薄れて行く西の空を見ていたとき、駅前広場に一台の軽自動車が入ってきた。車から若い女が降りると、小走りで待合室に駆けていった。頭の後ろでひとつにまとめた髪が揺れていた。待合室には次の列車を待つ乗客が四、五人いた。女は乗客のあいだを走りぬけて、駅員にもなにか話しかけるとホームへと出ていった。なにを

慌てているのか、駅にいる人たちはだれもが彼女の動きを注目しているようだった。

女はプラットホームからすぐ戻ってきた。だれかに忘れ物でも届けたのかと思った。女は先ほどの駅員とひとこと言葉を交わして、待合室から出てきた。女はきょろきょろと辺りを見回していたが、駅前のベンチにいた私に向かって、小走りに駆け寄ってきた。女はベンチに置いた私のザックを一瞥してから、おずおずと私に言った。

「あのすみません。このザックはそちらさんの物ですね」

どこかで会ったことがあるだろうかと一瞬私は思った。こんな場所で知らない女の人から声をかけられたことにとまどいを感じた。頭上の水銀灯の灯りの下で、女の目は真剣な光に満ちていた。

「はい、そうですが」

私は答えた。女は三十歳くらいだろうか。私よりも少し年齢が上だと思われた。セーターの上に明るい水色のダウンを着ていた。

「あの、突然変なこというようですけど、時計はあたしが時計屋さんに預けたものなんです。以前はあたしの部屋にあったんです。実家の祖母からあたしの結婚の記念に譲ってもらったものです。そうなんです。あんなに古くても、あたしの結婚記念にもらった時計なんです」

この女はいったいなにを話しだすのか、私は言葉が出なくてただ黙って聞いていた。

「どうしてこんな古時計が結婚の記念品だなんて、おかしいと思うでしょうね。実家ではその柱時計のねじを巻くことが、子供のときからのあたしの役目になっていました」

女は私が質問するいとまも与えずにしゃべり続けた。おそらくそのときの私は相当に怪訝な表情をしていたと思う。

「祖母と祖父が、はるかむかしに自分たちの結婚記念にということで、飯田市の時計屋さんに行って、二人で買ったものなんです。それからずっと何十年も使ってすっかり古くなってしまいました。でも実家では宝のようなものでした。あたしが結婚するときになったら、祖母からなにか記念の品を買ってあげるといわれて、新しく買うのではなくて二人の大切な柱時計がほしいといって譲ってもらいました。でも結婚した主人の家でそんな古いものを、と言って不評でした。無理もありませんね。嫁入り道具のひとつとして、古時計だなんて。新婚の嫁が持っていくようなものではなかったのかもしれませんから」

女は一息ついた。私は女の鼻筋の通った顔に、興奮のためか赤味が差してきて美しいと思って見ていた。

「実家の祖父が亡くなり、二年前には祖母が亡くなりました。主人から、これでお前の実家に気兼ねすることもないから処分してしまうようにって、あたしは言われました。そのころはねじをいっぱいに巻いても、時々時計が止まったりして調子が悪くなってきていました。修理にお金をかけることないだろうって、主人ばかりでなく主人の親にも言われていまし

た。でもあたしには捨てることなんてとてもできません。時計屋さんで電池式の時計を買うときに話をして、修理してから店に置いてもらいました」

風はなく、夜気の冷たさに女の人の白い息が見えた。

「時計屋さんには、もしもこんなに古くても買ってくれる人がいたら、あたしに連絡してくれるように頼んでおきました。その人にあたしの時計への強い思いいれをどうしてもお話ししたいからって。時計は店に預けてかれこれ一年半くらいになります。時計屋さんは売ってしばらくしてからあたしのことを思い出して、あわてて電話をしてきました。でも時計屋さんが言うのには、買った人は地元の人でなく旅行者のようだし、ちょうど今、急行が通ったから、もう駅にはいないかもしれないだろうって」

女の瞳は大きくて、そばにある街灯が映ってきらきらと輝いていた。

「そうですか。僕は急行に乗ろうかと思ったんだけど、たまたまここでお寺が見えたのでちょっと寄ってみたくなったんです。まだこの時刻ならそんなに急ぐこともないだろうから、次の普通列車でもいいかなって。僕は古い寺院を見るのが好きなものだから。だからこの古いボンボン時計も気に入ったのかもしれません。もしあのお寺が見えていなかった急行に乗っていたと思いますよ」

「あっ……」

女は言ってから大きく息を吸い、両手を口元にあてた。

「お寺というのはあすこにある天鈴寺ですよね」

女は鐘楼のある寺を指差した。太陽は沈み、灰色の空が残っていた。大きな杉や冬枯れのイチョウの木が本殿の屋根を包み込んで黒いひとつの塊となっていた。

「天鈴寺にはあたしの実家の祖母と祖父がお墓の中で眠っています。これは偶然ではないわ。そうよ、きっとこれはお墓の中の二人が呼びとめてくれたと思います。あたしのためにこうしてめぐり合わせてくれたんですよ」

女は息をすることが苦しいように、肩をふるわせていた。もしかしたら泣くのをこらえていたのかもしれない、と私は思った。

お寺の階段を上るときになって、私は足のつけ根の痛みを強く感じていた。もう高い場所へ上ることはやめようかなと一瞬思ったくらいだった。すぐに駅へと戻ればまだ急行列車に間に合うかもしれない、とも考えた。それでも大きな鐘楼や階段の上にずしりとかまえている寺門が気になったので、無理をして階段を上がったのだった。

「お願いです。とても古い時計ですけれど、これからはあたしの代わりに大切に使ってください。ゼンマイは一週間に一回は巻かなければいけません。しばらく使っていると面倒に思うかもしれません。でもこの時計のボンボンという音はとても静かで、きっと心にじんと響きます。ちょうど天鈴寺の鐘の音のような深みがあるんです」

一気に話をした女の瞳に、私の気のせいか涙が光っている

ようだった。

「僕は以前からこういった時計がほしくて心に留めていたんです。最近はあちらにもこちらにもあるという物ではないですからね。今日は思いきって買いました。そんないい話がこの時計にあるなんて……大丈夫ですよ。大切に扱います」

商店街からの階段を上がってきた男が、私たちの横を通って、急ぎ足で駅の待合室に向かった。

「ありがとうございます。お願いします」

女の声は震えていた。やはり泣き出したい気持ちをこらえているようだった。言ってから女は深々と頭を下げた。いつのまにか寺の鐘の音は聞こえなくなっていた。

「まもなく十八時二十五分発の上り普通列車が入ります」

駅員の声が聞こえた。すでに待合室の人たちはプラットホームに入っている。

「次の列車に乗るのでこれで失礼します」

私は時計で膨らんだザックを肩にかけた。

「もう二度とお目にかかることはないと思いますが、約束しますよ。大げさかもしれないが、この大切な時計は僕が一生守っていきます。どうか安心してください」

「お願いします。よろしくお願いします」

女の顔が歪んで完全に涙声になっていた。

女は駅の待合室まで私を送ってきた。彼女は歩きながら名前を名乗った。私も名乗って浜松から来たことも話した。彼女の名はごく普通の名前で、後日忘れてしまったが、改札口に立って手を振っていた姿ははっきりと覚えている。

ボンボン時計は私の部屋で故障することもなく動いている。夏と冬では多少の時間のずれがあるので、時計屋に教えてもらったように振り子の長さを調節することにしている。ゼンマイ式の時計は、鉄や真鍮でできた単なる機械だといっても、かなり人間に近い感覚を抱いてしまう。少しくらい時刻が合わなくても、デジタルの正確さよりも私は好きだった。

「孝男がどこかの山の中の町で手に入れたみたいだけど、あんな古い時計が趣味だなんて変わっているでしょう」

同居している母が、妻に時計のことで話しているのを聞いたことがある。妻にはめんどくさいので時計を手に入れたときのいきさつは話していない。

今でもあの地六峠へは歩いて通ることができるのだろうか。最近のガイドブックを何冊か調べてみたが、どの本にも地六峠への案内は載っていない。ふもとの小笠原へ行くバス路線は数年前に廃止されてしまったようだ。熊笹や灌木に山道が塞がってしまったのだろうか。そして安全のために掲載を外されてしまったとも考えられる。

真夜中にふと、別室にあるボンボン時計の音で目が覚めることがある。そんなときは夜の闇の中で、私のすぐ横を走りぬけるポインター犬と、雪の中の、地蔵尊の真っ赤な帽子と、

瞳を涙できらきらと輝かせていた女の顔が思いうかぶ。

（中区）

小説選考評

竹腰幸夫

本年も多様なしかも多数の応募作品があった。なかでもこの遠州地域に材をとった歴史小説と、団塊の世代の定年退職後の物語（私小説）に力作が集中した。しかも、いずれも人間の生きざま、生き方を問わんとする物語が多かった。あの3・11を経験して、生きるということに真摯に向き合おうとする姿勢がにじみ出てきているのかも知れない。

『哭くな信康』　織田信長の理不尽な命により切腹せざるを得なかった徳川信康。その苦しみの全容を、史実を背景にして小説に仕立てた。信康は武将としての若い命を、精一杯まっすぐに生きてきただけだ。それがなぜこのような事態を迎えねばならないのか。疑念は募る。自分を追い詰める戦国の黒い闇。同じく死を賜った生母築山殿への気遣い、妻お徳への思いなどを織り交ぜながら懊悩する若い魂を描いた。

『風が吹く場所』　妻を失った55歳の公務員。同居する長男夫婦、孫。日頃真面目なこの父がこそこそ十時頃まで帰らない。不信を抱く長男。父に女が出来たのではないかと疑う。ある日、長男一家がドライブに出掛けると、あるサービスエリアで大型バイクを連ねたシニア世代の一団に出会う。なんとその一人が颯爽たる革ジャンパーに身を固めた父だった。その生き生きした姿を見て、疑念は氷解する。バイクどころ浜松ならではの爽やかな作品。

『浄土への旅』　妻を事故で亡くし一人暮らしの男。仏壇と称する箱に妻の写真。墓はなく遺骨は里に散骨した。毎夜酒を呑みながら写真と語る。「なんの楽しみもない……永すぎる秋……」「最期をどう迎えるか……」哲学的観想を折り込みながら孤独な老いの心境を静かに見つめる労作。

『松の夜の夢』　携帯小説風なファンタジー。しかし、「夢」とは何なのか。「夢」を語りにくい現代の状況にあって、真っすぐに「夢」に向き合っていて、読者を引き込む不思議に魅力ある作品。文章の断片にも詩的な才能のきらめきを感じさせる。

『雨』　一つの演劇を上演するために一年以上の稽古を重ねるアマチュア劇団。三日間の合宿稽古に出掛ける。そのうちの三人が、それぞれの立場人生から、それぞれの思いを独白する。三者の思いを絡み合わせ、立体的な映像を造り上げようとする意欲作。

『源氏物語と井伊万千代』　嫡男信康、正室築山御前を死へ追いやった織田信長と離反しつつある徳川家康。その動向を探らんと信長は前関白近衛前久を送り込む。二度の来訪で家康に謀反の兆しは無いことを確信する。一方、この遠州に近衛前久の祖先に連なる藤原冬嗣一門の係累のあることを知る。『源氏物語』の作者、紫式部もまたその一門である。訪れた井伊谷・龍潭寺において前久は『源氏』の深部に潜む権力闘争に折り込まれた生のはかなさ・あわれを語る。家康もそれを聞いて心打たれる。労作。

『地六峠』　信州地六峠への登山。願いが叶うという六地蔵。下山直後、念願の古時計を手に入れる。エッセイ風の作品。

その他、自分がどこまで挑戦できるか定年退職後の縦走体験を描いた『穂高』、若き日の北条早雲を描いた『伊勢新九郎盛時海を渡る』などが興味深く読まれた。

小説選後評

柳本宗春

応募の多さ、内容の充実という点で、また進歩が見られた年でした。十八作品ありますので、早速、感想に移ります。

「嵐の夜の女たち」
五〇枚に色々な女性の話を盛り込みすぎた感がある。それぞれ一人ずつの視点から語るシリーズ物にしてはどうだろうか。

「源氏物語と井伊万千代」
力作だが、物語の山が分かりにくくなってしまったのが残念。

「伊勢新九郎盛時海を渡る」
小説にするには、主人公の人間性が感じられる工夫が必要。

「生命の灯火」
後半がコンパクト過ぎる。物語を納得させる仕掛けが欲しい。

「浄土への旅」
興味深いテーマである。もう少し、男の苦悩や亡妻の言葉に衝撃を受ける辺りをじっくり書くとさらに面白くなるだろう。

「イチゴミルク・キャンディ」
ファンタジックな短編としてまとまっており、描写力もある。作者の「作風」を感じるが、違う傾向のものも読んでみたい。

「遠い手紙」
ドラマとしては良くできている。登場人物個々の個性や人間関係がやや分かりにくいのが惜しい。

「哭くな信康」
客観的な視点を保ちながら、読者を引き込む描写と構成で、歴史を生き生きと描き出している。感動した。

「命の紙切れ」
丁寧に書けているが、物語としての骨格が弱い感じがする。

「リスク」
物語のネタとしてはよくあるので、さらにひねりが必要か。

「松の夜の夢」
いわゆる「父と息子」の話で、これもよくあるネタなのだが、展開をするためのアイディアが面白く、魅力的な話になった。

「風が吹く場所」
よくできている。斬新さには欠けるが、人物の個性がきちんと表現され、構成もしっかりとした「小説」となっている。

「地六峠」
或いは実話か、と思うほど実感の伝わる小説である。最後に登場する女性の描写がやや立体感に欠けているのが惜しい。

「雨」
三人の視点がリレーされて、そこに物語が生まれている。独特の雰囲気を持った佳作だと思う。

「過去の無い人」
発想は面白いが、前半と後半がややちぐはぐな感じ。

「穂高」
台風が近づく中での穂高縦走の緊迫感と山小屋へ辿り着いた時の安堵がよく伝わる。伏線もきちんとしていて素晴らしい。

「『社長の椅子が泣いている』か?」
評論或いはドキュメントとしては良いのではないかと思うが、これだけ経緯のある話を小説とするには五〇枚では難しい。

「Q千円」
自分の文体を持った作者だと思うが、この作品はまだ小説の一歩手前という感じである。次に期待したい。

児童文学
【市民文芸賞】

みみくんの物語

むらまつたえみ

子猫のみみは、優しいおじさんと、おばさん夫婦の家に飼われて、それは毎日、しあわせでした。

おじさんとおばさんは、結婚して、もう十年にもなりますが、夫婦の間に、まだ子どもがいなかったので、みみのことを、自分たちの子ども代わりに可愛がってくれているのでした。

ところで、みみは、女のコみたいな名まえですが、実は、メスではなくて、オスの猫、男の子です。

なんで男の子なのに「みみ」だなんて、女の子みたいな名まえになったのかというと、特徴のある耳をしていたからです。

みみの耳は、片方、左側の耳だけ下に向かって、たれ下がっていました。

まだ、ほんの赤ちゃんだった、この半年前、家のすぐ近くの道路の側溝にはまって、動けなくなって泣いていたところを、仕事帰りに通りがかったおじさんに助けられて、それ以来、この家で育てられていたのですが、この時から、耳の形が他の猫たちとは変わっていたので、おじさんが、

「名まえは、みみにしよう」と言って、すぐに決まったのでした。

「まあー、みみだなんて。かわいらしい名まえじゃない」

おばさんも、その名まえを気に入って、おじさんの意見に賛成してくれて、すぐに決まりました。

今日も、爽やかな秋の一日が始まろうとしていました。

みみは玄関先で、何時ものように、おばさんと、お仕事に出かけるおじさんを見送りました。この後、

「あれっ　そういえばみみちゃん、今日は、みみちゃんもお出かけの日じゃ、なかったのかしら?」

おばさんから言われて、
（あっ　そうだった）と、みみも思い出しました。今日は月に一度、町中の猫たちが、全員、一堂に集まる猫集会の日でした。
みみは、この日を、いつも楽しみにしていました。みんなと会えるからです。
「そろそろみみちゃんも、お出かけの準備をしなくちゃあね」
おばさんは、そう言うと、みみを膝の上に乗せてくれて、あごの下や頭、背中をやさしくなでてくれました。すぐに気持が良くなって、のどがゴロゴロとなりました。
「さあ、毛並をととのえてあげたから、みみちゃん、今日もハンサムになったわよ。出かけていらっしゃい」
みみも、おばさんに見送られて、出かけて行きました。

猫集会の会場は、町の中央の小高い岡の上にありました。小さなお宮の境内の横にある原っぱです。ここは見晴らしが良くて眼の前に町中が見渡せました。みみが世話になっている、おじさんとおばさんの家のオレンジ色の屋根も、もちろん見えました。
会場に着くと、もうたくさんの猫たちが集まって来ていて、にぎやかでした。
「やあ、みみ、おはよう」
この前から顔見知りになっていたチロが、話し掛けてくれました。
「みみ、もう、ここの生活に、なれたかい」
「みみの家は、いごこちいいかい」
前から、この町に住んでいる他の猫たちが、口々に声を掛けてくれました。
そこへ町会長猫のトラさんが、見なれない初めて見る女の子の猫を横に連れて、みんなの前に現れました。
「あっ　かわいい女の子だ……」
みみは、すぐに思いました。
そして、何と、その女の子もみみみたいに、猫には珍しく耳がたれていました。
でもみみと違うのは、左右両方の耳とも、同じ様に、下に向かって、きれいに揃っていました。
「えー　えっへん」
町会長のトラさんは、一つせき払いをしてから、
「さあ、みなさん、もっと前に集まって来て、聞いてください」と、話し始めました。
「今日は、また新しい仲間をひとり、みなさんに紹介します。今度、西村さんちで飼われることになったミミさんです。ミミさんは、すごいんですよ。なんたって血統書付きのお嬢さまなんだから……」
町会長さんの紹介を受けて、横にいたその女の子が、
「わたし、ミミです。みなさん、よろしく、お願いします」
ペコリとおじぎをしました。

「かわい〜い」
そこかしこから声が上がりました。だけど、
「ありゃらら。ボクと同じ名まえじゃん」
みみだけは、ひとり焦りました。

「あの……」
みみは、おずおずと恥ずかしそうに手を上げて、町会長さんに発言を求めました。
「なんですか?-みみくん」
「あのー　彼女、ボクと同じ名まえじゃないですか?」
みみが言うと、
「そうですよ。それがどうかしましたか?」
町会長のトラさんが、逆に聞き返してきました。
「変じゃないですか?」
「変じゃないですよ。そもそも、元々、変なのは君の方じゃないですか。男のくせにみみだなんて、女の子みたいな名まえで」
すると、
「そうだ、そうだ」と、あっちこっちから言われ、「アッハハ……」と、笑い声まで上がりました。
「だけど、同じ名まえで、これからボクたちって、不便じゃないですかねえ……」
遠慮きみに、さらに発言すると、
「心配しなくたって、それは大丈夫。だいいちミミさんは、れっきとした毛並みの良いレディなんですよ」
「はあ……」
「それにひきかえ、君の方は、そんなことを言っちゃアなんだけど、むさくるしい、ただの男の子だよ。一目で区別がつくじゃん」
と、言われてしまいました。
(ボクは、むさくるしい?　おじさんとおばさんは、何時もボクのことを、かわいいかわいいって、言ってくれているけどなあ……)
「ミミさんは、ちゃんとスコティッシュフォールドって、血統書付きのお嬢さんなんだから。君はただの雑種でしょうが。耳の形も、右と左が逆で、おかしいし」
「とほほ……」
ここで、また会場のみんなから、
「ワハハハ、ゲラゲラっ」と、笑い声が上がりました。
「お互いの呼び方も、みみくんは男の子だからみみくん。ミミさんは女の子だからミミさん、それでいいじゃないの」
「そうだ、そうだ」
「かわいい子ちゃんのミミさんと、同じ名まえなだけでも、光栄だと思いなさい」
町会長のトラさんと、他のみんなからも、いっせいに言われてしまいました。

それから、ひとりひとりに、挨拶をしてまわっていたミミ

さんが、最後の最後に、みみのところへも、やって来ました。
「わたしと同じ名まえのみみくん、あんたも、よろしくね」
彼女に話しかけられて、
「ミミさんも、耳に特徴があるから、ミミって名づけられたんだね」
と、みみは親しみをこめて、たずねました。すると彼女は、
「フンッ」と、鼻先で冷たく笑って、
「あんたなんか、わたしと違って、へんてこりんな耳じゃん」
と、きついことを言ってきました。
（えっ　ボクの耳は、へんてこりん？）
たしかに、みみの耳は、ミミさんみたいに、きれいには揃っていなくて、右の耳は上を、左の耳は下を向いていたので、ちぐはぐに見えるのでしたが……。
（ボクの耳は、おかしいの？）
みみは悲しくなりました。

「どうしたの？そんなに、しょげた顔をして」
しょぼくれた顔をしたまま、家に戻って来たみみに、おばさんが心配をして、やさしく問いかけてくれました。
それでみみは、おばさんの目をじっと見つめて、悲しかった今日の出来事を、訴えました。でも、おばさんには、「にゃん、にゃん」としか聞こえないのでした。
それでも悲しそうにしているのは、わかってくれて、
「みみちゃんは、良い子良い子。わたしは、みみちゃんのことが大好きだよ」
と、言いながら、膝に抱っこして、頭をやさしくなでてくれました。
みみの目から思わず涙の粒が落ちました。

★

その夜、お仕事から帰って来たおじさんが、おばさんに向かって、
「おい　おまえ、今日、会社の昼休みに良いことを聞いてきたぞ」
と、目を輝かせながら言いました。
「どうしたの？」
おばさんが聞き返しました。
「あのなあ、もうすぐ町のお宮の秋祭りがあるだろう」
「ええ。あるわねえ」
「毎年、その秋祭りの時に、神さまに願いごとを頼んだ人の何人かの願いが、必ず、かなうんだって」
「へえー。じゃあ、わたしたちも、今度の秋祭りの日には、わたしたちに赤ちゃんができます様にって、頼みましょうよ」
「そういうこと、そういうこと」
おじさんとおばさんは、楽しそうに、いつまでも話し合っていました。
（そうか……　ようし、ボクも神さまに頼んでみよう）
おじさんとおばさんの会話を聞いていたみみも、閃きまし

た。

町のお宮の　年に一度の秋祭りの日……、

それはもう町中の人たちが、大人も子どもも岡の上のお宮まで揃って参拝に訪れて、にぎやかでした。

おじさんとおばさんもやって来て、

「赤ちゃんができますように……」と、しっかり神さまにお願いをしていました。

そして夜遅く、みみも　誰もいなくなってから、そっとやって来て、自分も、神さまに、お願いをしました。

「神さま、どうかボクの、このへんてこりんな耳を直してください。上向きでも下向きでもかまいませんから、とにかく右の耳と左の耳とが、同じ向きに、そろうようにして下さい」

そして、その数日後、みみが、なにげなく気になって、ひとりで、お宮までやって来た時のことです。

（おやっ？）

なんだか、お宮の中から、ボソボソと、誰かの話し声が聞こえてきました。

（誰だろう……）

みみが、そっと中の様子を覗きこんでみると、三人の神さまたちが姿を現して、相談ごとをしているところでした。

「う～ん、今年は一つだけですか。参りましたなあ……」

「たったの一つだけ選ぶなんて迷うなあ」

「あぁ、困った困った。今年は、誰の願いを聞いてやろうかのお」

神さまたちは、腕を組んだり、あごひげをなでたり頭をかかえたりしながら、ほとほと困った様子で、思案にくれていました。

ありゃりゃ、神さまたちも悩むんだね……。

実は毎年、この町からは、少なくても三件の願いごとをかなえることが出来たのですが、今年は、春に東北地方で悲惨な大震災が起こってしまいました。それで困っている東北の人たちの、切実な願いを、少しでも優先しなくてはなりません。

そのために、出雲の神さまの本部から、今年のこの町の願いをかなえる割り当て分は、たったの一件だけだと、言われてしまったからです。

もう少し何とかならないかと、町の神さまたちも、出雲の神さまの本部に陳情してみましたが、「無理です」と、キッパリと断られてしまいました。

「今年は一件の願いが通らない、かわいそうな地区だってあるんだから……一件かなうだけでも感謝して下さいよ」

町の神さまたちは、本部の神さまから逆に言われてしまいました。

「よ～し、悩んでいてもしかたがないから、もう一度、てい

ねいに見直して、誰の願いを採用してやるか、早く決めよう」

町の三人の神さまたちは、今年、町中のみんなから集まった願いごとを記した一覧表を広げて、もう一度、上の欄から、また一件ずつ、ていねいに目を通していって、どれを採用するのか決めることにしました。

神さまも大変です。

「なになに、もっと学校の成績が上がります様に……いったい、これは誰だったっけ?」

「これは今年、小五になったしょうただよ」

「またあいつか、駄目だよ、これは。自分はちっとも勉強しないくせに、何時も神頼みだけしてきて、厚かましいやっちゃ」

「そうだ、そうだ、自分でも努力していかないと、ご利益なんてある訳がないよ」

「神さまだって、そこまでお人好しじゃあないからねえ」

「さあ、次、いきましょう」

「えー　次は、なになに……もっと野球が上手くなりますように」

「これは少年野球団のダイスケだよ」

「またかよ。ダイスケも練習をサボってばっかりいるくせに、厚かましいやっちゃあ。これもボツ……」

「えー　次は、むむっ……もっと痩せてきれいになりますようにってか」

「う～ん、これも勝手だな。食べる量を減らせればいいんだよ。もったい無い」

「次は?」

「かっこう良い彼氏が現れます様に……だって」

「これも呆れたやつだ。そんな神頼みをしている暇があったら、もっと自分を磨けって言うの」

「そうだそうだ」

こうして次から次と、願い事の内容を神さまたちは再度確認して、審議を続けていましたが、なかなか決まりません。

この様子を見ていたみみは、これはもう、自分の願いも叶えてもらえる訳がないと、諦めかけていました。何しろ沢山の願い事の中から選ばれるのは、たった一つだけなのですから……。

と、その時、

「えぇ～い。もう人間どもの好き勝手な願い事は、聞いてやるのもめんどう臭くなった。今年は、これで決まりじゃ」と声がして、続いて、

「今年は子猫のみみの願いを、かなえてやることにしよう」と、聞こえてきたではありませんか……。

「たしかに、あの耳じゃあ、かわいそうだ。この世に、あんな耳をしている猫なんて、他には、いないからなあ」

「それにみみは、素直で気持の良い子だよ。飼い主の夫婦にも、かわいがられてる」

「よし、今年は、みみで決まり」

なっ　なんと、自分の願いごとが聞いてもらえることになっただなんて、なんてラッキーなことなのでしょう。
　みみは嬉しくてうれしくて、胸がドキドキと、ときめいてきました。

　ところが……
「あぁ　神さま、ちょっと待って下さい」
　神さまの前に、みみが慌てて飛び出して行きました。そして、
「神さま、どうか聞いて下さい」
　神さまたちに頭を下げて言いました。
「おやおや、きみは、みみくんじゃあないか。さっきから、わたしたちの会話を聞いていたのか？」
「はい、すいません」
「うんっ？　だから、きみの願いをかなえてあげることに決めたじゃないか」
「いや、ボクは、もういいんです。ボクの願いは取り下げます」
　おやおや、みみは、いったい何を考えているのでしょう……。
「どうして？」
　神さまたちもビックリして、聞き返してきました。
「代わりに、ボクのうちの、おじさんとおばさんの願いを、かなえてあげて欲しいんです。お願いします」
　みみは、もう一度ペコリと頭を下げて、神さまたちにお願いをしました。
「みみくんちの夫婦の願いは、赤ちゃんが欲しい……　だったね」
「そうです」
「だけど、赤ちゃんが生まれたら、きみは、もう邪魔になって、追い出されるかも知れないんだぞ」
（う〜ん、それは、そのー、そうかも知れないですけど……）
　みみは、自分から変更を申し出たものの、ちょっぴり不安になってきました。
「ほうらね。心配だろう。どうするの？」
　神さまから念を押されて言われました。
「もし、そうなったら、それでも良いです。どうせボクは側溝にはまって、死にそうだったところを、おじさんに助けられたんです。今、こうして生きていられるだけでも、しあわせです」
　しばらく考えていましたが、みみは、きっぱりと答えました。
「しかし、きみは、これからも一生、そのへんてこりんの耳のままでもいいのか？」
　また神さまが、今度はこう言って、更に念を押してきたので、みみは、また少し心が動揺してきました。
（それもそうか……ボクだって、かっこう良い猫になりたいもんなあ）
　再び、少し決心が揺らいできました。だけど、暫くの沈黙

の後、
「良いです。ボクは男の子だから。顔のことなんて、今日から気にしないことにしました！」と、毅然として答えました。
「そうか……そこまでの覚悟があるのなら、きみの願いを聞いてやろうじゃないか」
「本当は、わたしたちが、一旦、決めたことを変更するのは有り得ないことなんだが……」
「今回は、きみの意気に感じて特例だ」
　神さまたちが、口々に言ってくれました。
「たしかに、よくよく考えてみたら、そうなんだよなあ。みみくんの耳だって、一つの個性だって考えれば良いんだから」
「そうだ、そうだ。それだって世界中を探したって、みみくんだけかも知れない貴重な個性なんだよ」
「男の子には、見かけより、もっと大事なことが沢山ある」
　神さまたちは、今度は、こう言って、みみを励ましてくれました。そしてみみの願いを聞いてくれることになったのでした。

　それから、暫くたったある日のことです。おじさんが会社のお仕事から帰って来て、夕食の時間に、ご飯を食べながら、おばさんに向かって、
「おれな、今朝っていうか、昨日の夜、不思議な夢を見ちゃったよ」と、言いました。
　すると、おばさんも
「そう、わたしもだけど……」と答えて、言いました。
「で、あなたの見た夢って、どんな内容？」
　おばさんが、おじさんに向かって尋ねました。
「それがなあ、お宮の神さまだっていうひとが現れて……」
「へえー　不思議だわ。わたしも同じ夢よ。それで、みみのたっての願いで、わたしたちの希望がかなうことに決まったから、ますます夫婦仲良くするようにって、言われたんでしょう」
「そうそう、まったくその通りなんだよ。それにもちろん、みみも大事にする様にって、言われたけど」
「それもいっしょだわ。不思議よねえ……」
「不思議だよなあ」
「それじゃあ、二人とも同じ夢を見たというより、きっと神さまが、わたしたちのところに、良い報告を告げに現れてくれたってことじゃあないの」
「そうだと思う……」
　おじさんとおばさんは、お互いに顔を見合わせながら、話し合っていました。
「だけど、みみまで、わたしたちの願いを、神さまに頼んでいてくれてたんだね」
　おばさんが言いました。
「本当に赤ちゃんができたら、これは、みみのご利益ってことにもなるんだね。おまえが、いつもみみをかわいがってやっている恩返しって訳だな」
　おじさんが言うと、おばさんも、

「あなただって、みみをかわいがってやってるじゃん。最初にみみを助けてやったのは、あなたなんだし。名付け親も、あなただし」
おじさんに向かって言いました。
「みみは、わが家の幸運の招き猫だったんだよ」
「そうね」
テーブルの下で、そんな夫婦の会話を聞いていたみみも、とっても嬉しくなりました。

★

次の年の春、おじさんとおばさんの間に、待望のかわいい赤ちゃんが本当に誕生しました。それもいっぺんに、男の子と女の子のふたごの赤ちゃんでした。
おじさんもおばさんも、それはそれは二人手をとりあって大喜びでした。

それで、みみはどうなったのかって……もちろん、みみも元気にしてますよ。
「みみちゃんも、わたしたちの大事な家族の一員。これからも、ずっと一緒にいましょうね。赤ちゃんのことも、よろしく」
「これから、わが家も、にぎやかくなって、ますます楽しくなるね。みんな仲良く暮らしていこう。みみちゃん、ありがとうね」
おばさんとおじさんは、みみに向かって、こう言ってくれました。
それに、何と何と、あの、お高くとまっていた、きりょう良しのミミさんが、今では、みみに、ぞっこん惚れこんでいて、みみの恋人になってくれていました。
「なんで?」と、不思議に思うひとがいるかも知れないけれど、個性のある耳のことなんか気にせず、堂々と振る舞って生きているみみは、それだけでも、ものすごく男らしくて、カッコウ良く見えるようになったんだ。
そんなものなんだね……。

（北区）

【入　選】

僕の夏休み

恩田恭子

僕は東京に住んでいる小学五年、泉智（いずみさとし）。

「あっ、地震だ。また揺れた」

東日本大震災以来、毎日揺れている。テレビをつけた震災復興の先行き分からないがれきの中で一本のしだれ桜の木が立っている。僕と同じくらいの年齢の少年が

「父も家もなくなっちゃったけど、このしだれ桜の木だけが残っている。これが僕のうちがあった証拠だ」

そう言って映し出された。僕は胸が熱くなった。

「頑張ってね。君だけじゃないんだ」

そう言って握手をしてやりたかった。涙が出そうになった。

そこへ、パパとママが帰ってきた。

「震災の様子だね」

とパパが言った。それから震災の話になった。あれから半年近くなるのに、まだ復興のめどがたたない。自分のサイズに合わないような洋服を着ている人もいる。僕たちは、ようやく落ち着いたけど、この人たちのことを思うとなんともいえない気持ちになる。

「今度の震災は、本当に大変だったねえ。でも、世界中の人がお見舞いをくださって、平和って、本当にありがたいねえ」

パパとママがしみじみ言った。僕も本当にそうだなと思う。

「智、夏休みに入ったね。これからどうするつもり？　智ももう五年生になったんだから、少しは何か考えてもいいだろう」

「そうだね、パパ。僕、パパとママが許してくれたら、川根のおじちゃんの所に行ってみたいんだ。川根にはおばちゃんも、いとこもいるし、夏休みをそこで過ごしてみたいなって思うんだけど、どう？」

「川根か懐かしいな。智が生まれた時に行って以来一度も行ったことがなかったなあ。でも智、山の中だよ。遊ぶ所なんか何もないんだよ。それでも行きたいかい？」

「長い夏休みだからちょっと変わった所へ行って過ごしてみたいなって思うんだ。本当はちょっぴり心配だけどね。あの震災の子のことを思えば、なんでもないことだよね」

「偉くなったねえ智。じゃあ早速川根に連絡を取ってみるよ」

一人旅もいい経験になるだろうと八月七日出発に決まった。小さなスポーツバッグに勉強道具とママがそろえてくれた下着類を詰めて準備が整った。

いよいよ八月七日。パパたちはママの実家、浜松へ。僕は掛川で降りると、川根のおばちゃんが迎えに来てくれることになっている。

僕は新幹線に乗るのは初めての経験だ。ついに駅にやって来た。人がいっぱいいる。僕は迷子にならないように気をつけた。ホームに着くとアナウンスがあった。

「十五番線に下り列車八時五十分発、こだま三百十五号、大阪行きが参ります。皆様白線までお下がりください」

いよいよ僕が乗る番だ。電車が静かにホームへ入ってきた。僕たちは電車に乗り、パパとママが並んで座り僕が向かい側に座った。いよいよ本当の楽しい夏休みが始まろうとしている。

約二時間、いや一時間くらいかな？　どのくらい乗ったか分からないけど

「智、起きるんだよ」

そう言って起こされた。

「もうすぐ、掛川だからな」

パパがそう言った。新幹線が滑るように掛川駅に入った。ドアが開いた。

「智、あの人がおばちゃんだよ。楽しんでおいで」

パパとママが手を振っている。

「こっち、こっち」

とおばちゃんが駆け寄ってきた。おばちゃんと一緒に駐車場へ行った。車の後ろに僕と同じ年齢の従兄弟の聖希（せいき）が乗っていた。

「智、待っていたよ」

と聖希が手を出したので握手した。聖希の手は温かかった。

おばちゃんの車はぐんぐん東へ進んだ。金谷に入ると細い道をどんどん進んだ。金谷から大井川鉄道が出ているという。

「今度は大井川鉄道に乗ってくるといいよ。ＳＬも走っているし」

おばちゃんがそう言った時、汽笛が鳴ってすぐ近くをＳＬが通っていった。初めて見た。大きな汽笛と黒い煙、すごい迫力だ。それから大井川の川幅が広いのにも驚いた。川向こうにも家がたくさん並んでいる。素晴らしい景色だ。約一時間半、車に乗っておばちゃんの家に着いた。

「ああ、やっと着いた」

おじちゃんとおばあちゃん、お兄ちゃんが迎えに出てくれていた。

「智、よく来たねえ」

「こんにちは。お願いします」

僕はそう言った。

「おなかがすいたでしょう。お昼だから、洋服を着替えて台所へおいで」

とおばちゃんが言った。それから僕は手と顔を洗い、家の中へ入った。

「おじちゃん、おばちゃん、これはおみやげだと言って、パパたちがくれました。僕もおじちゃんやおばちゃんの言うことを聞いてしっかりやりますので、よろしくお願いします」

暗記した言葉もすらすら言えた。

「そんなに肩をはらんで、聖希と一緒にゆっくり遊べばいい

よ」
「ありがとうございます」
少し休んでいたら、おばちゃんが
「お昼ですよー」
と呼んでくれた。
（やっとお昼になった……）
台所へ行き、まずお茶を飲んだ。とてもおいしかった。それから不思議なことに風がすいすい入ってくる。見ると窓や戸が全部開いている。
「おばちゃん、こんなに戸を開けておいて泥棒が入らないの？」
智が言うと
「泥棒？　ここは田舎だから、泥棒はこないし、来たとしても、持っていく物は何にもないしね。お茶碗持っていったってしょうがないしね」
みんなが笑った。お昼がすんで、智は縁側で寝転んだ。見る物何もかもが珍しい。鶯が鳴いている。静かだ。風がそよそよして気持ちがいい。蝉も鳴きだした。
（あれ？　あれはトンボじゃないかな？　もうトンボが飛ぶのかな？）
寝転んで見ていると青い空がとてもきれいだ。智はいつの間にか眠ってしまった。腕がひんやりとして目が覚めた。縁側の日はすっかり西へかげっていた。起きてみたら、戸がいっぱい開け放たれ、とても涼しい。あっちもこっちも風が入る。暑さなんて何にも感じないのだ。僕は帽子をかぶり庭へ出てみた。誰もいない。広い庭に草がいっぱい生えている。することもないので、隅から一本ずつ草を抜いた。抜いた草はまとめておいた。抜いた所と抜かない所の差がはっきりついてとても気持ちがいい。満足、満足。しばらくすると家の人たちがみんな帰ってきた。
「智、草取りしていたの？」
「うん、目が覚めたら誰もいなかったから。草取りって、初めてしたよ」
「そうなの、ありがとう。それじゃあ、三時半になるから、おやつにしようね」
おばちゃんがそう言って、縁側にお茶と一緒に丸いものを持ってきた。
（まんじゅう？　ちょっと違うみたい。なんだろう？）
そう思っていると、聖希が
「智、これは、じゃがいもだよ」
と教えてくれた。
「じゃがいも？　僕は、まんじゅうにしては丸すぎるなって思ってた」
するとみんなが大笑いした。
「サラダや煮物にするくらいで、丸いじゃがいもなんて食べたことないだろう？」
おじちゃんが言った。
「はい、これが本当のじゃがいもなんですねえ。あっ、しょっ

ぱくておいしい」
「そうだよ。これが自然の味というもんなんだよ。ゆでて塩を振っただけ。塩茹でっていうんだ。おいしいだろう?」
「うん、本当においしい。じゃがいもの塩茹でかあ。おいしいなあ」
（ママはどうして、こんなおいしいのを作ってくれないだろう?」
それからおいしいお茶を飲んだ。
「さあ、お茶を飲んだし、だいぶ涼しくなったで、今から茶原の草取りをするかねえ。お盆までにはきれいにしないといけないから」
「智も行くか?」
「うん、行く」
聖希の服を借りて一緒に茶原の草取りに行った。僕は草取りが嫌いではないようだ。きれいに隅から隅まで取っていくととても気持ちがいい。風が吹くし一通り一通りうねになっている茶原はとてもきれいだ。
夕方、聖希が畑を案内してくれた。
「田舎の子はこうして毎日仕事をするんだねえ」
「ううん、そうでもないよ。夏休みは家で勉強をしたり掃除をしたり、家の手伝いもいろいろとね。毎朝ラジオ体操を公民館へ行ってやるんだよ。明日は智も早く起きて一緒に行こう」
そう言ってくれた。
「智は、畑の広さなんて知らないだろう。僕の家の畑は、一町歩約一ヘクタールといってね、すごく広いんだよ。家はみんな農業で生活しているんだ。大変だけど、みんながね会社へ行くのと同じように畑をやって生活しているんだよ。この畑をね、ずうっと一回りするとね、なかなか広いんだよ。回ってみよう。僕が案内してあげるよ」
そして、僕は聖希の後に付いていった。
「これはね、柿の木。今、小さな実がなっているだろう。次郎柿っていうんだけど、秋になると大きくなって、取れ立てのを食べると甘くて、すごくおいしいんだよ。都会でこれを買うと一個二百円くらいなんだって。だけど家は作っているから、みんなもぎとって自由に食べるんだ。自分の家のだから好きなだけ食べられるんだよね」
それから、もう少し行くと
「これは栗の木。秋になるとたくさんの栗が取れるんだ。イガから出すのは僕の得意技。ちょっとこっちを見て。ここからが一番いい景色だと思うんだ。向こうに見える高い山をね、みんなが『赤石』って呼んでるんだけど、地図を見ると『赤石山脈』って書いてあるから僕はそれじゃないかと思うんだよ。冬になるとそこから吹いて来る風がとても冷たいんだ。右側にたくさん家が見えるだろう。あれは『久保尾』といってね、昔はあそこに学校があったんだ。みんなお茶で生活しているんだよ。その山をいくつか越えた向こうにさっき見た大井川が流れているんだよ。ちょっと有名な川なんだよ」

「僕、大井川って知ってるよ。社会でちょっと勉強したことがあると思うんだ。『越すに越されぬ大井川』って言うんじゃなかったかな？」
「そうそう、それだよ。」
　少し歩くと、また柿の木があった。
「これはね、ふゆう柿っていってね、大きくなったら、皮をむいて日に干すとね、糖分が出てきて白くなるんだ。それをシュロの葉っぱでつるして干しておくんだ。そうして冬になるととてもおいしい干し柿になるんだよ。智もまた冬に来るといいよ」
「うん、そうしたいな。おいしそう」
　いろいろ説明をしてもらいながら来ると沢が流れていた。きれいな沢だ。
「きれいな水だね。魚もいるの？」
「ううん、魚はいないよ。魚はいないけど、いつも水が絶えることはないんだ。僕の家はね、水道料も要らないんだ」
「なんで？」
「だって、湧き水でね、コックをひねると茶原も畑も家の中全部にその水が出るんだ。夏は冷たくて冬は温かいんだよ。その冷たい水でスイカを冷やしておいて食べるとおいしいんだよ。そのスイカもお父さんが作るんだ。だから一年中家の畑で取れたものでおやつがあるって訳さ」
　「ふうん、すごいねえ。僕ら、スイカは切って売っているのをスーパーから買ってきて三人で分けて食べるんだけどね」
「へええ、僕らとは違うね。柿の木に登って柿を一つもいで、枝に座って足をぶらぶらさせながら食べるのは最高さ。トンボを見たり、遠くの景色を見たり、一人でも結構楽しいんだよ」
「ふううん。なんかいいね」
「随分歩いただろう。これが僕の家の畑さ。これを一年中みんなで耕作しているんだよ。それから僕の家はまだ下のほうに田んぼを借りていてね、僕は田植えもするんだよ。こうして働くとね、山に生まれたことがとてもよかったと思うんだ」
　そんな話をしていると、家の中から、おばあちゃんの声が聞こえた。
「お家、入りないよお」
「ちっとも暑さなんて感じないんだね。きょうは、暑いはずなのに」
　家の中に入ってテレビを見た。
「きょうは猛暑で東京は三十八度です」
「へえ、東京は三十八度だって。ここは涼しいねえ」
「そうだよ。日向は暑いけど、ちょっと屋根の下に入るとひんやりするほど涼しいんだよ」
　何もかも珍しいことばっかりだった。それからは東京のことやパパたちのこと、空の青さに驚いたことなど話した。
「こっちに来て、よかったねえ」

聖希がそう言った。
「明日は肥料入れだ。手伝ってくれよ」
「はい」
朝になった。六時に目が覚めた。一緒に寝た聖希はもういなかった。
（どこへ行ったんだろう？）
そう思っていたらお兄ちゃんと一緒に庭を掃いて水を打っていた。
「智、今から公民館に行こう」
お兄ちゃんが言った。
（あっ、そうだ。きょうはラジオ体操に行くって言ったんだっけ）
急いでズボンを替えて、ランニングになって体操に行く準備をした。
「いってきまあす」
「いってらっしゃあい」
公民館に行くと十七人くらいいた。
「君は、どこの子？」
「東京です」
「東京から来たの？　田舎はいいだろう」
「はい」
「ゆっくり遊んでいけよ」
そう言って声を掛けてくれた。
「きょうは八月八日です。暑いから熱中症にならないように気をつけましょう。今から体操を始めます」
お姉さんがそう言って音楽が鳴り出した。僕も一生懸命体操をした。狭い所でやるんじゃないから、のびのびやれるし楽しい。力いっぱい腕を伸ばした。十五分なんて、瞬く間に過ぎた。
「ご苦労様でした」
さっきのお姉さんのあいさつで解散になった。家へ帰ると朝ごはんの支度ができていた。さわやかで気持ちがいい。
「いただきまあす」
ご飯と味噌汁と……きょうのご飯はなんだか黒い。
「おばちゃん、ご飯黒いねえ」
「そうでしょう。これは麦ご飯といってね、お米に麦を混ぜて炊くと体のためにいいから、家では食べているのよ」
「おいしいねえ」
「そうだろう。さあ、きょうはみんな肥料入れだから、ご飯をたくさん食べてな。洋服もそのように替えていくこと。智はきのう聖希に借りた服を着ていけばいい。持ち物はバケツと手袋。軍手をおばちゃんに貰ってね。それから帽子も忘れないこと」
茶原につくと
「今日はここから上全部に肥料を振る。聖希と智は手で振ってきなさい」
おじちゃんやおばちゃんは肥料を背中に背負って、こぼしていく。僕たちは茶の木が小さい所にまいていく。

「ここからここまでバケツ一杯ね」
「はあい」
　二人で仲良くやった。肥料入れはただこぼして歩けばいいから楽なもんだ。それでも長い時間やっていると疲れる。
「木の下へ入って休むかねえ」
　おばちゃんの声で、柿の木の下に入って草の上に座った。気持ちがいい。おばちゃんが水を一杯ずつくれた。冷たい水だ。
「これは、冷蔵庫に入れてあった水じゃあないわよ。湧いてきた水をただ汲んできただけ。冷たいでしょう。湧き水は夏は冷たくて冬は温かいの。だからお茶碗洗うのにもお湯は使わないのよ」
「ただで儲けてるみたいだね。僕たちはあったかいお湯を出しっ放しにしておくと、ママがすぐに『出しっ放し。もったいない』って怒るんだ」
「そうよねえ、お水はただこぼれていっちゃうから、お金がこぼれていっちゃうのと同じだものねえ。でも、田舎はお水だけはいっぱいあるからいいよ。でもあんまり出しっ放しはよくないけどね」
　それからまた十一時まで仕事をしてあとは家へ帰って勉強をした。昼間の暑い時間は家の中での勉強タイム。
「聖希、みんな塾へは行かないの？」
「塾なんて行かないよ。だって塾は上長尾（かみながお）っていう所にあるんだけど、送っていってもらわなくちゃあ行けないし、別に行かなくても困らないから。学校の先生も『授業で勝負』って言うから、先生の言うことを聞いていれば何にも困ることはないもん」
「ふうん。いいねえ。塾へ行かなくていいなら、たくさん遊べるよね」
「そうでもないさ、お手伝いをするし、自分でできることは何でも自分でやる。お父さんたちも忙しいから、なるべく迷惑にならないようにしているんだ。たとえば、自分のくつが汚れたら自分で洗う。それが当たり前だからさ」
「ふうん」
　毎日が瞬く間に過ぎていった。明日からお盆という朝、お兄ちゃんと聖希は、かや刈り、僕はおばあちゃんと一緒になすととうもろこしを取ってきた。そして、馬と牛を作った。とうもろこしにお茶の葉でぴんと立った耳を作って付けた。かやは足になり、うまい具合に立った。牛もナスで同じように作った。それから、そうめんを馬と牛の背中に乗せて少し水をたらした。そうめんがしなだれて馬や牛らしくなった。それに乗ってご先祖様が家に帰ってくるという。そんなこと僕は考えたこともなかった。
　十四日、きょうはお盆だから、みんなが公民館へ行って遊ぶことになった。お兄さんやお姉さんたちも大勢来ている。お盆は楽しい。僕もすっかり村の子どもたちと慣れて、いろんなことをして遊んだ。特にサッカーはお兄さんたちが応援してくれるから、おもしろい。みんなすっかり友達になって

僕をよそ者だなんて思っていない。

十六日、おばちゃんが今夜は送り盆だからご馳走を作ってくれると言った。聖希と僕が、人参と牛蒡を掘ることになった。牛蒡を掘るのはなかなか大変だったけど、なんとか一本掘ることができた。人参は三本掘った。それをきれいに洗っておいたら、おばちゃんが五目御飯にしてくれた。

「五目御飯は、筍ときのこと人参、牛蒡、油揚げ、昆布、大体それが主で、後はいろいろ入っているけど、昆布以外は全部家で取れる物なんだよ。さっき牛蒡を掘っただろう？　あれも、お父さんが種をまいて作ったんだ。人参もそう、それからさっき智が見た花、あれはかぼちゃの花なんだよ。家で取れたかぼちゃのスープはおいしいよ。お母さんは何でも料理してしまうんだからね。僕はそんなお母さんを誇りに思うよ」

聖希がそう言った。

（本当に田舎の暮らしを初めて見たけれど、東京とは随分違うんだなあ……）

ぼくはしみじみそう思った。

「今夜は下泉（しもいずみ）へ行って送り盆を見てこよう。きれいだよ」

夜になって、みんなで送り盆を見に行った。下泉の河原が真っ暗になった時に百八つの送り火を川に流し、やがて順番に消えていった。

「こうしてね、お盆に帰って来たご先祖様をお送りするのだよ」

おばあちゃんが教えてくれた。

「ふううん。きれいだねえ。でも、きれいだけどなんとなく寂しいね」

「そうだよ。これはね昔から行われている行事だけど、初盆の家の送り火を先頭にその後を他の火が送っていく、そういう形になっていると思うよ。だんだん火が消えていくのは、きれいだけど寂しいねえ」

（いろいろなやり方があるんだなあ）

やがて送り火が終わって真っ暗になった。すごい地響きがして大きな花火が上がった。広い空に大きなしだれ柳ができたのだ。

「すごいねえ」

それから次々といろんな花火が上がった。中でもきれいだったのは、スターマインだった。帰りは出店が出ていた。

「何を買おうかな？」

綿菓子におでん、お汁粉もあった。カキ氷も。金魚すくいも。大勢の人が出ていた。僕は東京にいてもこういうものは見たことがなかった。

「田舎に来るといろんな物が見えていいねえ」

「でも、これがいつもあるわけではないんだよ。お祭りとかお盆とか、そういう物日だけがこういうふうな出店が出るんだよ。お祭りは何日もあるから楽しいよ」

「いいなあ。お店も花火も。それからこんなにきれいな星がいっぱい。最高だね」

「じゃあ、毎年来ればいいよ」
「ほんとだ。それいい考えだね」
　僕はこの花火と星空は一生忘れないと思う。家に帰ると、
「智、今年初めて畑から取ったサツマイモをおばちゃんが蒸かしてくれたけど、食べてみるか？」
「いただきまあす」
　ぽこんと割ったら、粉みたいのが飛び出してきた。蒸かしたてのお芋で、湯気がホカホカしている。
「おいしーい。僕こんなの食べたの、初めて。お菓子みたい」
「今年は天気がよかったから実入りがよかったんだね。智、あっという間に十日が過ぎちゃったね。どうだった田舎の暮らしは」
「大変素晴らしいと思います」
　そう言って笑った。
「そうか、よかったな。今年は日本中が津波と原発で大変な思いをした。東京はどうだった？」
「いつもゆらゆら揺れているようで気持ちが悪かったけど、それもこの頃は終わりになって、水道も使えるようになって本当にありがたいです。でも、こっちの水はくさくなくていいですね」
　そう言うとおじちゃんが大笑いした。
「それは、消毒をしてないからだよ。きれいな水だからね」
「すごいですねえ」
「でも、地震は日本中が大変だったね。東北の子どもたちもかわいそうだった。お父さんお母さんを失い、家を失い、みんなどうしていいか分からなかっただろうね。千年に一度っていうから本当にすごいものだよね。おじちゃんの所なんか地震もゆすれなかったから何の心配もないと思っていたのに、福島の原発の放射能が風で舞ってきてお茶についたので心配したんだ。智にこんなことを言っても分からないかもしれないけれど、放射能の基準値っていうのがあってね、それ以上高いと出荷ができなくなるんだよ。幸い川根のお茶はすべて基準値以下だった。だから安心して飲めるお茶なんだよ。それにしてもこんな世の中は嫌だね。いつもはらはらしていなくちゃならないものな。どこにいたってどんな災難が来るか分からないけど、福島では放射能の基準値が高くてほうれん草やいろんな野菜が出荷できないそうだ。農家の人は困っているだろうね。それでも、六十年前かな？　広島に原爆が落ちた時、その時も怖かった。何も分からないまま、バカーンとはぜて、一度に何十万人が死んでしまったんだからね、恐ろしかったね」
「本当にねえ、あの頃はみんなが大変だったけど、さすがにあの時は、これからどうなるかと思ったよ。あれから六十六年になるんだねえ」
　おばあちゃんもしみじみ言った。
「世界のことを考えたら、こんなに狭い日本なのに、今度の地震で、百年に二度も大きな災いが起きたんだよね。でも、あの原爆から日本人は立ち上がって、今の立派な日本を作っ

たんだ。これからも頑張らなくてはいけないね。だが、今度の地震は、本当に大きな痛手だったねえ」
　そんな話をしていて、ふと思い出した。
「あっ、そうだ。すっかり忘れていた。携帯でママに連絡を入れなくっちゃいけなかったんだ」
　川根に来てから、携帯電話の電源をずっと切ったままだった。連絡を入れると、ママはあきれていた。
　なんだか川根から帰るのが寂しくなった。おじちゃんやおばちゃん、聖希やみんなと別れるのも寂しいし、つまらない。なんだか家へ帰るのが嫌になった。
「聖希の家って本当にいいね。家の人みんなが一緒に働けて、一緒に生活していけるんだもの。学校から帰ったって一人ぼっちってことはないし。みんな家でニコニコしている。朝になればみんなでご飯を食べてみんなで畑のことをするし、いいねえ」
「うん、それが当たり前だからね」
　僕はここへ来て随分体を動かした。汗をかくことを覚えた。ただ暑いからの汗じゃなく、一生懸命働いた汗っていうのが本当の汗だと分かった。働くことの喜びや楽しさも分かったような気がする。僕は聖希と同じ年なんだけど随分違う生活をしていると気付いた。
　十七日、とうとう帰る日がきた。
「約束の日だから帰らなくっちゃ行けない。また遊びに来るからね、聖希」
「うん、来年も来てね。約束だよ」
「うん、絶対に来るとも」
　僕は、あのまんまるいジャガイモとお菓子のようにおいしいサツマイモをお土産に貰った。そして、もう一度周りの山々を見渡した。
（本当に来てよかった）
　おじちゃんたちがみんなで見送ってくれた。
「お世話になりました。ありがとうございました」
　僕は胸が熱くなった。おばちゃんの車に聖希と一緒に乗って十日間を過ごした緑の茶園に別れを告げた。
　今年の夏休み、十日間の収穫は大きかった。初めて親と離れての十日間だったけど、僕はいとこの聖希と田舎の暮らしができたことを本当に幸せだったと思う。

（天竜区）

お詫び

昨年度児童文学入選作品の「ライオンの成人式」につきまして、掲載に不備がありましたので、ここに心からお詫び申し上げますとともに、改めて全文を掲載させていただきます。

浜松文芸館　館長

【昨年度入選】

ライオンの成人式

恩田恭子

ある日のこと、高い山の中に一匹のライオンがやってきました。ライオンはぐるりと見渡すと大きな木の下の茂みに入っていきました。何をするのでしょうか。

茂みの中へ入ったライオンは、せっせせっせと前足で穴を掘り始めました。一日目、二日目、三日目ようやくそこからライオンが出てきました。ライオンが入って休めるくらいの長く深い横穴を掘っていたのでした。

しばらくするとオスのライオンは、お嫁さんを連れてきました。お嫁さんは、そこに入って仲良く暮らしていました。ある日のことお嫁さんは三匹の赤ちゃんを産みました。二匹は男の子、一匹は女の子でした。みんな小さなかわいいライオンでした。おかあさんが捕ってきた獲物を仲良く食べては元気に暮らしていました。日向ぼっこをしたり、おかあさんのおなかに乗ってじゃれあったりして遊び、すくすくと育っていきました。おかあさんもお守りが大変です。おとうさんが帰ってきたとき、

「そろそろ表に出してもいいでしょうかね」

と相談をしました。

「表はなかなか危険だからなあ。よおく見張っていて、少しずつ慣らしていくようにしなさい」

そう、おとうさんは言いました。

次の日からおかあさんは、三匹の子どもたちを連れて表へ出ました。表に出た子どもたちは、いろいろな木の間をくぐってはじゃれあっていました。初めて外の世界を知り、興味いっぱいでした。

「あまり遠くへ行ってはいけないよ。おかあさんの目の届くところにいなくてはね」

そう言ってお守りをしていました。毎日毎日そうした日が続いているうちに、子どもたちは大きくなり、ライオンらしい姿になってきました。子どもたちはおかあさんと散歩に出るのが大好きでした。おかあさんは、少しずつ範囲を広げて

いき、子どもたちも慣れてきました。
　そんなある日、おとうさんが
「もうそろそろ狩りの方法を教えてもいいのではないかね」
　そんなことをおかあさんに話しました。
「そうですね。少しずつ遠くへ行けるようになりましたし、お天気のいい日を見計らって、やってみましょうかね」
　そういいました。
　ある日のことおかあさんは、三匹の子どもたちを連れて、かなり遠くの草原へ出掛けました。
「見てごらん、あそこに野うさぎがいる。今からおかあさんがあれを捕ってくるから、ここで黙ってじっとしておかあさんの様子を見ていなさい。そこから離れてはいけませんよ」
　そう言っておかあさんは、そろりそろりと音がしないように近寄っていきました。野うさぎは気付きません。するとおかあさんは、さっと野うさぎめがけてとびかかり押さえようとしました。しかし、獲物のほうが気付くのが早くて、くるっと、おかあさんの後ろへ行きました。しかしおかあさんは、すかさずしっぽでぴしゃりとたたき、向きを変えて前足で押さえてしまいました。そして、その野うさぎをくわえて子どもたちの前へ持ってきて殺しました。おかあさんはそれをがぶっと前歯で噛んで皮をむきました。子どもたちはびっくりしました。おかあさんはその肉を子どもたちに少しずつ分けてくれたのです。
「おいしい。でも、おかあさんすごいねえ」
「そうだよ。みんなこうして自分で獲物を捕って、立派な大人になっていくんですよ。これからは毎日、狩りに行きましょうね」
　そうおかあさんは言いました。日が暮れるまで遊んで楽しかったのも、やがて狩りの道へと進んでいったのです。
　それからしばらくすると一番目の男の子も二番目の男の子もどうやら小さな獲物なら捕ることができるようになりました。でも、三番目の女の子はなかなか捕れません。
「やったあ」
と思っては、逃げられてばかりいるのです。
「そのうちにだんだん慣れるでしょう」
　おかあさんも、そんなのんきなことを言っていました。
　また雨の季節がきました。毎日毎日雨降りです。でも、おかあさんが獲物を何とか捕ってきてくれるのでよかったのですが、そのうちにおとうさんが来なくなりました。
「もうおとうさんは、帰ってこないかもしれません。だから、みんなも自分で狩りをすることを考えなくてはなりません」
　おかあさんは子どもたちに本格的な狩りの方法を教えることにしたのです。
「きょうはおかあさんが大きな獲物を狙うから見ていなさいね。でも、大きな獲物を狙うのはなかなか大変で、危険が伴います。勝つか負けるかのどっちかなんです。でも、ライオンは百獣の王といって世界で一番強い動物なのです。だから負けてはいけません」

そう話しながら歩いていくと、草原にとても大きな鹿が一匹いました。鹿はライオンたちに気付いていません。しかしおかあさんは、その鹿を黙って見過ごしました。そして、草むらの中に入ると、子どもたちに

「あれは、鹿という動物なんですよ。鹿には大きな角があるの。だからそれをねらって捕ることです。でも鹿は足がすごく速いから気をつけないといけません。今からおかあさんが捕ってきますから、よく見ていなさいね。ただ、ここから動いてはいけませんよ」

こう話していると、さっきの鹿がまた草原に戻ってきました。今度も鹿は一匹だけです。鹿がおかあさんライオンを見付けました。おかあさんは追いかけるのではなく逃げました。藪の中へ藪の中へと大急ぎで逃げていきます。鹿もすごいスピードで追いかけてきました。そしてライオンに近付いてきました。実はそれは、おかあさんがおびき寄せていたからです。作戦だったのです。だんだん竹の茂みに入ると、鹿は大きな角が邪魔になり、なかなか前へ進めなくなりました。そこがチャンスです。おかあさんライオンは、鹿の横から飛びかかりました。鹿の角が折れました。すると今度は鹿の背中をぎゅっと押さえました。後ろへ行くと足ではねられるからです。鹿も暴れました。お互いに生きるか死ぬかの戦いですから必死です。おかあさんライオンは見事でした。自分の体重を鹿の背中にドスンと乗せて、すきを見て、鹿ののどにかみつきました。とうとう鹿をしとめました。

おかあさんはその鹿を子どもたちの所に引きずってきました。子どもたちは、とてもびっくりしていましたが、大きなごちそうをおなかいっぱい食べました。おかあさんはそれを見て、ニコニコしていました。そして、子どもたちが一番おいしいところを食べ終わった後に、おかあさんはバリバリと骨をしゃぶっていました。子どもたちはこうして狩りの仕方を覚えながら毎日が過ぎていきました。

ある日のこと、おかあさんは、子どものライオンたちを呼んで、

「きょうはお前たちの成人式ですよ。お前たちは狩りも上手になったし、もう立派な大人になりました。だから、どこへ行っても大丈夫。元気に過ごしていきなさい」

そう行って一番上の子を送り出しました。

「いってらっしゃい。いえ、行きなさい」

一番目のお兄さんライオンは後ろを振り向き、おかあさんや弟、妹をじっと見てから歩き始めました。二番目の男の子はお兄さんを追って出ました。

「さあ、今度はあなたの番ですよ」

おかあさんは言いました。

「私も行くの？」

「そうですよ。あなたも立派な大人なんですから」

おかあさんは三番目の女の子の目を見てそう言いました。女の子はおかあさんのらんらんと輝く目を見て震え上がりました。おかあさんのおなかの中にはすでに次の赤ちゃんが暴

れていました。なかなか動きださない女の子を見ておかあさんは言いました。
「さあ行きなさい」
　でも女の子は行こうとしませんでした。するとおかあさんは
「ついていらっしゃい」
と歩き始めました。女の子は
「散歩に行くのかな」
とうれしくなって、ついていきました。しばらく歩いて、崖の上まで来るとおかあさんは後ろ向きになり、ポーンと後ろ足で女の子を谷底へ蹴り落としました。
「ぎゃー」
という女の子の声が一度響きました。そして、後は何にも聞こえませんでした。
　おかあさんのライオンは下をのぞくことはしませんでした。百獣の王になる子どもたちを育てるためのすさまじい訓練なのです。
　三番目の女の子は谷底へ落ちる途中で崖にぶつかり腰の骨を折ってしまいました。そして、何回転もした後、木々が茂っている中へ放り出されました。わずかな力を振り絞って、動かない体を少しずつ少しずつ引きずって、木の葉が集まっている所へ体を横たえました。
「お兄ちゃんはどうしているかなあ」
　そんなことを思い、痛さをこらえているうちに、落ち葉の柔らかさに慣れてきて眠りにつきました。しばらくして目が覚めるとあたりは真っ暗になっていました。女の子のライオンはおなかがとてもすいていることに気がつきました。体が動かせないので、周りをゆっくり見回すと、遠くのほうにパンが見えました。小さなパンのみみのようです。手を伸ばしましたが、届きません。もう一度
「よいしょ」
と思い切り手を伸ばしたら取れました。それを食べるとまた眠りにつきました。食べたと思ったパンは、実は雲の間からのぞいていた三日月だったのです。
　朝になって目が覚めてもやっぱりおなかがすいています。食べる物はもちろんありません。
「ゆうべのパンがないかしら」
　きょろきょろ見回しましたが、何にもありません。ぽかぽか暖かい春の日です。動けないままにじっとしているうちに暗くなりました。寂しくて
「おかあさん」
と呼んでみましたが、おかあさんのあのらんらんと輝く目を思い出し、もうおかあさんは私の所には来ないのだと思いました。
　何日かたつと、体がだんだん楽になってきました。おなかがすいて仕方がありません。その日は、十五夜のきれいなお月様が出ていました。
「ああ、パンがあった」

女の子はそう言って飛びつきました。でも届きません。もう一度ぴょーんと飛びついたら届きました。おいしいパンでした。でもそれは女の子の夢でした。お月様がふっくらパンに見えたのです。

うとうとしていると、何かごそごそと音がしました。何かが近付いてくるようです。じっとしていました。よく見てみると、それはお兄さんのライオンです。

「おにいちゃーん」

呼んでみました。返事はもちろんありません。なぜなら、それは夢の中なのですから。お兄ちゃんはいないのです。

「おにいちゃーん」

もう一度呼んでみました。もちろん聞こえるはずはありません。

しかし、遠く離れたお兄ちゃんのライオンの耳に妹の声が聞こえたような気がしたのです。なんとなく、どこかで聞こえたな、そう思いながら山の中を必死で歩いて進みました。やっぱり聞こえたのです。

「おにいちゃーん」

「ああ、妹の声だ。今行くよ。」

そう言って妹のほうへ走って行きました。妹を見てお兄ちゃんはとても驚きました。すぐに妹の体を調べました。するとどうやら傷だけではなく背中のほうにも怪我をしています。体がひんやりしています。お兄ちゃんは、妹の体をなめました。なめてなめて、舌が疲れるまでなめました。そうして元の落ち葉の上に妹を戻し、その上にさらに落ち葉をたくさんかぶせて

「まっているんだよ」

そう言うとさっとどこかへ走っていきました。しばらくすると、お兄ちゃんが戻ってきました。口には子狐をくわえています。眠っていたところを捕ってきたのです。お兄ちゃんは、その子狐を妹の上に乗せて、さらに狐にも落ち葉をかぶせて、そこを去っていきました。

朝になって、女の子は目をさましました。なんだか体がぬくぬくしているのです。なんとなく、前足を伸ばしてみました。

「あら?.なんともないみたい」

後ろ足に力を入れて立ち上がってみました。首を動かしました。

「どこも悪くない。よかったぁ」

そう思ったとき、そばには冷たくなった子狐が一匹いることに気がつきました。子狐の体温で女の子は守られ、命を吹き返したのです。

「おなかがすいたぁ」

女の子は、迷わずその子狐の皮をむいて、むしゃむしゃ食べました。おかげでさらに元気になりました。もう大丈夫です。それから、思い切り身震いをしました。落ち葉が取れました。

「さあ、これからどうしよう。おなかもいっぱいになったし、

散歩でもしようか。でも、気をつけないとね」
そう思いながら、一足二足西に向かって歩き始めました。
女の子は歩きながら、ふとおかあさんのことを考えました。
ある日、おかあさんがこう言ったのです。
「あなたは、本当に何でもできるようになったね。でも、あなたにひとつだけ足りないものがあります。それは、〝勇気〟です。あなたはもう勇気さえもてばどこへでもひとりで歩いていけます。これからは、勇気をもってしっかりやりなさいね」
そんな言葉を思い出しながら、広い草原のほうへ向かって歩いていきました。
お兄ちゃんは、その様子を少し離れた岩場からじっと見ていました。
「ああ、妹ももう大丈夫だ」
そう思いながら、妹とは反対の方向へ歩いていきました。
その二匹のライオンは、もうすっかり立派な百獣の王と呼ぶのにふさわしい堂々とした姿でした。

（天竜区）

児童文学選評

那須田　稔

今年度の応募作品は、三月十一日に東日本を襲った未曾有の大震災の影響を受けているものが多かった。

震災に影響を受けていることが今年度の応募作の特徴である。

あの大震災では、じつに多くのものを一瞬にして失ったが、今まで私たちが忘れていたもの――「絆」の大切さを確かめる機会を与えてくれたものでもあった。今年度の児童文学応募作に、例年にもまして、そのことが色濃く滲み出ているのを知ってうれしく思われた。

市民文芸賞「みみくんの物語」

耳の形がおかしいので、仲間たちから笑われているオス猫「みみ」が、自分のことはどうでもいいから、野良猫の自分を拾い上げ、やさしく育ててくれた飼い主の夫婦の「子どもを授かりたい」という願いを祭りの夜、神さまに頼むというストーリー。

あいにく今年は、大震災のために東日本の人たちの願いを優先させるので、神さまたちが、「みみくん」の町でききとどけられる願いごとは、たった一つだという。多くの願いごとが寄せられるが、神さまたちは、みみくんの心からの願いをかなえるという神さまたちの配慮がほほえましい。そして、そのみみくんに、もう一つのうれしい事件が発生する。それは、みみくんが自分なんて相手にもされないと思っていた猫たちのアイドルで超美人のかわいいメス猫のミミが、なんと、みみくんへ恋の告白をするというものだ。これは、もしかして、神さまたちのほほえましい別口プレゼントなのかもしれないという余韻を残して物語は、終わる。

入選「僕の夏休み」

これも、東日本大震災に、心痛めている東京に住む小学五年の少年の物語。

夏休みに川根の従兄弟のところに行き、農村の暮らしや、自然の豊かさにふれ、震災の中で生きる人たちとの心の連帯をそっと確かめるという佳作。

入選には届かなかったが、「未来旅行」「身勝手な悪魔」も、それぞれ発想が奇抜で、思わず笑いがこみあげてくる楽しいものであったことを付記しておきます。

評論

【市民文芸賞】

「鍼の如く」前篇

中谷節三

土

激しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうっと打ちつけてはまたごうっと打ちつけてみな痩せこけた落葉木の林を一日いじめとおした。

（中略）

お品はおつぎをふだんからやかましくしていたのでよその子よりも割合に動けると思っているけれど、与吉とふざけたりしているのを見るとまだ子供だということが念頭に浮かぶ。

自分が勘次と知り合ったのは十六の秋であった。おつぎは十五であった。お品は破傷風[注①]で死んだ。

白き瓶

櫟や樽に囲まれた農道のそばの空地で、節は体操をしている。もろ肌ぬぎにぬいだ着物の袖は腰にはさみこみ、上半身裸だった。

（中略）

空地の入口に姿を現したのは嘉七という男である。節の家の小作人だった。嘉七のうしろから、まだ小さい弟の手を引いた嘉七の娘が現れたが、娘は軽く頭をさげただけで通りすぎた。嘉七は一昨年の冬に、女房を失った。破傷風[注①]が死因だったことを節も耳にしている。

上段は長塚節（以下節）の『土』の、下段は藤沢周平（以下周平）の『白き瓶』（小説・長塚節）の冒頭部分の抜粋である。皆、実在の人物で表にすると次の如くなる。

（土）	（白き瓶）	（本名）	（没年月日）注②
勘次	嘉七	嘉吉	昭・11・5・6（71才）
お品	女房	みよ	明・36・12・20（38才）
おつぎ	娘	いま	昭・24　健在（60才）
与吉	弟	徳松	分家
卯平	父	半右衛門	昭・7・1・9（94才）

「土」は漱石からの依頼により、朝日新聞に明治四十三年六月十三日から十一月十七日まで百五十一回に亘って連載された。その舞台は長塚家の小作農をモデルとし、女房のお品を除き皆現存し実際のことをありのままに小説化した。主人公たる人物には気の毒なれども、是非もなきことと存申候。注③

「土」は連載二年後の明治四十五年五月、春陽堂より単行本として刊行された。それに漱石が序文を寄せた。「土」の中に出てくる人物は、もっとも貧しい百姓である。長塚君以外に何人も手をつけられ得ない、苦しい百姓生活と精細に直叙したものである。作者は鬼怒川沿革の景色や、空や、春、秋や雪、風を綿密に研究している。彼は精緻な自然の観察者である。（要旨）　最初「土」は読者にも新聞社にも歓迎されなかったが、単行本化後、明治・大正文学を通ずる名作となった。

節（たかし）は明治十二年四月、下總國岡田郡国生村（ごおうこうじょう）（現、常総市石毛町国生（こくしょう））に生まれた。村は関東平野を流れる鬼怒川の西岸、東北に筑波山を望む僻（へき）村である。父は県会議員の豪農であった。節は水戸中学校を神経衰弱の為、四年で中退帰郷した。中学時代より短歌に親しみ、子規の「歌よみに与ふる書」に啓発され、明治三十三年二月十五日の「日本」紙上に二首載った。同年三月下旬、節は子規庵を訪ねた。

○歌人（うたびと）の竹の里人おとなへばやまひの床に絵をかきてあり

他、即席の歌十首を作った。その一連の歌は新聞「日本」に載せられ、子規から格別目にかけられるようになった。節の歌は、神経質な節の性格に似て鋭い感受性を持ち、精細に清く堅かった。四月の第十三回根岸庵歌会にて、岡麓・伊藤左千夫（第十回より参加）たちを知った。節の繊細な静けさの性質は、出しゃばりの嫌いな麓とはすぐ馴染（なじ）んだ。

海坂藩（うなさかはん）（後述）を舞台に、武士の市井物が得意だった藤沢周平（以下周平）が「白き瓶（かめ）」を書いた理由は、本人も「夢にも思わず」と言っている通り、小生にも疑問はあった。

実情を言えば歌人長塚節は長い間私（周平）の心の中にあった人で、その人を小説に書くという考えは必ずしも唐突というわけでもなかった。発端は、平輪光三著『長塚節・生活と作品』という本だった。昭和十八年一月に発行されたこの本が、その頃、山形県鶴岡市郊外の農村に住む私の手に入った。十六、七才の頃だった。その一冊は私の愛読書となり、不思議にも今も手もとに残る一冊となった。私をひきつけたのは節〈の短歌〉だったと思う。四十年の歳月が経って長塚節がよみがえったのである。注④

もう一つ、小生の推測であるが周平が節と同じく結核を病

んだということである。周平は戦後、山形県師範学校を卒業し新制中学校の教師となったが、集団検診で肺結核が発見されて休職し地元の病院に入院した。昭和二十六年、二十四才の時であった。しかし治療の効果がなかったので、医師と相談の上二十八年二月、東京都東村山の篠田病院へ移り、同町の保生園病院で右肺上葉、肋骨五本切除の手術を三回に亘り受け、十月篠田病院へ戻った。同院は病床二百八十六あり結核療養専門病院で、周平は安静度③の患者として二十九年一杯二人部屋に、翌三十年三月、安静度④となり六人部屋へ移った。同院で四年九ヶ月療養し、昭和三十二年十一月退院した。

入院中に療養仲間で俳句同好会「のびどめ句会」（病院が野火止（のびどめ）用水―明暦元年、玉川上水の支流として作られた―のそばにあった）が作られ、周平も参加した。俳句の経験者は、主唱者のS氏のみで、皆句作は初めてであった。そしてS氏の勧めで静岡の俳誌「海坂（うなさか）」へ投句した。S氏は復員して静岡の病院（天竜の旧陸軍病院？　―筆者）へ入院していると き、「海坂」を知ったという。周平は二十八年六月号に四句、以後四十四句が入選した。

「海坂」は私が小説の中でよく使う架空の藩の名前であるが、種をあかせばおよそ三十年も前にその俳誌に投句していたことがある私が、小説を書くにあたって「海坂」の名前を無断借用したに過ぎない。注⑤

私は、ごく短い期間「海坂」を読んだり、投句したことがあるというだけで、瓜人先生にはお目にかかったこともないのである。

私の俳句はさほど物にはならず、自分の才能に早々と見切りをつけたのだが、羽公、瓜人両先生から今なお先生と叫ぶしかない程の感銘を受けたことも事実である。注⑥

相生垣貫二先生は兵庫県の人で、私が旧制浜松工業学校の五年生だった昭和十四年九月に六年ぶりに図案科教師（東京美術学校卒）として再任されて来られたが、私としても、専攻科が違い翌十五年三月に卒業してしまったのでお目にかかる機会は少なかった。戦後は国語科担任となられ、俳句に専念され羽公氏と共に「蛇笏賞」を受賞された。街でときどき、ひょうひょうと歩いておられるのをお見かけし、あいさつすると「おや、どなたさまでしたでしょう」という顔つきであった。

「海坂」は平成二十年四月号で、64巻4号―通巻七五八号とあるが、創刊は昭和二十一年（前身の「あやめ」を含む）、「海坂」と改題したのは昭和二十五年であった。（瓜人年譜―平成五年に城西と共に館蔵資料展が市文芸館で開催された）

節は大正四年（三十六才）咽頭結核で亡くなるが、その兆しが現れたのは五年前の明治四十四年四月であった。それも節には悲劇的ともいえる見合いの席上での事であった。相手は同じ県内の医師の長女、黒田てる子（女子大卒、二十一才）で、見合いは東京神田のある料亭で行われた。その日、節は風邪を引き首に白い繃帯を巻いてかなり憔悴した姿で席上かなり咳き込んだので、てる子に同席した兄の昌惠はひどく気

にし、あの咳は尋常のものではない、結核の徴候があるから受けるべきではないと強く主張した。昌惠は節の弟、小布施順次郎（養子）と中学、一高と同級で東大医科を出た医師であった。しかし、てる子自身は賛成で七月頃に長塚家に意志表示をしたが、節の方の返事がおくれていた。それは節自身の身体上の不安の故であった。しつこい咳に更に喉の痛みが加わり、秋になると更にはげしい咳に悩まされた。初めて医師にかかったのは、北隣・下妻町の耳鼻咽喉科の中島医師であった。節の喉の痛みは、咽頭結核の疑いがあると言われた。節は上京して岡麓（麓とは根岸庵歌会の初対面の時以来すぐ馴染んで、縁談、物を売る、金銭、病気入院の相談など、頼みごとを多くしていた）に紹介された木村医師もやはり咽頭結核ですと言った。木村医師は、節に付添って来た麓を一人だけ呼んで「相当に悪い状態で、病気はかなり進んでいます。放っておけば、あと一年か一年半の寿命と考えてもらって良いでしょう。とにかく慎重に療養することです」

木村医師の前に、弟の順次郎が予約を取ってくれた小此木（おこぎ）医師は、即座に節の病状を見ぬき転地療養する位しか手段は残っていないと判断された。人形町の木村医院には、弟順次郎の小石川の養家小布施家から通っていた。寿命一年か一年半と言われた十一月二十一日の夜、節は小布施家の一室で幾たびか汗をかき、寝ぐるしい不安の一夜を明かした。

明治四十一年、節は「アララギ」の創刊に参加したが、その頃歌は少なく、写生文や短篇小説に意欲を燃やし、四十三年に約半年間に亘り「土」を朝日新聞に連載した。（前述）四十四年春、発病し寿命一年か一年半と宣告された、この時のことを、節は翌四十五年二月発行の「アララギ」に「病中雑詠」其一として発表した。久々（ひさびさ）に歌を作る心境に達した節の心中は尋常ではなかった。

咽頭結核といふ悲しき病ひにかかりしに知らでありければ心にも止めざりしを打ち捨ておかば余命は僅かに一年を保つに過ぎざる如しといへばさすがに心はいたくうち騒がれて

○生きも死にも天（あめ）のまにまにと平（たい）らけく思ひたりしは常の時なりき

○しかといはば母嘆かむと思ひつつただにいひやりぬ母に知るべく

○なにしかも命かなしといはまくに答ふることは我は知らぬに　（他五首）

うめき声のような節のほとばしりであった。

更に弟順次郎から紹介された岡田和一郎博士（後述）に十一月三十日に診察を受け、同氏の経営する根岸養生院に十二月五日入院することになった。博士の治療は患部を切り取るものだった。第一回目の手術は十二月八日、この前に節は麓へ「もし岡田博士でうまくゆかなければ重ねて御配慮願いたく今からお願い申し上げます」と心配したが、手術は苦痛もなく、翌年二月五日まで入院していたが治った訳ではなく「手術を知らない」と言った木村医師を「深く疑ふ」と麓

に手紙を書いたりして、病気に対するいらだちを表していた。気晴らしに、近くの正岡家や画家の中村不折を訪ねたりした。麓や左千夫が見舞に来た。暮の二十四日に左千夫が来た。節に婚約者のことを聞いた。節は「兄さんに断りの手紙を書いた。昨日出したばかりだ」「それは気の毒な」左千夫は心配したが、婚約は解消したが、節の気持ちまでふっ切れた訳ではなかった。その夜、観劇に行った節の留守に、黒田てる子が見え、見舞の手紙と寝巻を置いていった。節は一晩中ねむれなかった。

「病中雑詠」　其二（アララギ四十五年四月号）

明治四十四年十二月二十四日—中略—われ生まれて三十三年はじめて婦人の情味を解したるを覚えぬ……其人一たびは我と手を携ふべかりつるに悪性の病生じたれば我に引き止む力もなく、かくて離れたるもの合ふべき機会は永久に失われ果てぬ—中略—夜もすがら思いは掻き乱れて、明くれば痛き頭を抑へつつ庭の寒き梢に目を放ちて

○四十雀なにさはいそぐここにある松が枝にはしばしだに居よ

○我がおもふ人にあらなくに山茶花[注⑦]は一樹が枝に相隔りぬ

黒田てる子との関係は切れ、岡田院長からは年内退院の許可は出ず、節は暗い気持ちで明治四十四年を送り、根岸養生院の病室で四十五年の新年を迎えた。

「白い瓶」では次の一節[注⑧]が初出と後出[注⑨]とで差異のあることが見える。初出版では〔節はそのころ、九州帝大医科大学病院[注⑩]の久保猪之吉博士が、節の病む咽頭結核の治療の権威であることを聞きこんでいた。（中略）根岸養生院の治療が終わったあとは、九州の久保博士に見てもらおうと思いはじめていた〕

突然、九州帝大の久保博士が出てくるが、これについて清水房雄（アララギ派歌人）は「私が一つ引っ掛かったのは、久保博士の存在を節がどんな経緯で知り、絶対的信頼を寄せるに到ったか」の件である。節は弟の順次郎から聞いたことになっているが、その根拠は何なのかと藤沢さんに手紙を出した。これに対し周平氏は「弟の順次郎から聞いたというのは事実でなく、推測に過ぎません。資料は見つかりませんでした。[注⑪]」と返答している。

後出版では〔その元日（明治四十五年）節は前日留守の間に見舞に訪れたという親戚の堤定次郎、靖夫父子を西黒門町の宿泊先に訪ねていった。そしてそこで意外な吉報を聞いた。定次郎は父の従兄弟で香川県庁の内務部長を務める官吏だった。この人が九州帝大医科大学病院の久保博士と親交があるので紹介してもよい、と言い出したのである〕と訂正した。

このことは周平の清水房雄宛の書信（便箋十一枚）で次のように記している。「節の日記に一月一日、西黒門町の中島宅に堤父子を訪ねた。重要なのは久保博士が歌人であり、夫人が漱石と面識があったという事です。定次郎を香川県庁の

内務部長としたことは、若干忸怩（深く恥入る）した気分であるが、高級官僚よりわかり易い部長とした（要旨）」

弟の順次郎が腸チフスで神田の橋田病院へ入院したので、一月七日節は見舞にいったが、久保博士のことについては一切ふれていなかった。

事実は、弟順次郎より紹介された岡田和一郎（前述―根岸養生院長。東大教授でもある）博士は久保猪之吉博士の恩師であり、小此木医師は久保博士の叔父である。ということである。しかし、周平は「岡田ルートは捨てました」と堤定次郎説を持ってきたことは、ちょっと解せないことである。久保博士が歌人であり、夫人が漱石と面識があったと述べながら、この線から考えなかったのは不審である。

節は二月二十日（明治四十五年）に根岸養生院を退院した。全治ではなく一応小康を得というところであった。しばらく下谷の旅館（那須館）に泊り、残っている用を足した。朝日新聞に連載した「土」の出版を春陽堂と契約し、朝日新聞社に漱石、池辺三山（主筆）、森田草平を訪ね御礼を述べた。このとき、節は漱石に久保博士への紹介状を依頼したのではないかと、私は考える。

久保夫妻の経歴は次の如くである。注⑫

久保猪之吉（明治七年生）医学者、福島県出身、明治三十三年東大医科卒、ドイツ留学、耳鼻咽喉科学を研究、帰国後京都帝大、福岡医科大学（九大医学部）教授となった。日本の耳鼻咽喉科の開拓者である。

久保頼江（明治十七年生）久保博士夫人。愛媛県の生まれ、旧姓宮本、漱石の二番目の下宿は母方の祖母の家の離れ。（松山中学校教師時代）結婚するより漱石の千駄木町の宅をしばしば訪れた。「ホトトギス」「明星」による俳人、詩人として知られる。

節は明治四十年十一月「ホトトギス」に短篇小説「佐渡が島」を発表、漱石を感服させて朝日新聞への「土」連載の依頼となった。節は「ホトトギス」を通じて久保博士夫人を知り、夫の猪之吉博士が耳鼻咽喉科の大家ということを知ったのではないか。夫人と漱石の関係より、漱石に久保博士への紹介状依頼は決して不自然なものではない。久保博士の出現は、病いと婚約者との最悪の関係の時に明るい光明であった。

根岸養生院を退院した節は所用を済ませ、三月七日に帰郷し身辺の整理をして十六日に再び上京、子規の家にみやげ物を持参して翌十七日、退院している弟順次郎や漱石を訪ね、漱石からは依頼しておいた久保博士への紹介状をもらった。この紹介状について「白き瓶」では女人幻影の章で、最終節にその由来の理由も無く唐突的に記されているのみである。

漱石は、節が「土」を連載中は胃を患って、修善寺温泉で療養していたが病気も回復してこの年の正月二日から朝日新聞に「彼岸過迄」を連載中であった。紹介状は次の如くである。注⑬

明治四十五年三月十七日（日）

福岡市福岡医科大学　久保猪之吉宛

牛込区早稲田南町より　漱石

（前略）小生知人に長塚節と申す歌人有之（これあり）

故子規と根岸短歌会などにて研究致し、その後小説などに趣味を持ち、一昨年は東京朝日新聞紙上に「土」と申す長篇小説を載せ候

この人不幸にして咽頭結核を患ひ岡田博士の治療を受け先頃退院致し候処、九州地方へ旅する予定にて貴所の診療を受け度く希望にて小生に紹介を依頼申し候　小生も知人のことにて甚だ気の毒に存じ貴兄に対し失礼とは存じ候へども思い切って引き受け、この書簡と認むることを致し候

何卒事情御了解の上友長塚節御地へ参り候節は一応御診療の上相当の御注意御与被下候へば有難存候

先右御願迄　忽々敬具

節が漱石より久保博士への紹介状を携えて東京を発ったのは三月十九日（明治四十五年）で、二十二日に京都へ着いた。途中、静岡・名古屋・更に伊賀上野の梅の名所―月ヶ瀬を廻ったからである。旅好きの節は、病の治療と共に旅をも優先させていた。死を覚悟した九州行きであったが、まだ見ぬ西国の風景が節の頭の中にふくらんでいた。「序（ついで）を以て煙霞（えんか）の癖（くせ）注⑭を満足せしめむ計画に有之候」と長野の歌友胡桃沢勘内注⑮に書き送っている。

京都では、京都帝大医科大学付属病院に同郷人が二人助手（医学士）をしていたので、その人の紹介で診察を受け、京都見物で二、三日滞在する軽い気持ちであった。切角、漱石からの久保博士への紹介状を持っているのであるから、一直線に九州へ行けば良さそうなものであるが。これも煙霞の癖であろうか。耳鼻咽喉科の主任教授和辻春次博士の診察を受けたのは二十五日であった。その結果、手術を進められその手術も根岸養生院の岡田博士と同じ方法で、しかも切り取った部分が根岸の数倍もある量を一度に切除する大掛かりだった為、半月程の入院を余儀なくされ、日程に大きな誤算を生じてしまった。手術は助手が二時間半にも及ぶ始末であった。喉に少し痛みが残ったが、熱が出た訳でもなかったので、二、三日経ってから桜が咲き始めた京都市内の散歩に出た。

京都で思いの外時間をくってしまったので、福岡に着いたのは、東京を出てから一ヶ月も経った四月二十二日であった。鼻下のひげがいかめしい沈着な風貌をした久保猪之吉博士の診察を受けたのは二十四日であった。漱石の紹介状を持ってはるばる茨城から来た節を博士は丁寧に診た。「患部が少し赤くなっている所があります。手当をするとなるとそこを治療することになりますが……」「心配することはありません。ただ少し様子を見てから治療する方がよいでしょう」先の京都大学病院で切った患部が荒れていて手のつけようがなかったのである。節はそこまでは気がつかなかった。次の治療までの間、節は鹿児島、熊本、天草、太宰府などを廻り五月七

日福岡に戻った。

二回目の診察は五月八日から始まった。博士が本腰を入れて節の病状を確かめにかかった。その結果を節は郷里の父に「一ヶ所組織に疑ゆしき処がある故、念の為焼き可レ申一週間ばかり通えとのことです」と知らせた。診断結果の記載は次のようであった。

五月八日　鼻孔異常なし　咽頭やや発赤　潰瘍なし　咽頭両側声帯発赤　潰瘍なし　会厭遊離　綠癖収縮　軟骨欠損アリ　体温三十六度六分

十三日の月曜日から会厭軟骨と電気焼却する治療が始まり、十五日、十七日、二十七日と続け二十九日の外来日誌に「咽頭粘膜発赤」の所見があり、病状の好転完治ということは望めなかった。

この間、節が朝日新聞に連載した「土」が、漱石の序文を以て春陽堂から単行本として発刊された。その序文に

長塚君は不幸にして咽頭結核にかかった。この間まで東京で入院生活をしていたが、今は養生かたがた旅行の途にある。せんだってかねて紹介しておいた福岡大学の久保博士からの末書に「長塚君が診察を依頼に見えた」とあるから、今頃は九州にいるだろう。

明治四十五年五月。

七月五日通院が終わり、節は福岡から別府へ発った。四国に渡り、松山へ行って道後温泉、子規自宅や漱石の下宿先などを案内してもらって宮島へ渡った。途中、七月三十日明治が終わり大正へと時代が替わった。帰京したのは九月十五日であった。二十六日、半年ぶりに国生の自宅に帰った。半年間、旅が主眼だったのか、本来の目的の病の治療の方は進展がなく、無用の時を過ごしたという他なかった。帰郷してしばらく身体の様子を見守っていたが、十一月になって東京へ出た。おくればせながら十二月に菓子折を持って漱石を早稲田南町の自宅に訪ね「土」の序文への御礼を述べた。

（注）

①破傷風。外傷で侵入した破傷風菌によって起こる。今は小児期に三種混合の予防注射によって法定されているので殆ど起こらないが、全身けいれんによる呼吸困難で死亡する恐ろしい病気である。お品の死は素人療法による。

②五味保義著『アララギの人々』白玉書房刊（昭和四十一年）より。五味氏は節の生地を大正十三年、昭和十一年、二十四年の三回訪れている。昭和三十七年、土屋文明の後を継いで「アララギ」編集担当となった。

③久保田俊彦（島木赤彦）宛、明治四十三年七月十七日付書簡。

④「アララギ」昭和六十一年一月号。

⑤「藤沢周平のすべて」（文春文庫Ｐ494）海坂藩は周平の故郷庄内藩の鶴岡がモデル。

⑥「小説の周辺」（文春文庫P234）藤沢周平のペンネームは昭和四十年から。
⑦山茶花。サザンカと読む。つばき科で晩秋から冬に咲き庭木や生垣、盆栽用。
⑧別冊・文芸春秋一六七号（昭和五十八年）―女人幻影の章
⑨文春文庫版（昭和六十三年　十二月刊）又は単行本（昭和六十年）、全集本。
⑩正式には九州帝国大学医科大学付属病院―略して九大病院。明治三十六年、京都帝国大学福岡医科大学として創設された。
⑪「藤沢周平のすべて」（文春文庫P62）清水房雄『白き瓶』を中にして。
⑫『漱石全集』（岩波書店）人名録
⑬『　同右　』（　〃　）書簡集
⑭煙霞（えんか）の癖（くせ）―深く自然の風景を愛する習性のあるのを、久しくなおらない病いにたとえて言う。持病。節にとっては病いが気になるのに二の次で主客転倒であった。
⑮胡桃沢勘内。赤彦の「比牟呂」周人？「アララギ」二十五周年記念号（昭和八年一月）に、望月光（故人）の思い出記あり。左千夫の葬儀に参列している（大正二年）。

（後篇につづく）

後篇は病める咽頭（のど）の奥からほとばしる節（たかし）の畢生（ひつ）の大作「鍼（はり）の如く」其一―其五（二百余首）です。

（中区）

【入　選】

一葉の流れて哀しい江戸の町

十津川郷士

「十三夜」の中で、明治維新をむかえた江戸の下町はいまだ暗く外灯も十分でない夜更け、どうして主人公が人力車夫の後姿でそれが昔の恋人であったことが識別できたのだろうか。

たしかに明治二十年ごろの下町が、暗く沈んだ町であったことは事実である。

西南戦役がやっと終焉したばかりの東京が十分に明るかったとはいえない。

が、十五夜の月光は満月で明るいが、十三夜は実はもっと明るかったと思える。だから、この本を手にした読者は十分に理解できたのだ。

一葉の小説には季節の気配や雰囲気が巧みに挿入され、主人公たちの境遇や背景が夜目にも明らかに浮かんでくる。ことに、冬の木枯らしの音やそれが起こす木立や梢の佇まいが、今にも聞こえてきそうである。

「わかれ道」のあざなを一寸法師と軽蔑される十六の傘屋の職人吉が同じ長屋に引越してきた姉さんのような二十歳過ぎの年恰好の意気な女と気心が合い、毎晩のように暇を見ては、その女の家に遊びに行く様子が、いい。どんなに遅くても、「お京さんいるかい、吉だよ」という声に「もう遅い寝てるから」なんて云われても、そんなはずはないよね、なんてあつかましくも、戸を開けさせてしまい、女もまた、厭ではない様子で歓迎する。その軽口のやりとりに、姉と弟のような関係でありながら時に、大人の男と女のような会話が混じる、と思うと、自分の境遇をざっくばらんに話しながら、己の不幸を嘆いてみせる幼さというか孤独さとでもいうか、しんみりした口調が漏れる。女はそんな弟みたいな相手に、本気で慰めながら、自分もどうかなと、振り返る素振りもみせるのだが、どこかでいつか別れる日を予感している。

「おいらはどうせまともに生まれてきたはずがない。生まれた時から父親も母親もわからない。生まれついての独り者、親戚縁者もいない」

「何か手がかりになるようなものがないのかね」

と、女は、

「赤子が生まれたときに持たせる錦のお守り袋か何か、ないのかい」

「それが何もないのさ」

江戸時代には、貧民に赤子を貸して、それを抱えて道端に莫蓙を敷いてこの可愛そうな赤ん坊のために、一文でも二文でも、乞いもとめるために赤子貸しがあったそうだ。そんな貸し赤子だったかもしれない、と思っている。

「いつか誰か親戚が迎えにきてくれないかな」

……なんて、本気でいう。

誰も身寄りのない身を知りながら、願望を口にするのがせめてもの自分へのなぐさめなのだろう。

で、誰も相手にしてくれない不良の吉にとっては、そのお京さんみたいな人が、まるでほんとの姉に思えてくる。

ふたりの会話はいつか誰かがいい運でも馬車に乗ってもってきてくれそうじゃないかという、到底実現しない夢みたいな話でおわるのだが。

師走の三十日の夜、吉が納期遅れの断わりのかえり道、道端に転がっている石ころを蹴りながら戻ってくると、後ろから両眼を軽くふさがれる。

「だれだい」「ああ、わかった、お京さんだろう」と図星に当てられる。

女のお高祖頭巾を目深に被り、普段に似合わぬ高級なお召しの着物姿に気がつき

「まさかおまえさん、妾奉公なんぞにいくんじゃないんだろう」

「なにも好きこのんでいくわけじゃないわよ……」

「今日、昼間親方が話してるのを聞いたんだ。叔父さんの口利きでどこぞの御邸へ行くっていうじゃないか、ほんとかい」

女は少時、無言である。が、肯定しているようだ。

「お京さん、それだけは止した方がいいよ。なにも、あんなところにいくこともあるまい。それだけの腕があるんだから、針仕事だけで食っていけないこともあるまい」

吉は必死で翻意をうながしている。

「でもね、しかたがないのさ。行くってきめちまったんだよ」

「まさか、ほんきじゃあるまい。断っておしまいな」

「困ったわね」と、お京は立ち止まる。「わたしは洗い張に飽きちゃって、もうお妾でも何でもよい、どうせこんなつまらないずくめだから気楽に暮らすことにきめたのさ」

吉は縁側の柱に背中をつけたまま、黙って、うつむく。

ここから吉のすこし長い独白的なセリフで己の運の悪さを愚痴混じりに嘆く。いろいろな人とちょっといい関係になると、直ぐつまらないことになってしまう。自分を角兵獅子から拾ってくれた傘屋の先代のお婆々さんも、紺屋のお絹さんも、可愛がってくれたけれど、婆々さんは中風で死ぬし、お絹さんは嫁入りを嫌がって井戸に飛び込んじまった。お前さんは、不人情にも俺を捨てていくし、もうなんもかもつまらない。

こんな傘屋の油引き職人で百人前の仕事をしたからって褒められるわけでもなし、朝から晩まで一寸法師と言われ続け、待てば甘露というけれどおれなんぞ一日一日厭なことばかり

振りかかってくる。一昨日は半次と大喧嘩をして、お京さんだけは人の妾になるようなはらわたの腐ったのではないと、威張ったのに……。

そんなお前さんを姉さん同様に思っていたとはくやしい、もうだれも信用しないし、お前さんともお別れです、長々お世話になりました、ここからお礼を言います。

人を馬鹿にしやがって、もう誰のことも当てにするもんか、さようなら。

そして、草履をつっかけて立ったところで、後ろから女の両手が両肩に置かれるのを感じる。

「お京さん、後生だから、その両手を離しておくんなさい」

吉が振り向き見上げる眼には涙が光っている。

元は、角兵獅子をやらされていた孤児が、縁あって傘職人の女親方に拾われて、ようやく一人前になったところで知りあった姉さんみたいに思ってなついていたものを、いつかどちらかが良い運に恵まれたら、祝いに、着物でも誂えてもらおうと、話あっていたのに。

そんな折に、一等なってほしくない妾奉公にでてしまうとは。

吉にとっては、哀しくも辛い別れである。

女にしてみても好き好んでの妾奉公ではない、できれば女独りで食っていける生活を望んではいるが、それで通せる見込みもない。

江戸の末期、明治の初めの頃、女ひとりが生きていくことがどんなに大変であったか。親の選んだ相手のもとに嫁入りするか、女中奉公でもして、気に入られた男の嫁になるか。そんな縁がなければ、妾奉公しか生活手段がなかった。玉の輿にでも乗れる幸運を夢みることぐらいがせめてもの楽しみだったかもしれない。それすらも許されない厳しい生活の現実が待ち受けている。

ふっと袖すりあえた天涯孤独の若い職人がその女にできることは果たしてなんだったんだろう。いつまでも、独り身で針裁縫で生きていってください、なんて、そりゃ出来ない相談だ。それはあくまでも願望でしかない。万がいちにも叶わぬことである。

女もその弟みたいな職人と仲良しの暮らしをいつまでも続けることは逆立ちしてもできない。婚期を失った女が好きな手仕事で一生安泰に暮らせないのが現実である。

一葉の云う、「宿世の」運命というそれであろうか。

彼女は好きでも結ばれぬえにしに翻弄される女を描き、その好きな相手の引く人力車に乗せてもらいながら、辛い別れを演じさせた「十三夜」、背後には自分ひとりでは如何ともしがたい浮き世の義理としがらみが粘着する世界がある。

さらに厳しい現実は、奉公口（今で言う勤め先）を紹介してくれた叔父夫婦の困窮を助けんがため、思いあまって、その店の金を盗んでしまうという罪を犯してしまう。出口のない袋小路にある。

こんな狭い選択肢の中でも女たちは懸命に生きている。

が、「にごりえ」のお力は源七の無理心中の刃にかかって殺される。

元は、布団屋を営む源七が菊の井のお力に惚れこみ、その挙句、家運を傾けてしまう。落ちぶれながらも源七はお力を忘れられない。土方の人足の手伝いをしながら親子三人の糊口を稼ぐまでに落ちぶれている。

女房が懸命に意見するが、もう源七の耳には上の空、まるで魂の奪われた抜け殻みたいな生活から抜け出せない。悪いことに、子供はときどきそのお力からといって菓子や饅頭を貰ってくると、女房はあの鬼、あの鬼から貰ってきたものを、たべるんじゃない、と捨てさせる。そして、その菊の井のお力にたいする憎悪を愚痴混じりに夫の源七にぶちまける。

源七は肩肘をついて横向きになって、黙って、それにたいして無言である。

女房の愚痴は延々と続く。毎日のように。

「おまえさん、お力がいまだ忘れられないのは仕方ないさ。でもね今一度立ち直っておくれ、そして余裕ができれば、いくらでも遊んでもいいじゃないか、男の甲斐性っていうからさ」

そして祭りの晩に、その憎い夫をこのようにダメにしたお力から一人息子がカステラを買ってもらって、家に戻ってくると、女房の恨み節が一層激しくなる。ついに、それを庭に捨てさせてしまう。

鬼、鬼と、その女を呼び捨てる女房の愚痴はとうとう夫の源七をして三下り半の離縁状を書かせてしまう。

「あたしゃ離縁されちゃ行くところがないんだよ、勘弁しておくれ」と泣いて許しを乞う女房に源七は頑として許さない。女は一人息子の手をとり、風呂敷一枚に子供の着物を入れて源七の家をでる。

そしてある朝お寺の近くで、心中した男女が発見される。

女は顎と頬にすこし刃物キズがあるが背中から袈裟切りにされている。その横に、腹を切った男の遺体が重なるように横たわっている。云わずと知れた女は菊の井のお力であり、男は土方手伝いの源七だった。

こんな憂き世からできるもんなら唐天竺までも逃げたいと漂客の結城に話していたお力が思い通りになったか。祖父の代から続く不運の一家の最後の女が、脱け出したいと思っていた宿世の縁からおのれを断ち切れたのは、無理心中とは、余りにも哀れである。

源七に離縁された息子と女房の行く末は、分からない。女が自立して生きていける時代ではない明治の中期、小さい子供を抱えた女ができる仕事は限られている。運良く、子供と一緒に、雇ってくれる女中の仕事が、戻れる里があればそうするだろうが、一旦、実家を出た女は三千世界に棲み家がな

いと、云われた時代、ボロを纏うて乞食の真似をするか、或いは酌婦でもするか、縁を頼ってなんとか生きていける場所がみつかったのだろうか。この別れも切ないものである。裕福でない親子が父親に捨てられて果たしてうまく生きていけるだろうか。一葉は、その後のことは一切書いていない。

この心中事件の二、三日後、お寺の屋根に火の玉らしきものを見たという、それで結んでいるだけである。

「たけくらべ」の美登利の運命も、眼にみえる。

やっと胸のときめきを覚えた初恋にうつつを抜かしているうちにその相手の信如とは、さよならとも、互いに言うこともなく、永遠のわかれである。一輪の水仙の切り花が挿してあるのに、彼女は気づくも、ああそうか、となぜか独りうなずくのみ、それが、この初恋のすべての終焉であり、次の大人への時代へ否応なしに行かざるをえない出発なのである。

恋がどんな容態なのかも知らぬうちに、人恋ふるという情感を内蔵しながら、もう次のステージに立たされる、美登利の姿が切ない。

あとは姉の後姿がそっくりそのまま自分の姿になる、それが現実の宿命である。

昨日まで無邪気に遊んでいた友たちもそれぞれの自分の選択できない大人への道へと踏み出していく。

数年後には美登利も竜禅寺近くの楼閣にその美しく着飾った艶姿を見せるに違いない。

「おい、美登利ちゃん、綺麗な姿で顔見世をしたんだって、知ってるかい」

「そりゃ綺麗だろうさ」

「おいらも一人前になったらその金で会いにいくだろうさ」

「ちゃんと相手をしてくれるだろうかね」

「おいら友だちだったんだからさ、そんな心配はないだろう」

そんな噂ばなしも、いつか消えてしまう、この世の定めを当然のごとく予想してしまう。この「たけくらべ」の終わりも、哀しい現実となるだろう。

それを承知の思春期の一瞬の輝きを描いてみせた、一葉もさぞかし切ない思いで筆を擱いたに違いない。

町内が違うだけで子供たちが対立して喧嘩騒ぎをおこしてしまうその場面がまことに見事に活写され、一葉の筆遣いが鮮やかだ。同じデザインの法被姿の襟に地元の親分の名前の入ったなんとか連と書いてある。一人前でもない子供がねじり鉢巻に落とし腰の帯のいなせな格好と雪駄を突っかけた祭り装束をさり気なく好ましく描く一葉がそこにしばし佇む。十三、四の幼さを残した元気な江戸の下町衆の威勢のいい啖呵が今にも聞こえてきそうだし、笛に太鼓の音も初夏を彩る。

花街という特殊な場所に育つ子供たちの掛け声や端歌小唄の聞きかじりをまるで門前の小僧のごとく、つい口ずさむのを、大人に聞き咎められてすこし恥ずかしく頬を染める姿に、この年頃の子供たちの情感をさらりと教えてくれる。

ほんの束の間の思春期の大人のようで子供みたいな、他愛

のない毎日の出来事が、四季と日めくりで、彼らの住む界隈が目まぐるしく変転しながら時の過ぎ行く姿は余りにも短い。町内が変わるだけで彼等の気持ちが友情から敵対心に変化し、些細なことで、鋭く対立する様子は現代と変わらない。

しかし彼らは純真である。懸命にその環境を生きんとして、祭りには精いっぱいの趣向を凝らした遊びを考え、その日に備えた装束に身を包み走馬灯のごとく駆けていく彼らがいる。

せっかく芽生えた恋ごころも朋輩たちの無邪気な揶揄やからかいに巻き込まれながら、却って遠ざけられる二人の気持ちが、祭りの晩の喧嘩騒ぎの中で、直接的でなかったものの、草履を額に投げつけられたことをきっかけに切なくも離されていく。

永遠に戻らない思春期の哀しさである。気がついたときに、すべてが終わってしまう人生がそこにある。

一葉の一生は短い。であるが故に、凝縮された生涯の質度の濃さは尋常ではない。

父は幕末に武士の株を買い幕臣となり、南町奉行配下の与力となるが、その三年後に幕府瓦解、明治新政府の下級吏員となる。かなり不本意であったに違いない。一葉はこの父の思いを胸に小学校から高等小学校の四年までを卒業した。

途中、中島歌子の歌塾で和歌を習い、絵草紙を読みふけるとある。

瀬戸内寂聴は「日本で始めての女流職業作家」と呼ぶ。

父の死、兄の死、弟の死と、いう不幸のなか一葉は母と妹を養う戸主となり、貧窮を味わいながら、小説を書くことで糊口を稼がんと懸命に生きた。

一葉の日記に目を通すだけでその貧困の惨憺たる状況が読みとれる。まさに債鬼に追われる毎日が続く。具体的には、質屋通いと友人、知人への借金の依頼に走る。その間隙を縫うようにして小説の勉強のため、上野図書館へ通ったといわれている。

西南戦役が終わって既に十六年もたつ、明治二十六年ごろである。

一葉は見栄も外聞もなく毎日の生活のため、ひたすら借金のために奔走する毎日である。

最後は一面識もない赤の他人へも借金を申し込む。質草もなくなれば、もう自分を売るしかない瀬戸際まで追い込まれていく。

この過酷な「宿世の因縁」とでもいうべき現実に直面した一葉が開眼した文学こそが、「大つごもり」「にごりえ」「十三夜」「たけくらべ」というこの時代を冷静にかつリアリスティックに描き切り、同時代の文人達を瞠目させる作品に開花させたのである。

透徹した一葉の世界は、その現実を直視したものをもはや躊躇なく淡々と書く事のできる境地であったに違いない。

嗚咽をかみ殺す姿すらみせない一葉は最後まで自分は武士の娘であるという一点から身をそらすことがなかった。否、むしろ雄々しい姿すら誇らしげに見せていたのではないか。自虐的と思えるほどだ。

幕末から明治維新にかけて生きた市井（しせい）のなかの不幸を象徴するような女たち。宿命の枷に嵌められたが故に、泪をのんで親戚や子供や親たちのために、身を犠牲にしてでも生きていかざるを得なかった女性たちの生き様をリアルに描き切った。その視点はドキュメンタリー映像作家のようにクールである。

江戸の木枯らしは寒い。薄い半纏のようなものを纏いすきま風を避けながら硯の墨をすり、筆に託した端正な文字はそのまま出版されてもおかしくない原稿にしあがっていく。

「わかれ道」を冒頭にして一葉の流れるさまをなぞってみたのは、これが、最後の作品であり、ほとんど短編しか書かなかった一葉の作品のなかでももっとも短い。十七歳ぐらいの傘屋の職人と二十歳ぐらいの「意気なおんな」と書かせた独り住まいの女との短い交流を往復する二人の会話と動作には得もいえぬ関係が芽生えつつも、それは恋ではないが、姉弟の関係のようでそれでいて大人の男と女の境遇を語り合い、或る師走の末に、二人はそれぞれの道へと、別れていく。

吉と呼ばれる職人は天涯孤独の捨子の身であれば、恐らく死ぬまでその親方の家で働くであろう。一方のお京という独り身の女は係累は叔父ひとり、針仕事は達者であるが、それだけで生きていけない明治中期の女である。生きるために、妾奉公にでる決心をする。江戸の空っ風の吹く夜は哀しくも寒い。

その夜を最後に、二人は、別れの道をたどることになる。

「おまえさんがひょっとして、俺の姉さんだったら、どんなにか嬉しかったろう」と、しみじみと語る吉、「おいら嬉しくって、首っ玉に飛びつくだろう」

そんな思いは木っ端微塵になってしまう。

「おいら、お京さんに、妾奉公にいくだろうなんて、そんな謎かけをしたわけじゃないんだよ」

が、それが現実になる。吉にとっても、お京にとっても、わかれ道なのである。

一葉は人生の別れを好んで書いているのではないだろうが、ことごとくそのエンディングは、別れで終わっている。

次々に発表される一葉の作品の煌めきに、魅せられたように文人達は次々と一葉のもとを訪れ知己になり、当時すでに錚々たる文人はもとよりやがて著名になる作家たちの期待を担うことになるが、すでに、肺結核に冒された彼女には、筆を持つ力さえなくしていた。

その命、旦夕に迫る。

明治二十二年一葉十七歳のとき、事業に失敗し一家の行く末を案じ死期を悟った父の勧めで渋谷三郎と婚約している。

その年、父の死後樋口家の没落を知った婚約者はその婚約を一方的に破棄した。

そして、一葉ようやく小説を書いて生計を立てんとした頃、新潟県の検事に出世した元の婚約者である渋谷三郎が突然、一葉を訪れ、著名な文学者を紹介しようとして、復縁を申し出ている。そんなことに拘わっている時間もないほど、毎日の生計と小説修行に没頭していたころである。明治二十五年の頃である。

「いささかの感慨なきにしもあらず」と、日記に記しているが、どのような感慨が一葉の胸に去来したのであろうか。胸におさめて以後一切それについて触れていない。すでに、一葉には過去の一顧だにすべきことと思えなかった。

明治二十九年四月に肺結核を発病し、八月に往診した医師により絶望と診断される。奔馬性結核という急速に病状の悪化する病である。

その三ヶ月後の十一月に亡くなる。

惜しみてもあまりある急逝であった。漸くにして文学界においてその才能を認められ、これからという時期である。

森鴎外、幸田露伴、斉藤緑雨に泉鏡花といった文人が絶賛する才能をことごとく発揮することもなく他界した。

病床にあって高熱にうなされながら一葉の脳裏を掠めたものは父の則義のことであった。幼児の頃から一葉をことのほか可愛がり、その才能を認めていたのかもしれない。絵草紙を買い与え、小学校に通わせ、中島歌子の歌塾にまで通わせた。当時としては、貴族や上流社会の子弟が多く通わせる著名な塾であった。

一葉をして文学の道へと開眼させた同窓生たちと知己になるが、そのなかに田辺花圃がいた。彼女が小説を発表しその稿料を得ると知り、自分もと、思い立つ。

その人生のスプリングボードに立たせてくれたのも父であった。

母は江戸時代の女性であれば、女に教育は無用とする姿勢は変わらなかった。

父が甲州山梨の百姓出身で、江戸に母と一緒に出奔し、所帯を持ち苦労の末、武士の株を買い、士族になれた経緯を一葉はとくに忘れることはなかった。

終生父にたいする気持ちは特別であった。

夢に往来する父、則義は一葉の頭髪を撫でながら、優しく微笑む。神田神保町で荷車請負組合という運送業を設立当時の威勢のいいてきぱきと雇い人たちに指示を与える父の姿は終生、一葉の脳裏から離れることがなかったに違いない。それに、中井桃水の偉丈夫な姿が重なる。小説の師であった桃水の優しい容貌と親切な態度は、父に似ていたに違いない。成就しなかった一葉唯一の恋の相手である。

朦朧とする意識のなかでもはや一葉は疾風のごとく駆け抜

けた短い人生を恨むことも、悲しむこともない、たおやかな水脈を流れる自分の名のごとく、一葉だと、冷静に自分を傍観しているようだった。

おわり。

（中区）

評論選評

中西美沙子

今回応募された評論のどれもが、明治時代に関わるものでした。過ぎ去った時代から今を考えることは、未来への視座を拓く行為でもあります。

「鍼の如く」

この評論の魅力は、二人の作家、長塚節と藤沢周平をキーワードに置いたところです。ともに結核を病んだ作家であるからこそ表現に駆られる世界を、丁寧に描いています。藤沢が長塚節に惹かれたのは、共通する土着への思いだけではなく、「死」と「生」への飽くなき意思があったからだと感じます。彼らがともに「寡黙の士」であったことは文体に表れています。詩歌や小説から見える「文体」は重要です。その辺を意識して後篇を書かれるといいでしょう。二人の作家の文体には、記号としての言葉だけではない固有の文体があります。病としての結核と彼ら固有の文体が重層的に描かれると、より魅力が増すのではないでしょうか。後編がどのように描かれるか楽しみでもあります。

「一葉の流れて哀しい江戸の町」

樋口一葉の小説を丁寧に読んでおられて敬服いたしました。「十三夜」が描く江戸の風情を残した維新期の暗さから、その時代の人間が鮮明に現れてくる期待を感じました。が、なぜか表面的なものに捉われ、もうひとつ像が明確に結ばれないもどかしさも感じました。それは、一葉の歴史的資料や使われている小説の引用が適切でないところがあるからだと思えます。推敲なさればとても良いものになるのではないでしょうか。筆者は一葉を「ドキュメンタリー映像作家のようにクールである」と表現しています。明治期の市井の人間を描いた一葉には、社会を見る冷徹な目と愛しみがあります。その部分を適切に定着させるといいですね。

すでに読んでおられると思いますが、江藤淳の評論に「漱石とその時代」があります。それは論をなす大きな指針になるのではと思えます。参考のために。

「日露戦争から何を学ぶ」

歴史に対する骨格の大きさに感心しました。多くの作家や歴史家が「明治と戦争」を描いています。それに少しでも肉薄する作品を描くとしたら、歴史を大雑把な骨組みで論ずるのは至難なことと思われます。散漫になる危険性が否めないからです。「大津事件」への言及がありましたが、その経緯や背景、家族や親族から見た「小さな世界」から論をなすのがいいのではと思えてなりません。歴史観を深めるためには、感情的な断定は抑えた方がよいと考えます。筆者の文章からは、歴史や人間に対する思いが気力になって伝わってきます。読んでいて、表現する楽しみを改めて感じました。

随筆

【市民文芸賞】

私のくせ・生き方

前田徳勇

私の生活習慣、考え方

今年九十才の私の馬鹿な生活習慣、考え方を申し上げます。

(1)考えをデジタル化する習慣

例えばプロ野球チームの強さの評価です。若い頃は、チームの強いのは一番は監督力の五十%、次は投手力の三十%、打力の十%、守備力の十%と考えていました。年を取った現在はこれが激変して、一番は投手力の六十%、次は打力の十%、守備力の十%、監督力はたったの十%、運の十%となりました。

また演歌のよし悪しは、若い頃は作曲の五十%、歌手の三十%、作詩は二十%としたものでした。ところがこれが最近では作詩五十%、作曲二十五%、歌手の二十五%になりました。良い詩に誘発されて良い曲ができたなどとよく聞きます。美空ひばりのヒット曲の「川の流れのように」をよく味わってみると、この唄の作詩者の秋元康氏から老令者の人生哲学を教わっているような気持ちになります。唄を歌うときは詩も味わって歌うようになりました。

(2)歩数の想定

例えばあの駅からあの本屋まで何歩で行けるのだろうか、うちの玄関からあの電柱まで何歩で行けるだろうかなどと、夜寝ながら考えるのです。だんだん当たるようになってきますよ。馬鹿なことを考えるものですが、一歩を六十センチとすると距離の計算までできるようになります。

(3)目をつむって何歩歩けるか

やってみたことありますか。すこし広い人通りのない道路でやってみましょう。目をつむる前に目標をしっかり見つめておき、目をつむってから瞼の残像に頼って前進するのです。脳の何神経が歩行を司っているかは知りませんが、どちらに歩いているかさっぱり分からなくなります。そして塀にぶつかるのかと心配して目を開けてしまいます。現在の私は十歩がよいところです。たまに二十歩を試みますがすぐアウトです。なお素人考えですが、そのときの足跡が不自然に乱れている場合は左右のバランスを司る脳のコントロール機能に異常があり、悪く考えれば脳梗塞の前兆かなどと考えます。

(4)脳梗塞についての警戒

病院に行くと若いのに脳梗塞の結果の

不自然歩行の人によく会います。脳梗塞は左右の脳のどこかの血管が小さい血栓でつまり、発症した反対側の身体に運動麻痺がおこる状態です。私と家内は朝、目が覚めると、両手の拳をしっかり握り、片目ずつ開けて視力の異常を発見して脳梗塞の前兆とするのです。私は毎年ドックに行っていますが、とくに頸動脈の狭窄を見て貰います。ここの血栓のはがれは脳梗塞の最大な原因です。

⑸数字を文章化して覚えること

学校でも$\sqrt{2}$（ルート2）を「ひとよひとよ・・・」などと覚え方を教えるようですが、私は日常利用しています。銀行で口座を作ったとき、一見してその銀行のカード数字を覚え今でも言えます。「〇四〇九〇七〇」を「よくなれ」と文章化して覚えたのです。πは三十一桁まで言えます。「産医師異国に向う産後薬なくみ文や読むに虫さんさん闇に鳴く」です。

⑹物事の進捗度の考え方

いやなこと、行きたくないことなどたくさんあります。例えば東京の親戚の家に義理がかった用事で行かなくてはならない用事。この仕事の数学的半分は東京の家に行った頃ですが、私は次のように考えることにしています。始動がたいへんだと考えるのです。近所の遠鉄の駅に着いたらもうこの仕事の九十％に達したと考えるのです。東京の家に着いた頃にはもう百％ぐらいになっているのです。等分でない計算をするのです。帰りの汽車のなかはおまけのようなものです。

考え方次第で仕事、用事の比重がたいへん変わるように思えるのです。

まだまだ申し上げたいことはありますが、以上のような馬鹿な考え方が私の長生きの秘訣かも知れません。

以　上

（浜北区）

【市民文芸賞】

年賀状

北山七生

中学二年生の二学期、クラスにZさんという色白の美少女が転校して来た。父親は地元の県立高校の英語の教師だという。

それでなくても転校生は、いや応無く周りから好奇の注目を浴びることになるが、最前列の真ん中の席を与えられた彼女は、授業中、どんな教科でも積極的に挙手をして、すぐに目立つ存在になっていた。

ほとんど授業には関心がなく、はなから喜んで後ろの出入り口に一番近い最後列の席に座っていた私は、そんな彼女を、「自分とは、まったく人種が違う優等生なんだなあ……」と、遠くからボンヤリと眺めていた。

そんなある日、思いがけないことが起こった。そのZさんが、いきなり私の横の席に移って来ることになって、以来、親しく話し掛けられるようになったのだ。

それまで私の左隣に座っていた女子が、最近、視力が弱くなってきて黒板がよく見えなくなってきたので、前の席と替わって欲しいと皆に願い出た時、即座に自分が替わっても良いと申し出てきたのが彼女だった。そして私の横に来るなり、休憩時間になると、必ずいろんな話題を持ちかけてきて親しく接してくるようになった。

この頃、しばしば女のコに誤解を与えてしまうのが悩みの種だった私は、「またか……」と複雑な思いにかられた。

まだ転校して来て間も無い彼女は、余計に私の肝心の中身など知るよしも無く、勝手に買い被って好意を抱いてくれたに違いないと思ったのだった。

男として女のコに全く相手にされない、モテないというのも、勿論、淋しいことだが、逆に学業成績が芳しく無いにもかかわらず、見かけだけで女のコから勘違いをされて好意を抱かれることも、これはこれで、また辛いことなのであった。

どんな悩みも所詮は当人にしか計り知れないことではあるが……。

「おまえは良いなあ男前だで。絶対に女にモテるで得だよなあ」なんて、同級生から羨ましそうに言われる度にうんざりとした。そんなことを言われても一つも嬉しくなかった。外見と中身の実力とが全く伴っていないことは、自分が一番良

く知っていたからである。
女性でも見かけによらず中身の無い人は、白痴美人と言われて嘲笑の的にされていたので、自分も他人から「男前だなあ」なんておだてられる度に、その同類にされているようで落着かないのであった。

更にもう一つ、私が女のコたちに勘違いを与えていた材料に、ギターがあった。
昭和三十年代の後半、田舎の町では、まだギターを弾く少年はほとんどいなかった。私は本業の勉強が皆目出来ないくせに、ギターを学校に持ち込み得意がっていた。
休憩時間や放課後に、当時流行っていた映画音楽の禁じられた遊びやブーベの恋人、鉄道員などを弾くと、すぐに女のコの輪が二重にも三重にも出来た。

翌年の正月、自分のクラスを中心に十二人の女のコたちから年賀状をもらった。その中でも、とりわけ達筆の素晴らしい年賀状が一枚あり、それはZさんがくれたものだった。
クラスを代表する才女からのその年賀状を、本来ならば飛び上がるほど喜ぶべきことだったのだろうが、私は劣等生の負い目から素直にはなれず返事すら出さなかった。
新学期が始まって登校してからも、隣の席にいながらお礼の一言も言わず、いや、そればかりか目を反らしたまま、彼女と顔も合わせようとはせず無視し続けてしまった。
その後、私は中学を卒業すると、成績不良で地元の県立高校には入れず、都会に出ることになって、それっきり同級生や彼女とも疎遠になった。

★

それから更に十数年後、既に成人になって久しい正月休みのある日、実家に帰省した折、たまたま親父宛てに届いていた沢山の年賀状の束の中に、偶然、Zさんという苗字の人からのものを見つけて、
「もしや、これは……」と、はっとなった。
Zというのは、地元でも非常に珍しい苗字だったので、すぐに彼女と何らかの関係のある人に違いないと気が付いたのである。
「Zさんって珍しい苗字だけど、どんな人なの?」
さり気ないふりをして親父に尋ねると、
「ああ、この人は郷土史研究会のメンバーの一人で、○○高校の英語の先生だよ」と、答えてくれた。それはまさしくあのZさんのお父さんだった。
Zさんのお父さんが、親父と同じ趣味の仲間だったとは驚いた。
私の親父は田舎の素人考古学者で郷土史家だった。地元の新聞に郷土史関連の記事を連載し、たまにテレビ、ラジオにも出演して、郷土の歴史に関するコメントを求められたりしていた。
自営業で時間的な余裕もあったので、研究会の会長職にも就いていた。そしてZさんのお父さんも、その会の会員の一人だったのだ。
私は、とても自分の口から、それならそのZさんの娘さんと自分とは、中学時

代、同じクラスの同級生だったことがあるとは言えず、ただ黙っていた。

親父も余計なことは何も言わなかったが、会合の端々のついでに、たまには家族の話題も出ていて、そんなことは、先刻、承知していたかも知れない。

会長の息子が、地元の県立高校にも入れないような落ちこぼれだったなんて、親父にも余計な恥をかかせていたのではないかと、その時、改めて気恥ずかしくなったものである。

と同時に、ふっと、ある一つの思いが脳裡をよぎった。

同級生だった娘のZさんは、あの頃から、このことは知っていて、だからこそ少しは私みたいな劣等生の男にも、親近感を抱いてくれていたのではなかったのか……と。

それにしても、あの時、せっかくの年賀状にお礼の一言も返せず、なんて失礼なことをしてしまったのだろうと、今頃になって悔恨の情にとらわれるのであった。

ただ聡明な彼女は、その後、すぐに私の意気地の無さや劣等生ぶりに気付いて幻滅し、ほとほと愛想を尽かしていただろうことだけは、容易に想像できるのだった。

そして今頃は、彼女に相応しい素晴らしい彼氏がいるんだろうなあ……と、思いを巡らせるのだった。

（北区）

【市民文芸賞】

父からの答え

和久田理仁

掛川に往診するため、車で天竜川を渡っている時だった。急に胸が締めつけられるような感じがして、ああ父が亡くなったのだな、と思った。三月の乾いた空は突き抜けるように青く、小さな白い雲が低く浮いていた。母からの携帯電話の着信がその事実を伝えた。

僕は鍼灸師である。東京の大学を卒業できずプラプラしていて、カラダを壊したのをきっかけに資格を取った。長男だったので四十路を過ぎて田舎へ帰って、治療院を開いた。三年経って、父が病いを患った。

これから書こうとすることは、至極個人的な記録だ。これを書くことがどんな意味を持つかはまだわからないけど、末期がんの父が「身」を持って僕に教えてくれたことを記そうと思う。もちろん、病態病状には個人差があるのはわかっているし、現代医学とは的ハズレのことを言うかもしれない。しかし、こういう往き方もあったんだ、ということを伝えなければ、と思ったのだ。

一、がんは悪い病気なのか？

父のがんが見つかったのは、去年の六月。胆管狭窄で発熱した父が入院していた医療センターで、主治医に呼び出された。「十二指腸ファーター乳頭がん、ステージⅣ、余命三ヶ月です」

さて、どうしようか、と僕は悩んだ。父は元々気が弱い性格だったが、老いてより神経質で過敏になり、取り越し苦労で母を困らせるようになっていた。とりあえず直接伝えるのは止め、母と弟と家族会議をした。選んだ結論は「告知なし、すなわち抗がん剤なし」だった。というのは、僕が近藤誠先生のがんに関する著作本を拝読していたことや、神奈川に住む弟が、父とこれから看病する僕らのことを考え「自然のママでいいよ」と後押ししてくれたことに因る。末期がん、しかも肝転移が認められるであろう類のがんに対して、わずか一ヶ月の延命、しかも副作用がある抗がん剤が果たして有効であるかは、自分なりに答えは出ていた。告知した場合の父の精神的混乱を想像するに、彼が抗がん剤投与の選択を冷静にできるとは僕には思えなかった。この家族のわがままな意思を最終的には尊重してくれた、主治医のH先生には今でも感謝している。

考えようによっては、がんは悪い病気

ではないかもしれない。事故や心筋梗塞などの突発的な病気とは違って、死までの緩やかな道程が予想できるからだ。本人にも家族にも、最期に向かっての準備をする時間の猶予がある。

「抗がん剤をやらない場合はどうなりますか?」という僕の問い掛けに、「坂道をゆっくり下るように、木が枯れるように往くのだと思います」と、セカンドオピニオンを伺いに行った藤沢のR先生は答えてくれた。そう遠くないところに死が待っているということは、僕はわかっていた。

二、生命(いのち)の来るところ

それから四ヶ月。余命宣告をされた三ヶ月を過ぎた晩秋の日曜の夕方、父は自宅で大量に吐血した。食道大動脈破裂だ。合併症として予想されたことだったが、救急車を呼ぶ母はいささか混乱していた。救急医のおかげで止血が成功し、父は一命を取り留めた。医療が発達していなかった一昔前なら、これでジ・エンド、だったと思う。

入院中はほぼ毎日、病院へ行った。H先生が許可してくれたので、病室のベッドでお腹の水を散らす為の鍼灸治療をすることもできた。吐血後三日ほど経つと、腹水が溜ってきた。お腹がみるみる膨れてゆく。水はお腹で留まっていたが、これが足にも溜っていくと死期が近いことを意味する。もうこちらに戻っては来れない。

「そろそろ、でしょうか?」

「年越し、できないかもしれませんね……」と先生は言った。

ところが、輸血、酸素の補気補血により父は少しだけ元気を取り戻した。年末には退院、自宅で年越しをした。まるで再びスイッチが入って電気が通じたみたいだった。床屋も行った、出前のラーメンも食べた。

その時、僕は感じた。生命(いのち)はどんなに文明が発達したって科学でわかるモノではなくって、カミのみぞ知る領域なんだと。自己治癒力という言葉があるけど、自分の内にそんな力があるわけではなくって、あっちの方からやって来るのではないかと。それをキャッチするのではないかと。まさに、仏教でいうところの虚空菩薩の教えみたいだ。すべては虚空からやって来て虚空へ還る。

三、最期の顔

一月に入ってすぐ、悪寒戦慄で発熱し再び入院。しかし、寝たきりにはならず車椅子を使って自分で用を足し、病院の食事もとった。

鍼灸師としての僕の希望は、肉体的な痛みなく最期を迎えてもらうことだった。腹水をステンレスではなく、金の鍼でなんとか捌きつつ、それでもパンパンに膨れた足を診て「人は末端から死んでゆく」という師の教えを思い出した。

「オレはそんなに悪い病気なのか?」と父は僕のいない時に、叔母に訊いた。僕に訊いたら本当のことを言われてしまうと、父は怖れたに違いない。父にはそういうところがあった。その頃には、自分なりに感づいていたのだ。

痛みがやってきても、座薬でなんとか凌げた。痛いところには細い鍼を打った。この痛みはおそらく自律神経症状だったと思う。死への本能的な不安や怖れから

くるものだろう。

最期の一週間、下血をしてごはんが喉を通らなくなり、父は喋るのも面倒になった。ほとんど目も閉じたままだ。動かない。口渇が出てきて口を大きな綿棒で濡らす。タオルを置いてカラダが緩むようにベッドをセットした。鍼灸治療をしても使えるツボが少なくなってきた。もうおへその下の方までダメになってきた。使えるツボは何処だ。頭にお灸をした。

酸素と点滴で命をなんとか繋いでいたある日、二人きりの病室で僕は父に話をした。最後に言いたかったことを話した。父は目を閉じたままで、その表情からは反応はわからなかったけど、確かに聴こえていたと思う。

父があの世に旅立ったのは三月二日。余命宣告されてから八ヶ月。いちばん仲の良かった幼なじみの友人が見舞ってくれたすぐ後、往った。もちろん呼吸困難はあったけど、ほとんど痛みなく清々しい最期だった。息を引き取った父は、穏やかに微笑んでいるように見えた。

僕は自問自答した。三月の乾いた空気を肺に吸い込み、ゆっくり吐き出す。これで本当に良かったのだろうか？　自分はきちんと父を送ることができたのだろうか？

父の死に顔の微笑みが、僕にその問いの答えを教えてくれたような気がしてならないのだ。

（中区）

【入　選】

おじさん

吉岡良子

近ごろは健康のため、ウォーキングが流行だ。早朝や夕方には、三々五々と元気に手を振って歩く元若者の姿が見られる。わたしも真似をして、休日には外へ出てせっせと有酸素運動に励むようになった。

しかし先日その散歩中、ちょっとした出来ごとがあった。公園の近くで子供たちの遊ぶボールが転がって来たので、ほいきたとばかり拾って投げてやった。するとどうだ。

「おじさん、どうもありがとう」

と元気な声がはね返ってきたのである。

目の前に花火がいくつも弾けたような気がした。ヘラヘラとあいまいに笑ってその場をごまかして、散歩もそっちのけで家へとんで帰った。

わたしは、ついに性別不明のおばさんになり果ててしまったのだろうか。鏡を見たり服装を見直したりして考え込む。

しかしそれは無理もないことかもしれない。化粧もせず、スカートも履かない。これは若いときからのまんまで、わたしは四季を通じてズボンとシャツばかり愛用しているのだ。靴もスポンと履ける平たいものが二足。「よそ行き」という物を持たないから、他には礼服があるのみ。それでも結構気に入っているのだ。

おじさんと呼ばれるのは切ないが、お気に入りのズボンにしてもそれはメンズで買ったものだし、日よけに野球帽など被ればもう男に化けているようなものだ。なぜこんな風になってしまったのかと、また考え込む。

わたしは子供のころ「変わっている」と言われて担任からよく叱られた。初老の彼は訓示が好きで「人とはこうあるべきである云々……」と授業そっちのけで長々と弁じた。満足気に教室を見まわして締めくくる。

「わかったか」

皆は神妙にしているが、わたしは小さな声でしかしはっきりと、

「わかりませんでした」

と答える。反抗しているのではない。ほんとにそう思うからなのだが、彼は勘にさわるらしく、青くなってとんで来てげんこつをくれた。

そんなことが一度や二度ではないので、廊下に立たされたりもする。わたしとしてはずいぶんの侮辱と思い、胸も痛むことだった。

「ハイハイと言ってりゃいいのよ」

と忠告してくれる子もいたくらいで、今でも同窓会に出るとその頃のわたしの偏屈ぶりの話に花が咲く。

押し付けられるような画一的なものが嫌いで、個性や自由などに魅かれていたのだと思う。従って人の言うことに耳を貸さないものだから、どうしても悪路を歩むことになる。まじめに勉強したり、就職したりのレールからはみ出してしまうのだ。どう考えてみても、美しい婦人に成長することはできなかったわけだ。

ところで、服装はもとより生活一般もわたしは簡素である。ちょうど昭和三十年代の一汁一菜の暮らしを保っているかのように、身のまわりは最小限のものですませている。家も宝石も、パソコンもケータイも無い。

世間が高度成長で経済がわき立っている頃から貧乏だったし、「幸せはお金ばかりではない」と平気の平左だった。そのおかげかどうか、バブルが弾けたときも何の被害もない。

この度の原発事故によって省エネの問題が大きく浮き上がってきたが、わたしにとっては何を今さら……という感じなのである。原点に戻りましょうとか、時代の転換期とか言われてもピンと来ない。

要するに人が営んできた経済や暮らしの流行などは、まことにもろいということだ。「ホレ、ミイ」と言いたい気分である。

しかし、永い年月をかけてこうなってしまったおじさんのようなおばさんは、もう後戻りできない。子供たちの呼びかけを悔しく思いながらも、こりずにこのスタイルを続けていくのだろう。

（南区）

【入選】

覆水盆に返らず

石山　武

早いもので、妻との二人暮らしも八年目に入った。夫婦だけというのは、味気ないと言う人もあるが、私には何とも気楽で良い。

仕事からも離れて、日々サンデーの楽しみの一つが、三日に一度のサイクルで飲むビールがある。

現役のころは、仕事を休んでもビールを飲まない日は無かった。年金生活となってからは、体力の劣えも重なってこんなパターンに。

亡き両親は、アルコールはまったく駄目、母は、父親が酒乱であったことで酒呑みをまるで天敵のように見ていた。

ところが、四人の子供はいずれも酒好きであったのは、何とも皮肉な巡り合せだ。母のビールに対する批評と言えば、「あんな苦いまずいものを良く飲むな……」と、いつもビールを悪しざまに評していた。

私もビールを口にするまでは、母の言葉をそれは固く、固く信じてやまなかった。

初めてビールに巡り会ったのは、中学を卒業して入社した菓子屋の旅行で先輩から、

「石山……これがビールだ。飲め、いいか」

と、有無を言わせぬ態度に、恐る恐る飲んだのが出会いだった。じゃあ初体験の感想はと問われれば、何のためらいも無くこう答える。

「こんなうまいもの、どこが苦いだ」

今から思えば、これぞ我が「初恋の味」

と言える。ずっと、母の言葉を固く信じていた自分が、何とも愚かに思えた瞬間だった。

ビールとの出会いから半世紀余が過ぎた。

同時に、飲んだビールの量はといえば、若いころに流行した歌の文句では無いが、

「飲んだ、ビールが五万本」になるかも。

いずれにしても相当の量ではと思っている。

酔うと当然のことながら、素面では見せることの無い自分が現れてくる。

口下手で臆病な私は、他人とのコミュニケーションをとるのが下手で誤解を招くことが多い。ところがビールが入るとよくしゃべり、大笑いをして周囲の人たちを驚かせる。

飲んだ有り様が人畜無害のゆえか、半世紀余にもなるビールとの関わりだが、これ迄にトラブルになったことは無い。

大昔の話になるが、仕事の先輩から、「石山の酒は良い酒だな、買ってでも飲ませたいくらいだな」と、お墨付まで頂いた。

神話が？　脆(もろ)くも崩れる事件があったのは、七月も半ばのことだった。

九年余の交流があるサークル仲間四人が、F市でSさんが営む居酒屋に集まって、飲み会をしたときであった。

アルコールも廻り、同世代ということもあって、誰が言うことも無く、

「此の世からおさらば」が話題となる。

私は、臨終ということに対しては、一つのこだわりをずっと持っている。

三十代で、子供も三歳ごろのときだった。

ブロック工事の仕事をしていたのだが、何故か話題が老後の話になると、決まって、

「俺は子供の世話にならず最期を迎える」と、親子ほどにも年齢の違う先輩に言っていた。

「今は若いで石山もそう言ってるがな、それも若いうちだけだでな、そのうちわかる」と、一笑に付された。

あれから三十有余年、先輩の年齢を越したが、想いは変わることなくむしろ増している。

同時に、亡くなった後のことはどう思っても何も出来ない。そうであるなら「ピンピンコロリ」で逝くのが、此の世における最後の役目ではと思っている。

この日も最後は逝くところということで、メンバーからは熱い想いが語られた。「人間は臨終のときまで、後はどう思っても自分では何も出来ない。それだで病まずに逝くことを俺はいつも願っている」と、酔った勢いで、若いころからの持論をぶち上げた。

すると、酔ったせいもあって、自身の葬儀、お墓と、死後のことばかりを気にしていた、グループの纏(まと)め役でもあるMさんが、

「うちの主人と同じことを言う。そんな石山さんの話なんか訊きたくないわ」

声を荒げて、私の持論を遮ったところで一気に険悪なムードが漂う。

同席していた、O氏と、居酒屋の主人Sさんはそっちのけで、Mさんと感情むき出しの激しいバトルになる。いつもは和やかな座も、一気に白けていった。

「どうしたよ、今日の石山さんおかしいよ。そんなムキになることは無かったのに」

長いビールとのかかわりで、味わったことの無い白けムードは元に戻るはずも無く、何とも後味の悪さを残して、早いお開きとなる。

帰りはMさんも、浜松ということで、いつもの如く同じ電車に。

しばらくしてから、私は、

「さっきは悪かったね。俺も良い齢をして」

長い沈黙の後に、ポツリと一言。

「うんいいよ。そんなこと気にしていないで」と、言ってくれたが、会話は続かず後味の悪さだけが、体中に覆い被さってきた。

これ迄の電車内であったなら、

「石山さん、ちょっと声が大きいよ。見てみな。こっちを見てる人が居るよ」

Mさんに言われるほど電車内では、二次会でもやっているように騒がしかった。

今回の車内は、異常とも言えるほどの静寂ムードで帰路に、駅へ迎えに来た妻からは、

「どうしたよ。今日はいつもより早いじゃん」

「うん、Mさんとちょっとあってな」

飲み会であった一連の顛末を話してみる。

「ふーん、だけどさ亡くなってからじゃあどう思ったって何も出来ないじゃんね」

結婚生活も四十五年、酔いどれ亭主の扱い方には手慣れているだけに、妻のコメントは何とも心地よく耳にひびいて来た。

子供も独立して二人暮らしも十年と長くなり、いつしか他人への気遣いも無くなり、我ままになっていた。それ故に、他人から指摘を受けると、素直に訊いたり、訊きながすことのできない自分になっていた。

あれから二ヵ月余が過ぎた。Mさんとは何の連絡もしていないが、気になる日が続く。「覆水盆に返らず」ではないが、もう二度と元には戻らないのだろうか。

ビールを飲んで別の人格になっても、他人とのトラブルは皆無という、唯一の誇りも今回の一件であえなく消え失せた。

（東区）

【入選】

チャコちゃんの力こぶ

中津川久子

昭和三十二年、私は小学三年生になった。当時は薪の暮らしで、水は井戸から汲んでいた。

水汲みは大抵こどもの仕事になっていて、学校から帰ると真っ先に井戸端に飛んだ。炊事用と飲み水は、勝手場の土間の上に置いてある水瓶に溜める。常に三・四日分は賄えるようにしていた。

瓶の蓋はベニヤ板の切れ端をのせておくぐらいで、蜘蛛や虫が浮いているのは日常茶飯。ちっとも驚くことではなかった。

ある日、瓶を覗いたら柄杓に一杯ほどしかないではないか。さぁ大変、母たちが野良から帰ってくるのは暗くなってからだ。急わしくなるのは目に見えている。頼まれていたわけではなかったが、ふつふつとやる気が起きた。

釣瓶を操るのは、こつと力が要る。自分の手首より太いロープを必死にたぐり寄せるのだ。ちょっと力を抜けば、たちまちカラカラと井戸底に持っていかれてしまう。やっと吊り上げても、バケツに残るのは半分ぐらいだった。バケツへ移す際にこぼしてしまうからだ。井戸に映る泣きっつらに、ヤッホーと叫ぶ。ヤッホーと返事をもらって、また力がわいてくるのであった。

五右衛門風呂を満たすのは容易ではない。土間より高い位置にあるからだ。さらに、風呂桶の縁までバケツを持ち上げなければならないのが、最大の難儀である。両腕をぶるぶる震わせながら、びしょぬれになって入れた。

「おう、久子が汲んだのか？」

「助かる助かる。今日はすぐごはんが炊けるよ」

「ほう、風呂もやったのか？　よく汲めたなぁ」

兄のすっとんきょうな声が飛ぶ。

野良から帰った父母や兄が喜んでくれたり、何よりびっくりしてくれるのが嬉しかった。とりわけ風呂は皆を唸らせた。私の小鼻が、にっと膨らんだ。何だか、急に自分が大きくなったようでくすぐったい。

苦労した分、風呂の味は格別だ。ただ、入るのにはひと手間も、ふた工夫も必要となる。風呂底に丸い簀子を、いかに沈めるかが問題なのだ。

まず片足を簀子の中心に置き、重心を掛けながら、もう片方の足をのせていくという塩梅である。この時よほどバランスを考えないと、二本目の足をのせる寸前で、簀子のひっくり返しに遭ってしまう。その結果、煮えたぎった風呂釜に、直に触れる羽目となるのだ。まさに曲芸である。

当時村では、数人ずつ一組の、火の見回り役があった。「かまど回り」と呼んでいた。夕餉が済むころになると、提灯を掲げた役の男衆が、どやどやと勝手場に押し入って来るのだ。まだ小さかった私は怖くも感じられた。

点検を終えると、煤だらけの壁に貼ってある点検表に、合否の印を付けていくという寸法である。

焚き口近くには藁やら、ごが山積みされていた。焚付けになくてはならないものだ。そんなわけで、男衆の声が近付くと慌てて片付け始めるのであった。それでも間に合わないときがある。

「おえ、ごはもうちょっと離しておいてくりょね」

「へぇ、すまんのう」

「今日は大まけだで、丸にしとくでのう」

きゃしゃな父が、いっそう小さくなってぺこぺこしているのが分かる。こんなやりとりを耳にしながら、五右衛門風呂から出るに出られず茹でたこになってい

たものだ。
――ひょっとしたら、背戸のとみちゃんが入浴中かも。
――笑くぼの可愛いおけいちゃんの湯上がりを拝めるかもしれない。
などと、男衆は楽しみでもあったとか。
ちびたしゃぼんが、くすっとこぼれた。
（南区）

【入選】

負けないぞ

山田知明

二〇〇八年秋、新聞の片隅に目が留まった。政府広報版「お預かりしている通貨、証券類をお返しします」と、記事が載っているではないか。私は「これだ」と思った。子供の頃の私は父方のお祖母さんに育てられており、この頃のお祖母さんの口癖は「私が満州にいた頃はねえ、お祖父さんは広大な土地を持っていて、たくさんの農作物を作っていた。又多くの中国人が働いていたよ。その為、息子は（私の父）何一つ不自由なく暮らしていたよ。戦争に負けなければなあ」と、いつも話していたのを思い出した。そう、私の祖父母、そして父は満州からの引き揚げ者であったのだ。そして更に、お祖母さんは、引き揚げの時に貴金属宝石類や、通貨を入れたリュックは全て預けて来たとも言っていたのだ。現在、祖父母、そして私の父はこの世にはいない。しかし、私の役目としてどうしても先祖の遺品を手に入れ、この目で確認したいと、子供の頃からずっと夢に思っていた。すごいチャンスだ。早速、浜松税関に電話をしてみた。電話の向こうの担当者は、浜松では扱っていない。引揚げ者保管物件の扱いは、名古屋税関であり後日連絡をくれると言う事であった。二日後、漸く名古屋税関より連絡が入った。しかし、問い合わせの保管物件は現在調査中であり、一週間位掛かると事務的に伝えられた。お役所とは、こんなにも時間が掛かるのかと真に思う。それから本当に一週間後に名古屋税関より封筒が届いた。中身を読んでみて又、びっくりしてしまった。私の祖父の引揚者保管物件は、現在横浜税関に移されていて、しかも祖父である「山田一郎」という名の人は三人おり照会された本人の物件でない可能性もある為再度調査すると、書かれていた。又、問い合わせの時に話した祖母、そして父の名は手掛かりがなく、その様な事実もなかったと、書かれていた。どうしてお祖父さんはもっと難しい名前を親に付けてもらわなかったのかなあ、とがっかりしてしまった。

それから約一箇月が経過し、横浜税関の伊東さんという人から電話が入った。彼女は矢継ぎ早に、「祖父が満州に居た時の職業は何でしたか?」「日本の最初の住所が山口県になっているが、どの市か分かりますか?」と言う質問をしてきた。これは、不幸にも私の生まれる前の

話であり、しかも六十年以上も経過しているではないか。まして、父の兄弟は全員戦死している。それに、祖父母の生誕地など聞いた事がなかった。電話の前で呆然と立ちすくんでしまった。今度は、お役所の仕事とは凄いなと感心してしまった。それから年が明けて正月、ふと父方の戦死した兄の嫁さんが山口県に住んでいる事を思い出した。自分の家の電話帳を広げ、従兄の住所に電話をし、それから徳山市の伯母さんの電話番号を聞き出した。伯母は現在九十歳を越してはいるが、電話で少し話が出来ると教えてくれた。その日の夜に即伯母に電話をしてみた。年寄りの為耳が遠いものの、昔の話となると大変良く覚えていた。それによると、彼らは中国の遼寧省の営口という市で終戦を迎えて、まず最初に祖父母が錦州から船に乗り、佐世保に上陸したらしい。その後、遠い親戚を頼り、山口県の柳井市に到着したと言うのだ。そして、暫くして伯母と従兄が帰国し、父は一年後であった事が判明した。当時の日本人会が助けてくれ、リュック一つと、シャツ三枚の持ち出しが可能であったとも教えてくれた。日本の最初の住所が柳井市と判明した。それが分かったのだから、こちらも少し作戦を立てようと考えた。少し間を置いて攻め方をゆっくりと考えれば相手の出方も少し変わるのではないか、と思ったからである。

季節は、あれからおよそ一年が経過し、二回目の秋を迎えようとしていた。やはり、祖父母の遺品が気になり、改めて横浜税関の伊東さんに電話をしてみた。しかし、彼女は既に定年で退職しており、担当者が宮里さんという男性に代わっていた。彼の質問は前回の伊東さんより厳しかった。私は、祖父母の日本の最初の住所は柳井市と、伝えたのだが、そんな事よりも「預けたリュックの中身は何でしたか？」「遺品の中に武雄と言う人の名前が出てくるが誰ですか？」と、相手は私を取り調べている様に大きな声で話してきた。役人というよりもまるで刑事みたいである。しかし、私もここで負ける訳にはいかなかった。「山田一郎」という祖父の名前が三人居たのは分かるが、他の二人の遺族から遺品の引渡しの問い合わせが無いのであれば、当時のリュックぐらい私の祖父と決め込んで、せめて私の所へ返してくれれば良いのにと、思ってもみたりした。

そして、更に一箇月が過ぎた頃今一度思案してみた。待てよ、確か私の伯母の夫（父の兄）の名前は武雄というと、母に聞いた事があった。翌日実家へ行き先祖の位牌を覗いて見た。あったあった。父の兄の名前は武雄であった。間違いはないぞ。今度こそ自信が持てた。良し、これが最後と横浜税関へ又電話をしてみた。そして、その内容を伝えたところ、彼はあくまでもリュックの中身にこだわり、しつこく中身を聞いてくる始末であった。六十年以上も前の現実を知っている人など、今は居ないのになあ。まして私に質問している人だって、当時は生まれてなかった筈なのになあ。官とは相当手強いぞ。

それから二箇月、黒く暗い冬の雲の下、今私は山口県徳山市へ向かう新幹線の中に居る。伯母が達者なうちに全ての情報

を手に入れようと思ったからである。そして、再度遺品入手の作戦を練る事を決めていたのであった。長い一つの時間の中で、いつの間にか自分との戦いになってしまっていた。車内は、本を読む人、眠る人、窓から外を見ている人で一杯だ。座席に座ったまま、心の中で「負けないぞ、先祖の遺品を手に入れるまでは」と、大きな声で呟いてみた。

（中区）

【入選】

雪解けて、空へ

ア イ ユ

「ねぇちゃん、母が亡くなりました」

何気なく開いた妹からのメールには、どことなく他人行儀な一文が綴られていた。

我が家から送り出す身内は初めての経験で、どう書いていいのか分からなかったのだろうか？　そんなことを考えながら、私は車に乗り込んだ。

私がメールに気付いたのは夜八時過ぎ。母が息を引き取ったのは夕方だったため、遺体は既に葬祭センターへと運ばれていた。

五分ほど車を走らせ、聞いていた一室へと向かう。扉を開けると、飾り気のない部屋の中に母が寝かされていた。真っ白な布団に寝ている母は、まるで眠っているかのようだった。

「きれいな顔してるら」

部屋の隅に置かれた机の脇に座っていたすぐ下の弟が言った。手荷物を畳に置いた私は更に母に近づき、「そうだね」と頷いた。

「今にも起きてきて、おはよう、とか言いそうだよね」

妹がつぶやいた。

生前よりひとまわりほど小さくなった母の様子は、確かに死人だとは思えないほど自然な表情をしていた。死んだと聞かされていなければ、妹が言うように起きてきて「あれ、久しぶりだねぇ」とでも言ってきそうな気さえする。

発見した弟の話では、眠るようにして息を引き取ったらしい。晩年、憂き目の連続であった母の最後が、苦痛でなかったことを嬉しく思った。

母の死に顔を眺めながら、私は昨年末のことを思い返していた。

クリスマスを間近にひかえた頃、仕事を終えて確認した携帯の着信履歴には同じ名前がびっしり並んでいた。妹からのものだった。

分刻みに近い間隔で連なる履歴には、父や二番目の弟のものまで混じっている。ただ事ではないと感じ、慌てて履歴で妹に折り返す。

と、「メール見た？」の返事。見てないことを伝えると、母が入院して危篤だと告げられた。とりあえず、入院先を教えてもらい電話を切る。そして迷った。行くべきかどうかを。

実は、私は母と十年以上会っていなかったのだ。原因は金銭的なこと。誰にも言ってこなかったが、働き始めた当初から金の無心をされてきた。育ててもらった恩もあるので仕方ないと、可能な限りは助けてきた。だが、母の要求が無くなることはなかった。忘れた頃に電話がかかってくる。用件はいつもお金のこと。私は、だんだんと母からの電話が疎ましくなった。

そうした私の中の不満はある日を境に爆発した。もしかしたら、お金を借りてまで無理をする母をこれ以上見たくなかったのかもしれない。

私は、父に電話で事情を説明した。それまで、何も知らなかった父は驚いたが納得してくれた。母からの電話は以後かかってこなくなった。

迷った末、私は病院へ向かうことにした。（母が死んでも葬式に出ないつもりじゃなかったの？）そう尋ねるもうひとりの私に、私は返事ができなかった。到着した病院の駐車場に車を止め、降りると雪が舞っていた。

十年ぶりに見る病院のベッドの中の母は、とても小さかった。食べることが好きでグルメだった母は、私の記憶の中ではもっとふっくらしていた。

ギャップに困惑する私の前で、眠っていた母が目を覚まして言った。「会いたかった」と。その途端、もういいや……という思いが私中で芽生えた。私の中で凍りついていた雪が溶けた瞬間だった。血のつながりという強さは結局こんなものなのかもしれない、と随分後になって気がついた。

あれから三ヶ月あまり。退院後は、実家で過ごしていた母は、本格的な春を迎える前に旅立っていった。

葬儀場で、母を悼んでくださる方々を迎えながら思う。

あの時、私が病院へ向かわなければ、母を許そう、と思わなければ、私はこの場に立っていなかっただろう、と。

母の遺体にすがり泣く父を見て、涙を流した自分が嬉しかった。

火葬場から立ち上る煙が空に昇っていく。糖尿病を患ってから視力が落ち出歩くことも難しかった母は、これでようやく自由になれたのかもしれない。

二月末、母のお葬式の日は雨だった。なのに、葬儀場から火葬場への移動時は、雨が止んでいた。

今だからこそ素直に言える。

今までありがとう。

（中区）

随筆講評

たかはたけいこ

年末の恒例行事となった、応募原稿の下読みだが、今年の作品は実に読み応えのあるものばかりだった。応募原稿には氏名はもちろん性別、年齢が記されていない。書かれている内容から作者の輪郭がわかってくる。

今年の作品は文句なしに男性の書き手のものが総じて良かった。読み手として「そうか、男性はこういう風に考えるのか、感じるのか」と納得したり、「男も女も思うことは一緒だなあ」と、同感したりした。

応募点数も増え、レベルが上がることは選者にとって嬉しい悲鳴で、今回は三点を市民文芸賞、五点を入選に推すという「大盤振る舞い」になったが、実際、どの作品も落としがたく、選外になった作品も読み返してみると、点数を上乗せしたくなるほどだった。

ものごとを文章にするということは、書き手そのものが客観的にならないとできない。書き残したことで、書き手は次のものごとに向かい合うことができる。文章を書く楽しみは実は新たな自分自身と出会うことでもある。この楽しみを是非、本書を読んでくださっているお一人お一人に味わって欲しい。

私のくせ・生き方

九十歳の作者が自分の生活習慣や物事に対する考え方を、実に飄々と書いている。随筆というより論文のようでもあるが、九十年、生きてきたからこそ書けている事柄が多いし、わかりやすく説明されているので、納得してしまう。老い方の知恵袋のようで、こんな高齢者に私もなりたいものだと、憧れ、尊敬してしまう。

年賀状

セピア色になりかかった初恋のようなものが、年月を経た後にふいに天然色に蘇ったような、「流れ」を感じさせる文章だ。感受性豊かな年頃（中学生）の作者の心情がよく著されている。なにより、最後のオチがいい。

父からの答え

父親ががんを患ってから亡くなるまでの顛末が、冷静に描かれているのは、作者が鍼灸師というある種、人の生死に関わる仕事に近いからかもしれない。

けれど、刻々と変わる病状の変化と父と息子、家族の気持ちが、通い合っていく描写力は見事で、この家族にとっての良い記念碑となる一編に仕上がった。

おじさん

年を追うごとに女性の身体は、変化していく。上向きだった乳首は下を向き、ウエスト周りには肉がつき、胸から腰までがまっすぐに、いや、ビヤ樽化していくのだ。そのうえ、ショートカットにし、黒っぽい服を着れば、子供たちに「おじさん」と呼ばれても、致し方ないかと苦笑する。

そんな作者の心情をこの作品は見事にひとつの作品にしてし

まった。

覆水盆に返らず

奥様とのふたり暮らしのなかで、作者の楽しみはビールを飲むことだ。お酒の楽しみを知らずに育った作者がお酒の味を覚え、一家の主としての人生が淡々と描かれている。そうして、親の役割を終えてのんびりと暮らすうちに事件は起こる。酒の上で口げんかをしてしまうのだ。作者はしょんぼりと帰宅するのを奥様が優しく受けとめる。良い夫婦だなと思う。そうして作者はけんかをしたことをくよくよと悩む。その様子さえも素直で、人となりが出ている。

チャコちゃんの力こぶ

蛇口をひねるだけで、常温水から熱湯まで出る時代だが、半世紀前の日本には生活インフラはほとんどなかった。水は井戸から、火は薪から、排尿物さえも各自の家に溜めて、数ヶ月に一度、汲みだしていた。当時の子供は子供の仕事や役割があった。

小学三年生になったチャコちゃん（筆者）が、五右衛門風呂に汲んだ水を入れ、火を起こして風呂を沸かす様子が力強く、克明に描かれている。あの時代の子供たちは大人に感謝されることによって、自分の存在意味を改めて知ったものだった。

負けないぞ

太平洋戦争勃発から七十年が経ち、戦争そのものの実体験を知っている人が減っている。作者自身も戦争体験はないようだが、戦争の記憶は身体の一部に確かにある。その記憶が新聞の政府広報版によって呼び起こされる。祖母の言葉を頼りに、作者は過去へと向かっていく。さながらミステリーのように新事実が発見され、新たな障害も出てくる。しかし、タイトルの作者の言葉が前へ前へと読み手を誘っていく。

雪解けて、空へ

母と娘は仲が良いと、総じて考えられがちだが、実はそうでもない母娘がここにいる。母親の我儘をきいてしまった娘と、我儘が通ると思ってしまった母親との確執が素直な一文になった。特に『血のつながりという強さは結局こんなものかもしれない』の一文は、読み手の想像力を書き立てる。

詩

【市民文芸賞】

終わりの夏

竹内としみ

終わりのとき
そこに見えるかすかな予兆
発信される静かなサインに気づかぬふりをし
現在（いま）が永遠に続いて欲しいと願う
終わりの向こうに何があるか
扉を開くのが怖い
ぬくぬくと今の空気を彷徨いたいから

季節の終わりもそう
ことに夏の終わりは一層の寂しさ
エネルギッシュな日差しと降りそそぐ蝉時雨
不思議なことに
いつのまにか…喧噪の中にひそむ規則的なシンフォニーの静
　寂を楽しんでいる
あるときふと気づく
蝉時雨が止み、雨だれのように静かなため息
そんな蝉の音が時折耳に届く世界の訪れ

毎朝、家の外に出ると
地面のあちこちに転がる黒く小さな物体
これは昨日の彼なのか
あれは一昨日の彼なのか
目覚めてすぐ、寝室の窓のカーテンを開ける
そこにいつも一匹の彼の姿
じっと動かず、必死に窓ガラスに足をつけ
私を見つめる
次の朝もその次も、ずっとそこに現れる
違う彼の姿
短い命を終えるとき
彼らは何故
慣れ親しんだ木ではなく
人工的なガラス窓に向かうのだろう
力尽きてその亡骸を横たえる場所は
無機質なコンクリートの上かも知れないのに
自分の生きた証、自分の終焉の姿を
私たち人間に見せつけるためなのか
それとも
季節の終わりを告げる、物静かな語り部になるためなのか
地面に落ちた黒い物体は

やがて、風に吹かれ、雨に打たれ
その姿はみるみる小さくなっていく
観念した私は
固く閉じたまぶたを大きく開き
扉の向こうの世界をあるがままに受け入れる
慣れ親しんだ季節のぬくもりを捨て
新しい世界の空気をわしづかみする

終わりの夏は、寂しく消え
始まりの秋は、はにかみながら挨拶を返す

（中区）

【市民文芸賞】

新常用漢字

中村弘枝

平成二十二年六月新常用漢字が決まった
全部で二千百三十六字
その中追加は百九十六字でその中に
俺　は言葉として多く使われていて
今になってと言う感じ
鬱　は今更うっとうしい感じがする
画数が多く辞書で探すのも目も疲れて大変だ
私は書き順を自分なりに唱えるように考えて
気楽に書けるようになった

削除は五字その中に
勺　匁　が入ってる
商家へ嫁いで来た頃使った　勺　匁　がなくなることで今
　使っていないのに一寸淋しい

先代が大正時代に使った　匁　は砂糖　味噌を量り　勺は五
　勺桝が漆塗りで液用の焼印が　今もはっきり付いている
色は褪せて縁はすり減り角が丸くなっている
かすかな匂いとうっすら黴が
白木の一合と五合桝も持っている
この桝は疎開してあったのだろうか
戦後一升徳利が焼け跡を掘った時出てきた
先代の栄えた時代　我が家のひとつの歴史と店の棚に並べて
　ある

いつものお茶屋にゆくと削除の話になり
昔使っていた分銅を出してきた
主は一貫匁の分銅をわたしの掌にのせた
どすんと冷たい固まりが
土蔵の戸を開けた時の匂いを想い出した

此の頃カタカナ語が大分増えて辞書をみてもなかなか覚えな
　い
又簡略語も出て新聞やテレビにも出る
世の中はめまぐるしく変わり
携帯電話も持たない私は従いてゆけない
婚活　就活　時短などの略語が次つぎと
　カツカツと躓きそうな此の世の中は
　暮らしにくく候

（中区）

【市民文芸賞】

ある駅の構内で

水川亜輝羅

駅の構内に頭から血を垂らして　顔中を
真赤にして　座り込んでいた男
何かを大声で叫んでいた
それは憤怒のようでもあり　哀愁のようでもあった
　ほぼ　完全に近く　恥も自分自身　をも捨てた行動に　見
えた
ワンカップの上に掌を当てて　体の震動で　中の液体がこぼ
　れないようにしていた
彼の唯一の宝物に思えた
Tシャツの袖口から青黒い入れ墨が
覗いていた　頭からの出血が止まらない

シャツの胸元は真赤である　傷の程度も
わからず　震えている体の様子は尋常ではない
「怪我による悪寒ではないか」
「あまりほって置くと命に掛るぞ」
男を立ち止まって見ている人も居る
「仲間割れの喧嘩らしい」
「何かの事情はあるだろう」
臨海工業地帯の大都市　都会のハプニング
と申せばそれまで　多くの乗降客はそれを無視して　足早に
　行動している
構内に滴った血液が黒く変色している
まだ救急車が来ない　叫んでいたのが呟きに変わり　何を
　云っているのか聞き取れない
報復の言葉であろうか　ワンカップを両手で挟んで持ってい
　るので滴る血液が拭えない
時折　眼に血液が入りそうになると首を振るのである　それ
　も疲れたのか　眼に血液が入り　真赤なのだ　滴った血痕
　を取り巻いて野次馬が増えて来た
凄惨な形相になって来た　怒鳴り散らした声が低くなってい
　る
この殴られた男の現実の事態を見て
自分自身と置換した人が居たかも知れない
人の生き様からすれば　この男は救急車に救われるだろう
だが世の中正義の場面ばかりではない
むしろ少ないのかも知れない
定期のバスが時刻表通りに運行しているとしても　乗降客は
　様々　けたたましいサイレンが鳴って救急車がやって来た
野次馬の中から
「ワンカップ　飲んじゃえよ」との声
ワンカップは男の座っていた　血痕の残る床に置かれていた
ワンカップ劇場の幕が降りた
瞬間　背筋に悪寒が走ったのは
野次馬達であった

（南区）

【市民文芸賞】

わが心の…

辻上隆明

知識として蓄えられていた言葉に、血が通い、肉体となって、内部に宿るときがある。
最近、とみに大きくなってきたのが、親鸞の《わが心のよくて殺さぬにはあらず》だ。
四十年程前、初めて出会ったときには、肩透かしを食らったような意外な感を覚え、衝撃度の強い言葉に押されて、心の片隅に追いやられた言葉。
私は、「善人なほもて往生をとぐ。いはんや悪人をや」の親鸞に、その生涯と相俟って、師自身は、いかなる状況にあっても善性を生き得る人だ、と《大いなる人》の像を抱いていた。
その親鸞が《わが心の……》と言ったのだ。一個の人間としての強い倫理意識、自恃の心を期待していたのに、その親鸞が……《わが心の……》は、育まれることなく捨て置かれた。
ところが、この言葉は、年を経るごとに着実に成長を続け、私の心に広く座を占めるようになった。
〈死〉の報じられない日はないという国。親による虐待死、子どもから大人にまで続出する自殺、金銭や怨恨がらみの殺人等々、受け容れ難い〈死〉にあふれている。
そのとき、重く浮上してくる言葉。
《わが心のよくて殺さぬにはあらず》
善悪は相対的なものであり、業縁あれば、人は、状況のなかで常に変化する。状況次第では、自分もまた、殺人者になった恐れがあり、そうならずに生きてこられたのは幸いであった。親鸞の辛く厳しい自己省察である。
そう、殺すには殺すにいたる状況があるのだ。
そのような状況に生きざるを得なかった、その人の生育史、人間形成過程、社会環境が。
ここには、殺めた人への寛容の心がある。
〈自力〉の自惚れを撃ち、〈他力〉に深謝させる《わが心のよくて殺さぬにはあらず》。

（中区）

【入　選】

嫁ぐ日に

桑　原　み　よ

夏の日が名残惜しげに遠のき
青空は　大きく息をした様に澄み亘っている
みんなで種を拾い集め　育てた
ハナミズキの葉っぱも　少し色付き始めた
日曜日の窓辺
本を手にする娘の横顔を　そっと覗く
白いまあるい頬　髪は肩でなびいている
ふとページをめくりながら　顔を上げ
幼いままの瞳で見つめた
私はとっさに「もう秋ねえ」と言った
「そうね　秋ね」と微笑み庭先を眺めた
日々草の花だけは変わりなく
色とりどり鮮やかに　愛くるしく咲いていた
そんな強さに　なぜかホッとして台所へ立った
湧きあがる鍋を見ながら
いつの間にか　指おり数えていた

昼下がりの陽だまり
マフラーを編む手を休め　ぼんやりと
斜めに映る影の中に　母の面影を見た
母は　父が病弱のせいか
優しい物腰の中に
凜とした眼差しを持っている
不安そうにしている私に　母は
「苦しみも哀しみも　静かに待てばいい
その間　ありがとうありがとうと言えばいい
いつしか　みんな笑顔になれるから」と
何度も何度もくり返し言った
庭先に干してある黒豆が
私を勇気づける様に
勢いよく弾け飛んでいた

日の光がにわかに薄らぎ
夕暮を誘っている
娘も何気なく二階へ上って行った
こんな日には
みな母親は
娘に送る言葉を探しているのだろうか
あと何日　一緒に暮らすことのできる日
今日の夕日が　明日にかがやき

日々　穏やかな笑顔で過ごす事を願い
私は　この娘に一番ぴったり似合う
お守りをつけてあげたい

（東区）

【入　選】

古都紅葉

小池祥元

日本には四季がある
四季夫々の景観の移ろい
好きな季節は秋
日毎に涼風のたつ暮の秋
草むらに鳴く蟲の音
暑かった夏の疲れを癒す
樹木の青葉が日毎色付き始める
晩秋の青い空と黄葉

公孫樹の黄葉は眩しい
あの色は最高の色合いだ
秋の古都は紅葉狩りの人ひとヒト
過ぎ去りし日に訪れた懐かしき寺社
東福寺の紅葉はカラフルだった
紅葉と一言で語れない美が有る
三百六十度何処を見ても色とりどり
一木として同じ色がない
南禅寺の赤煉瓦に調和する
水路閣との佇まいに映える紅葉
永観堂の噎せ返る如き紅葉の美
紅葉に映える茶店の緋毛氈
銀閣寺と続く哲学の道
立ち去りがたい心状
足を延ばして真如堂
此処の紅葉は落葉が地上を赤く染める
深紅のバージンロード
三重の塔が夕焼けに染まる頃
ライトアップされた
名刹は静かに夜を誘う
虫達の声も次第にか細く
秋の終わりを告げようとして居る
暮れ行く空に響く入相の鐘
古都はやがて夜の帷が降り

京の町屋の灯りに郷愁を
下弦の月は淡く東寺（とうじ）の塔を
黒く浮かび上がらせる

（中区）

【入　選】

『温暖化』

新村健一

昼寝の時間
悪い夢でも見ているのか
やたらと　足がむずむずしてかゆい
夏が始まる頃から、砂ほどの蟻が
風で舞ってくる　のか　網戸を潜り抜け
居間の絨毯の上に
甘い香りのする台所に
無数　不気味なほどに
蟻が行列をなして
砂糖の上に黒い山を築いている
今まで経験のない　風景である

四国の沖に台風がやって来て
紀州半島が危ないと感じた
昭和三十六年　大鹿村が集中豪雨で
隣の山が崩壊
天竜峡の上部も大洪水
温暖化　否　亜熱帯化
が　作動し始めた

少子高齢化
赤字国債　東日本大震災
復興債務　膨れ上がる借金は
行かし方ないが、百姓をやる
老人はいなくなった
ださい仕事など　誰もしないさ
近隣の山里は、雑木林で草ぼうぼう
国破れて山河あり

亡びるのは誰だ
温暖化は
山の生物が好んで

喜ぶ　未来の世界

砂塵のような、細かい蟻が
網戸を潜り抜け
台所に忍びより
次第と彼らは、白アリに巨大化して
我が家をかじり潰す

大地は固そうに見えるが
蟻が住み食う大地は
大雨が降れば
堅いパンの皮に水をかけたと
同様に　もろくも

明日に、日照り
明日に　大地震
明日に　台風
文明のもろさを感じる
温暖化

（西区）

【入選】

視る者

鈴木巳三郎

深海の底に
ひっそりと息づく魚
何億年の太古の昔より
そのままの形で生きつづけた
奇怪な魚　シーラカンス

君こそ　すべてを視て来たのだろう
この地球上に現われた
新参者の人間が
その野放図な傲慢さで
地球そのものさえも滅らしかねない
愚挙をくり返しつづけて来たことを

君は　ただ視つづけて来たのだ
地球を救うために
その背鰭をはげしく動かし

愚かな行為に歯止めをかけようと
ぶつかって行くこともなく
永く　ながく生きて来た
その貴重な経験をふりかざして
愚かものたちを教え導こうと
することもなく

君はただ　視つづけて来たのだ
深海の底にひっそりと生き
環境も自分自身をも
すこしも変えようとせずに
ただ　視守るものとして
生き続けて来た者よ

人はもっと早く　気付くべきだったのだ
深い海の底で
その瞬かない瞳で
じっと自分達を視つめつづけて
居るものの存在を

人間はもっと早く気付くべきだったのだ
ただ　じっと視つめ続けられることの
たぐいまれな　恐ろしさを

（天竜区）

【入　選】

直面する問題への対応策の一例

高柳龍夫

雨上がりの夕方
部屋の中まで入ってきた季節はずれの蚊
2階だったらまだマシだろうけれど
部屋は1階だし
付近は自然の緑が多いから

人間の体温と呼吸を感じとり
ブゥーンとかすかな羽音と共に寄って来る
追い払って見えなくなっても
すぐにまたブゥーン

ふらふら飛んでいるのを叩き潰してみて
初めて血を吸われていたとわかることも
皮膚の神経のすきまから血を吸われると
刺されたこと自体に気づかないことも

蚊の産卵場所をなくすか
蚊を殺してしまうか
蚊の侵入を防ぐか

雑草を引き抜き小さな水溜りをなくせ
今となっては蚊への後悔先に立たず

部屋の天井中央付近
吊ったままのハエ取りリボン
ブゥーンと飛び回るうちに偶然
虫はくっつき死骸に変わる無残
あんなベタベタリボンにもいくらかの
存在する意味はあったのだ

殺虫剤は体にいいわけないし
染み込む匂いも好きでないし

人生に尽きない深刻な悩みと苦痛
さしあたり私が困っている問題は蚊
飛び回っているあの一匹の蚊が問題
気になってどうにも眠れやしない

え？
　見えないようにアイマスク

羽音がうるさきゃ耳に栓
　文句言わずにお静かに、って・・・
それじゃあ蚊に刺されるばかり

それで今は
昔ながらの蚊帳の中
これで安心

明日は楽しみ晴れ予報

（西区）

【入　選】

ジョブズ氏に脱帽だ

内藤雅子

二千十一年十月七日
一人の著名な男性が亡くなった
五十六歳と言う働き盛りの
余りにも早い死である
その名はスティーブ・ジョブズ氏
ＩＴ関係者は言うまでもなく
私も、いや世界中の人々が
カリスマ経営者に心からの
哀悼の意を表した

ソフトバンク　アイフォン　スマートホン
私の日頃の生活には遠い話
でもアップル社の名は知っている
ただ「遊園地の様だ」
「ファイルを開くには箱の形の
アイコンをマウスでノックする」と

言われてもチンプンカンプンの世界
しかしジョブズ氏だって
これまでの道は平たんではなかった
アメリカに生まれ養子に出され
大学中退で友人とアップル社を創設
起業家の仲間入りをしたものの
ひととき会社を追われ
十二年後に古巣へ戻りトップとなり
次々に最先端を行く商品に
独創的な発想をあみ出したと聞く

常にアイデアを生み出し
エネルギッシュに生きてきた生活には
さぞかしストレスとの戦いも
少なからずあったと思う
死を覚悟して手術し退院
学生の前で次の様なスピーチを残している
「毎日を人生最後の日である様に生きれば、いつか必らずひとかどの人物になれる」と
正に言いえて妙である
皮肉にもアイフォンで
死を知ったユーザは驚いたとも

素晴らしい頭脳を失った事は
ＩＴの世界ではこの上ない損失だ
願わくはこの辺で留め
十分進歩した技術を
世界中の平和のために利用してほしい
今はただ心から冥福を祈るのみ
アーメン

（東区）

呼気を吐きだすごとに　ため息が
悲さんな叫びをあげていた　だが
いまは　悲しみさえも拒否するように
狂わされてある　乾いたこころである

感傷は　楕円の空に花火とうちあげた
それ故に　空はうす雲を刷くことしきりである
それ故に　祭りのあとの虚しさが棚引いている

世界に何ものも継ぎ足しえない　という
悲しみが　いまはがん強に
悲しみを拒否するまでに至った
その為か　わたしのこころは惰眠を貪りはじめた
あのながれる雲のように　――

（浜北区）

【入　選】

惰眠の由来

橋本まさや

世界に何ものも継ぎ足しえない　という
悲しみが　この三年のあいだ　しきりと
わたしのこころを蝕みつづけてきた

詩選評

埋田昇二

今年は、東日本大震災という未曽有の災害があったことが作者の心の中にあったのでしょう。作品は命の意味を問う作品が多く寄せられていたように感じました。詩の主題としてはとてもよいことだと思います。ただ作品を書くときは、まず対象をしっかり見つめることが大事です。そして次にそれにぴったりあった言葉を選ぶことです。なかには言葉や意味を飛躍させることが「詩」になる要件であると考えておられる方があるようです。たしかに現代詩では言葉や意味を飛躍させることが詩に成り立つ重要な要件であるともいえます。しかし、それはなんとなく気分で描くというようなものではありません。詩人はその場合も言葉や意味の飛躍を厳密に計算して書いているのです。言葉を大切に選ぶことが「詩」になるための最低の要件です。

その上で、毎回私が強調しているように、感動を呼ぶ作品を創るためには作者自身が題材として選んだ自然や人間や社会を描くにしても対象を見たとき、胸がときめくような感動することがなくてはなりません。感動するとは心が動くことです。なぜ心が動くのでしょう。それは見慣れない風景に出合った時です。あるいはいつも見慣れている風景に「おや?」という新しい風景を「発見」した時です。「詩」はその「おや?」を言葉に置き換えることが出来た時生まれるのです。

「終わりの夏」は、そうした「発見」があります。一連で己れの命が終わる微かな予感を感じながら、二連、三連で季節の終わりにやがて命が絶える蝉に思いを寄せる展開もとても良いです。三連で短い生命を終える蝉に哀れを感じながら、それが季節の自然というものであり、自然の移ろいをあるがままに受け入れ、やがてはじまる「秋」に挨拶するという作者の心根も快い。

「新常用漢字」は、平成二十二年六月に新しく採用された常用漢字への思いをつづっています。「俺」、「鬱」のように復活した漢字もある一方、削除された漢字のなかの「勺」「匁」に古き時代の特別な思いをよせて時代の移り変わりを見る、これもひとつの発見ですね。

「ある駅の構内で」は、ある駅の構内で大けがをして血を流して倒れている男を取り囲む野次馬の人々の姿に、現代社会の荒んだ風景と人々の無関心の世相がよく書けています。

「わが心の」は、親鸞の「わが心のよくて殺さぬにあらず」の言葉の深い意味が、年を経るに従って己れの心に広く座を占め始めているというわが心の変化が丹念に描かれています。

その他、現代人の乾いた心をうたった「惰眠の由来」、地球温暖化による気候の大変動から風景の荒廃を描く「温暖化」、秋の古都京都の寺の鮮やかな紅葉の彩りを探索して歩く「古都紅葉」、襲ってくる蚊への対策をユーモア交じりに描く「直面する問題への対応策の一例」、化石生物といわれるシーラカンスが深海の底から人間の愚挙を視つづけているという「視る者」、やがて嫁ぐ娘を見詰める母親の哀歓をうたった「嫁ぐ日に」などの作品が印象に残った。

短歌

【市民文芸賞】

こぼれ萩そこだけ時が見えている無風無音の寺の庭園　東区　飯田裕子

糸さわぐ満たされし午後和布広げ旅立つあなたに贈るコサージュ　北区　伊藤美代

廉太郎　一葉　啄木　子規　賢治　今さら哭かるその享年に
膨大な妖怪漫画玉砕の地ゆ還り隻腕に描かるるものか　中区　塩入しず子

台風の置土産なる停電に親族浮かびく蝋燭の灯に　中区　富永さか江

投げもせずかわしもなくてひたすらにがぶる相撲のはっけよいやあ　中区　内田乙郎

【入　選】

中区　柳　光子

末っ子の見本のような妹が天ぷらを揚ぐ母の初盆

中区　鈴木　利定

みちのくの友の絵手紙紫陽花の露は涙のごとく滴る

中区　寺田　久子

「終活」の造語知りたるその日より身辺整理まだ捗らず

中区　江間　治子

北風に吹かれて寄りし干物のシャツは仲よき家族のごとし

西区　伊藤　米子

逝く母に呼吸合わせつつ手を握るこの母ありて今の吾あり

中区　石原　新一郎

言へぬまま内に蔵ひて四十年妻は洩らしぬ蓋も痛みて

天竜区　ちばつゆこ

わたくしが少女の顔に戻る時月と星とランプの下で
弥生という優しい響きその裏で何万という命を奪った

天竜区　太田初恵

老脳と休眠ミシン揺さぶりて浮かぶアイデア夏ころも縫ふ

天竜区　鈴木巳三郎

姿なきけもののあらく吐く息に追われるごとく畑見廻る
けものにはけもののくらしあるならんわが糧守るわれもけだもの

中区　宮本恵司

フルートに明るき五月を委ねむとスタッカートに弾みつけたり
八分音符が四小節間つづきをり早まる心抑えへつつ吹く

中区　戸田田鶴子

ここで生まれここで育った大空へ抜ける祭の太鼓のひびき

南区　井浪マリヱ

スペインのアンダルシアの美しき景の映画を娘に誘われて

南区　大庭拓郎

もう一つ角を曲がれば見えてくる妻の新墓花
を供えん

西区　柴田修

蔦江さん今日も元気とありし日の妻を記せし
連絡帳は

西区　岡部政治

特撮の映画のごとき黒き濤家や車を呑み込み
進む

中区　袴田宣子

福島に早く帰れるようにとぞ鎌倉の地の絵馬
にありたり

南区　柿澤妙子

老舗なる暖簾くぐれば並びたる和菓子のなか
に「復興玉子」

中区　澤田あい子

雨やみて蜜柑の花の匂ひ立つ原発廃止の気運
の中に

中区　木下芙美子

地震（なゐ）の夜子の待つ家へ五時間を歩きしと娘の
零時のメール

東区　森脇幸子

家族みな津波に消えし四歳の子「ままへ生き
てね」の文字にも涙す

西区　柴田千賀子

「わたしでもお役に立ててうれしい」朝シャン
派の娘東北へ発つ

中区　小笠原靖子

フクシマを世界中に知らしめて自転公転地球
はまわる

中区　浜　美乃里

農園の返す日近し丹念に土ほぐしけり収穫の
あと

東区　宮澤秀子

新米の炊き上がる香に目覚めゐて身の丈の幸
噛みしめてをり

南区　曽布川くり子

蕗、三つ葉、茗荷、明日葉、わが庭の地産地
消に今日虫の声

西区　近藤栄子

押しのけて咲けないやさしさ仏の座からす豌
豆庭に咲きそむ
ふくらめる椿の蕾掌につかみ春の確かな鼓動
伝はる

中区　松浦ふみ子

ごめんねのつもりか「今夜、鍋がいい」冬の
けんかを夫から折れて

南区　赤堀　進

幼子のないしょ話はやわらかく老いの私は息を聞くのみ

東区　鈴木　壽子

母の胸に抱かれ眠る幼子の「安心」と銘ある写真に見入る

北区　古谷聰一郎

新米の炊きたつ釜の蒸気からたなびく稲穂のざわめき聞こゆ

南区　太田　静子

娘と孫と我の異なる性格が布巾の絞り方にあらわる

天竜区　恩田　恭子

この夫と添へてよかったあたたかな手のぬくもりよ金婚式の今日

東区　能勢　明代

いつせいに挙手したるごと裏白の新芽明るく夏始まる

西区　河合　和子

静けさの戻りし夕べあらためて賀状と向き合う吾と対き合う

中区　松江佐千子

水槽の数だけ天井ゆらゆらと水陽炎の入江の漁港

中区　知久とみゑ

骨と皮じっと見つめし父よ父二度と鏡を見る
ことなかりき

東区　長浜フミ子

もう年だから逃げないぞこのままいるぞと兄
が言う原発汚染消えぬ故郷

中区　手塚みよ

種なしの金柑ながら一粒の出で来し種を庭に
埋めたり

中区　佐々木たみ子

目に慣れし時計外され白白と閉院近き医院の
壁は

北区　山田文好

隆隆と瘤積み上げて御座します空半分に入道
雲が

東区　生田基行

桜花散りて若葉の芽ぶきあり去年も今年も妙
なる力

西区　水嶋洋子

厭わずに公衆トイレ拭き清め自分みがきと友
は清しく

浜北区　すずきとしやす

亡妻（つま）おくり六年の秋の押入れに君は残せり風
呂敷ひとつ

北区　鈴木信一

うしろ前に着てるじゃないか息(こ)にいわれやっと気づきしTシャツ気楽

東区　久米玉枝

幸せの鳥よと云ひて友が掌にのせくれしガラスの小さな梟

東区　北野幸子

ビル工事の高き足場に仰向けに若き鳶職昼寝しており

中区　幸田健太郎

亡き父の傍線のこる歎異抄老いを覚りてしみじみと読む

東区　岡本久榮

ダム湖より今艇上げし生徒らはいとほしむごとぬぐふ船底

浜北区　前田徳勇

麁玉の根方はおよそ暮れはててかすかに残る山の嶺(ね)の朱(あか)

東区　村木幸子

集落が鹿猪(しし)熊に追われゐし柵の中には人が暮らせる

東区　杉山佳子

認知症関係なしと思ひたき見え隠れする老ひと向き合ふ

中区　宮地政子

リハビリに励みいちづに打ち込んで一日(ひとひ)のこころ楽しく過ぎる

中区　中山和

傍らに寝息を立つる君のゐて炎暑の昼のゆるやかに過ぐ

北区　大石みつ江

古希過ぎて漠然とした不安覚ゆ老ひに関する書物を読まむ

中区　岡本蓉子

体調のすぐれぬ姉になき父母のことを聞きつつその背をさする

中区　金取ミチ子

たそがれの春まだ寒き帰り道真紅の椿にしばしみとれる

北区　平井要子

赤子泣く赤子なく声なつかしく日当る路地にしばし佇む

中区　織田恵子

ゲストのアンヌリーズに釘付けにわが持ち歌の「水に流して」

中区　坂東茂子

死の話ばかりの辻氏九十二歳いまおいしそうにランチたべゐる

西区　荒木治子

献血の杏き記録を繙きて情報キットに血液型
かく

中区　吉野正子

救急車暴走バイクの音遠く夜半の湯船に俄雨
聞く

浜北区　内山喜八郎

山に来て喝を入れられ帰りきぬ生きる気力は
満満となる

中区　倉見藤子

生前の兄の読経よみがへる西行恋ふも霜月に
逝く

浜北区　川島百合子

七十路の手習始めパソコンに孫らの応援嬉し
悔しき

東区　寺田陽子

淡き紅滲ませ揺るる紫陽花はおたふくという
名前なるらし

中区　髙橋幸

稲架（いなはざ）が西日をうけて輝きぬ宅地化のなか残さ
れし風情

中区　新田えいみ

胸に乗り安堵するらし鳥のため午睡を少しの
ばし寝ている

中区　仲村正男

儂よりも前に出ないと約束し曾孫と参加三キロマラソン

中区　髙山紀惠

のこぎり草まっすぐ立ちて丈二尺夏の陽の中小さき花付く

北区　角替昭

絵に歌にグランドゴルフとサークルは年齢を超えたる絆の深さ

東区　増田しま

一人病む真夜(まよ)の目覚めの枕辺に夢を見守る卓の一輪

中区　安藤圭子

フライパンずらりと並ぶ店先で迷いながらも軽きを選ぶ

中区　平野旭

愛猫のいつもの場所に姿なく居間の灯が暗く思える

中区　鈴木郁子

祖母われに長生きせよと手相見つつ生命線をなぞりくれたり

東区　寒風澤毅

肩肘を張らずに生きよと教えるか伊勢の山川丸くおだやか

浜北区　大城きみ子

苦労続きの母なれど小さき声で唄ふ姿をなつかしく思ふ

南区　水川あきら

下校の子声掛けやれば次からは手を振りながら挨拶をする

西区　河合秀雄

前向きは心の支え今日も又めぐる朝日に感謝を込める

中区　中村弘枝

几帳面の角のとれないわたくしも部屋丸く掃くを体が教える

東区　森安次

震災の障りの所為か入梅の雨を報せる蛙鳴を聴かず

南区　白井忠宏

大地震日本の力試したか世界の目耳ここに集まる

南区　内山智康

妻と来し旅に見上ぐる天主堂十字架黒し逆光となり

浜北区　竹内オリエ

祭りの夜こころ浮き立ち宵宮に集う屋台の賑わいが好き

中区　荻　恵子

寒風の中遠ざかるバイクの灯朝刊広げ感謝して読む

北区　あひる

通学の自転車にまで巻きつきし朝顔のつる今盛りなり

中区　高橋紘一

物持ちがいいねと人は言うけれどケチではないと声を大にす

中区　内田安子

砂時計落ち終へるまで歯を磨くブラシの角度さまざまに変へ

北区　森上壽子

どうしても思い出せない商品名孫がすかさずケチャップと言う

東区　内藤雅子

雷はいまだ遠しと草むしり続ける我に大つぶの雨

中区　今駒隆次

どんなにか日夜苦労の連続か介護の苦労目頭うるむ

中区　江川冬子

十八番（おはこ）なる夫（つま）の「風雪流れ旅」聞けば今宵の宴も果てなん

天竜区　月美里

朝もやにキャッチロー声こだましてカソの村
にも若人集う

東区　田辺悦子

梅雨の間の匂ふがごとき夕映えの春にも秋に
もあらぬその色

中区　小林和子

つひに子を孕むことなく除かれし子宮は白き
唇のごと

中区　和久田俊文

照る月の光も柔きに幼子の足跡二つ浜に踊れ
り

中区　鴇多健

四千の灯籠揺らぐ舘山寺震災悼む想いの花火
よ

北区　半田恒子

終戦後六十有余過ぎたるに原発事故に不安つ
のりぬ

中区　飯尾八重子

ピオーネの口いっぱいにひろがりぬ朝のひと
とき今日もしあわせ

西区　伊藤友治

雨だれに雨だれの音重ねては暮れなずむ空な
ほ暮れなずむ

浜北区　石川きく

年重ね手足の自由ままならぬ好きなお習字筆を持ちたし

中区　前田道夫

台風に揺れいる柿の木の繁み高く鳴きたつ油蝉らは

中区　大橋康夫

秋夜長ひとりし臍の胡麻弄(じら)ふ生くるも死ぬもさびしと思ふ

南区　太田あき子

老いの身に活力くれる吾子達は旅に出ようと温泉に誘う

中区　藤田淑子

風船をついて笑いが湧いてくる曾孫と過ごす春の縁側

中区　内山文久

かたことのおはなししましょ三歳の真夏の昼はアイス舐めつつ

中区　川上とよ

広き庭木立繁れる大雄寺木瓜の花咲き静けさ保つ

中区　飛天女

たずねみる引佐細江のみおつくし真鴨群れ飛ぶ母の里山

中区　畔柳晴康

鶯の鳴き声大分巧くなりヘリーポートも霞む
春来る

南区　出原久子

病室に臥せいる夫に面会し二人して見る夕焼
けの空

南区　鈴木芳子

今様の短歌（うた）学びたく新聞の投稿欄よむうなず
きながら

南区　杉山勝治

叙勲者の載る朝刊を確かめて赤飯を炊く晴れ
やかな妻

東区　北島はな

会ひたいな声出してみて呼んでみる空に浮か
ぶ面影恋し

北区　鶴見佳子

健康をゆいつの自慢の姑なれど白きベッドで
見るも悲しき

西区　近藤茂樹

咲きほこるミカエリソウの風情にも寸時惜し
みて石畳踏む

中区　井口真紀

紫陽花に一筋の雨流れ落ち自然の恵みありが
たきかな

西区　脇本淳子

傘寿なる祝いの膳で夫（つま）いわくめでたくも有りめでたくもなし

北区　山口久代

縫い針を運ぶ窓辺に聞こえくる五羽の雀のよもやまばなし

東区　高橋正栄

陽を受けて庭木に吊るすCDは光り振りまく色は七色

短歌選評

村木道彦

ありえない光景がテレビに繰り返し流れ、私たちは言葉を喪った。三月十一日。日常のなかに突如出現した「非日常」はそのまま長く居座り、今もなお収束への道筋を完全には示し得ない。私たちが拠って立つ「日常」とは何か？　社会とは何か？　そしてそもそも人間とは何か？

目の前に在る「今」を、更にはその「今」を通して「わたし」を主題にして来たのが短歌であるとして、こういう時代であるからこそ、より深い眼差しが求められていると思われる。今回の市民文芸賞は次の五名の方。

○

・こぼれ萩そこだけ時が見えている無風無音の寺の庭園

思弁的・哲学的な作品だが、観念的ではない。「無風無音の寺の庭園」という周到な措辞が効いているからである。ひそかに堆積していく「時」を「こぼれ萩」に見ているのである。

○

・糸さわぐ満たされし午後和布広げ旅立つあなたに贈るコサージュ

「糸さわぐ」が秀逸。「コサージュ」を作るときの踊るようなこころが目に見えるようだ。

○

・廉太郎　一葉　啄木　子規　賢治　いまさら哭かるその享年に

・膨大な妖怪漫画玉砕の地ゆ還り隻腕に描かるるものか

一首目も二首目も共通点がある。明治期の文人や現代の漫画家の作品のその背景を描いている。それぞれの時代ゆえの「夭死」と「戦争体験」。時代を見据えた大人の視線をこの作者に感じる。

○

・台風の置土産なる停電に親族浮かびく蝋燭の灯に

そうなのだ。東日本大震災の暗闇のなかで改めて「日本人」の顔が浮かびあがったのだった。「絆」という言葉をともなって。こういう時代を背景に、この作品の深さが成立する。

○

・投げもせずかわしもなくてひたすらにがぶる相撲のはっけよいやあ

私自身は特に大相撲のファンというわけでもないのだが、それでも新大関誕生は明るい話題だった。「はっけよいやあ」が効いている。短歌のリズムが生きて躍動している。

最後に入選作のなかから五名の方を挙げる。文芸賞作品と甲乙つけがたい作品である。

○

・末っ子の見本のような妹が天ぷらを揚ぐ母の命日

○

・みちのくの友の絵手紙紫陽花の露は涙のごとく滴る

○

・「終活」の造語知りたるその日より身辺整理まだ捗らず

○

・北風に吹かれて寄りし干物のシャツは仲よき家族のごとし

○

・逝く母に呼吸合わせつつ手を握るこの母ありて今の吾あり

定型俳句

【市民文芸賞】

細胞の六十兆個春待てり　東区　田中美保子

若頭領木っ端枕に三尺寝　中区　野田正次

流れくる雲に跳び乗るあめんぼう　西区　山内久子

俎をはみ出す冬瓜切りがたし　東区　切畠正子

爽やかに我が身の癌を撃ちにけり　西区　吉田髙徳

制服の釦のかたき四月かな　西区　山﨑暁子

百歳を生き抜く気骨夾竹桃　西区　野嶋蔦子

花束の如しパセリの束薫る　南区　藤田節子

マンボウを見に新涼の水族館　南区　渡辺きぬ代

初夏や屋号呼び合ふ漁師町　西区　野中芙美子

【入選】

南区

弾かれて西瓜明るき目覚めかな　赤堀　進

薩摩芋掘るや米寿の膝をつき

蝋燭（ろうそく）の揺れる火影（ほかげ）に十三夜

南区

誇らしくなでしこの花夏に舞う　あべこうき

「イマジン」を今生きている我ら夏

亡き母に励まされては初の盆

東区

初蝶のひらひら目線奪いゆく　飯田裕子

二人共坊主で帰る鰯雲

句が有りて夜長一灯欲しいまま

中区

誠実に生き万緑の地に還る　池田千鶴子

夕厨いつしか虫の闇迫る

ふるさとの橋を渡るや秋茜

中区

還暦の嫁ご作りし茄子の馬　池谷静子

逆上がり習う幼な子金木犀

防災の人の輪ひろぐ芋雑炊

南区

伊藤久子

浴衣着て少女他人の顔をして
小鳥来る子らに秘密の基地ありて
空の色あくまで青し稲穂垂る

中区

今駒隆次

着ぶくれしサンタクロースの老の笑み
満月や連山影の濃くなりて
鰯雲まばらとなりて泳ぎけり

西区

岩﨑良一

たそがれの雲はむらさき桐の花
炎天下老農ひとりかげ揺れる
盆の夜は亡母の七癖語りつぐ

西区

岩渕泰三

夏祭鼻筋白き稚児の列
教会の鐘鳴りわたる花ミモザ
村芝居見栄を切る子のあどけなさ

中区

右﨑容子

鞦韆や少年野球白熱す
メガホンを上下左右に雲の峰
涼新た生徒五人の小学校

中区

大倉照二

被災地に産声高く春満月
振り向けば越し方遥か枯野道
喜びのはみ出して来る年賀状

南区

永らへる父の気魄や春田打　大田勝子

農機具を磨く軒端や笹子鳴く

大寒の朝の産声響きたり

中区

わだつみの鳥居へ歩む大干潟　大村千鶴子

始めてのふらここ父の膝の中

新涼やまろき勾玉(まが)胎児めく

中区

蝉時雨他に存在無きほどに　小川惠子

炊きたての豆の香りし夕餉かな

寒雷に包丁の手も止まりけり

西区

春隣口笛の流れ来たりけり　加藤新惠

夏休み少女は乙女となりにけり

台風の目に入り将と刻止まる

東区

汗とばし旗振る漢の真顔かな　切畠正子

寒稽古少年の討つ竹刀の音

もみじ手の十指に溢る土筆かな

南区

想い出す夜なべの母の鼻めがね　齊藤あい子

木の芽和えみどり浮き立つ白小鉢

風呼びて音色異なる鉄風鈴

中区

列島を覆ひつくせよ桜の芽　佐藤千恵

流星や少なくなりぬ願ひごと

縁側に絵本並べる小六月

西区

新藁にまみれて仔牛立ち上る　佐藤政晴

村芝居女形の手足荒れてをり

天涯に師あり野辺の草紅葉

中区

硬くなな秘密すべらす寒玉子　澤木幸子

青梅や反面教師ここに居り

秒針の音正確に夏去りぬ

中区

啄木の元朝の歌いまになほ　塩入しず子

哭きしきる蝉か信濃の無言館

しみじみと「みすゞの一世（ひとよ）」夜の秋

西区

母の摘む子に薬効の滑莧　柴田弘子

秋祭太鼓の音に急かさるる

送り火の煙の中の佛かな

西区

水鳥の点となりゆく長き水尾　柴田ミドリ

囀りの止みて一人の畑となり

空蝉の眼に乾く土の色

中区　白井宜子

しみじみとボレロ終章秋惜しむ
落葉踏む一歩一歩の深き音
冬隣り路地奥に見る昭和の日

北区　鈴木章子

日暮まで溶けぬ氷や母の里
冬鳥の一羽が発てば群つづく
北に行く鈍行の窓夜の秋

中区　鈴木由紀子

雨上がりルオーの色持つ柿落葉
冬うらら十八柱の御祭神
太陽を部屋に放てり干布団

西区　平幸子

薪能果てて現に戻りけり
ゆくりなく恩師にまみゆ大花野
行く秋の梵鐘を撞く異邦人

西区　高橋ひさ子

北の地のはや流氷の便りかな
桐の花散りて夕風むらさきに
探梅や陽のやはらかな山に入る

西区　竹山和代

葉を抜けて蓮の蕾は天を指す
人を呼ぶ風のコスモス畑かな
競漕や掛声高き方が勝ち

西区

野遊や少女の胸の膨らみて　田中ハツエ

甚平を仕立て直せし鼻眼鏡

小さき手に数へて掴む木の実かな

東区

身じたくは手櫛で済ます蛍狩　田中美保子

右の畑左の畑も豆の花

鵙の声天まで届く日和かな

西区

篷篷と杉菜の堤となりにけり　徳田五男

芽吹きそむ幹くろぐろと今朝の雨

亀鳴くを八十余年聞かぬなり

南区

明日はオペ風に遊ばる花大根　中津川久子

吹つ切れて大股に行く薄暑かな

問診表ひとつ嘘あり花の冷

中区

冬夕焼工事半ばのシルエット　中原まさ

今朝ひらく芍薬誇りうしなわず

秋風の揺らす暦の軽さかな

南区

蜩やまこと貫き来て卒寿　中山志げ

刈跡の稲田とりどり鳥の群

束の間の冬至の入り日部屋染めて

西区　野嶋蔦子

島二つ抱きし湾や春霞
木洩れ日や揺れる若葉のグラデーション
曖昧に季移ろへる暮の秋

西区　野島やすゑ

咲き満ちし桜に愁ひなかりけり
アスファルト裂け目に宿る春の草
炎天下砂場にバケツ転がりて

北区　野末初江

彼岸花畦道大きく曲りけり
大根干すかおりゆたかに三方原
電線に旅仕度する渡り鳥

中区　野田正次

迸る水天を衝く出初め式
白鷺の脚にたつぷり春の泥
時の日にねじ確と巻く古時計

中区　野田ますえ

手の甲にためす口紅冬はじめ
晩学の辞典は重き鉦叩
その後の便りは聞かず吾亦紅

西区　野中芙美子

冬帽をすつぽりかぶり漢来る
標札はひらがななりき沈丁花
銀杏舞ふ城下通りの古本屋

中区　伴　周子

鰡はねて水面の静寂破りけり
辺つ波の民家つなぎて秋灯
美し国国土の汚染蚯蚓鳴く

中区　平野　旭

ペタル踏み少年夏を走り行く
御柱春浅き諏訪滑り行く
海野宿卯建の下に福寿草

南区　深津　弘

朽ち舟は歳月のいろ水温む
語るたび良くなる昭和終戦日
鈍も一刀にして西瓜割る

南区　藤田節子

牡丹の溢れむとして崩れけり
満月の和紙の白さに昇り初む
掌団栗のせるためのもの

中区　藤本幸子

空蝉の縋る葉裏に爪のあと
長き影連れ通学の息白し
鉛筆の文字に込めたる寒見舞

中区　星宮伸みつ

星降つて山田の案山子眠らざる
不断着に替へて腕白七五三
凍滝の月日を刻みゆるがざり

北区

本陣の一の間二の間雛飾る　牧沢純江

衛兵の敬礼颯と立夏かな

十薬のいきいき雨に打たれをり

中区

濡れながら綻びながら牡丹かな　松江佐千子

飽きもせず豆飯炊けるひとりかな

靴跡に雪の深さのありにけり

中区

七転び八起のふたり古茶いるる　松本緑

針穴にすつと糸入る良夜かな

寄せ鍋に眉毛の似たる子等の箸

中区

秋潮のどよめきながら岸洗ふ　宮本みつ

湖施餓鬼路地より子供湧き出でて

吹き降りの遠州灘の野分かな

東区

新涼やようやく会えし阿修羅像　村松津也子

秋扇想い出そつとたたみけり

生き様を大震災に問われけり

西区

リハビリの杖の先なる土筆かな　森下昌彦

佐鳴湖に魚影戻りし小春かな

傾きて案山子の役を全うす

西区

我もまた長き影ひき秋惜しむ　山内久子

緑蔭の一本に足る大きな木

噴水の技有り高くより高く

西区

咲き満ちてよりの気怠さ花の昼　山﨑暁子

絵手紙に一字の朱印青蜜柑

水音の尖りし峡の冬はじめ

西区

神の留守絵馬色あせて風に鳴る　山﨑勝

十三夜横一文字夜汽車の灯

杖ついて秋夕焼の中に入る

西区

角落とし雄々しさ失せてしまひけり　横原光草子

麦笛の名手でありし父偲ぶ

こんこんと湧水の音木下闇

西区

病室にコスモスの風吹きゐたり　吉田高徳

癌病棟ともりてゐたり夜半の秋

病棟に千歳飴持つ子のゐたり

中区

ゆつたりと島巡り来る水母かな　和田有彦

魚跳ねて浜名湖の秋惜しみけり

大太鼓打ち鳴らし過ぐ秋の浜

南区

子の髪の日差しの温み手にやさし　渡辺きぬ代

水打つて路地に生気の戻りけり

訪ねたる若冲の墓秋日燦

西区

日曜日父娘のテニス赤とんぼ　浅井裕子

摘みたての芽キャベツ並ぶ道の駅

北区

行きかうは熟年ばかり山笑う　あひる

ニュータウン隅にススキの揺れし頃

北区

純白の神主くぐる芽の輪かな　安間あい

逞しく育てとエール鯉幟

西区

獣道かすかに揺るるからす瓜　安間すみ子

再会の心は少女花かんな

中区

絵手紙に春の足音きこえます　飯尾八重子

友逝きぬ一際さみし晩夏かな

東区

虫の音に重なる汽笛遠く聴き　生田基行

拭きかけの窓から入るる十三夜

中区

開店に冬めく街も賑はひて　池田保彦

父と子のボール蹴り合ふ刈田かな

中区

柿一つ残して終る去年今年　石川芳治

鷹柱ほぐれ流れて宙に入る

東区

てつぺんの見ゆる木となり神無月　石橋朝子

花嫁披露お隣りも石蕗の花

北区

山頂のうぐいす身近にこだませり　伊藤アツ子

初がつお大振り盛りて平和かな

中区

文化の日基地に爆音なかりけり　伊藤サト江

凡骨へ賜りしもの菊日和

西区

薫風やひとりの座敷通り抜け　伊藤しずゑ

万歳の語り上手や舞鼓

南区

晩夏光丘の上なる美術館　井浪マリヱ

秋深しロシア民謡口ずさむ

西区

鶯を聴く足取りとなつてゐし　岩崎芳子

張りつめてずしりと重きトマトかな

北区

秋空にゆつくり輪をかく鳶一羽　内山あき

倖は切り開くもの神無月

西区
ふるさとの老母の湯かげん春の月　海原　悠
月光に金木犀の香を放つ

中区
みちのくの子供真つ赤な桜描く　梅原栄子
定位置に夫の座布団鵙猛り

北区
寒の朝両手にぬくき志野茶碗　大石佳世
犬がゆく着ぶくれ主(あるじ)ひつぱつて

西区
母さんの色見つけたよ実むらさき　太田沙知子
交差するロープウェーの冬夕焼

東区
子燕が巣立ち別れの四羽並ぶ　太田しげり
花吹雪水面に浮び逆らえず

西区
麦笛を競ひし友の通夜となり　太田武次
風通し高校野球観戦す

中区
ブロンドの頓狂な声雛の店　大橋康夫
入学児下校の門に敬礼す

中区
小鳥来て又小鳥きて絵となりぬ　大平悦子
マネキンの案山子流行(はやり)の服を着て

中区

にわか雨蝶も舞い込む傘の中　大屋智代

甘夏や思い出いつぱい皮をむく

東区

桃の花一輪だけの桃祭　岡本久栄

階の高き一段紅葉かな

西区

噴水や一基止れば一基噴き　岡山小夜

たれさがり滝の如くに菊盛り

中区

新しき命を囲む春隣り　小楠惠津子

鰯雲遠くのみねに風車列

西区

廃村の空に満ちたる雁の声　刑部末松

枯蓮に父の気骨を偲びけり

東区

大盆に枇杷大盛りに盛られたり　小野一子

水仙や小束の並ぶ凛として

西区

鉦叩(かねたたき)七つたたいて闇に消え　御室夢酔

残り葉に色なき風の音を聞く

北区

肩先に花一ひらや一年生　梶村初代

秋光るフエルメールの耳飾り

中区
方丈の句会に鯉のはねる音　勝田洋子
真砂女いる天より降るや紫木蓮（しもくれん）

中区
秋刀魚ずし満面の笑み友の顔　勝又容子
稲架の間に父母の姿が見えかくれ

中区
猫じやらし無事生き延びて野良の猫　加藤和子
青ばったお前も食はねば生きられず

東区
日だまりに猫の寝息のきこえくる　加藤ゆう子
鰯雲父母の里にもつづく空

中区
春暁やつゝがなき日のめぐり来ぬ　金取ミチ子
モネの庭バラの賛美の声しきり

西区
東風の吹く日ごとに緩ぶ蕾かな　金田チヨ
あらたかな社を護る木華かな

北区
里山につきささりたり百舌（もず）の声　加茂桂一
満月と踊つてみたい唐州崎（からすざき）

西区
汐干狩巧みな足の捌きかな　加茂忠
浮人形子もそれぞれに親となり

中区

その昔熟れし桑の実食べしこと
冬の朝生かされてこそ楽しけり

加茂隆司

中区

木犀に季(とき)の確かさ知らさるゝ
断層に栄枯の歴史木の実落つ

川島泰子

西区

花桐や肘ついて見る雲の影
梅雨晴間色えんぴつで描く夕日

川瀬慶子

西区

何せむと出づれば夜霧纏ひくる
名月の瓦礫の闇を照らしけり

川瀬雅女

中区

友来たるコスモスを一抱へして
「さようなら」と夏の手袋振りて行く

川村かづ子

南区

残照を背景に飛ぶ蚊喰鳥
鵙の鳴く高音の楽し朝厨

金原はるゑ

中区

晩学の古事記音読秋ともし
友と和す原語の「野ばら」秋澄めり

倉見藤子

中区

息かけて眼鏡ふきゐる花曇り
褒められて其の気になつて四月馬鹿

斉藤てる

中区

招かれし十八階の朧月　斉藤三重子

敬老の日のコーラスに加はりぬ

東区

ときめきし夢たぐる夜や遠花火　坂下まつ江

今昔を密かに偲ぶ秋夜長

西区

復興を願ひ野外のフラダンス　坂田松枝

「それから」と御伽話の夜長かな

南区

行く夏の波のさらひし砂の城　佐原智洲子

天邪鬼の吾子の自立や青胡桃

中区

買い初めや少し派手目の帽子とす　沢田清美

御法話中朝蝉いつか声かはる

西区

懸命に蝉鳴く姿見つめけり　柴田修

法師蝉わずかで終わる声を追う

西区

畦道を彩る豆の花あまた　清水よ志江

滴りに息を合はせてをりにけり

中区

燕(つばくろ)や水田に浮かぶ逆さ富士　不知火

地蔵盆過疎の村にも市が立ち

西区
芋名月落書ののこる文机　新村あや子
忘却のページもありて古日記

西区
嵐過ぎ何処から来たや赤とんぼ　新村健一
嵐行き湖の風秋の色

西区
参道の芭蕉の句碑にこぼれ萩　新村ふみ子
なでしこの凱旋祝ふ蝉しぐれ

西区
おにやんま今日も高きを飛びにけり　新村康
大手振り芋虫道をわたりけり

西区
喜寿近し米ひとすじの鍬始め　新村八千代
氏神に献句整いぼたん雪

西区
元朝は父の訓示で始れり　新村幸
ソプラノもアルトもありて蝉しぐれ

中区
駿河湾指呼の初島梅だより　鈴木和子
金木犀風の吹くまま匂ひけり

東区
遠目にも軒の明るさ吊し柿　鈴木節子
落葉浴び落葉踏みゆく欅道

東区
をんどりの呼応してゐる柿日和　鈴木千寿

銀杏割る旅の話のつづりをり

西区
山あいの銀杏もみじのきらめきて　鈴木ちよ

鳥の分残しおきたるさくらんぼ

西区
夏帽子螺旋階段登り来る　鈴木智子

浮見堂水の底まで夏なりき

東区
初稽古父も一緒に習ひけり　鈴木浩子

冬晴や素振りの音と鳥の声

北区
金木犀香の高きより零れ満つ　関和子

贈られし母の日の傘雨を待ち

南区
遠き子の帰省の知らせ辛夷（こぶし）咲く　髙林佑治

七夕の笹の先には金の星

西区
闇夜にも白く映えるや蕎麦の花　髙柳とき子

秋祭り笛や太鼓にうかれけり

中区
金魚草緑の原を群れ泳ぐ　髙山紀惠

細き茎大きなゴーヤぶらり下げ

西区　田中安夫

薮入りや昭和の記憶甦る
三の酉鳥居の陰に喫煙所

西区　為永義郎

春雷やきつと牙剥く鬼瓦
夏雲や一際高き兵の墓

北区　辻村榮市

じゃんけんぽどんぐり握るグーの手に
秋の暮ボンボン時計帰る子等

西区　辻村きくよ

蓮枯れて田の面に映る夕日かな
夕日差す庭に蜻蛉（とんぼ）の群れ遊ぶ

南区　坪井いち子

口紅の色変へてみる四温かな
冬ぬくし一度で通す針の糸

北区　鶴見佳子

足袋脱いで指を休ませ田植人
青き目の介護学生麦の秋

中区　鴇羽　健

瞬間（とき）刻む3・11白梅花
逢いにゆく杖を頼りに墓参り

中区　戸田幸良

二歩三歩歩きて更に春の風
玄関の梅一輪で今日明ける

中区
耳元に蝉の声あり草を引く　富永さか江

赤き茄子黄色き茄子を壺に挿す

北区
蝉に起き蝉に暮れたる一日（ひとひ）かな　豊田由美子

向日葵の迷路大人もはしやぎたる

東区
御衣黄は花好きの亡夫の贈り物　内藤雅子

カマキリと目が合えば鎌を振り上げる

西区
金沢の雪吊雲に触るほど　中嶋せつ

ささやかな我が家なれども煤払

中区
駐車場たんぽぽスギナの背比べ　永田恵子

梅雨晴れやここぞとばかり子ら遊ぶ

東区
コスモスや母が見守る一輪車　長浜フミ子

梅を干す一つ一つに恵みあり

中区
児の放つ尿湯気立つ寒の入　中村貞子

マネキンも腕はずされて更衣

西区
花枇杷に陽の集まりて空深し　中村勢津

街灯の霧に潤みて定まらず

西区
さざ波の音集めたる蘆の角　西尾わさ

入陽濃し山なだらかに蜜柑熟る

中区
蒼空に赤き日の丸明治節　西村充雄

ラケットを休めてコートの草を抜く

中区
御坂越え紅ひといろの桃の里　二橋記久

彫金の鯉に願うや安居寺

北区
啓蟄や仮名文字ふつと動き出す　野沢久子

盆の月雲がくれつつ瞬きぬ

北区
春衣まといてのぞく鏡かな　野末法子

ちちははの面影ほのか盆の月

東区
源流の匂ひ新たに葛の花　能勢明代

大声で叫ぶかわりのひよんの笛

西区
遥かから波辿り着く秋夕焼　野田俊枝

膝まづく老婆の祈り破蓮

中区
木犀の香も描きたる画学生　野又惠子

秋の昼たつた二人の路線バス

南区

刈田道幼名呼び合ふ遠会釈　袴田八重子

立冬や路地靴音の急ぎゆく

南区

西瓜食べ今も昔も種飛ばし　花田春男

秋に入り茜に染まる西の雲

中区

高校のチャイム聞く坂日脚伸ぶ　浜美乃里

蝉時雨強く生きよと鳴きやまず

中区

親鸞の御跡を慕ふ花の旅　林田昭子

天高し園児きびきび組体操

東区

夏雲のわき出るかなたあこの顔　原田かつゑ

彼岸花あぜ道つづくかぎりかな

南区

ボランティアの汚れし顔や風光る　原田ゆり

釣人も猫も動かぬ冬日和

東区

青嵐日本一の天狗面　日置文代

青鷺の脚軽やかに舞ひ降りぬ

西区

木犀の香り法衣とすれ違ふ　古橋千代

歳月の重ね背負ひて冬仕度

中区
スカーフのシルクひんやり初夏の風
夕風にひとり遊びの猫じやらし
堀口英子

中区
くせ髪を手櫛でときて春惜しむ
蕎麦のれん古りて昔の味のあり
前川友子

西区
小春日や百面相して歌謳ふ
秋の暮山の姿を写し出し
松本憲資郎

中区
花は葉になれてきたれり通学路
七五三指三本で答へけり
松本賢藏

西区
一面に黄菊白菊咲きほこる
新米を袋に詰める心意気
松本美都

南区
年かさねまだ望みある鰯雲
ねじれ花ねじれたままに咲きにけり
松山洋子

東区
くさめして星の在りかの定まれる
曼珠沙華押し分け猫の現るる
馬渕涼子

南区
東北の知人不明のままに春
稚児抱く仕草筍貰ひけり
水川放鮎

東区
冴返る庭木の幹に紅ほのか　宮澤秀子
亀鳴くや机上に古りし啄木集

中区
チェロ弾けば腹に響けり牛蛙　宮本惠司
チェロを弾く弓休めたり虫の声

南区
毎日を地道に生きて冷奴　森明子
陽の匂ひ残る帽子の色あせし

東区
年仰ふ白寿の遊亀の梅の軸　森満智子
看取る手と看らるる手の温かし

南区
無事帰還せしパラシュート冬の月　八木裕子
譲られし席にふかぶか梅雨曇り

西区
我が胸も同じ色あり割れ石榴　八木若代
ひたすらに裸婦を描きし秋の暮

西区
雀寄る静な午後の松納　山口久江
月光の河津桜の並木かな

西区
風鈴の鳴る強弱や子守唄　山本晏規子
乳母車押す背に光る秋日差

西区
月光の浜にこぼるる二枚貝　山本兵子

日傘さしキリストを説く女かな

東区
返り花縁あたたかき日なりけり　山本峰子

啓蟄や松の根方に石一つ

中区
落蝉のじいと発する力あり　横田照

秋ひとりもの云ふ家電にかこまれて

中区
生かされて観音巡る白芙蓉　吉野民子

秋立ちぬ紅柄格子続く街

西区
野良仕事終つてみれば日脚伸ぶ　和久田志津

力なきラジオ流るる終戦日

西区
何となく微笑んでみる初鏡　和久田りつ子

万物の静まる夜半の冬の月

西区
コスモスにほほよせあえり童(わらべ)かな　渥美進

東区
魚飛びて浜名の面は秋色に　伊藤倭夫

西区
七五三羽織袴で出立ぬ　うたの

浜北区
茶の花のひつそりと咲く山の中　内山喜八郎

中区
秋桜（こすもす）を見たさに友を誘いけり　大石睦治

南区
菜園のしの字曲りのキュウリたち　太田静子

中区
ひと踊りして汗ぬぐう顔と顔　岡本蓉子

南区
ふる里は新茶生きいき香りけり　加藤うめ子

中区
初講座秋の七草活けて受く　川上とよ

中区
蟷螂（かまきり）の目のなかまでも枯れにけり　北村友秀

中区
馬酔木咲く白い花弁夕映えす　畔柳晴康

西区
万を越す灯籠揺るる鎮魂歌　佐久間満雄

中区
若武者の残る魂燃ゆ大念仏　佐久間優子

中区
日の本にしかと馴染めり花水木　佐野朋旦

南区
稲刈りで家族が集う日曜日　小百合

北区
野武士とて装束ありて秋立ちぬ
清水孜郎

南区
静寂を破り鶯初うたい
白井忠宏

東区
あそこにも子供の声や蛍狩
杉山佳子

北区
紅葉を愛でて楽しむ墓の父母
鈴木圭子

中区
春愁やあちこち向いた子らの靴
高橋紘一

南区
白酒で酔いたしと言う内裏びな
滝田玲子

中区
一人去り次々去りて夜店果つ
竹下勝子

天竜区
絵筆持つ少女に少女の秋の色
ちばつゆこ

南区
空青く海また青し久能路（みち）
黒葛原千恵子

中区
頬張りて金柑の種吹き出せり
手塚みよ

中区
はからずも甘茶賜わる花の寺
寺田久子

東区
夕空に子らに追われし赤とんぼ
天竜子

方広寺五百羅漢と月を愛(め)で　中区　戸田田鶴子

チューリップ太陽あびてあざやかに　南区　永井真澄

秋刀魚焼く裏も表も庶民の顔　中区　中野はつゑ

ほの匂う芽輪くぐりて祓わるる　中区　中村弘枝

縁側で二人つきりの十三夜　中区　錦織祥山

待ち人の来りて梅雨の晴れ間かな　中区　のぶ女

枯葉なす古道上(のぼ)りて山日和　西区　浜名湖人

初採りのトマト一箇を仏壇へ　中区　藤田淑子

野菊一枝軍手をとつて直しけり　西区　古谷廣行

原発の廃墟の上に鰯雲　北区　本間哲三

遠近(おちこち)に花火の上がる邑の秋　浜北区　前田徳勇

裏作の柿の実少し残しけり　東区　松野タダエ

南区
夏が来てハエトリ草を買い求め
水野健一

南区
良い年に願いをこめてしめ縄に
道

中区
朝露の道を夜露にかえりけり
宮地政子

中区
山城にのろしのけぶる秋雨よ
森三歩

北区
鳳仙花はじける音の軽かりし
山口英男

中区
泣く虫や犬と聴き入る夜半の道
山田知明

中区
田舎通軒下かざるつるし柿
山田美代子

中区
メダカ浮く池の水面の水ぬるむ
山中伸夫

西区
年賀状先ず健康と添書きす
和久田孝山

定型俳句選評

九鬼あきゑ

本年度の応募作品は、今までになく個性溢れる句が見られたことである。これは新しい何かが始まる予感のようなもので、実に嬉しいことであった。最終的に応募総数一一六九句の中から、次の十句を第五十七集の市民文芸賞に推薦することにした。

・細胞の六十兆個春待てり　田中美保子

私たち人間の身体は沢山の細胞で構成されている。どのくらいあるかは私には不明だが、こう言われてみるとなるほどと納得してしまう力がこの句にはある。「細胞」の一つ一つがみんな春の到来を待っているのだ。「春待てり」の季語が効果的。

・若頭領木つ端枕に三尺寝　野田正次

「木つ端枕に」からは、威勢のいい鰯背な若頭領を想像する。「三尺寝」の季語は動かない。その光景がありありと見えて来る。ものを作る現場、ものを作る人の大切さも。

・流れくる雲に跳び乗るあめんぼう　山内久子

ひとひらの雲が空をゆっくり流れている。もちろん「あめんぼう」のいる池にも映っている。とその時、あめんぼうは、水面に映ったその雲に跳び乗ったのだ。正に打座即刻の妙なり。

・俎をはみ出す冬瓜切りがたし　切畠正子

俳諧味溢れる作品である。「俎をはみ出す」ような大きな冬瓜を前にして、思案にくれる作者を想像するだけでくすっとなってしまった。俳諧自在なりと思う。

・爽やかに我が身の癌を撃ちにけり　吉田髙徳

五句とも癌がテーマ。作者自身の入院、手術の記録である。情に流されず冷静に詠まれている。「爽やかに」対処するまでにどれほどの葛藤があったことか。「病棟に千歳飴持つ子のゐたり」も、心打たれた作品である。

・制服の釦のかたき四月かな　山﨑暁子

ぴかぴかの一年生だろうか。輝いている金釦。この句の眼目は「釦のかたき」である。釦になれない頃がよく描かれている。

・百歳を生き抜く気骨夾竹桃　野嶋蔦子

長寿国日本を代表するのは、明治大正生まれの方々。総じて皆意気軒昂。この気骨はどこから。「夾竹桃」の季語もよい。

・花束の如しパセリの束薫る　藤田節子

「パセリの束」を「花束の如し」と例えられる作者の瑞々しい感性が光る。この伸びやかな詩心大切に。

・マンボウを見に新涼の水族館　渡辺きぬ代

「マンボウ」はフグ目のマンボウ科の海産魚。体長約四メートル、体重一・五トンにも及ぶ。どんな会話を楽しむのかな。

・初夏や屋号呼び合ふ漁師町　野中芙美子

舞阪あたりの漁師町での光景か。「屋号呼び合う」がポイント。地方独自の風土感のある一句。

本年度の作品を顧みると、堅実な写生のうえに生活感溢れる句が多く、俳句の常道を進まれているのが見えて良かった。その上で、一人一人の個性が開花されればと思う。単なる表面的な写生ではなく、己の身体、胸中を通して表現されんことを祈る。芭蕉が「舌頭に千転せよ」と言った言葉もお忘れなく。皆様のさらなるご精進を期待します。

自由律俳句

【市民文芸賞】

ビルの窓一枚の赤光となり秋の入り日

中区　大軒妙子

小さな天窓から月が覗く只今夢の続きです

中区　藤本ち江子

十三夜の月を氷に閉じ込めた水割り

東区　生田基行

【入選】

北区　縣　敏子

背伸びして後ろから月つまんでみる
何もなかったようにいつもの月と星
溶けない記憶がカップの底にある

東区　生田基行

赫い情念の陽を追い落とし白い月が誘う
飲みかけの大吟醸に映える十六夜の月
手酌の盃重ねつつ窓開け放ち月の客

浜北区　伊熊房子

一寸眼鏡直してもらうこの店の主人ハンサム
台風一過畑の冬瓜ごろごろしている
一年で一番短いと言う日も豆腐売りが来る

中区　泉沢英子

竹とんぼ夕陽の窓は開けておく
これ以上欲するものはなし曼珠沙華
空耳か振りかえる風にコスモス

北区　鈴木章子

舞踏会の手帳のスクリーン雨ふって
草原の風よんでパオの星空
菜の花の道を行く娘は花嫁姿で

中区　鈴木まり子

麦秋のはるかに瀬戸の海光っている
解体した更地に早くも草萌える
揚羽蝶息づく羽をたたんで止まる

中区　戸田幸良

膝を抱く今宵流れ星一つ寒し
選ぶ子等一人づつ抜け残る満月
湯が沸いてても誰もいない冬の部屋

浜北区　外山喜代子

石蕗に花咲くついに果せない約束
ちょっと立ち読みして出て西日の濃く
柿落葉風の笑い声が通りすぎる

南区　中津川久子

サルビアめらめらとをんなを溶かしていく
大風車ことことお日さま畳んでいる
枝下ろし一枝一枝に青空咲いていく

南区　中村淳子

待合室真白き富士が少し見え
つぼみから葉桜までを見舞う道のり
泰山木ほころぶ夕べ舅逝く

東区　宮本卓郎

沈む陽いっしょに追いかけた赤とんぼ
いさぎよく大空めざすたんぽぽの綿毛
ふっとあいつのことが夜の止まり木

湖西市　石田珠柳

足湯から丸い地球を見る潮見坂
絵手紙で初物の西瓜が届く昼下がり

中区　伊藤重雄

夫々の生活（たつき）に幸ありて顔の余裕
死化粧イケメンとなった顔に花を置く

天竜区　岩本多津子

親娘してたおやかな赤目柳を活ける朝
鴉群れて飛ぶ師走の空が暮れ急ぐ

南区　太田静子

街へゆくハイカラさんに会いたくて
吹く風にこたえて揺るる風船かずら

中区　大軒妙子

ひしゃげてもなお蟷螂の鎌振りかざす
壁の人形が見ている遠い日の家族写真

南区　大庭拓郎

降り続く孤独の雨を浴びてゆく
木香バラ月命日に妻の花

中区　小楠純代

迷い道足元に賑やかな石蕗の花
雨上ってゆうゆうと横断歩道渡る猫

中区　河村かずみ

朝の一閃銃口に口閉ざされて椿落ち
聖夜電飾に眠れぬ木々は遠くに

浜北区　木俣史朗

土のしめりが芽を出した今晩満月
神々旅立ち月夜さむざむと眠る

浜北区　木俣とき子

遅れた一人を乗せて秋空へ旅立つバス
再びのいのち無人売り場の大根二本買う

中区　倉見藤子

水鏡ゆれて少女は森の妖精（ブラウニー）
夕焼くる冬木雲を突き抜けている

中区　畔柳晴康

千両が赤と黄色と色を増し祝う初春
手を翳し日差し避けて詣でする秋彼岸

中区　鈴木憲

秋愁や車輪の軋みと隣の会話
怖いもの無しの人生背中が掻ゆい

天竜区　鈴木巳三郎

赤い血はさびしげな一滴やがて大海に溶ける
諍（いさか）いて帰る月が稲穂を照らさない

中区　鈴木好

形見の着物装い鏡見れば母が映る
サスペンスドラマ独り見ている秋の夜寒

天竜区　ちばつゆこ

するっと剥けた桃のまあるい
行先不明の渋い秋を踏む

中区　戸田田鶴子

涅槃図に手を合わせ香ゆらぐ
写真撮る鵜は一斉に羽広げ

中区　富田彌生

山ふところ段々に並んだお墓の秋の日
死ぬ迄働いて貰う脚をなでている

中区　錦織祥山

庭の隅生まれたばかりのふきのとう
二人っきりの縁側で十三夜

中区　袴田香代子

あの頃と変わらぬ夜景も懐かし石蕗の路
立冬や言の葉ならべ霧の中

東区　松野タダエ

のこり火に来世を誓う風の波紋
丸い背に孤独背負いて冬日射す

南区　水川彰

風の掴みがうまいのかコスモスの揺れかた
朝焼の街白い街灯

中区　宮司もと

雨の庭自己主張する半夏生咲く
小さいことまで語り合う小春日和

中区　阿部洋子

旅ばなしヒヨドリの羽休めに目が覚める

東区
友の母も白いつぼにおさまり菊しろく
飯田邦弘

東区
秋夕陽誰かが下で引っぱった
飯田裕子

西区
なでしこの凛しさ遂に世に咲けり
池野春子

浜北区
街も人も無彩色に移ろい風は北よりに
内山春代

浜北区
彼岸会の終りし後の茶の香り
大久保榮子

中区
浜名湖を別の世界にする花火
影山ふみ

西区
早春は夢を含んだ恋の風
河合秀雄

中区
松古葉落とし明るく風通る
川上とよ

中区
譲歩せぬ話合ひ膝の拳に汗して聞く
佐々木たみ子

西区
病気の上に笑顔を塗る人腹の底からあわれに思う
柴田修

西区
春宵、鏡の自分に語りかける
鈴木愛子

南区
秋夕べもひたすらに一万歩へと街歩き
鈴木明子

浜北区
朱(あか)を背に物言わぬ影法師
鈴木晴香

南区
ここも更地何があったと中心街変わりゆく
滝田玲子

浜北区
月の満ち欠けふと恩師想う
竹内オリエ

南区
真紅の畦道がスキップで揺れる
鶴市

東区
風がゆらす夢の中に亡夫がいる
手塚全代

中区
さよならの手の温みが秋のわかれ
寺島寛

中区
ぶらさがる空蝉ひとつ秋の空
鴇羽健

中区
晴れし空富士を遠くに見て歩く
富永さか江

東区
夏の草、草、草に腱鞘炎うずく
内藤雅子

北区
古里にあじさい群れてあるじ待つ
永田キク

東区
文庫本のイニシャル恋のなごり
長浜フミ子

南区
湖(うみ)に月の道遠い日のバージンロード
中村友乙

西区　浜名湖人
人見知りアラタマホシクサ乱舞せり

北区　原川恭弘
親子で失業の昼のうどん

中区　飛天女
若駒は乗り手なきごと草食めり

中区　ヒメ巴勢里
おなかにアンコをためたような雲

中区　広島幸江
忘れられた法師蝉が独り啼いている森の奥

中区　藤本ち江子
赤とんぼの群東日本へ秋を届けに

中区　宮地政子
せみしぐれ無人の家で鳴き合唱始まる

南区　山崎みち子
フロアーに灯が流れて更ける聖夜

西区　山下正則
古屋でも生きるよろこびわいてくる

南区　横井万智子
風鈴が音色で誘い雲おどる

中区　渡辺憲三
山頭火の真似して山の水を味わう

自由律俳句選後評

鶴田育久

今回の応募者は七十一名。自由律俳句では初めて七十人を越える事が出来ました。大変嬉しいことですが、ただ、自由律俳句という部門なのに、応募五句とも五・七・五の方が七名もありました。

別に定型俳句を否定している訳ではありませんが、市民文芸の場合、定型俳句のセクションもありますので、応募句全てが五・七・五の場合は、これからは定型俳句の方へ投稿されるようお願い致します。

さて、今回も予選句として十五句を選び、二次予選句として○印の八句を採りました。

○十三夜の月を氷に閉じこめた水割り
　遊ぶ子等一人づつ抜け残る満月
○一寸眼鏡直してもらうこの店の主人ハンサム
○大風車ことことお日さま畳んでいる
○雨の庭自己主張する半夏生咲く
　死化粧イケメンとなった顔に花を置く
○ビルの窓一枚の赤光となり秋の入り日
○小さな天窓から月が覗く只今夢の続きです
　沈む陽いっしょに追いかけた赤とんぼ
○コスモスの風子供スキップでくる
○背伸びして後ろから月つまんでみる
　竹とんぼ夕陽の窓は開けておく
　怖いもの無しの人生背中が掻ゆい
　朝の一閃銃口に口閉ざされて椿落ち
　水鏡ゆれて少女は森の妖精

熟慮の結果、次の三句を市民文芸賞に推します。

ビルの窓一枚の赤光となり秋の入り日

一枚の赤光が強烈です。このフレーズで、秋の入り日というありきたりな表現が吹っ飛んでしまいました。それがビルの窓一枚ですから、作者の眼にはもとより、心の中にまで食い入るような印象であったのでありましょう。もし、その窓が病室であったとしたら尚更です。選は作者名が伏せてありますので、勝手にそんな想像をしてしまいました。

小さな天窓から月が覗く只今夢の続きです

小さな天窓と、夢の続きという結びつきが素晴らしい。それがまた、只今夢のつづきという現在進行形であるのが心憎い。小さな天窓から射す月のひかりは、まさに夢の世界へ誘ってくれるエンゼルロードです。佳句です。

十三夜の月を氷に閉じこめた水割り

十三夜ですから満月ではありません。それは満ち足りているようで、少しもやもやとした不満とまでは云えぬ心情を、暗喩として氷に閉じこめているのです。そして、そんな気持ちを、むしろ洒落た水割りにして飲み干すのです。だからこの句は、まさしく十三夜の月で極まっています。

〈雨の庭…〉自己主張するに作者の強い意図を感じます。秀逸。
〈大風車…〉お日さま畳んでいる、童画の世界が見えるようです。
〈背伸び…〉月つまんでみるは面白い見方で、もう少し構成に留意されたら素晴らしい作品になるでしょう。
〈一寸眼鏡…〉主人ハンサムと何でもないことを言っているのですが、これで楽しい詩になりました。
〈コスモス…〉スキップでくる、このくるで句まで躍動してきます。

川柳

【市民文芸賞】

母の海抱かれて石も丸くなる　南区　鈴木千代見

偽りを脱いでわたしに戻る夜　東区　竹山惠一郎

はぐくんだ絆の杖に明日の風　中区　髙橋　博

母の味褒めて妻との距離が出来　中区　馬渕よし子

【入選】

中区　仙石弘子

美しく老いたく薄く紅をひく
うやむやにした恋今も胸の奥
修羅の過去黙して凛と曼珠沙華
残照を背に終焉の幕あける
人気出ると二の矢が探す過去の傷

南区　赤堀進

平凡という幸せにうたたねし
青空はすべてを聞ける耳だろう
故郷（ふるさと）の過去を夢みる枯れ木立
牛の目が見つめ続ける青い空

中区　浅井常義

飲み会で外した仮面戻せない
騙し絵の揺れる心に添える色
ふるさとの思い出運ぶ母の舟
振り向けば轍に残る悔いの列

南区　太田雪代

不器用な汗に活路の灯が点り
七坂を越えた夫婦にある温み
前向きな努力に風も背なを押す
巣立つ子の気迫に夢が盛り上がる

中区

小島保行

回り道しても別れをいいだせず
温もりを棄てたつもりが人を待ち
王子様探しくたびれ森の中
かけなおした椅子だがあせた夢ばかり

北区

山口英男

平凡もまたよしとする日の和み
ああ言えばよかったことが胃に溜まる
まだ先があるからここは我慢する
涸れぬ間に繕っておく知恵袋

中区

米田　隆

不得意を得意に変えた褒め言葉
根回しが敵も味方も増やしてる
口答えすまいと思う親の老い
支え合いゆっくり回る夫婦独楽

東区

木村民江

ウェディングに花束が泣く母の胸
さめざめと泣いて心を裏返す
苦しいことバネに生きてく底力

浜北区
鈴木　覚

電池切れ休暇の取れた腕時計
被災地を気遣うように雨予報
風鈴が風と仲良く涼を呼び

南区
鈴木千代見

言い合った後も夫婦の彩になる
トゲのある言葉やんわり胃に送る
三面鏡見にくい所見えてくる

西区
鈴木　均

沈黙が精一杯のメッセージ
四面楚歌タフな交渉力が鍵
躊躇する正義けし掛け邪を退治

南区
滝田玲子

温暖化地球の悲鳴止まらない
団塊が駆けた昭和も黄昏れる
再会の森で時計が逆回り

東区
竹山惠一郎

父の訃にからだを風が吹き抜ける
笹舟を連ねて流しきみ偲ぶ
寒い夜は背中合わせの子守唄

東区
堀内まさ江

言い負けて拳を握り石を蹴る
つき進む少年未知の夢を抱く
ウォームビズ昭和一ケタ素足です

西区

手酌酒すかして見たい胸の内　山﨑靖子

義父母には片目つぶって導かれ

口すぼめ夢を詰込む紙風船

東区

B面で生きて良かった今の幸（さち）　飯田裕子

ヤジロベー夫がどんどん軽くなる

湖西市

太鼓判押されて食べる期限切れ　石田珠柳

茎交ざるお茶買ってくる受験前

南区

皺が増え軽くなったね母背負う　伊藤信吾

手拍子で車も揺れるバス旅行

浜北区

嬰児の握りしめる手夢あふれ　金原惠子

荒れ果てた日本にほしい救いの手

東区

聞き上手心開かせ愛もらう　柴田良治

なにげないしぐさにひそむ人の味

南区

猛暑日と耳にする度汗が噴き　白井忠宏

生活に追われ腰痛忘れてる

中区
いつまでかメルトダウンの後始末
立ち位置を変えて明日の風を読む

高橋紘一

中区
戦争が何をしたかを語り継ぐ
人の和の温もりを見た北の空

高橋博

浜北区
初孫を抱く思いで仔犬抱く
落穂ひろい家族揃って夕暮れる

竹内オリエ

西区
年経ても熱いセピアのツーショット
定年を陰で支えて来た内助

為永義郎

中区
演技などしない主役が母にあり
どの道もやがて眞冬の海に出る

戸田幸良

中区
惜しまれる内に退く土性骨
ブランコに揺れた二人の宇宙船

とつか忠道

南区
本当を言えぬ見舞いに重い足
好きですと言えず逃した青い鳥

中田俊次

南区
ストレスは夫と書いてる問診表
かくし味やさしい嘘のひとつまみ

中津川久子

中区
うきうきと出掛けてみたが歳に負け
豊かさの夢に向かって汗をかく
中村禎次

東区
授かった命鼓動に歓喜する
諍いが晴れて陽差しと笑い合う
中村雅俊

中区
好い話持って駈けこむ母の膝
節電がスカイツリーを引きたたせ
長谷川絹代

中区
気紛れなペンで思いが伝わらず
ばらばらな心束ねている輪ゴム
馬渕よし子

東区
つまずいて生きるアングル変えてみる
内山敏子

南区
爪に火を点す暮らしが板に付き
太田静子

天竜区
被災地の復興願うフラガール
太田初恵

南区
水もなく涙ばかりの避難民
大庭拓郎

中区
仏壇に庭の花生け亡夫偲ぶ
岡本蓉子

東区
針孔の見える日向を探してる
小野和

中区
巻きもどし出来ぬ余生にねじを巻く
金取ミチ子

南区
嫁の酒チェックし乍ら茶をすすり
久保静子

中区
聞き役に徹し波風立たぬ日々
倉見藤子

中区
物言わぬ鏡に老いを教えられ
畔柳晴康

中区
五十鈴川杖を頼りに伊勢参り
後藤静江

中区
言いたきを三つのみこむ年の暮
斉藤三重子

中区
冷暖房に縁なき衆生のエコ暮らし
佐々木たみ子

西区
久々の街の空気は甘くない
柴田修

東区
たてまえで本音上手に包みけり
杉山佳子

西区
寝返りに追う掛け布団親心
髙柳龍夫

中区
がんこ者自分の姿見えてない
髙山紀惠

北区
ガキ大将手筒花火に耳押え
辻村榮一

中区
神頼みしゃっくり辛いおまじない
手塚美誉

中区
老いの集い天下国家をひとくさり
寺田久子

中区
天守閣今日の登城はハイヒール
戸田田鶴子

中区
願いごと叶えば更に欲が湧く
富永さか江

北区
席譲り今は譲られ杖たより
豊田由美子

東区
亡夫描きし富士鎌倉へ心旅
内藤雅子

中区
ビー玉が床を転がる恐ろしさ
仲川昌一

東区
古タンス生きた証しも詰まってる
長浜フミ子

中区
デイサービスマニキュアされて若返る
中村弘枝

北区
おでん鍋お目当てが合い箸からむ
野末法子

東区
置き忘れ思い違いで日が暮れる
松風梢

中区
今日病んで明日に繋ぐ糧がない
松本錦是

南区　水川　彰

電線の定位置烏糞落す

中区　夢　耘

おだてられ屋台を担ぎ医者通い

北区　森上かつ子

亡き父母の教え脳裡に日々歩み

西区　山田とく子

中流を自負した頃のルイヴィトン

川柳選評

今田久帆

今年は昨年より応募者が四名減り、七七名、三七八句の中から、私の心を捉えた二〇句を予選句として候補に挙げ、熟慮した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

川柳は俳句と同様十七音字で表現する短詩文芸です。川柳と俳句は共通点も多く、作者が俳句と言えば俳句になり、川柳と言えば川柳になると言われる程、その境界線は入り組んでいます。定型俳句が季語を必要とし、切れ字を用い、主に自然を対象として文語で表現するのに対し、川柳は主に人や社会を対象として口語で表します。五七五で詠むということ以外、大きな制約もなく、気軽に表現することができることから、テレビやキャンペーンなどにも採用され、ブームにもなっていますが、言葉選びになったり、内容よりも奇をてらうものになる傾向があるので注意が必要です。投句の中にも、切れ字を用いたり、文語を用いた句がありましたが、俳句調になってしまいます。また、五七五のリズムを大切にすることで句に流れやリズムが出て心に響く句になりますので、声に出して詠んでみましょう。

予選句

つき進む少年未知の夢を抱く
支え合いゆっくり回る夫婦独楽
不器用な汗に活路の灯が点り
飲み会で外した仮面戻せない
修羅の過去黙して凛と曼珠沙華
ああ言えばよかったことが胃に溜まる
回り道しても別れをいいだせず
立ち位置を変えて明日の風を読む
諍いが晴れて陽差しと笑い合う
牛の目が見つめ続ける青い空
嬰児の握りしめる手夢あふれ
かくし味やさしい嘘のひとつまみ
ヤジロベー夫がどんどん軽くなる
口すぼめ夢を詰め込む紙風船
再会の森で時計が逆回り
ウエディング花束が泣く母の胸

市民文芸賞

◎母の海抱かれて石も丸くなる
ゴツゴツして世間とぶつかり、疲れ果てた石も、母に抱かれるとその角も取れ、素直な気持ちに返って、また出直すことができる。

◎偽りを脱いでわたしに戻る夜
社会では背伸びして見栄を張り、澄ました顔で過ごしているが、家に帰ると素の自分に戻り、気を張ることもなくゆったりと過ごすことができる。

◎はぐくんだ絆の杖に明日の風
同じ時間を共有し、互いに悩み苦しみ、互いを大切に思って助け合い育んできた絆は、明日を生きる杖となり、自分達を励ましてくれる。

◎母の味褒めて妻との距離が出来
別に悪意があったわけではないが、なつかしい母の味を褒めたばかりに、妻は自分の味と比較され、けなされたように受け取り、妻との間に距離が出来てしまった。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸』第58集作品募集要項

一　趣　旨　市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品（未発表）を募集して、「浜松市民文芸」第58集を編集・発行します。

二　発　行　浜松市

三　編　集　財団法人浜松市文化振興財団　浜松文芸館

四　応募資格　浜松市内に在住・在勤・在学されている人（ただし、中学生以下は除く）

五　募集部門及び応募原稿

部門	枚数等（一人）	部門	枚数等（一人）
小説（戯曲を含む）	50枚以内（一編）	児童文学	30枚以内（一編）
評論	25枚以内（一編）	随筆	7枚以内（一編）
詩（漢詩を除く）	50行以内（一編）	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

＊　原稿用紙はＢ４判（四〇〇字詰め、**横長・縦書き**）を使用して、ページ番号を付けてください。
　ワープロ原稿（Ａ４判用紙二〇字×二〇行、**横長・縦書き**）でもかまいません。

＊　同一部門内で、複数編の応募はできません。

六　選　者　選者の氏名は、平成二十四年八月配布（予定）の「浜松市民文芸」第58集の作品募集要項に記載します。

七　募集期間　**平成二十四年九月一日（土）から十一月十日（土）まで。（必着）期間外の受付はいたしません。**

八　応募上の注意

① 応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。

② **部門ごとに、規定の応募票（コピー可）を必ず添付してください。**応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所6階文化政策課、市内の公民館、図書館などの公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。

③ 応募原稿には、氏名を書かないでください。

④ **応募時に、選考結果通知のための返信用の定型封筒に自分の住所・氏名を書き、八十円切手を張って、作品に添えて出してください。**

⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。

⑥ 作品掲載にあたって、原稿のままを原則とさせていただきます。**提出の際は、清書原稿でお願いします。**

⑦ 右記の規定や注意に反する作品、判読しにくい作品は、失格になることがあります。

⑧ 応募原稿は、返却いたしません。（必要な方は事前にコピーをおとり願います）

九　発表　選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で平成二十五年二月初旬までにお知らせします。

十　表彰　市民文芸賞及び入選の作品は、平成二十五年三月発行予定の第58集に掲載いたします。

十一　その他　市民文芸賞の方には、平成二十五年三月開催予定の表彰式で賞状と記念品を贈ります。市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸」第58集を一部贈呈いたします。購入される場合は、一部五〇〇円です。

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館　〒四三二―八〇一四　浜松市中区鹿谷町一一―二　☎〇五三―四七―五二一一

「浜松市民文芸」第58集応募票

（短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに◎をつけて下さい）

部　門	小説・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・定型俳句《新かな・旧かな》・自由律俳句・川柳 （部門名のいずれかに１箇所〇をおつけください）	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください **題　名** **原稿枚数　　枚**

ふりがな		年齢　　歳	男　・　女
氏　名			
ふりがな		勤務先または通学先(市外の方は必ず記入をして下さい)	
発表名 ペンネーム		名称 住所	
住　所	〒	電　話　番　号	

文芸館使用欄	受付月日	受付番号	

編集後記

今年度も多くの方々の熱意に支えられ、「浜松市民文芸」第57集が発行の運びとなりましたことを大変うれしく思います。

第57集に投稿いただいた作品総数は、二、五七一点、投稿者数は延べ六〇三人でした。全体的には、投稿者・作品数ともに昨年を上回る数であり、長年投稿を続けて下さっている方も数多く見られうれしく思います。また、前号からインターネットで本文を閲覧できるようにしたり、要項や応募票を取り出せるようにしたりと工夫して参りましたが、若い年齢層を中心に、徐々に活用が図られてきているように思います。

さて、昨年は大震災や大津波、原発事故など、未曾有ともいえる災害が日本中を揺るがしました。それらに関わる様々な思いが直接的、或は間接的に反映された作品が散見され、今回の市民文芸の特徴となっています。

昨年キーワードとなった言葉は「絆」でしたが、文芸とは、自分の感性と何らかの対象（人・物・自然・自分…etc）との「つながり」の有り様を表現する作業のような気がしてなりません。今後ともこの「浜松市民文芸」は市民の皆様の、そんな表現の場で有り続けたいと考えます。

最後に、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方の御理解、御協力に厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館　館長　　増渕　邦夫

浜松市民文芸　第57集

平成二十四年三月十七日　発行

発行　浜松市

編集　(財)浜松市文化振興財団
浜松文芸館
〒四三二―八〇一四
浜松市中区鹿谷町一一―二
☎〇五三―四七一―五二一一

印刷　(株)シバプリント

浜松市民文芸 第五十七集

発行日 平成二十四年三月十七日

編集・浜松市文化振興財団 浜松文芸館 浜松市中区鹿谷町11—2 電話 053—471—5211

THE 8th HAMAMATSU INTERNATIONAL PIANO COMPETITION 浜松国際ピアノコンクール 世界連盟会員

第8回 浜松国際ピアノコンクール

www.hipic.jp

2012 11月10日[土]—24日[土]

[審査委員]

海老彰子(審査委員長・日本)
ダン・タイ・ソン(ベトナム)
クラウス・ヘルビッヒ(ドイツ)
キム・デジン(韓国)
練木繁夫(日本)
ジャン=クロード・ペンティエ(フランス)
アンドレイ・ビサレフ(ロシア)
エヴァ・ポブウォッカ(ポーランド)
ジェローム・ローズ(アメリカ)
植田克己(日本)
アリエ・ヴァルディ(イスラエル)
ディーナ・ヨッフェ(イスラエル/ドイツ)

[会場] アクトシティ浜松
[出場資格] 1982年1月1日以降に出生した者
[主催] 浜松市 財団法人 浜松市文化振興財団 Hamamatsu Cultural Foundation
[後援] 外務省、文化庁、静岡県、社団法人日本演奏連盟、一般社団法人日本音楽著作権協会、財団法人地域創造
社団法人全日本ピアノ指導者協会、浜松商工会議所、時事通信社、産経新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社
読売新聞社、朝日新聞静岡総局、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社、日本放送協会、静岡朝日テレビ
静岡第一テレビ、テレビ静岡、株式会社音楽之友社、株式会社ショパン、K-MIX、F m Haro!、ケーブル・ウィンディ
株式会社河合楽器製作所、株式会社ピアノギャラリー、ローランド株式会社、ヤマハ株式会社

[お問い合わせ] 浜松国際ピアノコンクール事務局 E-mail: info@hipic.jp
〒430-7790 静岡県浜松市中区板屋町111-1 TEL: 053-451-1148 FAX: 053-451-1123

様々な公演のチケットが24時間オンラインで購入できます

HCFオンラインショップ
http://www.hcf.or.jp/

システム使用料0円 発券手数料0円
◎クレジット決済／送料315円
◎代金引換／送料315円＋代引手数料315円
◎直接アクトシティチケットセンター窓口にて購入(現金のみ)もできます。
チケットの委託販売も受付中。
お問い合わせは（財）浜松市文化振興財団 TEL053-451-1131 web@hcf.or.jpまで。